

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院入院棟 A 地点

報告編《第 1 分冊》

入院棟 A 地点の概要・江戸時代以前の調査・1 区遺構本文

2016

東京大学埋蔵文化財調査室

巻頭図版 1



C~D・5~6グリッド縄文時代遺物出土状況



SI4



SI4出土甕

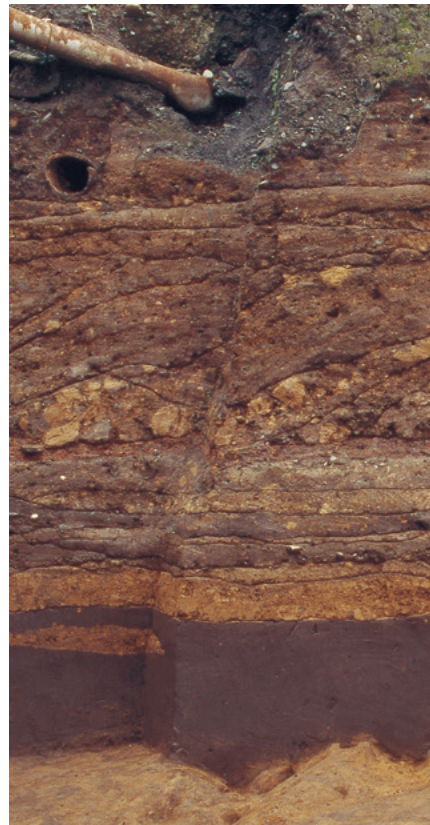


SR717・SR718全景

巻頭図版 2



調査区南側全景



C 面

D 面焼土

D 1 面

E 面

J2グリッド付近北壁 土層堆積状況

巻頭図版 3



SD1103石積検出状況



SD1103断面



SG1586石積検出状況

卷頭図版 4



SB772石積検出状況



SD803

卷頭図版 5



SU327



SE382

卷頭図版 6



D1面礎石建物群



SB1772・SB1782、SD1601・SD1603



SB1697第3・4室



SB1822礎石表面の墨書「四(三)ノ十五」

卷頭図版 7



SF1798



SF1689



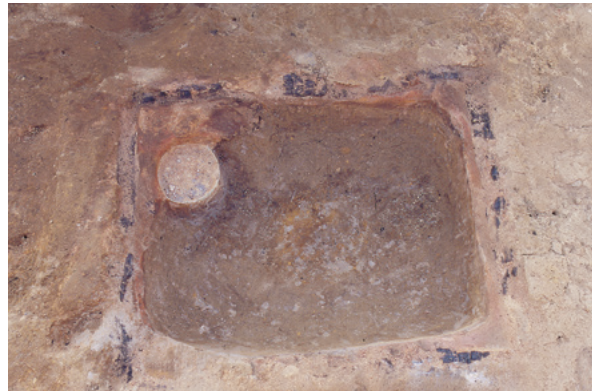
SF1845



SF1699・SF1700(右)



SF1700



SF1804



SF1761



SF1724

巻頭図版 8



SD1724



SB1611 畳状炭化物検出状況



SK1659(左)・SK1660



F~Gライン付近C2層遺物出土状況



Cライン付近C2層遺物出土状況

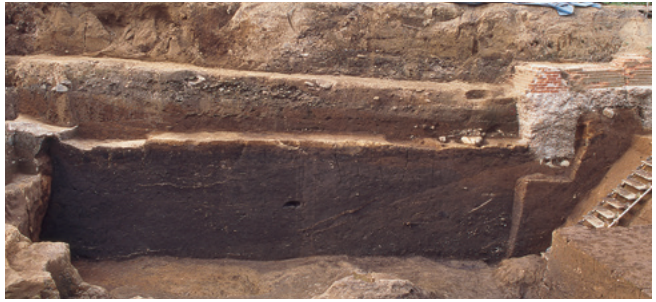


C2層堆積状況

巻頭図版 9



SK3



SK3覆土堆積状況



SK3カンナクス出土状況



CR1・CR2面全景

巻頭図版 10



厩全景



SU631



SE108



SD236・SD259・SD337・SD260・SD340全景



SD236宝永スコリア検出状況



SD1118-1・SD1118-3

例 言

1. 本書は、東京大学医学部附属病院入院棟 A 新営に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 入院棟 A 新営に関する工事は、建物本体部分とそれに伴う基幹整備関連調査区とに大別され、既刊年報等掲載の東京大学構内遺跡調査一覧では、建物本体部分を「入院棟 A」（略称 HW）、基幹整備関連調査区を「医学部附属病院基幹整備共同溝等地区」と区分し、後者は調査区が点在することから各々の調査区に 1～4 の番号を付した（略称 HWK-1～4）。
3. 本地点は、調査、整理時において、「病棟地点」と称していた調査区で、既出の年報、論文などには「病棟地点」と記載されている。本報告作成にあたり、現在の施設名称である「入院棟 A 地点」に改称した。
4. 調査地は、東京都文京区本郷 7 丁目 3 番 1 号東京大学本郷構内に所在する。
5. 本地点は、東京都遺跡地図「文京区 No. 47 本郷台遺跡群」内に位置している。
6. 調査面積は、建物本体部 6,096㎡、HWK-1 地点 20㎡、HWK-2 地点 102㎡、HWK-3 地点 183.9㎡、HWK-4 地点 4.9㎡の合計 6,406.8㎡を対象とした。
7. 発掘調査は、東京大学埋蔵文化財調査室が行い、成瀬晃司、篠原和大（現、静岡大学）、原 祐一、大成可乃が担当した。
8. 本書の編集は、担当者の協議の上、成瀬晃司、小林照子、香取祐一が行った。
9. 入院棟 A 建物本体部分のうち、全体を通した調査概要と江戸時代以前の遺構・遺物に関しては、第 1 分冊に記載したが、調査区大半を占める加賀藩邸域と調査区東縁部にかかる講安寺寺域との地境が江戸時代を通して変化が認められないことから、前者を 1 区とし第 1～4 分冊に、後者を 2 区とし第 5 分冊にまとめた。また「医学部附属病院基幹整備共同溝等地区」は第 6 分冊にまとめた。
10. 報告編の執筆分担は以下の通りである。

《第 1 分冊》

第 I 章 成瀬晃司

第 II 章 第 1 節 追川吉生

第 2 節 香取祐一

第 3 節 (1) 成瀬、(2) (3) 成瀬・大成可乃・香取・大貫浩子、(3) 大成・香取・大貫

第 4 節 (1) 香取、(2) 原 祐一・大成・香取・大貫

第 III 章 第 1 節 成瀬

第 2 節 成瀬・香取

第 3 節 (1) (3) 成瀬・原・大成・香取、(2) (4) (5) 成瀬・原・大成

第 4 節 (1) 成瀬・原・大成、(2) (3) 原、(4) 成瀬・大成、(5) 成瀬、(6) 成瀬・原・大成

第 5 節 成瀬・原

まとめにかえて 成瀬

《第 3 分冊》

第 IV 章 第 1 節 (1) 成瀬・安芸毬子、(2) 大貫、(3) (4) 原、(5) 香取、(6) (7) 大貫

第 2 節 (1) 大成・安芸、(2) 大貫、(3) 原・安芸、(4) 原・小松、(5) 香取、(6) (7) 大貫

- 第3節 (1) 大成・安芸、(2) 大成、(3) 大成・安芸、(4) (5) 大成、(6) 成瀬・安芸、(7) ~ (9) 成瀬
- 第4節 成瀬・大成・安芸
- 第5節 大貫
- 第6節 原・小松
- 第7、8節 原
- 第9節 香取
- 第10～12節 大貫
- 第13節 阿部
- 第14節 大成・安芸・原

《第5分冊》

- 第I章 原
- 第II章 原
- 第III章 第1節 成瀬・安芸・原
第2節 成瀬・安芸
第3節 成瀬
第4節 大貫
第5節 原
第6節 香取
第7節 原・大貫
まとめ 原

《第6分冊》

- 第I章 成瀬
- 第II章 成瀬
- 第III章 第1～2節 成瀬
第3節 成瀬・大貫
まとめ 成瀬
- 第IV章 第1～2節 大成
第3節 大成・大貫
まとめ 大成
- 第V章 第1～2節 原
第3節 大成
まとめ 原

11. 宮崎勝美氏には、文献調査を依頼し、玉稿を頂戴した（「研究編」掲載）。記して感謝したい。
12. 新見倫子氏（名古屋大学）には、動物遺体の分析を依頼し、玉稿を頂戴した（「研究編」掲載）。記して感謝したい。
13. 近藤 修氏（理学部人類学教室）には講安寺寺域出土人骨の分析を依頼し、玉稿を頂戴した（「研究編」掲載）。記して感謝したい。
14. 能城修一氏（森林総合研究所）には樹種同定を依頼し、玉稿を頂戴した（「研究編」掲載）。記して感謝したい。

15. 錢貨の分類・鑑定について、川根正教氏にご教示をいただいた。
16. 西脇 康氏には花降雛小判について玉稿を頂戴した（「研究編」掲載）。記して感謝したい。
17. パリノ・サーヴェイ（株）には、土壌分析、石材鑑定などを依頼し、その成果は「研究編」に掲載した。
18. 木製品等にかかれた墨書の解読は小松愛子が行った。
19. DVD-ROM収録の遺構写真は、各調査担当者が撮影したりバーサルフィルムをフィルムスキャナーで読み込みデジタル処理を行った。遺物写真は青山正昭・（株）セビアスがデジタル一眼レフカメラで撮影した。
20. 遺物の実測、拓本は主に今井雅子・坂野貞子・川原良子・野村 遊が行い、（株）セビアスによってデジタルトレース、写真合成を行った。
21. 本書に添付したDVD-ROMには、検出遺構一覧表、出土遺物観察表、磁器・陶器・土器組成表、人形・玩具類組成表（以上、xlsx形式）、遺構写真、遺物写真（以上、jpg形式）、電子報告書（pdf形式）を収録している。特に出土遺物観察表は「報告編」には掲載されていないので注意されたい。
22. 発掘調査に伴う図面・写真・出土文化財は東京大学埋蔵文化財調査室が駒場リサーチキャンパス、茨城県石岡市柿岡414東京大学工学部・工学系研究科柿岡教育研究施設内において、運用・保管・管理している。
23. 発掘調査及び報告書作成にあたり下記の諸氏・諸機関より御協力・御教示を賜った。記して謝意を表する。（敬称略、五十音順）

家田淳一 池田悦夫 伊藤博之 今村啓爾 内野 正 大塚達朗 大貫静夫 大橋康二 大八木謙司
 小川 望 梶原 勝 片山まび 加藤元信 金沢 陽 金子 智 川根正教 木越隆三 北野信彦
 小池 聡 古泉 弘 小泉好延 後藤貴之 後藤宏樹 小橋一朗 小林 克 小林謙一 近藤 修
 坂井 隆 渋谷葉子 鈴木伸哉 鈴木裕子 鈴木由紀夫 諏訪間順 高橋忠久 高島裕之 滝川重徳
 竹石健二 武田昭子 田嶋正和 谷川章雄 辻本崇夫 栩木 真 富田和気夫 長佐古真也 中野忠
 一郎 中野雄二 成田涼子 新見倫子 西田泰民 西脇 康 野上建紀 能代修一 橋口定志 橋本
 真紀夫 東中川忠美 船井向洋 松崎浩之 水本和美 宮崎勝美 宮崎 博 村上伸之 両角まり
 山口剛志 渡部マリカ 東京大学施設部 東京大学医学部附属病院 東京大学人文社会系研究科・文
 学部考古学研究室 東京大学理学系研究科・理学部人類学教室 日本大学文理学部史学科 浄土宗講
 安寺（株）大林組（株）誠和（株）セビアス（株）三浦工業



発掘調査参加者（所属は発掘調査時）

寺島孝一 成瀬晃司 原 祐一 篠原和大 大成可乃 大島美智子 遠藤 香 佐藤律子 坂野貞子
 （埋蔵文化財調査室）、米川裕治 君島俊行（考古学研究室大学院生）、（株）三浦工業

整理作業参加者（五十音順）

相川美香子 青山正昭 安芸毬子 阿部常樹 池田奈津代 石井龍太 今井雅子 大貫浩子 加藤理
 香 香取祐一 川原良子 小林照子 坂野貞子 清水 香 杉浦あかね 田中美奈子 野村 遊 山
 田くりか 渡邊法彦

凡 例

1. 遺構の実測図は原則として1/50で掲載している。それ以外は各図版に記した。
2. 石器の実測図は原寸、陶磁器・土器の実測図は原則として1/3で掲載している。その他の尺度は、各図版に表示している。
3. 実測図に付けられる記号及びトーンは以下のことを表している。
 - ・中心線上下端の破線は、各々推定口径、推定底径を表している。
 - ・トーンは、 が青磁の  が赤彩範囲を表している。
4. 遺構番号は、原則調査順に通し番号を付した。ただし調査担当者が複数介在しているため、必ずしも遺構番号の大小が、遺構の新旧を表すものではない。また冠詞に付けた略号は以下の通りである。

SA：堀跡 SB：建物跡 SD：溝 SE：井戸 SF：炉 SG：石積み SI：住居址 SK：土坑
SL：便槽 SP：小穴 SR：道路 ST：埋葬施設 SU：地下室 SX：性格不明遺構
5. グリッドは、調査区北西隅を基準点とし（A1）、南へアルファベット、東へ自然数（アラビア数字）を5m間隔で付した。よってグリッド名は5m四方柵の北西コーナーを交点とする英数字をあてている。A1の座標値は世界測地系第IX系 $X = -32013.1397$ 、 $Y = -6113.1242$ で、真北より0度23分32秒西偏している。

また、本グリッド網にかからないHWK-1、HWK-2に関し、HWK-1では平面直角座標系に準拠し、HWK-2では調査区北西隅を基準に、南へアルファベット、東へ自然数（アラビア数字）を5m間隔で付す独自のグリッドを設定し、基本グリッドと識別するために、冠詞にK2を付した。K2-A1の座標値は、世界測地系第IX系 $X = -32094.1354$ 、 $Y = -6166.7880$ である。なお、上記の世界測地系の値は平成23（2011）年東北地方太平洋沖地震による変動数値補正後の世界測地系（JGD2011）である。
6. 遺構断面図などに記載された標高は、東京湾平均海面（T.P.）を基準とし、基標番号「郷（2）」本郷七丁目3東大赤門前（T.P.:23.4046m）から、小数点第四位を四捨五入して算出した。なお、「郷（2）」のT.P.は、平成6年7月東京都土木技術研究所刊行の『水準基標測量成果表』に基づいている。

医学部附属病院入院棟 A 地点
報告編《第 1 分冊》
入院棟 A 地点の概要・江戸時代以前の調査・1 区遺構本文

目 次

例 言
凡 例
目 次

遺構一覧表

第 I 章 調査の経過と概要

第 1 節 調査に至る経緯	21
第 2 節 調査の方法と経過	22
第 3 節 調査地点の位置と地理・歴史的環境	24
第 4 節 基本層序	28

第 II 章 江戸時代以前の遺構と遺物

第 1 節 旧石器時代	39
第 2 節 縄文時代	43
第 3 節 古墳時代	51
第 4 節 中世	62

第 III 章 江戸時代以降の遺構 (1 区)

第 1 節 調査の概要	73
第 2 節 藩邸開発関連遺構	79
(1) 地境遺構	79
第 3 節 加賀金沢藩下屋敷期	93
(1) E 面の遺構	93
(2) E ~ D2 面の遺構	104
(3) D2 面の遺構	117
(4) D 面の遺構	148
(5) D1 面の遺構	159
第 4 節 大聖寺藩上屋敷期	221
(1) C 面の遺構	221
(2) CR2 面の遺構	229
(3) CR1 面の遺構	233
(4) C ~ A 面の遺構	236
(5) B 面の遺構	239
(6) A 面の遺構	239
第 5 節 東京 (帝国) 大学期	259
(1) 近代の遺構	259
まとめにかえて	263

参考文献
報告書抄録

《第2分冊》1区遺構図版

第IV章 江戸時代以降の遺構（1区）

《第3分冊》1区遺物本文

第IV章 江戸時代以降の遺物
主要遺構出土磁器・陶器・土器組成表
人形・玩具類組成表

《第4分冊》1区遺物図版

第IV章 江戸時代以降の遺物（1区）

《第5分冊》2区の調査

凡 例
目 次
第I章 調査の概要
第II章 2区の遺構
第III章 2区の遺物
第IV章 まとめ

《第6分冊》基幹整備共同溝等地区の調査

凡 例
目 次
第I章 調査の経緯と経過
第II章 HWK-1地点の調査
第III章 HWK-2地点の調査
第IV章 HWK-3地点の調査
第V章 HWK-4地点の調査

附図

- 附図 1 : 1 区 ローム面・H 面、G 面、F 面全体図 (1/200)
- 附図 2 : 1 区 E 面、E 面～D2 面、Db 面、D 面全体図 (1/200)
- 附図 3 : 1 区 D2 面、Db 面、D 面全体図 (1/200)
- 附図 4 : 1 区 D 面、Da 面、D1 面全体図 (1/200)
- 附図 5 : 1 区 D1 面全体図 (1/100)
- 附図 6 : 1 区 D1 面礎石配置図 (1/100)
- 附図 7 : 1 区 D1 面礎石エレベーション (1)
- 附図 8 : 1 区 D1 面礎石エレベーション (2)
- 附図 9 : 1 区 C 面、C 面～A 面全体図 (1/200)
- 附図 10 : 1 区 C 面、CR2 面、C 面～A 面全体図 (1/200)
- 附図 11 : 1 区 CR2 面全体図 (1/100)
- 附図 12 : 1 区 C 面、CR1 面、C 面～A 面全体図 (1/200)
- 附図 13 : 1 区 CR1 面全体図 (1/100)
- 附図 14 : 1 区 C 面～A 面、B 面、A 面、近代全体図 (1/200)
- 附図 15 : 2 区 全体図 (1/100)

遺構		面	グ リッ ド	遺構図版		遺構		面	グ リッ ド	遺構図版		遺構		面	グ リッ ド	遺構図版	
種 別	No.			PDF 全体図@	Ⅲ-@	種 別	No.			PDF 全体図@	Ⅲ-@	種 別	No.			PDF 全体図@	Ⅲ-@
SK	2825	E面	D14	2		SP	2917	E面	I7	2		SK	3009	E面	D10	2	
SK	2826	D2面	C14	3		SP	2918	E面	I7	2		SK	3010	E面	F8	2	
SK	2827	D4面～D2面	D13	2		SP	2919	E面	I7	2		SK	3011	E面	H8	2	
SD	2829	E面	C14	2	46	SP	2920	E面	I7	2		SD	3012	E面	G9	2	
SD	2830	E面	C14	2	47	SD	2921	E面	I7	2		SK	3013	ローム面・H面	I8	1	
SK	2831	D3面	B9	2		SD	2922	E面	I7	2		SK	3014	ローム面・H面	J8	1	
SD	2832	D3面	C9	2		SD	2923	E面	I7	2		SP	3015	ローム面・H面	J8	1	
SP	2833	D3面	C9	2		SP	2924	E面	I7	2		SP	3016	ローム面・H面	I8	1	
SP	2834	D3面	C10	2		SP	2925	E面	I7	2		SK	3017	ローム面・H面	I8	1	
SK	2835	E面	A8	2		SK	2926	E面	I7	2		SK	3018	ローム面・H面	J8	1	
SK	2836	E面	A8	2		SP	2927	E面	I7	2		SP	3019	ローム面・H面	J8	1	
SX	2837	E面	A8	2		SP	2928	E面	I7	2		SK	3020	ローム面・H面	J8	1	
SX	2838	E面	A8	2		SP	2929	E面	G6	2	85	SP	3021	E面	I3	2	
SK	2840	E面	A9	2		SP	2930	E面	G5	2		SP	3022	E面	I3	2	
SK	2841	E面	A9	2		SP	2931	E面	G6	2		SP	3023	E面	I3	2	
SK	2842	E面	A10	2		SX	2932	E面	G6	2		SP	3024	E面	J3	2	
SK	2843	E面	A10	2		SP	2933	E面	H6	2		SP	3025	E面	J3	2	
SK	2844	E面	A10	2		SX	2934	E面	G6	2		SP	3026	E面	I6	2	
SK	2845	E面	A10	2		SD	2935	E面	H7	2		SP	3027	E面	I6	2	
SK	2846	E面	A10	2		SP	2936	E面	H7	2		SP	3028	E面	I6	2	
SK	2847	E面	A11	2		SP	2938	E面	H7	2		SP	3029	E面	I6	2	
SK	2848	E面	A10	2		SX	2939	E面	H7	2		SP	3030	E面	H6	2	
SK	2849	E面	A10	2		SX	2940	E面	G6	2		SP	3031	E面	H6	2	
SK	2850	D3面	C10	2		SP	2941	E面	H7	2		SP	3032	E面	H6	2	
SK	2851	E面	A9	2		SP	2943	E面	B4	2		SP	3033	E面	I6	2	
SP	2852	E面	A9	2		SP	2944	E面	G6	2		SD	3034	E面	H6	2	52
SK	2853	E面	A10	2		SP	2945	E面	J2	2		SP	3035	E面	I6	2	
SK	2854	E面	A9	2		SP	2946	E面	J3	2		SX	3036	E面	I6	2	
SK	2857	D3面	C11	2		SP	2947	E面	J3	2		SX	3037	E面	I6	2	
SK	2858	D3面	D10	2		SP	2948	E面	I3	2		SP	3039	E面	H6	2	
SD	2859	D3面	C9	2		SP	2949	E面	I3	2		SP	3040	E面	H6	2	
SK	2860	E面	A8	2		SP	2950	E面	G7	2		SP	3041	E面	H5	2	
SK	2861	E面	A9	2		SK	2957	E面～D2面	J12	2		SP	3042	E面	H5	2	
SK	2862	E面	A9	2		SK	2958	E面～D2面	I13	2		SP	3043	E面	H5	2	
SK	2863	E面	A9	2		SK	2959	E面～D2面	I12	2		SX	3044	E面	H5	2	
SD	2864	D3面	C9	2		SK	2960	E面～D2面	J12	2		SK	3045	E面	I3	2	
SK	2865	D3面	C9	2		SK	2961	E面	D12	2		SK	3046	E面	I3	2	
SK	2866	D3面	C9	2		SK	2964	D4面～D2面	D12	2	148	SX	3047	E面	I3	2	
SP	2867	E面	B8	2		SK	2965	D4面～D2面	D12	2	148	SP	3048	E面	I3	2	
SK	2868	E面	B8	2		SX	2968	D4面～D2面	F15	2		SP	3049	E面	I3	2	
SK	2869	E面	B8	2		SK	2971	E面～D2面	H12	2		SP	3050	E面	I3	2	
SP	2870	E面	B8	2		SD	2972	E面	D12	2	51	SP	3051	E面	I3	2	
SK	2871	E面	B8	2	75	SK	2974	E面	E12	2		SP	3052	E面	I4	2	
SK	2872	D3面	C9	2		SK	2975	E面	E12	2		SX	3053	E面	J5	2	
SP	2873	D3面	C9	2		SK	2976	E面	G13	2		SK	3054	D4面～D2面	J5	2	149
SK	2874	E面	G8	2		SK	2977	E面	G13	2		SP	3055	E面	I5	2	
SK	2875	E面	G8	2	76	SD	2978	E面	G12	2		SK	3056	E面	I5	2	
SP	2876	E面	H8	2		SK	2981	E面	H9	2		SX	3057	E面	H5	2	
SP	2877	E面	H8	2		SK	2982	E面	H9	2		SP	3058	E面	H5	2	
SK	2878	E面	G8	2	77	SK	2983	E面	H9	2		SP	3059	E面	H5	2	
SP	2879	E面	H8	2		SK	2984	E面	H9	2		SK	3060	E面	I3	2	
SK	2880	E面	H8	2		SK	2985	E面	F8	2		SD	3061	E面～D2面	I9	2	103
SD	2881	E面	C14	2	48	SK	2986	E面	F8	2		SK	3062	ローム面・H面	J9	1	
SP	2884	E面	D14	2		SK	2987	E面	F8	2		SK	3063	ローム面・H面	J9	1	
SP	2885	E面	D14	2		SK	2988	E面	F8	2		SK	3064	ローム面・H面	J9	1	
SK	2886	E面	D15	2		SK	2989	D3面	G8	2		SK	3065	ローム面・H面	J9	1	
SK	2887	E面	D15	2		SK	2990	E面	E9	2		SK	3066	E面	B10	2	
SK	2888	E面	D15	2		SK	2991	E面	C8	2		SK	3067	E面	I8	2	
SD	2889	E面	D15	2	49	SK	2992	E面	G8	2		SK	3068	ローム面・H面	J8	1	
SD	2894	D4面～D2面	D12	2		SK	2993	E面	G8	2							
SK	2896	D4面～D2面	E13	2		SK	2994	E面	G8	2							
SD	2897	E面	D15	2		SP	2995	E面	G8	2							
SD	2898	E面	D15	2	50	SP	2996	E面	G8	2							
SK	2899	E面	C12	2		SK	2997	E面	G9	2							
SK	2901	E面	D15	2		SK	2998	E面	G9	2							
SK	2903	E面	C13	2		SK	3000	E面	G9	2							
SK	2904	E面	C12	2		SK	3001	E面	H8	2							
SK	2907	E面	C16	2		SK	3002	E面	H8	2							
SP	2911	E面	G7	2		SK	3003	E面	I8	2							
SP	2912	E面	G7	2		SK	3004	E面	I8	2							
SX	2913	E面	G6	2		SK	3005	E面	I8	2							
SP	2914	E面	G6	2		SP	3006	E面	G9	2							
SP	2915	E面	G6	2		SK	3007	E面	G9	2							
SP	2916	E面	I7	2		SK	3008	E面	C8	2							

造構種別	No.	面	グ リッ ド	造構図版	
				PDF 全体図@	Ⅲ-@
SK	3525	D4面～D2面	C12	2	
SK	3527	E面	C11	2	
SD	3528	E面	B12	2	56
SK	3535	E面	D11	2	
SP	3551	H面	B11	1	
SP	3552	H面	B11	1	
SP	3553	H面	B10	1	
SK	3554	H面	B10	1	
SK	3555	H面	B10	1	
SP	3556	H面	B10	1	
SP	3557	H面	B10	1	
SK	3558	H面	B10	1	
SK	3559	H面	B10	1	
SK	3560	H面	B10	1	
SP	3561	H面	C10	1	
SP	3562	H面	C10	1	
SP	3563	H面	C10	1	
SK	3564	H面	C10	1	
SP	3565	H面	C10	1	
SK	3566	H面	C10	1	
SK	3567	H面	C10	1	
SK	3568	H面	C10	1	
SP	3569	H面	B10	1	
SK	3570	H面	B10	1	
SK	3571	F面	H3	1	
SK	3572	F面	H3	1	
SK	3573	F面	H3	1	
SX	3574	F面	H4	1	
SX	3575	F面	I3	1	
SX	3576	F面	I3	1	
SP	3577	H面	A4	1	
SP	3578	H面	A4	1	
SP	3579	H面	A4	1	
SP	3580	H面	A4	1	
SP	3581	H面	A4	1	
SP	3582	H面	A5	1	
SP	3583	H面	A5	1	
SP	3584	H面	B5	1	
SP	3585	H面	B5	1	
SP	3586	H面	B5	1	
SF	3587	H面	A4	1	
SX	3588	H面	A4	1	
SX	3589	H面	A5	1	
SX	3590	H面	A6	1	
SP	3591	G面	D6	1	
SK	3592	E面	F13	2	
SK	3593	E面	F13	2	
SK	3594	E面	F12	2	
SK	3595	E面	F13	2	
SP	3596	E面	F13	2	
SP	3597	E面	E13	2	
SK	3598	E面	F13	2	
SK	3599	E面	E13	2	
SK	3600	E面	E13	2	
SK	3601	E面	E13	2	
SK	3602	E面	E12	2	
SK	3603	E面	E13	2	
SK	3604	E面	E13	2	
SP	3605	E面	E13	2	
SK	3606	E面	D12	2	
SK	3607	E面	D12	2	
SK	3608	E面	C12	2	
SP	3609	E面	C12	2	
SK	3610	E面	D13	2	
SP	3611	ローム面・H面	H8	1	
SP	3612	ローム面・H面	H8	1	
SP	3613	ローム面・H面	G8	1	
SP	3614	ローム面・H面	G8	1	
SP	3615	ローム面・H面	G8	1	

造構種別	No.	面	グ リッ ド	造構図版	
				PDF 全体図@	Ⅲ-@
SP	3616	ローム面・H面	G7	1	
SP	3617	ローム面・H面	H7	1	
SP	3618	ローム面・H面	H7	1	
SP	3619	ローム面・H面	H7	1	
SP	3620	ローム面・H面	H7	1	
SP	3621	ローム面・H面	G7	1	
SP	3622	ローム面・H面	G7	1	
SP	3623	ローム面・H面	G7	1	
SP	3624	ローム面・H面	G7	1	
SP	3625	ローム面・H面	G8	1	
SP	3627	ローム面・H面	G7	1	
SP	3628	ローム面・H面	G7	1	
SP	3629	ローム面・H面	G7	1	
SK	3630	ローム面・H面	G7	1	
SP	3631	ローム面・H面	G7	1	
SP	3632	ローム面・H面	G7	1	
SP	3633	ローム面・H面	G7	1	
SP	3634	ローム面・H面	G7	1	
SP	3635	ローム面・H面	G7	1	
SP	3636	ローム面・H面	G7	1	
SP	3637	ローム面・H面	G7	1	
SP	3638	ローム面・H面	G7	1	
SP	3639	H面	G7	1	
SP	3640	H面	G7	1	
SK	3641	ローム面・H面	H7	1	
SP	3642	ローム面・H面	G7	1	
SP	3643	ローム面・H面	G7	1	
SP	3645	H面	G7	1	
SD	3646	H面	G7	1	
SP	3647	H面	G7	1	
SP	3648	H面	G7	1	
SP	3649	H面	G7	1	
SD	3651	H面	G6	1	
SP	3653	H面	G8	1	
SP	3654	H面	G8	1	
SP	3655	H面	G7	1	
SP	3656	H面	G7	1	
SP	3657	H面	G7	1	
SP	3658	H面	B9	1	
SP	3659	H面	B9	1	
SP	3660	H面	B10	1	
SP	3661	H面	B10	1	
SP	3662	H面	B10	1	
SP	3663	H面	B10	1	
SP	3664	H面	B10	1	
SP	3665	H面	B9	1	
SP	3667	H面	B10	1	
SP	3668	H面	B10	1	

造構種別	No.	面	グ リッ ド	造構図版	
				PDF 全体図@	Ⅲ-@
SP	3669	H面	B10	1	
SX	3670	H面	C10	1	
SP	3671	H面	C10	1	
SP	3672	H面	C10	1	
SP	3673	H面	C11	1	
SP	3674	H面	C11	1	
SP	3675	H面	C9	1	
SX	3676	H面	G7	1	
SD	3677	H面	G7	1	
SP	3678	H面	G7	1	
SP	3679	H面	G7	1	
SK	3680	ローム面	A7	1	
SP	3681	ローム面	A7	1	
SP	3682	H面	G7	1	
SP	3683	H面	F7	1	
SP	3684	H面	F7	1	
SP	3685	H面	F7	1	
SP	3686	H面	F7	1	
SP	3687	H面	F7	1	
SP	3688	H面	F7	1	
SP	3689	H面	F7	1	
SP	3690	H面	F7	1	
SR	3692	F面	F13	1	
SP	3693	ローム面・H面・G面	G13	1	
SP	3694	ローム面・H面・G面	G13	1	
SP	3695	ローム面・H面・G面	G13	1	
SP	3696	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3697	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3698	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3699	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3700	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3701	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3702	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3703	ローム面・H面・G面	G12	1	
SP	3704	ローム面・H面・G面	G13	1	
SP	3705	ローム面・H面・G面	G13	1	
SP	3706	ローム面・H面・G面	G13	1	
SP	3707	ローム面・H面・G面	G13	1	
SP	3708	G面	G13	1	
SK	3709	G面	G13	1	
SK	3712	G面	C11	1	
SK	3717	H面	F14	1	
SK	3718	H面	F14	1	
SK	3721	E面	D13	2	
SK	3722	E面	D13	2	
SP	3723	E面	D13	2	
SK	3724	E面	D13	2	
SP	3725	H面	C7	1	
SP	3726	H面	C7	1	
SP	3727	H面	C7	1	
SP	3728	H面	C6	1	
SP	3729	H面	B6	1	
SP	3730	H面	C5	1	
SP	3731	H面	C5	1	
SP	3732	H面	C5	1	
SP	3733	H面	C4	1	
SP	3734	H面	C4	1	
SP	3735	H面	C4	1	

造構		面	グ リッ ド	造構図版	
種 別	No.			PDF 全体図@	Ⅲ-@
SP	3983	ローム面・H 面・G面	F13	1	
SP	3985	ローム面・H 面・G面	E14	1	
SD	3986	H面	B16	1	
SP	3987	ローム面・H 面・G面	E14	1	
SP	3988	ローム面・H 面・G面	E15	1	
SK	3989	ローム面・H 面・G面	D15	1	
SP	3990	ローム面・H 面・G面	D15	1	
SP	3991	ローム面・H 面・G面	D15	1	
SP	3992	H面	C16	1	
SP	3993	ローム面・H 面・G面	G13	1	
SP	3994	H面	D16	1	
SP	3995	H面	C16	1	
SP	3996	H面	G15	1	
SP	3997	H面	F14	1	
SP	3999	H面	F14	1	
SP	4000	H面	G15	1	

第 I 章 調査の経過と概要

第 1 節 調査に至る経緯

第 2 節 調査の方法と経過

第 3 節 調査地点の位置と地理・歴史的環境

第 4 節 基本層序



第 I 章 調査の経過と概要

第 1 節 調査に至る経緯

東京大学医学部附属病院では、現況病院施設の老朽化への対応策として病院エリア南半部一帯に新施設の建築を計画した。本地域を含む病院地区は、明治 30 年頃から大正初年にかけて煉瓦建築による病院諸施設が建設され、昭和初期頃に現バス通りに面した病院地区西域は、いわゆる内田ゴシックによるコンクリート建物に建て替えられた。その後も旧外来診療棟（現事務管理棟）を中心にそこから東へ中央診療棟、中央棟、中央病棟などの病院諸施設が建設されていった。その中で病院南東部は、小規模建物の新営による変化はあったものの、昭和 40 年代までは旧来の煉瓦建物が研究室として存在していた。煉瓦建物は昭和 48 年に全て解体され、当エリアは、次期再開発地区として更地となった。昭和 50 年代後半に入り、再開発計画のキープランが策定され、いよいよ始動する運びとなり、1984 年に中央診療棟地点（本郷 4）、1990 年には外来診療棟地点（本郷 10）の調査が建設工事に先立って実施された。

当時、行われていた山上会館地点、法学部 4 号館・文学部 3 号館地点、御殿下記念館地点での調査成果から、キャンパス内には江戸時代の加賀藩本郷邸に関する遺構・遺物が予想を遥かに越えて良好に存在していることが明らかになっていた。発掘調査に併せて実施された文献調査の成果から、病院地区は寛永 16（1639）年以降、加賀金沢藩の支藩である富山藩、大聖寺藩の上屋敷域に該当することが認識されていたものの、第 1 陣となった中央診療棟地点では、当初、煉瓦建物をはじめとする既存建物（もしくは解体建物）の基礎による攪乱を受け、遺構、遺物ともにすでに消滅しているだろうと考えられていた。ところが建設工事が始まって間もない頃、重機掘削中に大量の陶磁器類が出てきたので確認して欲しいという連絡が調査室に入り、現状確認を行ったところ、既存建物や配管による攪乱は随所で認められるものの、比較的良好な状態で江戸時代の遺構、盛土が遺存していることが判明し、急遽工事を中断し調査を実施することとなった。この予想に反した要因には、現状では土地改変によってその面影が薄らいでいるが、病院地区が本来本郷台地の東斜面上に位置し、それを平準化するために江戸時代から近代にかけて大規模な盛土造成が行われてきたことが大きい。その盛土の厚さによって、基礎下にも遺構が存在し、重層的な様相を呈していることが明らかになった。特に低地に近づく中央診療地点東半部では、1 万年以上以前の開析谷の影響を受け、現表から地山までの深さが 7m を越える箇所も存在した。

病院の当初計画では、中央診療棟建設に引き続き病棟建設が予定されていたが、中央診療棟東側に計画された病棟建設地点では、前述した盛土がさらに厚くなり、調査に膨大な期間を要することがほぼ確実視されたことから、急遽、再開発計画を変更し、台地上に近く、地山までの掘削深度の浅い、中央診療棟西側に計画された外来診療棟建設を先行することになり、1990 年に調査が実施された。その外来診療棟も 1993 年に竣工し、さらには同年より再開発による病院規模拡大に伴い、看護師宿舎の整備も開始された。93 年当時、病棟建設地点はほぼ更地状態で、北東の片隅に平屋建ての MRI-CT 棟、看護師宿舎 1 号棟建設工事の現場事務所が存在していたにすぎない。その MRI-CT 棟もすでに移設工事が行われており（本郷 21）、いよいよ翌 1994 年に病棟建設地点の調査が実施さ

れることとなった。

第2節 調査の方法と経過

(1) 調査の方法

調査範囲は、入院棟 A 建設予定範囲及びそれに付随する共同溝とその連結部分などの基幹整備に伴う外構範囲を対象とした。建物本体部分を略称 HW、付随する基幹整備部分を略称 HWK とし、後者は個々の地点ごとに番号を付し、HWK-1～HWK-4 と区別した。また建物本体部分は、前節でも述べたように調査開始段階で、調査範囲北側の一角に MRI-CT 棟、看護師宿舎 1 号棟建設工事事務所が存在していたこと、予想される多量の残土を仮置きするスペースの確保を考慮して、開析谷の谷筋から離れ、比較的地山レベルが浅い南側約 1/2 から調査を実施した。

グリッドは、調査区北西隅を基準点とし (A1)、南へアルファベット、東へ自然数 (アラビア数字) を 5m 間隔で付した。よってグリッド名は、5m 四方柵の北西角を交点とする英数字をあてている。A1 の座標値は世界測地系 (JGD2011) 第 IX 系 $X = -32013.1397$ 、 $Y = -6113.1242$ で、真北より 0 度 23 分 32 秒西偏している。また、基幹整備関連対象調査区は、調査開始後に設計されたため、本グリッド網にかからない HWK-1、HWK-2 に関し、HWK-1 では平面直角座標系の値を使用し、HWK-2 では調査区北西隅を基準に、南へアルファベット、東へ自然数 (アラビア数字) を 5m 間隔で付す独自のグリッドを設定し、基本グリッドと識別するために、冠詞に K2 を付した。K2-A1 の座標値は、世界測地系 (JGD2011) に換算して $X = -32094.1354$ 、 $Y = -6166.7880$ である。

調査は、重機によって表土掘削と残存していた煉瓦建物基礎の排除を行った後、人力によって重層する遺構面を上面から順に行った。盛土層も遺物を含むことから基本的に人力によって掘削していったが、1 単位の盛土が厚く且つ遺物がほぼ含まれていない場合は、調査の効率化を図るため、0.06 立米程度の小型バックホウを用いて遺物に注意を払いながら掘削を行った。

(2) 調査の経過

前項で述べたように、調査は入院棟 A 建設予定範囲のうち、完全に更地となっている南側約 1/2 を 1 次調査区とし、大学と大林組が事業契約を結んだ。それを受けて、大学、大林組、調査室 3 者で工程協議を行った結果、1994 年 4 月 21 日より表土掘削を開始した。本区域は、明治 29 年に建設され昭和 48 年に解体された煉瓦建設による病院施設が存在した場所で、表土掘削の進捗に合わせ、その建物基礎が姿を表した。検出された基礎は、建物躯体外枠に該当し、その構造は、建物外枠に合わせて掘削された布堀内にベースのコンクリートを流し込み、その上に煉瓦を積み上げる構造を取る。その際、建物の地盤沈下を防ぐため原則的に全て地山である関東ローム層まで掘削し、基礎を構築する工法が取られている。そのため、布堀ラインに江戸時代の遺構がかかった場合、布堀幅に合わせてロームが露出するまで掘り下げ、その部分に関してはベースのコンクリートを厚くしたり、煉瓦を高く積み上げ、周囲の基礎レベルに合わせる措置が執られていた。表土掘削は、この煉瓦基礎を取り除きながら進んだが、江戸時代の地下室や大形遺構にかかる箇所では、かなり深く基礎が入り、表土掘削の進展を度々妨げ障害となった。表土掘削が終了したエリアから。攪乱の除去を行いながら遺構確認のための精査を始め、確認を終えた遺構から、順次調査を開始した。重機による表土掘削と攪乱の除去は、最終的に 2 棟の煉瓦建物基礎を撤去し、6 月 2 日に終了した。

本調査区は、中央診療棟地点での調査成果及び事前に実施した試掘調査の結果、中央診療棟地点で検出された開析谷が、2次調査区のかなり広い範囲に広がっていることが想定されていた。その影響を受け、開析谷南側に位置する1次調査範囲も、Pライン付近から地山の傾斜が認められるようになる。その結果、Pライン以南では煉瓦建物など近代以降の攪乱・削平を受けていない区域でも、江戸時代の盛土は数10cm程度であったのに対し、特にLライン以北では、初期開発の段切りの影響も受け、江戸時代を通し約3mの盛土と8枚の遺構面が確認され、膨大な土量との戦いを含め、かなり困難な調査になることが予想された。それは、南北に2棟並ぶ煉瓦建物基礎のうち、JからKラインで検出された北側建物の基礎が、先に述べたように江戸時代に構築された大深度遺構の影響を受け、かなり深くまで達していたことによる。しかもその遺構のプランを精査したところ東西方向に約20mの規模を有することが確認され、盛土造成による膨大な土量以外にも、SK3とした想像を超える大形遺構の調査が待ち構えていることが判明した。全体的な遺構密度は台地上に近い南側ではさほど過密ではなく、地下室などの大形遺構は存在するものの、多くの遺構は攪乱によってローム面で確認されたことから、調査も順調に進展していったが、調査対象が北へ移るにつれ、重層する遺構面と膨大な土量によって作業量が大幅に増加した。特にSK3では、その規模による土量に加え、泥炭層を主体とする埋土中に夥しい量の遺物が廃棄されていたことによって、かなりの調査時間を費やすことになった。こうした厳しい状況であったが、10月末には江戸時代の遺構調査もほぼ終了し、最後に中世と考えられる道路遺構と、礫集中範囲の調査を終え、1次調査は11月16日に終了した。調査後の埋め戻し作業に関しては、2次調査との関連を考慮し、Lライン付近を東西に伸びる段切り以南とし、以北に関しては、現況のままとした。

続く2次調査は、看護師宿舎1号棟竣工とそれに伴う建設工事現場事務所の撤去を待って、再び大学と大林組とで契約を交わし、1995年1月31日より表土掘削を開始した。調査区南西部には、1次調査時に検出された煉瓦建物基礎が引き続き検出された。加えて、煉瓦建物解体時の瓦礫や、病院廃棄物を埋設した大形攪乱が随所に存在し、表土掘削の進捗を妨げた。そのため表土掘削が完了したのは、調査開始から2ヶ月を経過した4月5日であった。その後、遺構確認のための精査作業を行い、実際に遺構調査に着手したのは5月に入った。

表土掘削及び遺構確認中において、調査区北端に従前から表面が露出し、位置関係から大聖寺藩邸と富山藩邸の地境の可能性が予想されていた石列周辺を精査したところ、中央診療棟地点で検出された6号組石の延長であることがほぼ確認された(SD1103)。残念ながら西側中央診療棟寄りには、中央診療棟建設時の搬入用スロープのため、削平されていた。また3月3日にSD1103の延長とSG1586の延長が接続すると推定される北東部分の調査に関して施設部職員と協議するも、中央診療棟など病院施設への資材搬出入導線のため、現状では調査実施が困難であり、今後の検討課題となった。SD1103は調査の進展に伴い、天端石まで残っている範囲では、最多8段の石積みで高さ約3mを測る非常に良好な遺存状況を呈していることが確認された。また最下段の築石の一部には刻印も認められ、構築時の上限が17世紀まで遡ることも確認された。施設部に対し、本遺構の現状保存を打診したが、設計上困難である回答が帰ってきた。そのため移築保存の可能性を打診したところ、新営建物完成後の外構施設に一部移築保存する方向で合意し、大林組から石垣施工専門の(株)誠和を紹介して頂き、立面図測量後、移築保存に向けて該当箇所の築石に番号を付したプラスチックラベルを貼り付け、一石ずつ丁寧に解体し、工事エリア外の給水設備棟周辺に仮置きした。しかしその後、入院棟A新営工事期間中に施設部担当職員の移動、交替などによって進展がないまま、すでに外構設計に組み込むことができない状況になり、移築保存計画は白紙に戻る事態に陥り、入院棟Aの竣工時(2000

年)にも露天に仮置きしたままの状態であった。その時には、数年の露天放置によって築石に貼られたプラスチックラベルは剥がれ落ち、すでに復元不可能な状態になっていた。それでも何らかの形で活用することができないかと当時の施設部担当者と協議した結果、第2中央診療棟完成後の外構整備で周辺道路を大幅に整備する計画があり、当時の面影を遺すことはできなかったが、その道路の中央分離帯の縁石として利用することになった。また、その造営時に当時の病院長の提案で、使用した石列の由来を掲示する解説パネルが設置された。

調査は、前述したSD1103、講安寺との地境SG1586などの地境関連遺構をはじめ、藩邸内の遺構調査が進められた。特に、1次調査区から続くSK3はその範囲を確認したところ、南北約50mを測ることが判明し、作業員の約半数をそこに投入し、多量の土量と膨大な遺物量に対応した。9月下旬には、SD1103を含むSK3以外の範囲で18世紀以降の調査が完了し、天和2年火災後の盛土層の掘削を開始した。この盛土層はロームブロック主体土で厚いところで約2mを測ることから、バケット体積0.06立米の小型バックホウを導入し、掘削を進めた。盛土層下には、天和2年の火災による焼土層そしてそれにバックされた遺構群が比較的良好な状態で遺存していることが判ってきた(D1面)。検出された遺構群は、長屋と考えられる礎石建物群と炉、路地、溝などの附属諸施設で構成され、遺構群全ての調査が終了したのは、年明けの1月下旬であった。さらに盛土を掘り下げ下位の遺構面の調査へと進んだ。

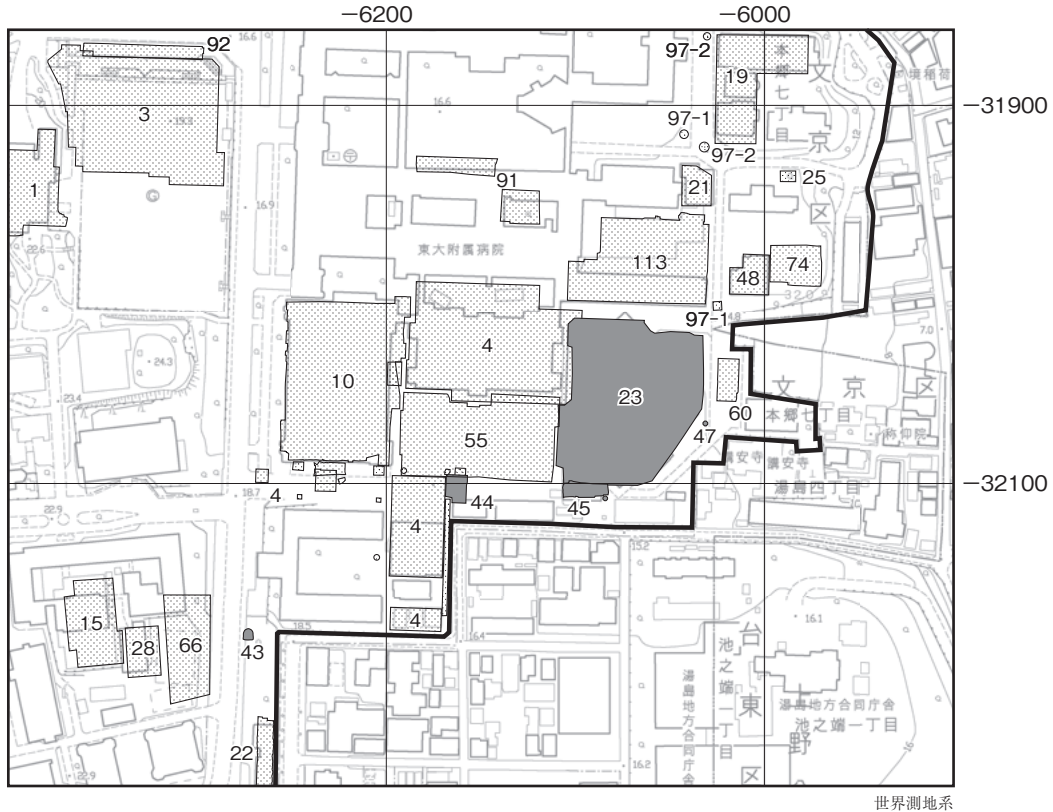
同時にSG1586東側の講安寺寺域内(2区)の調査も開始した。1月23日には、講安寺調査区内より人骨が出土したため、本富士警察に連絡を入れる。本富士署員、施設部職員、文京区担当者が立会、江戸時代人骨として調査、処理することが確認された。その後、調査の進捗に従い、Gライン以南で、甕棺墓、木棺墓、火葬墓などの埋葬施設が、高密度で検出された。出土人骨に対しては、当時の調査室長であった今村啓爾先生の紹介で、理学部人類学教室の近藤修先生に分析を依頼し、2000年に調査を行った基幹整備外構施設地点(本郷60、略称HWK-6)と併せ、研究編にその成果を掲載した。

1区における江戸時代の調査は、4月下旬にはほぼ終了し、調査は順次開析谷を形成する自然堆積層へと進み、古墳時代竪穴住居、縄文時代晩期前半遺物包含層などの調査を行い、5月31日に全ての遺構・遺物包含層の調査を終了した。翌週には東西南北メインセクションラインを重機によってトレンチ掘削し、開析谷の土層堆積状況を記録し、6月6日に全ての調査を完了した。

一方、建物建設部分の調査終了の見通しを受けて、ケヤキ移植先のHWK-1地点、基幹整備部分であるHWK-2～4地点の調査を開始し、HWK-1地点では、20㎡を対象に1996年5月12日～18日、HWK-2地点では、102㎡を対象に1996年5月27日～6月27日、HWK-3地点では、183.9㎡を対象に1996年6月3日～20日、HWK-4地点では、4.9㎡を対象に1996年6月24日～28日にかけて調査を実施し、1996年6月28日に全ての調査を完了した。

第3節 調査地点の位置と地理・歴史的環境

調査地点は、東京都文京区本郷7丁目3番1号、東京大学本郷キャンパスの東域にあたる医学部附属病院南東部に位置する(I-1図)。本地点は本郷台地東縁上にあり、現標高約16mを測る。現況はほぼ平坦であるが、調査地点の南を東へ周り北へ伸びる構内道路が緩やかに傾斜し、調査地点との比高差が徐々に大きくなっている。この道路の傾斜に旧地形の面影をわずかに見て取ることができる。江戸時代以前の旧地形は、中央診療棟地点の調査で検出され、本地点の北半部を東北東方向に伸びる開析谷の影響を強く受け、東の根津谷に向かう緩斜面を基本地形としながらも、開析谷に向かう傾斜



I-1図 調査地点の位置(S=1:4000)

23医学部附属病院入院棟A (HW) 43医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK-1) 44医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK-2) 45医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK-3) 47医学部附属病院基幹整備共同溝等 (HWK-4)
 1山上会館 3御殿下記念館 4医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝 10医学部附属病院外来診療棟 15薬学部新館 19医学部附属病院看護師宿舎Ⅰ期 21医学部附属病院MRI-CT棟 22山上会館龍岡門別館 25医学部附属病院看護師宿舎ゴミ置き場 28薬学部資料館 48医学部附属病院看護師宿舎Ⅱ期 55医学部附属病院第2中央診療棟 60医学部附属病院基幹整備外構施設等 66薬学系総合研究棟 74医学部附属病院看護師宿舎Ⅲ期 91医学部附属病院立体駐車場 92学生支援センター 97-1基幹整備(流域⑧排水)A区 97-2基幹整備(流域⑧排水)B区 113医学部附属病院入院棟Ⅱ期

が加わるというやや複雑な様相を呈している。

この谷は、中央診療棟地点のほか、給水設備棟地点でも確認され、病院地点報告書において「今回の調査で、現在はその眼で見ないとその痕跡すら確認することの困難な、本郷三丁目と春木町の間あたりを源流にし、東北流し大学の構内に入り、今回調査の給水設備棟地点、設備管理棟地点を通り、中央診療棟地点に至り、そこで向きを変え東流し、不忍池方面に流れていた沢があったことが確認された。この沢は江戸時代の初頭には、既になんかなり埋まっており、常時水のあるものではなかったものと考えられるが、沢状の地形をしていたものと推測される。中央診療棟地点の南端では23もしくは24ラインあたりに中心があり、東端ではH～Jラインあたりに中心があったものと考えられる。沢の底までは完全にさらっていないが、底で10m内外、上部で20mほどの幅をもっていた沢である。平安時代ごろにはかなり埋っており、それから江戸時代までの間にさらに埋まったものと考えられる。そのあと江戸時代にこの上に大規模な盛土がされ、さらに大学の用地になってから大規模な造成がな

され、現在見るような平坦な台地状の地形と沖積地につながる急な崖という地形が作られた。大学の南東の隅から上野方面に向かう無縁坂の傾斜は本来の傾斜に近いものだろう。」と報告している。春木町とは現在の本郷三丁目に統合された旧地名で、「本郷三丁目と春木町の間あたり」とは、本郷通りから1本東側の路地に面する本郷3丁目34、36番にあたり、おおよそ大江戸線本郷三丁目駅6番出口周辺に該当する。本郷三丁目の交差点から春日通りを東に見渡すとこの辺りがわずかに低くなっている。その後の調査成果の蓄積によって、以下のようにこの開析谷の様相が明らかになってきた。

第2中央診療棟地点（本郷55、1999～2002年調査）で、調査区東側をほぼ南北方向に伸びる開析谷が確認され、南北方向の谷が中央診療棟地点で大きく東へ曲がったことが検証された。さらに設備管理棟から給水設備棟東側の大学用地に隣接するマンション開発に伴って実施された龍岡町遺跡第7地点の調査では、調査区北側でほぼ南北方向に伸びる谷が、南側に至りほぼ直角に西方向へ曲がっていることが確認された。その延長には給水設備棟が位置し、中央診療棟地点での所見通り、同一の谷筋であることが検証された。

龍岡門を入り南北に伸びる車道は、第一本部棟付近まで緩やかに下がり、一端平坦になるが、医学部附属病院南研究棟付近から外来診療棟南側付近まで再び緩やかに上がる様相を呈している。しかし大学用地に隣接して南北方向に伸びる道路の傾斜から、本来は北へ下がる緩斜面であったことが考えられる。それは山上会館龍岡門別館地点（本郷22、1994年調査）のローム面標高が北へ向けて下がっていることから確認できるが、ここでは南側で約21m、北側で約20mと調査区南北長約60m間で、約1mの比高差にとどまる。北側のHWK-1地点のローム層上面は標高約17.7mを測り、龍岡門別館地点より2m強低くなる。この比高差はその位置関係から当初傾斜の連続性と考えられたが、山上会館龍岡門別館北側で建設が予定されているCRC-B棟の試掘調査で、その間のローム標高がさらに低いことが確認され、給水設備棟に向かう谷筋であることが確認された。また、病院地区とはバス通りを挟み西側に位置する薬学部新館地点（本郷15、1992年調査）の調査区北東部で東南東に開く谷頭が検出され、その谷筋が隣接する薬学部資料館地点（本郷28、1995年調査）の調査で、調査区北東部分で南南東方向に、さらにその東側に隣接する薬学系総合研究棟地点I期（本郷66、2002年調査）の調査では、調査区北西角から南東角へほぼ対角線状に伸びていることが確認されている。

これらの調査結果より、病院地区内をS字状に蛇行する開析谷は、薬学部新館地点を谷頭にして、複雑に蛇行し入院棟A地点に至ることが明らかになった。また入院棟A地点下流に関しては、台東区営アパート改築に伴って実施された茅町二丁目遺跡の調査で、さらに向きを東南東方向に変え根津谷に向かうことが明らかになっている。この方向は、江戸時代の加賀藩邸（富山藩邸）と南側に隣接する講安寺、称仰院との地境方向とほぼ一致しており、境界が自然地形の影響を少なからず受けていたことが確認される。

谷筋の形成に関しては、研究編に掲載したパリノ・サーヴェイによる土壌分析に詳しいが、開析谷はほぼ中央部での分析では、離水期以降、縄文期に約2mの埋積でほぼ埋まり、さらに中世までに1m数十cmの埋積が重なり、平安以降はかなり緩やかな谷地形を呈していた。

江戸以前は谷を挟んだ南北緩斜面上に旧石器時代礫群、縄文時代晩期前半の土器廃棄層、古墳時代前～後期の竪穴住居、古代と推定される柱穴群、中世の道路状遺構などが認められ、ほぼ連続的に人間活動の痕跡を観ることができる。旧石器時代では、開析谷南緩斜面上で立川ロームⅢ層中より礫を中心に剥片、細片などが出土している。近接調査地点では、看護師宿舎Ⅲ期地点、ドナルド・マクドナルド・ハウス東大地点でⅦ層から、看護師宿舎Ⅲ期地点、入院棟Ⅱ期地点、設備管理棟地点でⅣ層から石器集中区が検出されている。縄文時代では、開析谷北緩斜面上に縄文時代晩期前半の土器集中

区が認められたが、同期の遺物包含層は、隣接する第 2 中央診療棟地点でも確認され、開析谷の南北両側における廃棄行為が確認できる。また近接調査地点では、縄文時代早期末の炉跡が看護師宿舎 I、Ⅲ期地点、入院棟Ⅱ期地点から、縄文時代前期中葉の竪穴住居が看護師宿舎Ⅱ、Ⅲ期地点、ゴミ置き場地点から検出されている。続く弥生時代の活動痕跡に関しては、現状では浅野、弥生地区においてのみ確認されている。古墳時代では、開析谷をはさみ前期から後期の竪穴住居が散見される。しかし近接調査区のうち、開析谷北側台地縁辺部に位置する看護師宿舎 I～Ⅲ期地点、MRI-CT 棟地点、看護師宿舎ゴミ置き場地点、ドナルド・マクドナルド・ハウス東大地点、入院棟Ⅱ期地点では、古墳時代前期から中期にかけて竪穴住居が多数検出され、さらに最近調査を実施した CRC-A 棟 I 期地点では、同期の竪穴住居に加え、古墳跡と推定される隅丸方形もしくは円形の周溝が検出され、根津谷を挟んだ忍岡台地と共に、かなり大規模な集落が形成されていたことが明らかになりつつある。しかし中期から後期に下ると住居件数は激減し、本地点以外では看護師宿舎 I 期地点、入院棟Ⅱ期地点、中央診療棟地点、第 2 中央診療棟地点で、各 1～2 軒検出されているにとどまる。続く古代も同様に、設備管理棟地点で竪穴住居が 1 軒、中央診療棟地点で井戸が 1 基検出されたにすぎない。中世に関しては、近世の造成土、遺構覆土などに陶磁器片、板碑片が散見され、何らかの人間活動が行われていたことが推定されるが、遺構は本地点で検出された道路状遺構のみである。「本郷」の地名は、中世において湯島郡本郷と称されており、湯島郡の中心域であったとされるが、現在のところそれを考古学的に証明できるには至っていない。

江戸時代初頭、大久保忠隣邸があったといわれているが、文献、考古資料ともにその詳細は不明である。大坂の陣が終結した元和 2・3 年頃に、大久保邸跡を加賀藩は下賜され、本郷邸は下屋敷となった。本地点は本郷邸の東縁部に位置するが、現在のたんぼぼ保育園東端から南北に伸びるラインより東側は、やはり元和 2 (1616) 年に湯島天神下から移転した浄土宗講安寺の寺域となる。両者の地境は江戸時代を通して変化がないことより、本書において加賀藩邸側を 1 区、講安寺側を 2 区と空間区分している。

1 区に加賀藩邸側では、寛永 16 (1639) 年に 3 代藩主利常の次男利次が富山藩を、三男利治が大聖寺藩を分掌した。両藩は本郷邸の一角を上屋敷として加賀藩から貸与され、現在の附属病院地区のおおむね北側に富山藩邸、その南側に大聖寺藩邸、富山藩邸に続く道をはさんで東側に黒多門邸が設けられた。黒多門邸は証人制度が廃止された寛文 5 (1665) 年以降も聞番・足軽の居住区として存在した。この地境に大きな転機が訪れたのは、天和 2 (1682) 年の藩邸全焼である。それを契機に黒多門邸は廃され、その場所は大聖寺藩邸に含まれることになる。それ以降、細かい変更はあったものの基本的屋敷割りには、幕末まで踏襲される。本郷邸跡地のほとんどは、明治 10 年に東京大学用地となり、本地点周辺には医科大学のお雇い外国人教師の宿舎が建設されたが、明治 26 年頃には、病院開発計画が本格化し、一帯は病院施設へと変容し、現在に至っている。

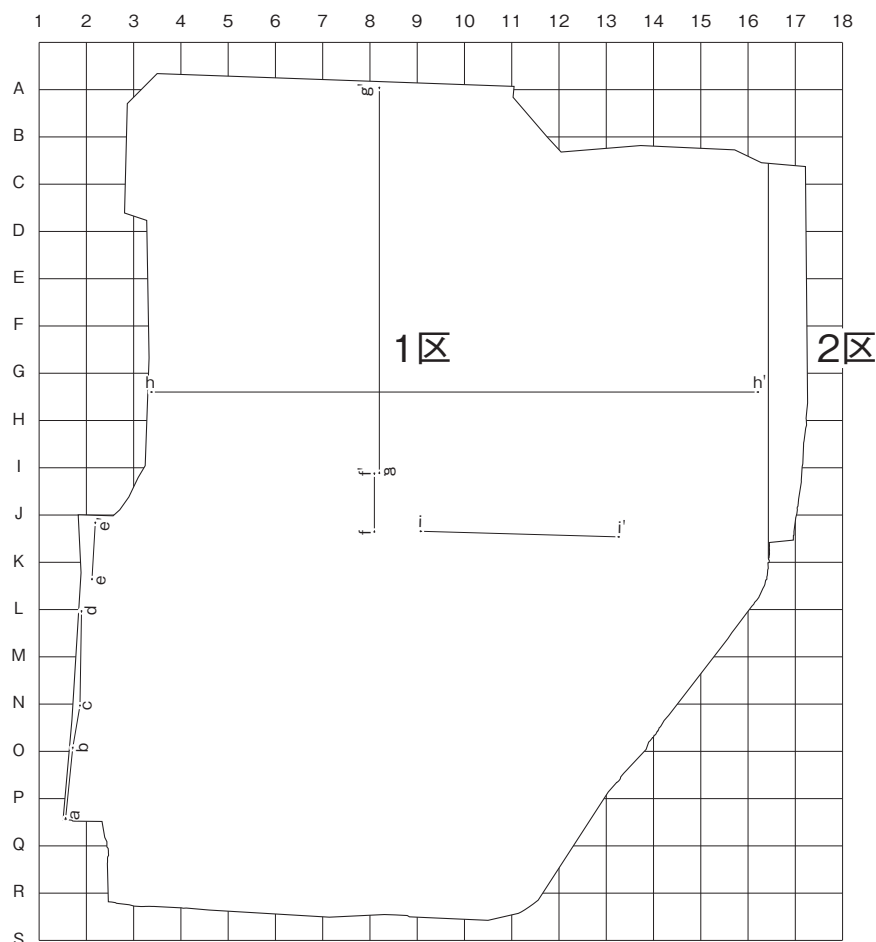
一方、2 区を含む講安寺寺域は、南側の無縁坂に通じる道に面し、山門両側には門前町屋が形成され、逆凸字状の区画を呈していた。元禄 3 (1690) 年に寺域の一部に関し富山藩との賃貸契約が結ばれる。絵画資料などから寺域北域がその区域に該当し、天保年間までは賃貸契約が結ばれていたことが判る(詳細は、研究編宮崎論考参照)。しかし、今回の調査によって山門西側門前町屋の北側も借地していた形跡が認められ、遺構変遷、遺物年代より 18 世紀末頃までは富山藩が利用していた実態が明らかになった。19 世紀以降は墓域として利用されたが、大正元 (1912) 年、東京帝国大学による用地買収によって該当墓域は巢鴨に移転することになり、その後は附属病院の一角として現在に至る。

第4節 基本層序

本地点は、既に述べたように調査区北側に開析谷の存在が確認されている。自然堆積層はもとより近世以降の開発もこの谷の影響を受けていることが確認され、谷の南側台地上と谷上部では、土層堆積に大きな様相差が認められる。ローム層から黒ボク土の堆積に関しては、研究編のパリノ・サーヴェイ論考に詳しいので、本節では概略を記載するにとどめる。

I-4図は、8ライン東1mの南北セクションで、開析谷を横断する土層図である。Hライン以南のローム層堆積は、ほぼ標準的な立川ローム層の様相が看取される。それが谷の傾斜が始まるHライン以北では、まずV、VI層の堆積が認められなくなり、さらにIV層が無くなり、III層のソフトローム層が第2黒色帯直上に堆積していることが確認される。即ち第2黒色帯形成後に浸食が始まり、降下した火山灰は全て流され、ソフトローム層形成期に離水したものと考えられる。この様相は谷を縦断するGライン南2mの東西セクションでも認められる（I-5図）。

こうして形成された開析谷は、離水期以降徐々に埋積されていく。F～I層が沖積層に該当し、谷中央部では2m数十cmの厚さを測り、江戸時代初期にはかなり緩やかな斜面に変容している。そのうちH層は、いわゆる淡色黒ボク土と称される褐色土中にソフトローム状の暗黄褐色土ブロックが斑状に含まれる土層である。本層序は縄文時代前期から後期初頭にかけての堆積土といわれている。



I-2図 調査区グリッド・基本層序ポイント(S=1:800)

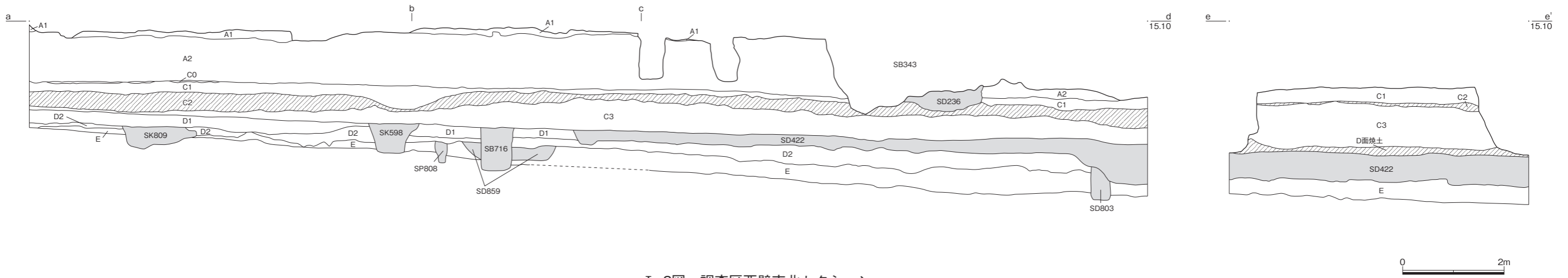
本郷キャンパス内の斜面地での調査で普遍的に認められ、御殿下記念館地点の調査では、本層上から堀之内 2 式土器や安行 3c 式土器、下層から黒浜式土器が出土している。本地点における開析谷北緩斜面で出土した安行 3c 式土器も本層上の出土である。また H 層上に堆積した G 層は黒色を呈する沖積層で、その上部には同色調の軽石粒が含まれる。パリノ・サーヴェイに委託した分析結果からこの軽石粒は、天仁元（1108）年の浅間山噴火によって噴出した浅間 B テフラ（As-B）に由来する軽石であると同定された。これらの結果より H・I 層は縄文時代に、G 層は弥生から平安末期に、F 層は中世期に埋積した層序であることが確認された。

A～E 層は江戸時代の造成土である。E 層は自然体積土層上に造成された初期造成土でローム粒を含む黒色土を基調とする。出土遺物の年代観はおおよそ 1620～30 年代に比定され、肥前磁器はほとんど含まれていない。E 層に準ずる黒色土層は、病院地区内の調査で広く認められている。寛永 6（1629）年銘の木簡を出土した中央診療棟地点の「池」遺構も本層下から検出されており、出土遺物の年代観を合わせ 1630 年代の造成と考えられ、寛永 16（1639）年の富山藩邸、大聖寺藩邸成立に関わる造成の可能性が指摘される。D 層は、D1～D4 層に細分される。そのうち D3、D4 層は開析谷中央付近の低地域にスポット的に認められ、E 層造成後に残された低地域及び緩斜面域を平準化するための盛土と推定される。続く D2 層は調査区内 L ライン以北ほぼ全域で認められ、この段階でかなり大規模な造成を伴う開発が行われたことを示している。そしてその直上にさらに D1 層が盛土される。D1 層出土の陶磁器類は 1650～60 年代に比定され、また新寛永通宝文銭が出土していることから 1660 年代末以降の造成と考えられる。D1 層造成後、すなわち D1 面段階の本地点は、礎石を伴う長屋建物群が L ライン以北に展開する。検出された長屋建物の大部分が、礎石配置から間口 2 間の狭小な区画で構成されていることが確認された。また礎石は掘方を有さず、石を配置して盛土層で固められたことが確認されており、土地利用の展開を見定めた造成であったことが読み取れる。ところで概期の本地点は絵図資料との比較から黒多門邸（証人屋敷）に比定することができる。黒多門邸は、寛文 5（1665）年の証人制度廃止以降、足軽・間番などの勤番武士居住区として使用されたことが文献資料から窺い知ることができる。検出された長屋建物群は、出土遺物も含めた検討の結果、この中・下級武士居住区に比定されるもので、D1 層の盛土造成行為は土地利用（居住者相）の変化に関連した造成と推定される。

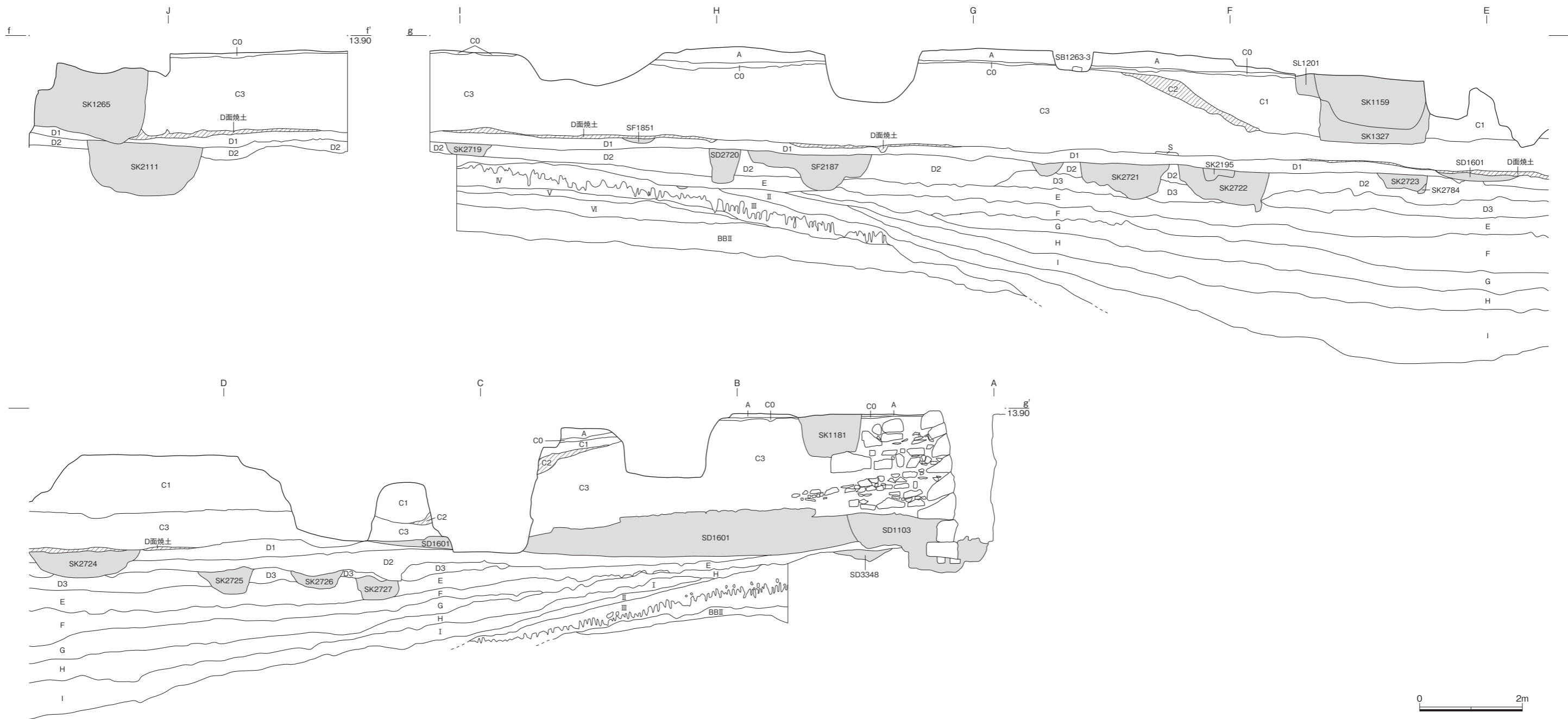
D1 層直上に堆積した D 面焼土は、L ライン以北の D1 面長屋建物群範囲で検出された（I-3 図）。その分布範囲から被災した長屋建物の壁土が構成主体と考えられ、焼土層中には陶磁器類を主とする多量の遺物が含まれていた。出土した陶磁器の年代観は 1660～70 年代を示し、「延宝八」（1680）年銘の砥石が含まれていたことから、天和 2（1682）年 12 月 28 日のいわゆる「八百屋お七の火事」によって発生した瓦礫層と考えられる。文献によるとこの火災の翌年に黒多門邸域が大聖寺藩邸に取り込まれ、加賀藩、富山藩、大聖寺藩各邸の屋敷割り再構成が施行された。その区画変更により、緩斜面を雛壇状に造成したことによって生じた大聖寺藩邸と黒多門邸の比高差を解消するために、本地点を含む黒多門邸側に大規模な盛土造成が行われた。それが C 層である。C 層はロームブロックを主体とする造成土で、C0～C4 層に細分される。堆積状況から南北両方向から埋め立てされたことが看取できる。特に C1 と C3 層に挟まれた C2 層は焼土層で、2 ライン周辺を南北方向に、C および F ライン周辺を東西方向に広がる 3 箇所検出されている。南北方向に広がる 2 ライン周辺の分布域は隣接する中央診療棟地点、第 2 中央診療棟地点でも認められる。東西方向の 2 つの分布域はおおよそ SK3 以西で顕著である。C2 層には肥前磁器を主体とする多量の被熱磁器片が含まれていた。出土した磁器片は、数個体が直重ね状に溶着した資料をはじめ、6、7 寸皿や小坏を中心に揃いの製品が一

定量含まれており、有田町南川原窯ノ辻窯跡出土資料との共通性など、御殿空間における宴で使用された食器と考えられる特徴を有す。本資料と同種の被災資料が、加賀藩邸御殿空間に位置する医学部教育研究棟地点の調査で出土したことから、両地点の遺物接合を試みたところ、10数点が藩邸を越えて接合したことより、C2層出土一括資料は、加賀藩邸内で使用、保管されていた宴用食器が被災し、瓦礫処理場として大規模盛土造成が行われている本地点まで運び込まれ、盛土内に廃棄されたことが確認された。このように瓦礫処理も含め大規模盛土造成を行い、最上層に山砂を多量に含む褐色土を敷き詰め（C0層）、新たな生活面が構築された（C面）。

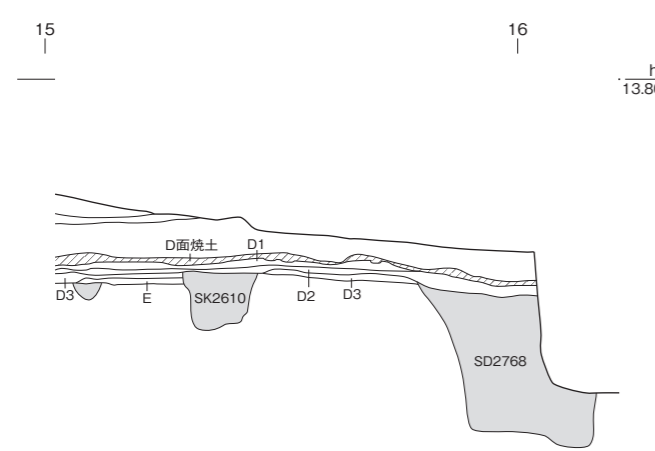
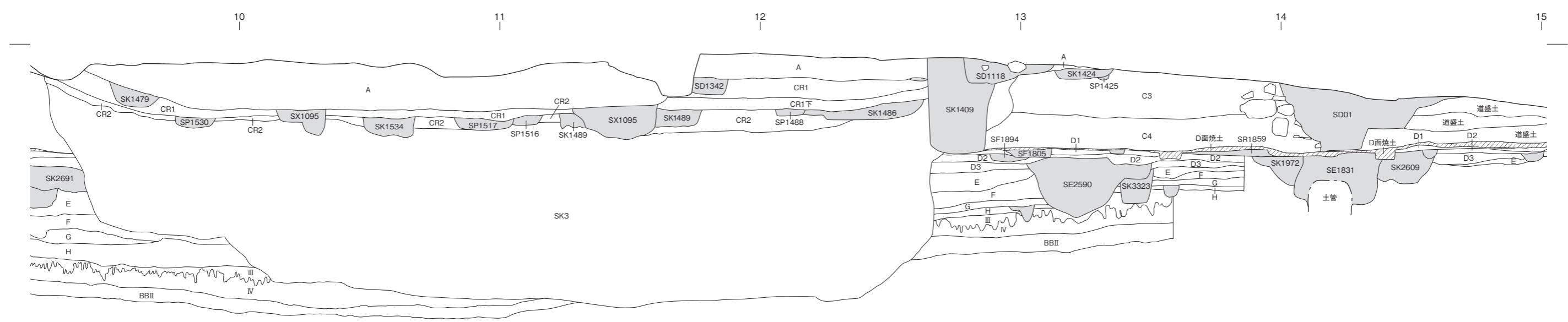
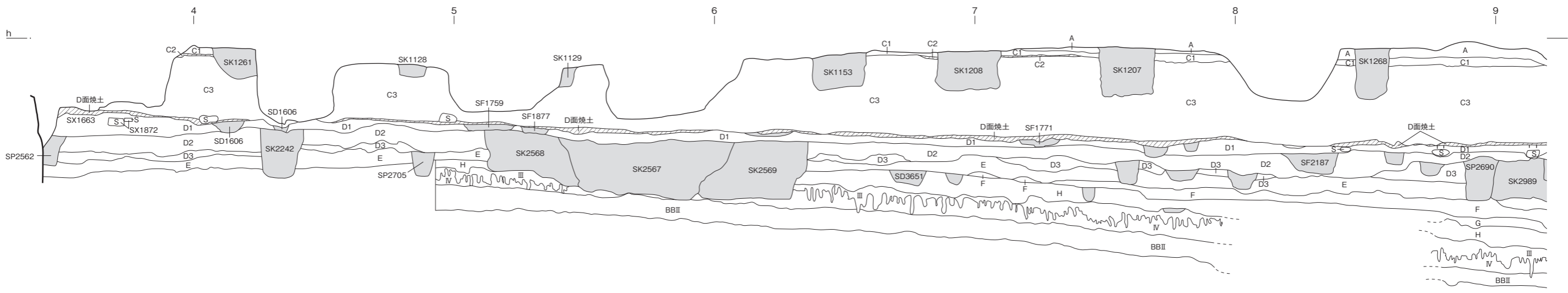
その後、C面上にA層が盛土造成される。I-6図に示したようにA層中にはC面焼土とした焼土層が含まれる。C層と同様、盛土造成時に火災後の瓦礫整理が行われたことを示し、A層の造成も火災が要因と考えられる。この火災年代は、A2層を切り込んで構築されたSD236（I-3図）の溝底に宝永4（1707）年の富士山噴火によって降下した火山灰が敷き詰められていたことより、A層の造成はそれ以前かつ天和2年の火災以降に絞られ、出土遺物の年代観も合わせ、元禄16（1703）年の「水戸様火事」による藩邸全焼後の瓦礫整理時に断定される。本地点内ではA層上は攪乱の影響もあり、近世の盛土層は残存していなかったが、HWK-2地点の調査では、それ以降の盛土も確認されている（第6分冊）。



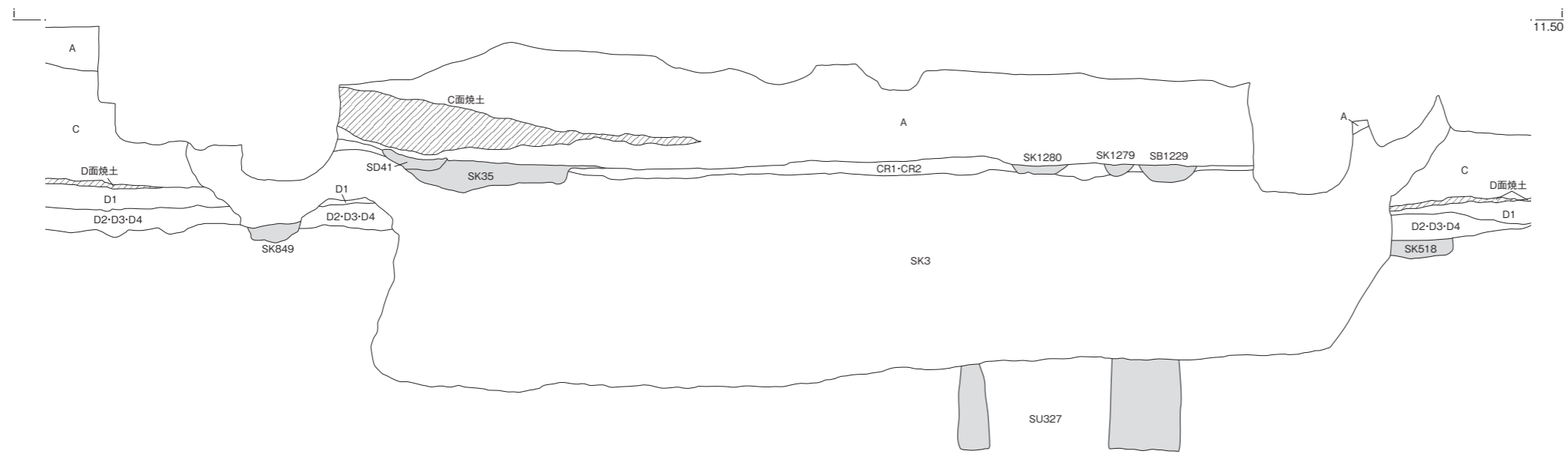
I-3図 調査区西壁南北セクション



I-4図 8ライン東1m南北セクション



I-5図 Gライン南2m東西セクション



I-6図 Jライン南2m東西セクション

第Ⅱ章 江戸時代以前の遺構と遺物

第1節 旧石器時代

第2節 縄文時代

第3節 古墳時代

第4節 中世

第Ⅱ章 江戸時代以前の遺構と遺物

第1節 旧石器時代

(1) 出土状況

L2グリッドの中央やや東寄りを中心に、ほぼグリッド全域に、一部L3グリッド・M2グリッドにかかる範囲から出土した(Ⅱ-1図上)。出土地点は調査区内に存在する埋没谷に向かう傾斜地にあたっていて、東から西に向かって傾斜している。このことも影響して、立川ローム層Ⅲ層からⅥ層の層厚が著しく薄く、一部には消失している部分も認められた(Ⅱ-1図下)。従って調査時の所見から出土遺物の帰属する時期を検討することはできなかった。

遺物は石核2点、剥片5点、細片2点、礫253点(202点が被熱)である。その中で石核・剥片をⅡ-2図に図示した(観察表については付録DVD-ROMに収録)。

- 1 剥片。チャート。打瘤部を折断している。背面は原礫面を残している。
- 2 石核。砂岩。180度に打面を転移しながら剥離が行われ、背面には一部原礫面を残している。
- 3 石核。チャート。90度、180度の打面転移による剥離が行われている。背面に一部原礫面を残す。
- 4 剥片。砂岩。打面部は折断されている。左側面の剥離は主剥離面の剥離方向に対して90度転移している。横断面はほぼ三角形の形状を呈している。石核を整形する剥片か。
- 5 剥片。チャート。打瘤部は2度の打撃で中程から折断している。背面は複数枚の剥離面から構成されている。
- 6 剥片。粘板岩。打面部が腹面からの打撃によって平坦に整形。
- 7 剥片。黒色安山岩。

文京区内には大規模な旧石器時代遺跡の調査例は少なく、真砂遺跡(文京区遺跡調査会1991)が知られている程度である。本郷キャンパス内(本郷台遺跡群)では、文学部3号館地点で3ブロックにまたがる石器の出土がある(成瀬1990a)。

文学部3号館地点は心字池をのぞむ台地の傾斜変換点に位置しており、石器の出土層位は立川ローム層Ⅲ層からⅣ層にかけてまとまっている。ナイフ形石器が2点出土しているものの主体は剥片で、第1ブロックからは石核が1点出土している。

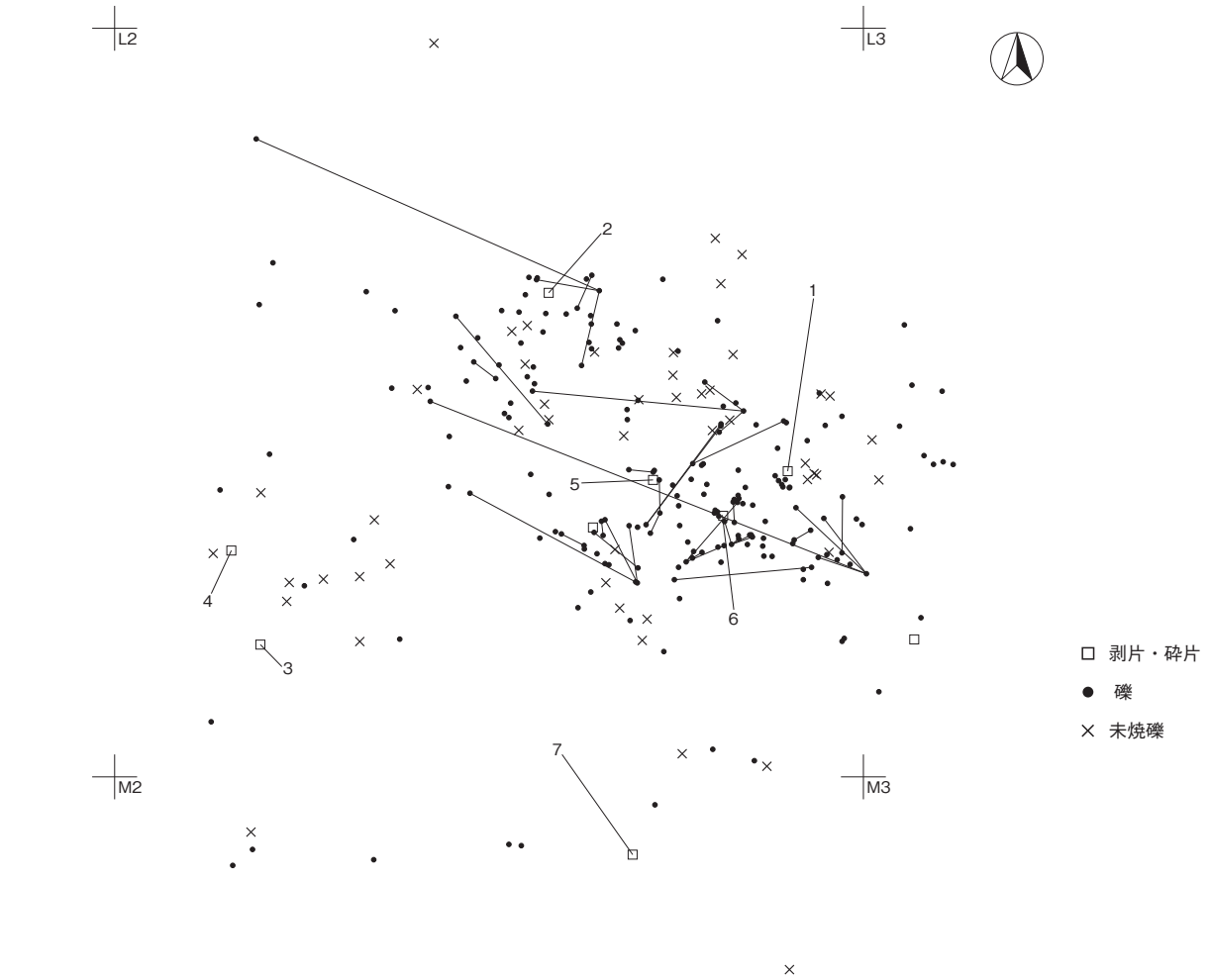
石材は黒曜石とチャートが用いられている。各ブロックの同一石材はいずれも同一母岩によるものである。接合する資料も認められるが、石器製作の具体的な工程の復元までには至らない。

附属病院周辺は文学部3号館地点より一段下の面に立地しており、これまでの調査では設備管理棟地点(成瀬1990b)、看護師宿舎地点Ⅲ期(堀内2012)、ドナルド・マクドナルド・ハウス地点(追川2012)において旧石器時代の遺物が出土している。

そのうち設備管理棟地点は本地点と同一の埋没谷に面する傾斜地上に位置している。ここからは基部の欠損したナイフ形石器と横長剥片が各1点、碎片7点の出土が報告されている(成瀬1990)。しかし出土地が傾斜地上にあたり、詳細は不明である。

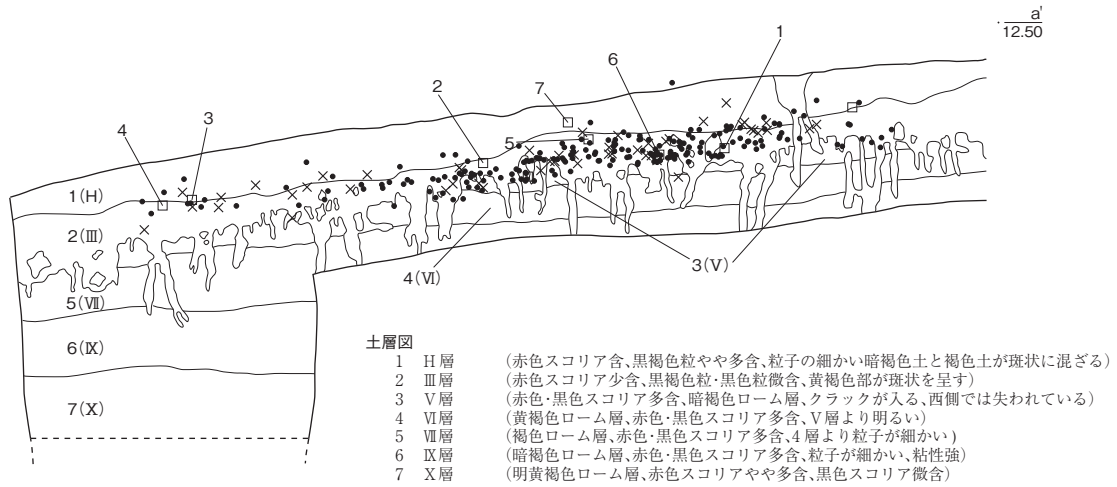
本地点もⅢ層からⅤ層までの堆積が極めて薄く、遺物も一連の石器製作の工程を示すものはないため、石器群としての特徴は不明である。附属病院周辺の遺跡のあり方から、ごく短期間の居住が埋没谷に隣接する台地上に営まれ、本地点や設備管理棟地点の石器群はそのひろがりの末端に連なっていたものと思われる。

第II章 江戸時代以前の遺構と遺物

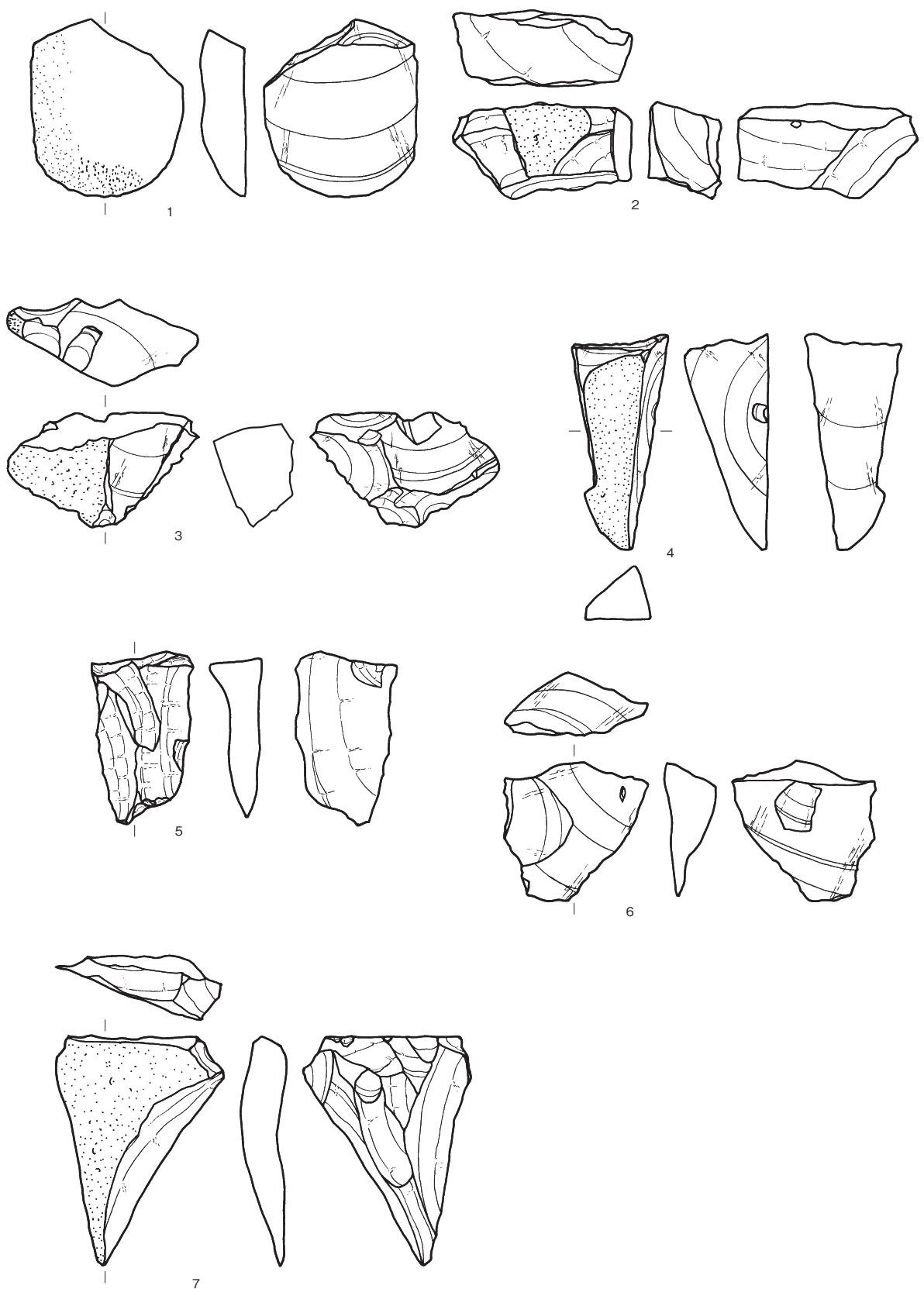


a a'

a a'



II-1図 礫群分布図



II-2図 旧石器時代の遺物

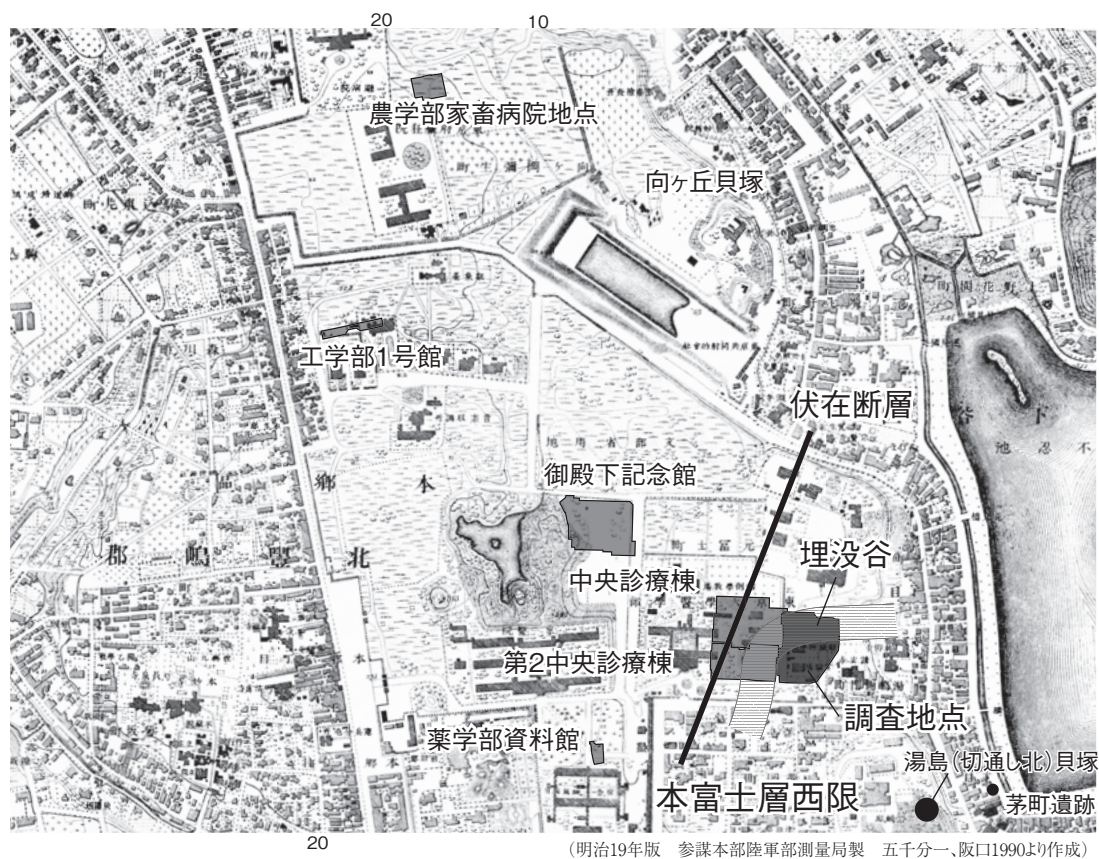
第2節 縄文時代

(1) 遺跡の位置、地形及び周辺の遺跡

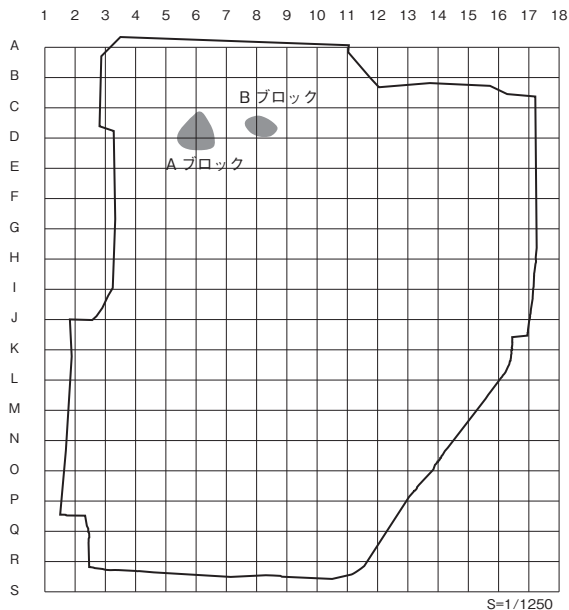
東京大学本郷構内は武蔵野台地東端のM2面に対比される本郷台上に位置している。本郷構内は20～22mの標高を持つ上位面と、15～17mの標高を持つ下位面が存在する。従来は一続きの地形面に区分されていたが、阪口豊氏の研究により新たな見解が生まれている（阪口1990）。阪口氏の見解では、本郷構内が二つの高さの違いを持つ理由を、本郷層堆積の後、離水し浸食を受けた谷に堆積した本富士層の存在に求められ、上位面である本郷層より新しい地形面とされ、その時期を四万年前頃と推定され、M3面に対比される中台面群に含まれるとされている。

現時点では本郷構内では縄文時代後・晩期の具体的な遺構は検出されていないが、これまでに農学部家畜病院地点（東京大学埋蔵文化財調査室1998）、工学部1号館地点（東京大学埋蔵文化財調査室2005）、御殿下記念館地点（東京大学埋蔵文化財調査室1990）、薬学部資料館地点（未報告 東京大学埋蔵文化財調査室1998）、中央診療棟地点（東京大学遺跡調査室1990）、向ヶ岡貝塚（東京大学文学部考古学研究室1979）など縄文時代後・晩期の土器を出土する遺跡が点在している。さらに構外ではあるが周辺に湯島（切通し北）貝塚（木下1967）、低地部で茅町遺跡（台東区遺跡調査会1999）が存在し、本郷構内を含む本富士台周辺では、安行式期を通して生活が営まれたことが類推できる（Ⅱ-3図）。

土器廃棄場は第2中央診療棟地点から中央診療棟地点を通り、東へ90度に屈曲し、本地点を通り



Ⅱ-3図 周辺の遺跡



II-4 図 検出範囲

時代後期の堆積と考えられる G 層下部より検出されている。A ブロックは C～D・5～6 グリッドに南北 7.5m、東西 7m の範囲に土器片が 282 点、自然石と思われる破片が 1 点集中して検出された (II-5 図)。そのうちある程度数量がまとまり、ほぼ遺漏なく接合が可能であったものを II-4 図中の記号 (○、□、× 等) で示している。そのほかのドットで示したものは、深鉢胴部以下の個体で接合は不能であったが、ある程度まとまった数量での同一個体の土器である可能性が考えられるものが 1、2 個体存在する。したがって A ブロックで検出した土器はある程度大きさまでに接合できた 4 個体と接合不能であった 1、2 個体の合計 5、6 個体の土器を中心に形成され、その以外の個体の小破片が散在する状況を呈している。

B ブロックは C・7～8 グリッドに南北 4.5m、東西 6m の範囲に土器片が 62 点検出された (II-6 図)。土器片以外は検出されていない。まとまった数量の個体を II-6 図中に記号 (△、□、■) で示し、接合片は結線している。B ブロックは出土数も少ないため確かなことは言えないが、II-6 図中の 2 (□)、4 に看取できるように同一個体片であっても接合しない状況が存在し、A ブロックのまとまった数量の個体がある程度接合した状況とは異なる。しかしながらドットで示した接合不能破片の多くは深鉢胴部以下の個体であるが同一個体片と考えられる 1、2 個体より構成され、B ブロック全体としては、まとまった 4、5 個体を中心とし、その他の小破片が散在する点で、A ブロックに類似する。なお二つのブロック間に接合する土器片は存在しない。

(3) 出土遺物

A ブロック (II-7 図)

1 は推定口径 25cm、器高 39.2cm、底径 6.9cm で口縁部が内傾する深鉢形を呈する。外面は上半部に横位ナデ、下半部は縦位のナデ整形が施され部分的に輪積み痕が認められる。内面は平滑に調整されている。口縁部から肩部に巡る沈線の区画内に斜行する沈線が描かれる。斜行する沈線を引いた後に肩部の沈線が引かれ、はみ出した部分をナデているが、調整は粗く部分的に残っている。肩部焼成は良好で色調は赤褐色を呈する。胎土は砂粒を含み、赤褐色である。2 は深鉢形土器で頸部にややくびれを持ち体部は開きながら立ち上がる。口縁部に横位のナデ、体部内外面に細かい不均質な板状

不忍池方向へ抜ける一続きの埋没谷の、北岸緩斜面に検出された (成瀬 2006)。今回の調査では確実に土器廃棄場に伴うと思われる、住居址などは現段階では確認できていなが、縄文時代中期後半ないし後期以前の遺物を含む基本層序の H 層上面より、前述の谷の両岸にピット群が検出されており、今回紹介する土器廃棄場との関連性が考えられる。

(2) 検出された遺構

土器廃棄場

検出された土器廃棄場は 2 つのブロックからなり、西側を A ブロック、東側を B ブロックと呼称している (II-4 図)。ともに基本層序の縄文時代中期後半ないし後期以降から古墳

工具と思われる条痕を持つ。焼成は普通で胎土色は赤褐色を呈し、直径 2mm 程度の赤色粒子を含んでいる。3 は胴部上端部に最大径を持ち緩やかに内傾する口縁部を持つ深鉢形土器である。推定口径 27.7cm、上半部のみ遺存している。口唇部に指頭と思われる押圧が 5 単位前後施されている。口縁部から頸部の調整は粗いが、胴上半部は横位にナデられている。下半部は縦位の調整が窺える。内面は口縁部内側に横位のナデが認められる。口縁部から上方開放の連続する平行弧状沈線、頸部下に平行沈線が描かれる。ともに米粒状列点が配され、さらに横たわる逆 S 字状の連続する入り組み文状沈線下に列点が配されている。焼成は良好で硬質であり胎土は赤色粒子、砂粒を多く含み暗赤褐色。4 は胴部上半部に最大径を持ち、くびれをもちやや外傾する口縁形状を呈する深鉢形土器である。推定口径 27cm、上半部のみ遺存している。口唇部は押圧が 2 単位以上施される。口縁部下の沈線文と胴部上半部に米粒状の列点を配し、平行沈線の区画内にやはり米粒状列点を配した連続する弧状平行沈線、及び下方開放の弧状平行沈線が施文されている。表面は丁寧にナデられているが器面は風化し粗い。焼成はやや不良で胎土に砂粒を多く含み脆く、褐色を呈する。5 は深鉢形土器の口縁部片で口唇部に 5 単位以上の押圧が施されている。弧状を呈すると思われる沈線間に一部復列の列点が施文される。胎土は砂を含み焼成も悪く風化、あるいは被熱して脆い。上記の接合不能個体が 5 の破片と同一個体である可能性が考えられる。6 は推定底径 4.2cm の底部片で外面は縦位の整形が施される。内面は幅 1.3cm のヘラ状工具により粗くナデられている。7～10 は紐線文系土器の胴部片。いずれも紐線が張り付けられ、連続した押圧が施される。7、8 は紐線の下縁に、9 は紐線の上縁に沈線による縁取りが認められる。8、9 の体部条線は浅い。10 は口縁部に連続した押圧、斜行する平行沈線間に鋭利な工具による刻みが施される。胎土は砂が多く焼成もやや不良で褐色を呈する。

B ブロック (Ⅱ-8 図)

1 は深鉢形土器の胴上半部である。外面はナデられ、比較的平滑であるが内面は凹凸を持ち器面の厚さが不均一である。文様は肩部に巡る沈線と、鋭利な工具によって施された斜行する沈線が、充填された胴部の平行沈線文の区画内に、横たわる逆 S 字状の入り組み状沈線文が描かれる。2 はわずかに外反する口縁部を持つ深鉢形を呈すると思われる土器の口縁部片で、胴一個体と思われる体部片が出土している。器面には横位のナデが見られるが輪積み痕が一部残される。内面はナデが施され平滑に調整される。焼成は良好で外面は赤褐色、胎土は黒色～褐色を呈し、硬質である。3 は無文深鉢形土器の口縁部片で口唇部付近は横位のナデが認められる。4 は浅鉢形土器片で口縁直下に列点を有し、単節 LR の縄文が雲形文の一部と思われる沈線区画内、および体部平行沈線内を充填される。内外面ともミガキがなされ光沢を持つ。焼成は良好で外面は黒色～褐色を呈し、薄手で硬質であるが底部付近では厚みを増し、ミガキも粗雑になっている。大洞 C1 式の影響を受けた模倣品ないし、南東北からの搬入品と思われる。5～7 は深鉢形土器の口縁部片で 5、6 は口縁部下及び斜行する米粒状列点が充填される平行沈線をもち、7 は口縁部より弧状の平行沈線が連続するであろう。8 は紐線文系土器の口縁部片で肥厚した口縁部刻みが施され、口縁部下に沈線が巡り、斜行した平行沈線文及び胴部の平行沈線文内に鋭い工具による刻みを持つ。9、10 は底部片で 9 は推定底径 6.7cm、10 は推定底径 5.3cm である。10 は縦位のヘラ状工具による整形が認められる。

(4) まとめ

土器廃棄場は「土器捨て場」、「遺物集中区」など呼称に差異が認められるが、可児通宏氏により「土器を廃棄する“場”」(可児 1971)として捉えられた後、小林達夫氏による土器の廃棄の定義付けにより「パターン D (平和台パターン)」(小林 1974)として認識され、土器廃棄場のもつ意義について、

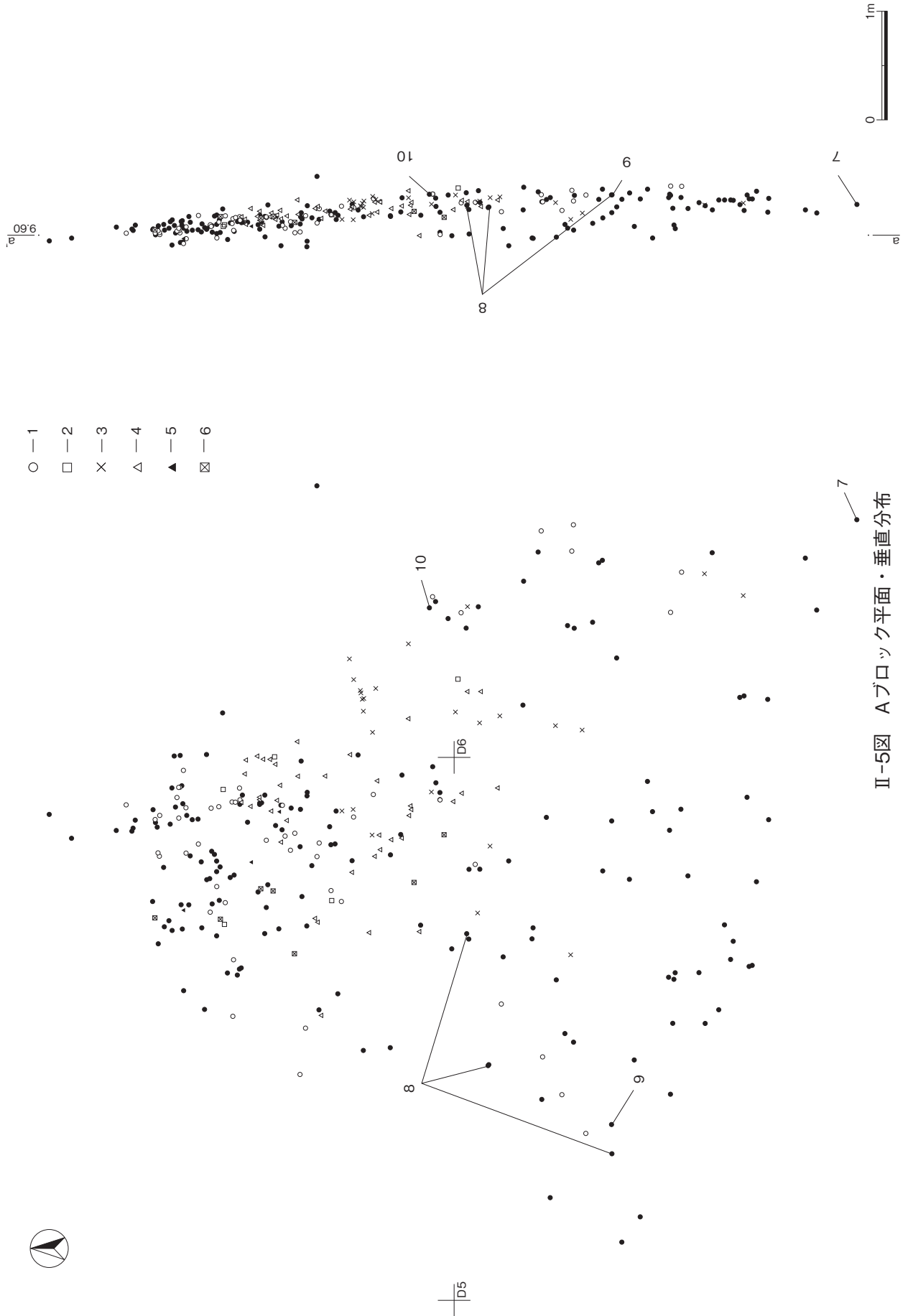
多くの報告の基礎となっている。その後資料の蓄積に伴い、土器廃棄場の形成過程が検討され、廃棄行為の復元から行動様式の復元へと、研究が深化されるようになっていく。その中で小川和博氏は「平和台パターン」を再定義し、小林氏の「パターンD」の定義から「具体的な遺構からの出土」を除外し、「斜面地、谷頭斜面部、台地下向部など」の自然地形地の上に範囲を限定されている（小川 1975）。本地点で検出された土器廃棄場は、このケースに該当すると思われる。中野修秀氏はそれまでの土器廃棄場の研究をまとめられ廃棄行為に「片付ける」という要素を抽出された（中野 1984）。また小葉一夫氏は埋没谷における縄文時代中期の遺物の分布を重量的に分析され、等高線との比較から斜面の上位に重量の重い土器が分布し、下位に軽い土器が自然営力により拡散することを述べられ、谷頭に完形土器を含むまとまった土器が多く遺存し、小破片が谷中部、谷底に出土していることを明らかにした。（小葉 1982）。さらに阿部芳郎氏は縄文時代後期前葉から中葉の土器について、破碎化の過程と飛散の種類の因果関係を検討され、廃棄ブロックの形成過程と、遺構との有機的な関係を詳細に検討され、遺跡全体の性格について考察されている（阿部 1998）。

小葉氏、阿部氏の視点は従来の出土状態の検討のみならず重量分析、土器の破碎化の復元と言う新しい視点による分析方法として、廃棄状況の復元に有効であることが考えられる。今回はこの土器廃棄場の分析視点としてとして小葉氏、阿部氏の分析方法、さらに同一個体の土器片の部位（口縁部片、胴部片、底部）の分布状況による廃棄状況の復元を試みたが、規則性・傾向を見いだすことができなかった。消極的ではあるが小葉氏、阿部氏の分析結果に背反する点に留意しまとめてみると、AブロックにおいてはⅡ-5図に見られるように同一個体の分布が平面的に比較的広範囲に検出される点、また斜面の傾斜に沿う50cm程度の堆積層幅に同一個体が垂直的に重畳する点、さらに同一個体ではあるが多くの接合できない破片が存在する点から、完形土器ないし大形破片の連続した1次廃棄の結果とは考え難く、廃棄された時点ですでに土器片が混在していたことも推測される。従い1次廃棄は別の場所で行われ、2次廃棄は後代になってからの「片付け」の可能性も考慮しなければならないであろう。Bブロックについては出土量も少ないため、廃棄状況については言及できない。

またこの2つのブロックの時間軸を考えてみると、Aブロックから出土した土器群は、概ね大宮大地に見られる安行3c式中期段階に属すると考えられる。2に見られる条痕文を有する土器は、比較的近辺の遺跡では、町田市なすな原遺跡からまとまった量の出土例（なすな原遺跡調査団 1984）があるが、東京東部地域では一般的ではなく、東海地方の影響を受けた晩期前葉から中葉の条痕文土器群との関連性が考察されている（重久 1984）。Bブロック出土の土器群も安行3c式に属するものが多いが、1に見られる入り組み文と斜行する沈線が施されたもの、8に見られる安行3b式段階と思われる紐線文土器などが含まれることから、3c式のなかでも古い段階に帰属する可能性も考えられるが、上記のような出土傾向の検討から、2つのブロックの時間差の有無は断定は難しい。

本地点周辺は、本格的な整理作業に着手していない調査地点を含め、多くの地点が調査されている。近世に属する遺構が中心ではあるが、少なからず縄文時代に属すると思われる遺構・遺物が検出されている。上記のように、この廃棄場に直接関連づけられるような遺構は、本地点では検出されていないが、広範な視点で考えることによって、この土器の廃棄を行った集団の営為を探ってみたい。

謝辞 町田市教育委員会の好意により、なすな原遺跡出土の条痕文土器を実見させていただいた。後藤貴之氏にはここに記して御礼申し上げます。



II-5図 Aブロック平面・垂直分布

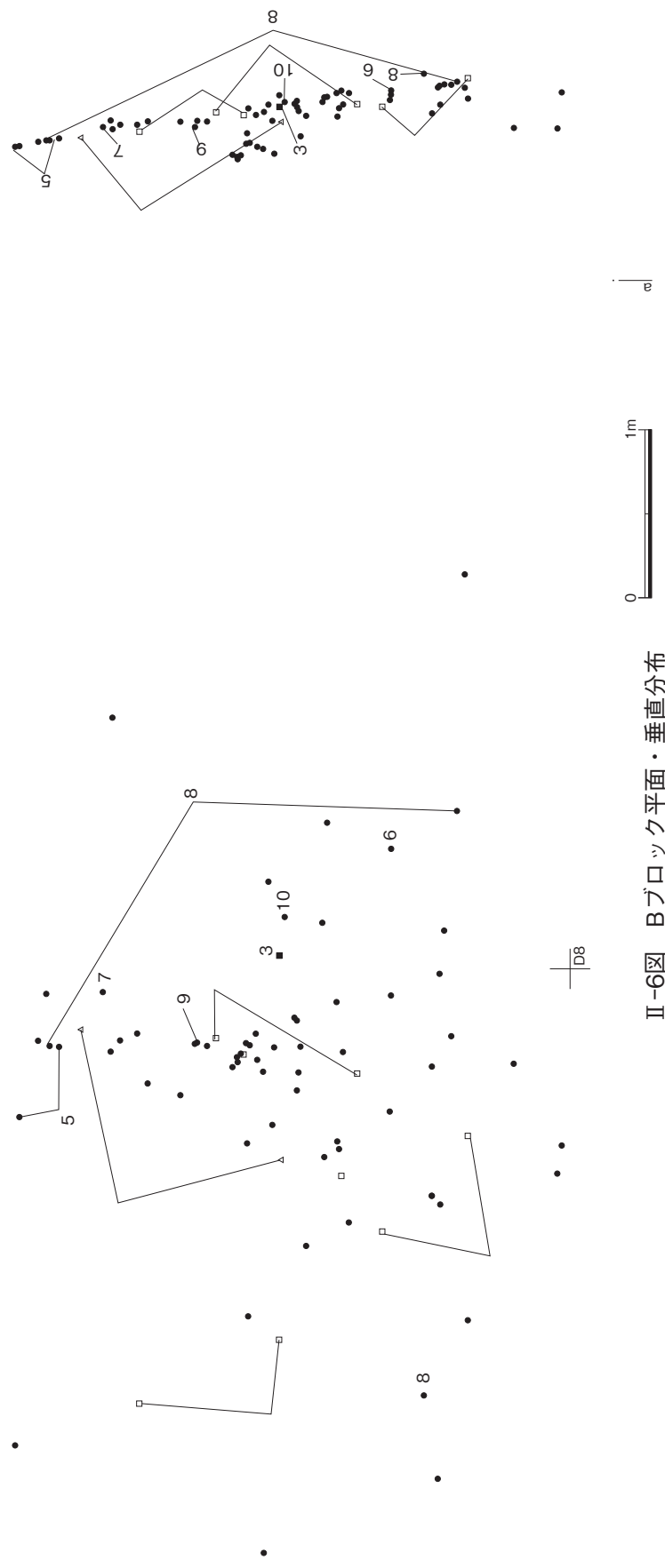


- △ — 1
- — 2
- — 3

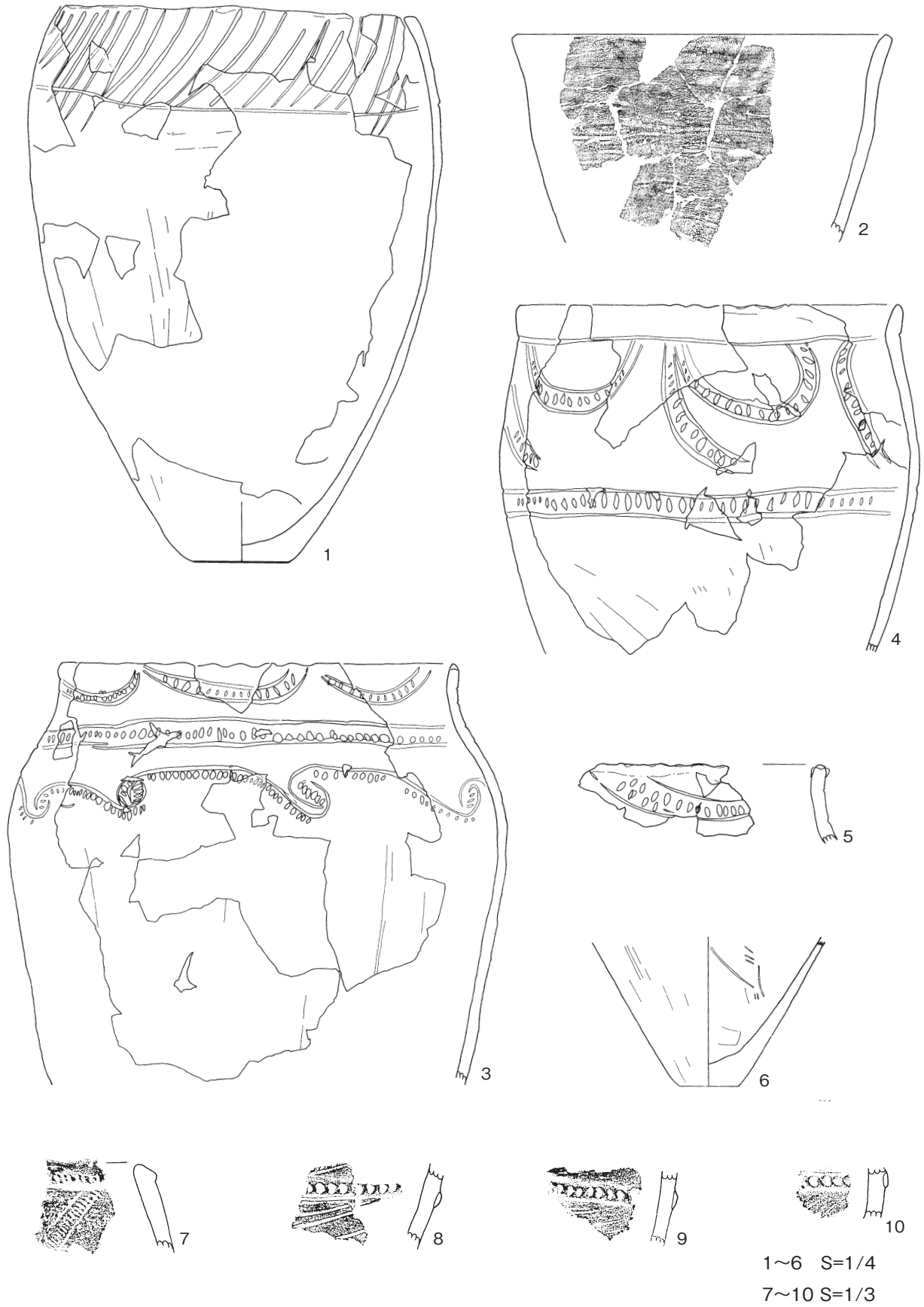
996
a

CS

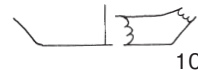
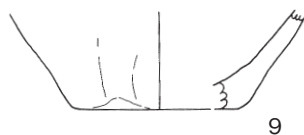
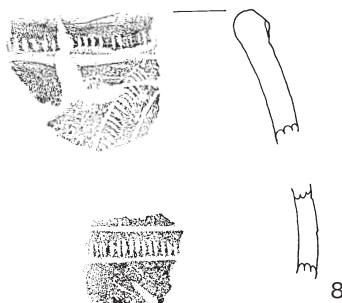
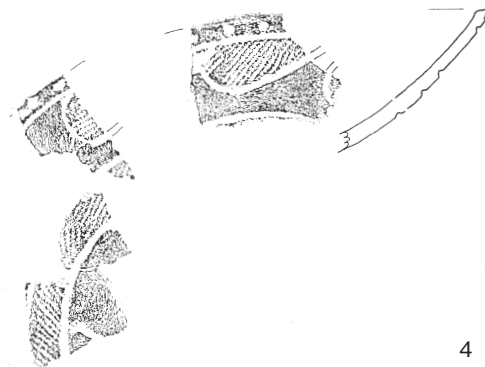
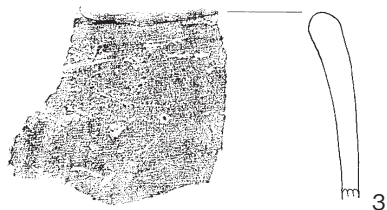
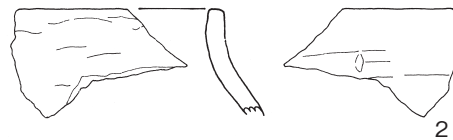
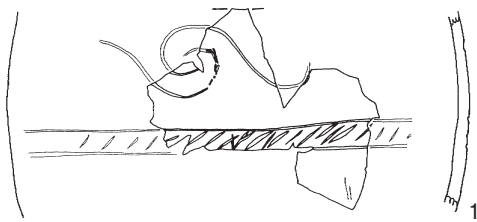
D8



II-6図 Bブロック平面・垂直分布



II-7図 Aブロック出土土器



1・2 S=1/4

3~10 S=1/3

II-8図 Bブロック出土土器

第3節 古墳時代

(1) 調査の概要

本地点からは、古墳時代前期と推定される竪穴住居が1軒(SI5)、縦穴状遺構1基(SX758)、中期と考えられる竪穴住居2軒(SI1、SI3)、後期に帰属する竪穴住居1軒(SI4)が検出された。

古墳時代後期に帰属する竪穴住居は、これまでの病院地区内調査で、中央診療棟地点(2軒)、第2中央診療棟地点(1軒)、入院棟Ⅱ期地点(2軒)、看護師宿舎Ⅰ期地点(1軒)が確認されている。これらの遺構は全て、病院地区内を蛇行して根津谷に開いていた埋没谷の北緩斜面上に位置しているが、その密度は低く、まばらな集落像がイメージされる。それに対し、古墳時代前～中期に帰属する竪穴住居は、看護師宿舎Ⅰ期地点で6軒、MRI-CT棟地点で5軒、看護師宿舎Ⅱ期地点で7軒、看護師宿舎Ⅲ期地点で15軒が検出されているが、前期の住居が主体を成している。昨夏調査が終了したCRC-A棟Ⅰ期地点、国際イノベーション棟地点でも概期の竪穴住居が検出され、その拡がりには北東側の段丘崖から、西はCRC-A棟Ⅰ期中央付近、南は本地点北端付近までの約200m四方が該当すると推定される。特に、段丘崖に近い東寄りの看護師宿舎Ⅰ～Ⅲ地点、MRI-CT棟地点では、重複事例も多く認められる。その様相から未調査域も含め、かなりの高密度で集落が構成されていたことが予想される。さらにCRC-A棟Ⅰ期地点の西側では古墳跡と推定される方形もしくは円形を呈する溝状遺構が複数基検出されており、段丘崖近くの東側に集落が、その西側台地奥部に墓域が形成されていた可能性が考えられる。

(2) H面の遺構と遺物

SI5 (Ⅱ-9 図)

遺構

調査区北端のB～C・11～13グリッドにかけて位置する竪穴住居で、H面より検出された。北側は調査区外に及び、遺構南半約2/5が調査対象である。また江戸時代の切土造成による削平を受け、壁はほとんど残存していない。平面形は隅丸方形を呈すと考えられ、東西620cm、南北(調査区内)380cm、確認面からの深さ最大20cmを測る。床面はH層中に構築されているが、硬化範囲・貼床は確認されなかった。

SI3 (Ⅱ-10 図)

遺構

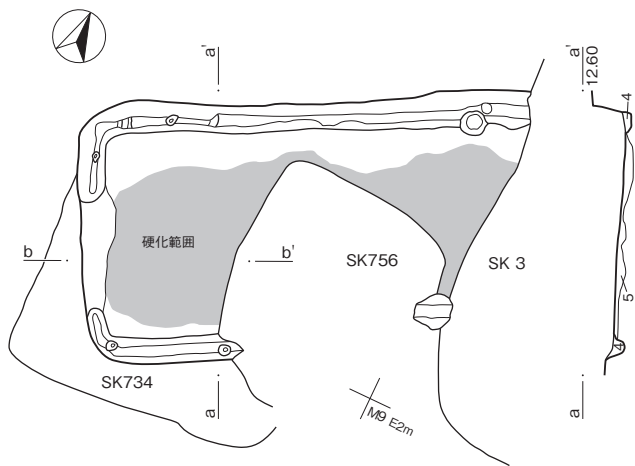
調査区南側L～M・8～9グリッドで検出された竪穴住居である。H面で検出されている。中央部および北東側を、江戸時代の遺構により攪乱されている。平面形は隅丸長方形を呈し、短軸205cm、長軸は残存部位最大で357cmである。壁は最大深25cm遺存していた。道状遺構であるSR832に切られる。

長軸方向に硬化面が検出され、床面と思われる。炉跡、柱穴は検出されなかった。周溝は短軸方向の南西側は繋がっていない。遺物は土師器が少量出土している。

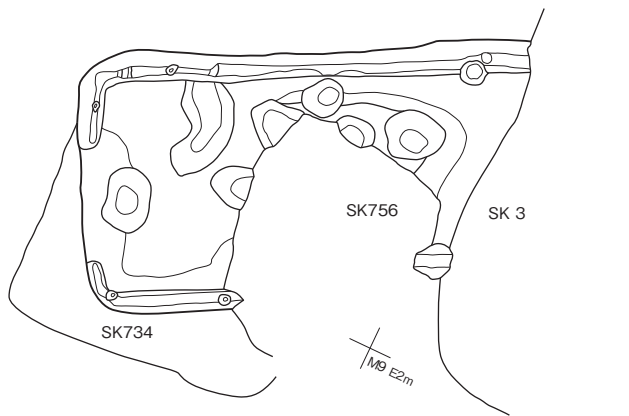
遺物

1は小形破片で、土師器壺の肩から口縁にかけてである。頸部は「く」の字状に屈曲する。外面は縦方向のヘラ削り、内面はナデによる調整が施されている。胎土は橙色。砂粒、赤色粒子を含む。古

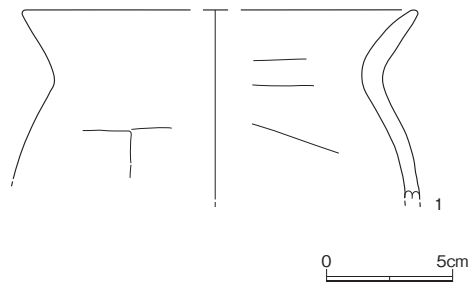
第II章 江戸時代以前の遺構と遺物



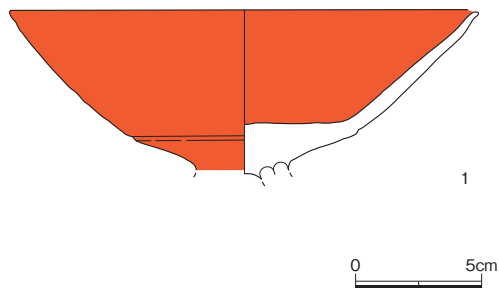
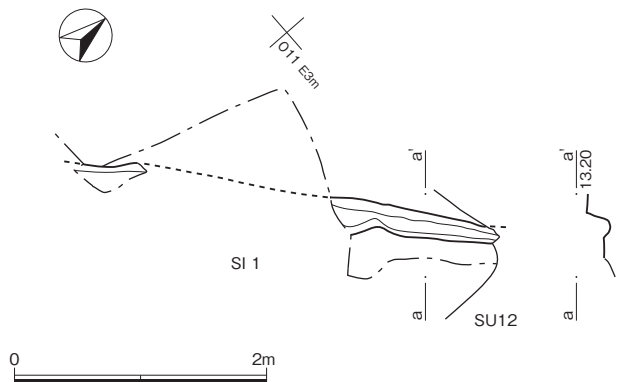
- 1 黒褐色土 (黒褐色土主体、ローム粒含、赤色スコリア微含、空隙に鉄分の凝集状のものが見られ硬く締まる、粘性やや弱、しまり強)
- 2 暗灰褐色土 (ローム主体、暗褐色土やや多含、粘性弱、しまり強)
- 3 暗黄褐色土 (ロームブロックが斑状を呈す)
- 4 暗黄灰褐色土 (褐色土中にローム粒多含、黒色土少含、炭化物粒微含、粘性弱)
- 5 暗黄灰褐色土 (灰褐色土主体、ローム土を斑状に多量含む、こげ茶色のスコリア粒多含、粘性弱、しまりやや弱)
- 6 暗黄灰褐色土 (灰褐色土主体、ローム粒多含、こげ茶色のスコリア粒多含)



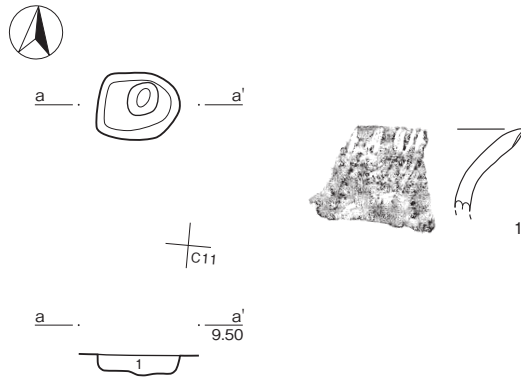
掘方



II-10 図 SI3

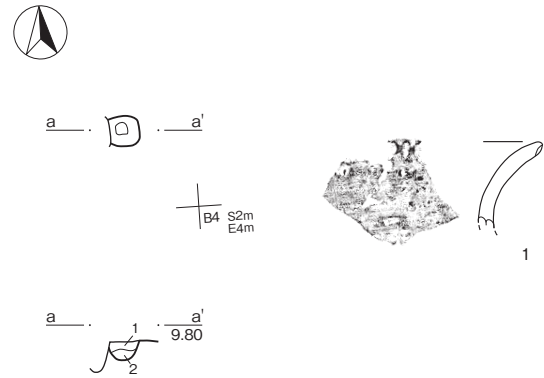


II-11 図 SI1



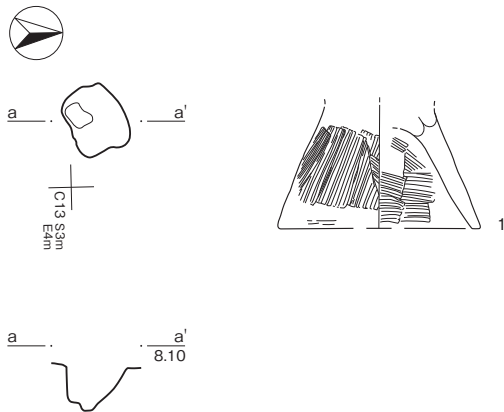
1 暗褐色土 (黒色土粒少含、ローム粒・炭化物粒微含)

SK3339

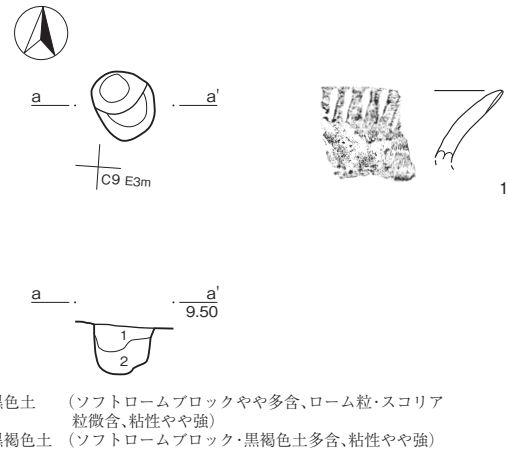


1 黒褐色土 (淡褐色スコリア多含)
2 暗褐色土 (ローム粒多含)

SP3781



SP3971



1 黒色土 (ソフトロームブロックやや多含、ローム粒・スコリア粒微含、粘性やや強)
2 黒褐色土 (ソフトロームブロック・黒褐色土多含、粘性やや強)

SP3973

II-12図 SK3339、SP3781、SP3973(遺構は1/50、遺物は1/3)

遺物

1は土師器甕の口縁部。口縁は外反し、口唇部には刻みが付されている。外面縦方向のナデ。内面はナデによる調整。胎土は黄褐色。外面にスス附着。古墳時代前期に比定される。

SP3781 (II-12図)

遺構

H面に帰属するピットで、B4グリッドに位置する。重複するSP3760より新しい。平面形は円形を呈し、直径20cmを測る。土師器片が少量出土している。A～D区の南緩斜面上には、同様のピットが多数存在しており、本遺構もそのピット群を形成する1基と考えられる。ピット出土遺物は少なく、年代を特定することは難しいが、本遺構から土師器片が出土したことによって、ピット群の年代は、古墳～中世と考えられる。

遺物

1は土師器甕の口縁部。緩やかに外反し、口唇部には刻みが付されている。内面口縁はナデ、頸部

は横方向のハケ調整。胎土は暗褐色。古墳時代前期に比定される。

SP3971（Ⅱ-12 図）

遺構 C13 グリッドに位置する遺構であり、H面に帰属する。平面形は方形を呈し、長軸43cm、短軸38cm、確認面からの深さは30cmを測る。坑底は開口部より極端に小さく、また東側に偏っている。

遺物は土師器片が少量出土している。

遺物

1は土師器台付甕の脚部。脚部は底部から真直に「ハ」の字状に開いている。外面は縦方向のハケ調整。内面は斜方向、横方向のハケ調整。胎土は明褐色。古墳時代前期に比定される。

SP3973（Ⅱ-12 図）

遺構

B9 グリッドに位置する遺構であり、H面に帰属する。平面形は楕円形を呈し、長軸47cm、短軸40cm、確認面からの深さは32cmを測る。坑底付近に小さなテラスを有す。

遺物は土師器片が少量出土している。

遺物

1は土師器甕の口縁部。外反し、口唇部には刻みが付されている。内面はナデによる調整。胎土は暗黄褐色。砂粒を少量含む。古墳時代前期に比定される。

(3) G面・G層の遺構と遺物

SI4 (II-13・14 図)

遺構

A～B・8～9グリッドに位置する竪穴式住居である。平面形はほぼ方形を呈し、規模は1辺250cm(南辺はやや長く270cm)、確認面からの深さは48cmを測る。北壁中央より東よりにカマドが付設されている。ローム主体の明黄褐色土で約2～8cmの貼床が施され平坦にされており、特に中央付近では他より硬化した状況が確認された。床面で柱穴は確認されなかった。壁は床面からやや開きながら立ち上がり、東西壁際には幅10～15cm、深さ約3～5cmの壁溝を有すが、全周する状況は確認されなかった。覆土は黒色から暗褐色土が主体で四方から流れ込む。a、bライン4層は焼土粒やブロックが多量に含まれており、平面的に検出したところ住居中央付近に集中する状況が認められた。堆積状況は他の層と同様であり、また特に火熱による硬化なども確認されなかったことから、埋積の過程で流れ込んだものである可能性が高い。なお焼土から特に遺物は出土しておらず、その年代は不明である。

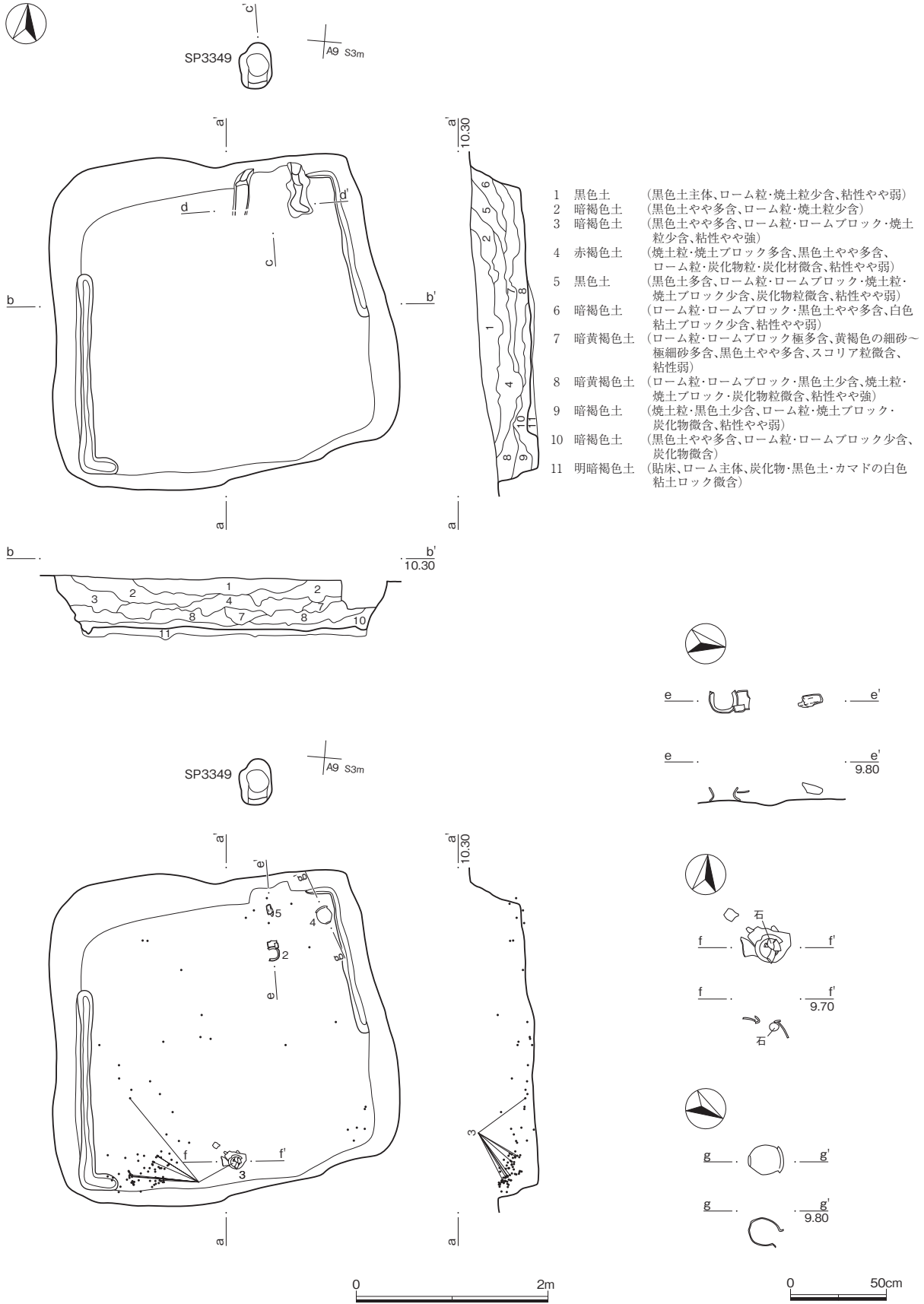
カマドは袖部、煙道部、煙道口ともに比較的良好に遺存しており、カマド本体の規模は南北105cm、東西94cm、床面からの高さは28cmを測る。カマドの掘方北側立ち上がりは住居北壁より外側へ突出し、坑底から煙道部側へ傾斜しながら立ち上がる。袖部はいわゆる山砂と粘土を芯としている(Dライン15層)ことが確認されたが、天井部や周囲の壁体は潰れており、焚口部の形状は不明である。焚口部は掘り込みをもたず、床面がそのまま利用されていたようであるが、被熱による赤色化は確認されなかった。ただしC、Dライン12層とした暗茶褐色土は焼土粒やブロックを多く含む層であり、その層からは被熱した土製支脚も出土(II-15図5)している。また12層が堆積する高さとはほぼ同じ高さで、袖部内側には被熱による赤色化が認められる。以上のことからこの付近に燃焼部があった可能性が高い。なお支脚が出土した位置から南側部分の床面が全体よりわずかに落ち窪んだ状態となっていることが確認された。カマド本体に近い煙道部南側は天井部が崩落(Cライン1層)していたが、北側では地山(ローム)を穿ち、煙出部(SP3349)まで伸びる状況が確認された。規模は長さ105cm、幅35～42cmを測る。坑底はわずかに凹凸を有し、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は「U」字形を呈す。煙出部平面形は南北に長い楕円形を呈し、東西57cm、南北79cm、確認面からの深さは80cmを測る。覆土の堆積状況を見ると、煙出部から煙道部へ覆土が流れ込む状況が確認されるが、その流れ込みはカマドの天井あるいは壁体の崩落土と思われる層(Cライン4、5層)で止まっている。従って煙道部からの覆土の流れ込みはカマド本体の天井や壁体の崩壊後と考えられる。

遺物は110数点確認されているが、多くが住居南壁付近の暗褐色土(2、3層)内から出土したものであり、床面直上から出土したものはあまり多くなく、実測遺物の2、3、4がそれぞれである。カマド内からの出土遺物は前述の支脚を含めて土師器破片が4点確認されたのみである。

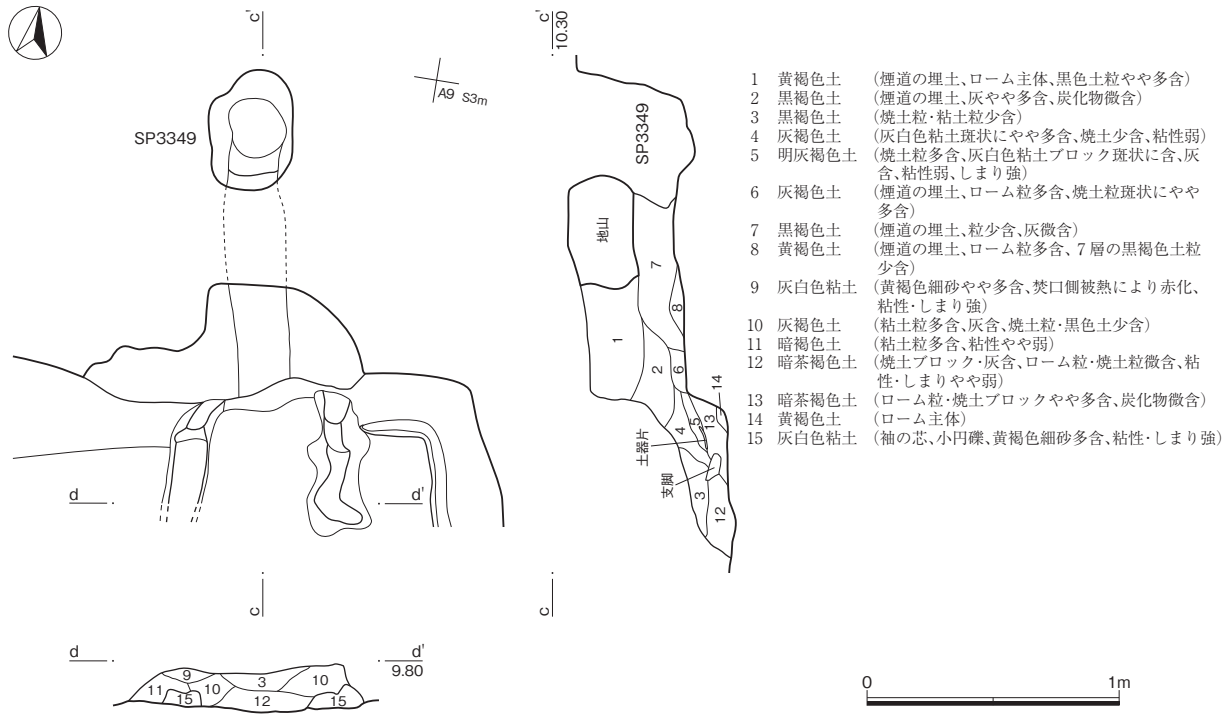
出土した土器の年代観などから、本住居址は隣接する中央診療棟地点でも確認されている古墳時代後期に帰属するものであろう。

遺物 (II-15 図)

土師器の壺、甕、坏がまとまって出土している。また、カマドからは、支脚が出土している。1は坏である。口縁部は外反しながら内湾気味に立ち上がり、体部との境は明瞭な稜を持つ。外面底部はヘラ削り。外面体部から内面にかけてはナデによる調整。外面はうっすらと黒色化している。胎土は

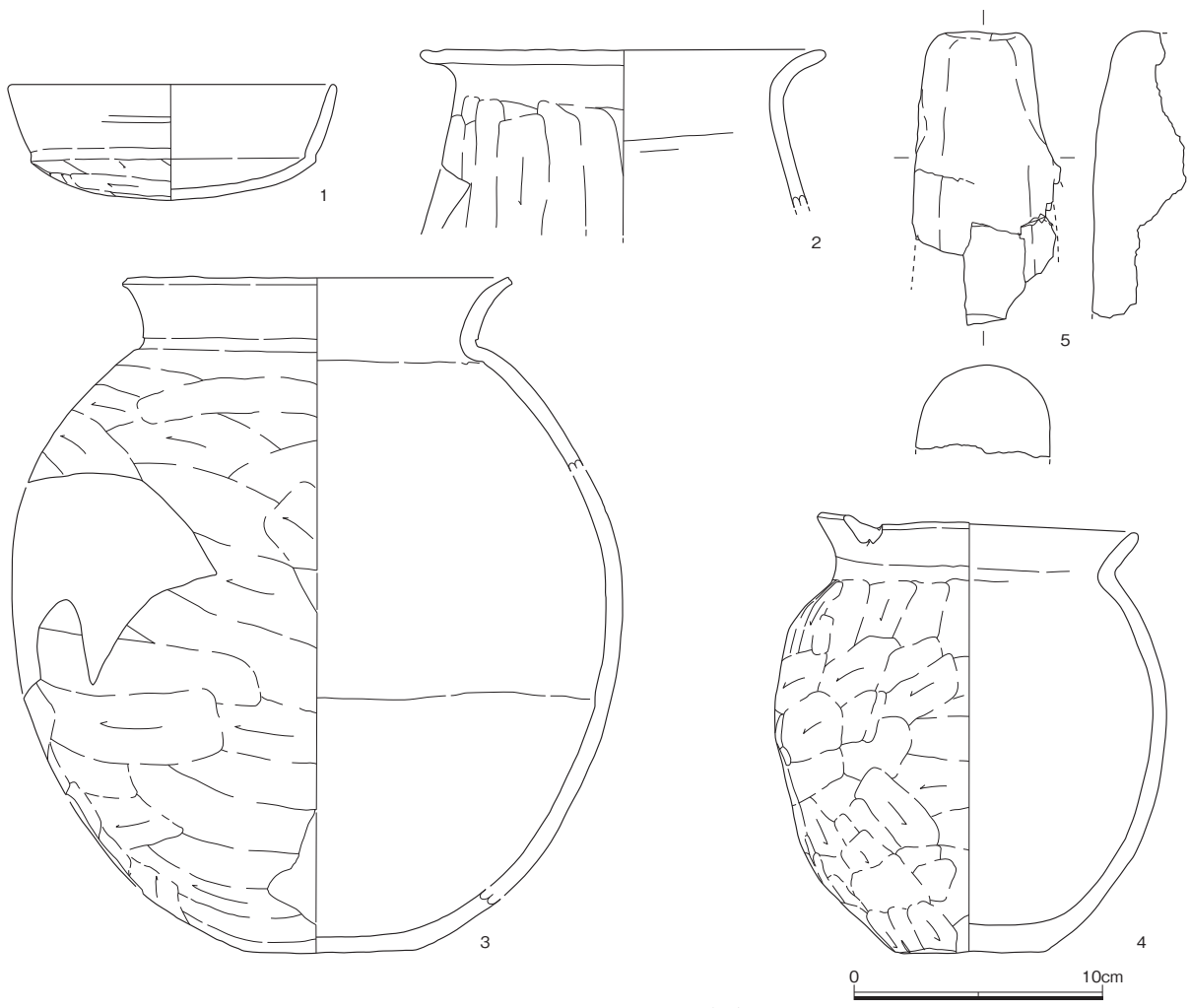


II-13図 SI4



- 1 黄褐色土 (煙道の埋土、ローム主体、黒色土粒やや多含)
- 2 黒褐色土 (煙道の埋土、灰やや多含、炭化物微含)
- 3 黒褐色土 (焼土粒・粘土粒少含)
- 4 灰褐色土 (灰白色粘土斑状にやや多含、焼土少含、粘性弱)
- 5 明灰褐色土 (焼土粒多含、灰白色粘土ブロック斑状に含、灰含、粘性弱、しまり強)
- 6 灰褐色土 (煙道の埋土、ローム粒多含、焼土粒斑状にやや多含)
- 7 黒褐色土 (煙道の埋土、粒少含、灰微含)
- 8 黄褐色土 (煙道の埋土、ローム粒多含、7層の黒褐色土粒少含)
- 9 灰白色粘土 (黄褐色細砂やや多含、焚口側被熱により赤化、粘性・しまり強)
- 10 灰褐色土 (粘土粒多含、灰含、焼土粒・黒色土少含)
- 11 暗褐色土 (粘土粒多含、粘性やや弱)
- 12 暗茶褐色土 (焼土ブロック・灰含、ローム粒・焼土粒微含、粘性・しまりやや弱)
- 13 暗茶褐色土 (ローム粒・焼土ブロックやや多含、炭化物微含)
- 14 黄褐色土 (ローム主体)
- 15 灰白色粘土 (袖の芯、小円礫、黄褐色細砂多含、粘性・しまり強)

II-14図 SI4 カマド



II-15図 SI4 出土遺物

明褐色。砂粒、雲母を含む。2は住居址北東側カマド付近床面より出土している。長胴甕の胴部から口縁にかけてである。口縁部は外反して立ち上がる。外面は縦方向のヘラ削り。内面は横方向のヘラナデ、口縁部は横ナデによる調整。胎土は明黄褐色。小石、雲母、砂粒、長石を微量に含む。3は住居址南壁際の埋土から出土している壺である。頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部最大径は中央やや上方である。外面は横方向のヘラ削り。胎土は明褐色。砂粒、赤色粒子を含む。外面胴部には部分的にスス付着。4は住居址北東角床面、カマドの東側から出土の小型壺である。頸部は「く」の字状に屈曲する。胴部最大径は中央やや上方である。外面は上方から順にヘラで調整しており、縦方向、左斜め下方向、右斜め下方向のヘラ削りが施されている。胎土は明褐色。砂粒、赤色粒子を含む。外面胴部から底部にかけて全面スス付着。5は土製支脚である。カマド内から出土。外面には成形時の指痕が残る。胎土は黄褐色、内部は火を受け明赤褐色になっている。

古墳時代後期に比定される土器群である。

SX758 (Ⅱ-16 図)

遺構

M～L・8～9グリッドで検出された。北西側、南側を近世の遺構に攪乱され、遺存しているコーナーは北東側のみであるが、隅丸長方形を呈していると思われる。遺構の主軸は北西から南北方向である。短軸の堀方断面形は箱状で、両壁付近で底面より15cmから25cm程度高い堆積(9・10層)が認められる。この層にはロームブロックが含まれており、人為的に埋め戻された可能性が窺える。従い中央部が一段低くなった、凹形での使用状況が考えられるが、出土遺物などもないため、遺構の性格は不明である。

SK3374 (Ⅱ-17 図)

遺構

B～C・10グリッドに位置する遺構であり、G面に帰属する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は東西125cm、南北90cm、確認面からの深さは25cmを測る。坑底の西側立ち上がり付近に、深さ4cmほどのピットを有す。壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。覆土は黒色土粒やブロックを主体とする、比較的しまりの強いものである。性格は不明である。

遺物は土器片が少量出土している。

遺物

1は土師器壺の肩から口縁にかけてである。頸部は「く」の字状に屈曲する。胎土は粗く小石、砂粒を多く、雲母を少量含む。明黄褐色。外面は縦方向のヘラ削り。調整時に、小石、砂粒が縦方向に流された痕が多く残る。古墳時代後期に比定される。

SK3910 (Ⅱ-17 図)

遺構

C～D・13グリッドに位置する遺構であり、G面に帰属する。平面形は歪な円形と方形からなり、残存規模は長軸(東西)98cm、短軸(南北)36～40cm、確認面からの深さは13～22cmを測る。覆土の堆積状況を考慮すると本来は重複する2基の遺構であった可能性が高い。

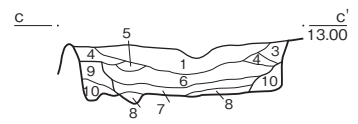
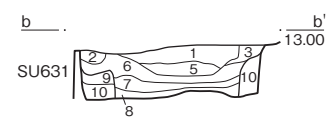
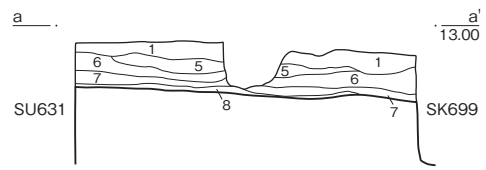
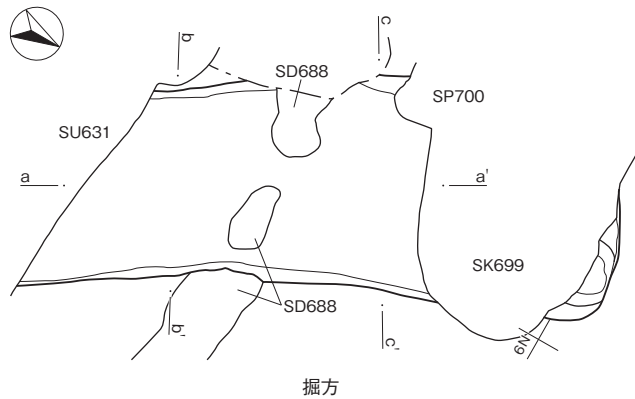
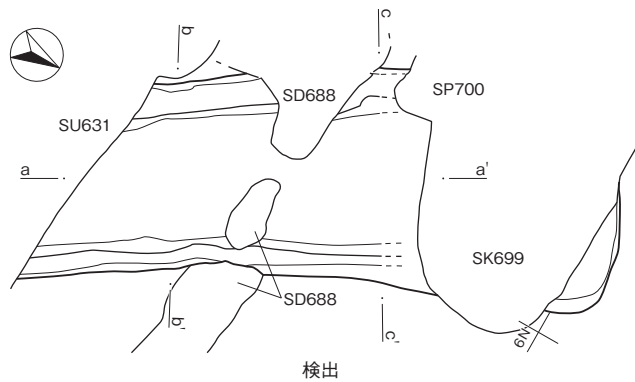
遺物は図化した土錘のみである。

遺物

1は土製の管状製品である。胎土は明赤褐色。長さ5cm。

G層出土遺物 (Ⅱ-18 図)

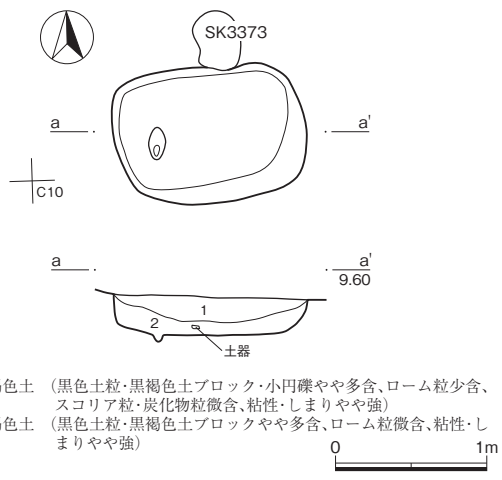
1は土師器壺の肩から口縁にかけてである。口縁は二重口縁でS字状に屈曲し、頸部は「く」の字



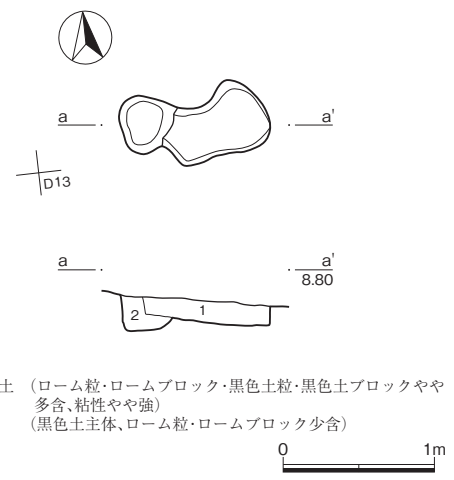
- 1 黒褐色土 (ローム粒含、赤色スコリア少含)
- 2 明褐色土 (ローム粒多含)
- 3 明褐色土 (ロームブロック多含、ローム地山の崩落したものが斑状を呈す、炭化物粒含)
- 4 暗褐色土 (1層の黒褐色土粒・ローム粒含、)
- 5 明褐色土 (1層の黒褐色土粒含、ローム粒微含)
- 6 茶褐色土 (ロームブロック含、炭化物粒・赤色スコリア微含)
- 7 暗茶褐色土 (ローム粒含、赤色スコリア微含)
- 8 暗茶褐色土 (ロームブロック含、赤色スコリア微含)
- 9 明褐色土 (炭化物粒少含)
- 10 暗褐色土 (ロームブロック含)



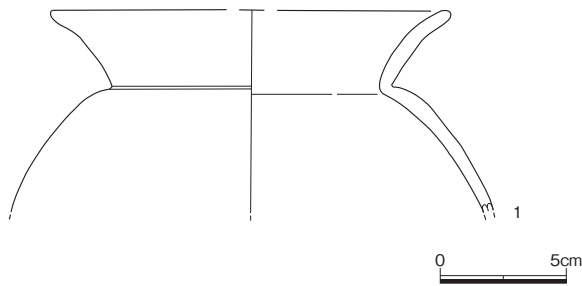
II-16図 SX758



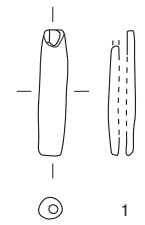
- 1 暗褐色土 (黒色土粒・黒褐色土ブロック・小円礫やや多含、ローム粒少含、スコリア粒・炭化物粒微含、粘性・しまりやや強)
- 2 暗褐色土 (黒色土粒・黒褐色土ブロックやや多含、ローム粒微含、粘性・しまりやや強)



- 1 黒褐色土 (ローム粒・ロームブロック・黒色土粒・黒色土ブロックやや多含、粘性やや強)
- 2 黒色土 (黒色土主体、ローム粒・ロームブロック少含)



SK3374

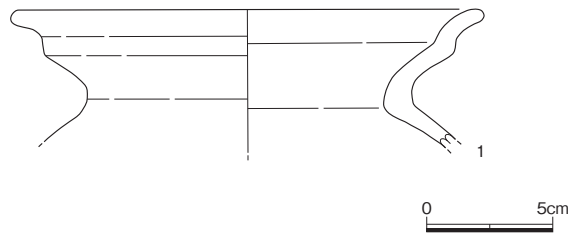


SK3910



II-17図 SK3374、SK3910

状に屈曲する。外面は縦方向のナデ、内面は横方向のハケによる調整。古墳時代前期に比定される。



II-18図 G層出土遺物

第4節 中世

(1) 調査の概要

本地点からは、中世期に属すると考えられる遺構として、基本層序下面より井戸が2基、道状遺構が3条検出されている。これまで、本郷キャンパス内の調査では、現地位置を保っている出土遺物として御殿下グランド地点で、羽釜片・陶器大甕片、浅野地区 工学部風工学実験室支障ケーブル地点より板碑破片などの出土がわずかにあった程度であり、遺構は検出されていなかった。また本地点の立地する本郷台の近隣では弓町遺跡、真砂遺跡第二地点などで、遺物の出土が散見できる程度である。

そのほかに本郷キャンパス外の本地点に近接する茅町二丁目遺跡が台東区により調査されており、近世期の遺構覆土内または包含層より板碑が27点出土している。その中には15世紀前半の記年銘が判別できるものも含まれていたが、遺構は検出されていない。

このような周辺環境から、本地点周辺が中世期は活発に利用されていないと推測することもできるが、本郷キャンパス東側崖線下、不忍池西には、南から北に向け近世以前に奥州街道が通っていた可能性が考えられており、無縁坂が相当する可能性が考えられている。本地点で検出された道状遺構、SR717・SR718は道幅が最大で7m以上と大規模であり、轍の痕跡が考えられること、また検出地点南端から無縁坂の通りまで、直線で40m程度と近距離であり、何らかの関わりを持っていた可能性も考えられる。

(2) F面・下層の遺構と遺物

SE3917 (Ⅱ-19 図)

C～D・13～14グリッドに位置する井戸であり、F面に帰属する。東側は攪乱されるが、残存する規模は東西186cm、南北262cmを測り、平面形は歪な円形を呈す。調査は安全上の理由から確認面下300cmにて中止し、覆土の堆積状況の観察は確認面下186cmまで実施、9層以下の堆積状況は不明である。覆土は暗褐色土ないし黄褐色土がレンズ状に堆積する。掘方の断面形は大きく2つの形状からなる。すなわち確認面下160cmあたりまでは底部がすぼまる鉢形を呈し、そこで一度袋状に膨らみ、以下では歪な筒形へと変わる。

遺物は土器片が少量出土している。

SE3966 (Ⅱ-20 図)

D・13～14グリッドに位置する井戸であり、F面に帰属する。掘方の平面形は歪な円形を呈し、東西260cm、南北300cmを測る。調査は安全上の理由から確認面下240cmにて中止した。壁はゆるやかな凹凸を有し、断面形は底部がすぼまる鉢形を呈す。覆土は5層まではレンズ状、6～9層は北から南側に流れ込んでいる状況が確認されたが、10層以下の堆積状況は不明である。

遺物は土器片が少量出土している。

SR832 (Ⅱ-21 図)

K～N・8～9グリッドで検出された道状遺構である。遺構の主軸はN-13°-Wで長軸は最大12.5m、短軸は62cm～130cmであり、南側は削平され幅が狭く検出される、遺存度の良い北側の断面形状は逆凸字を呈する。覆土は暗褐色土を主体とする自然堆積層で、坑底レベルは南側から北側へ高くなっていく。坑底付近5層は非常に硬化しており、道と考えられる。主軸が同一のF面で検出

されている SR717・SR718 と同様に、方位には無関係で類似しており関連性が窺える。

SR717・SR718 (Ⅱ-22・24 図)

遺構

調査区南側、J～N・2～6 グリッドで検出された道状遺構である。遺構の主軸は南側では南東から北西方向で、北側はほぼ東西方向を主軸とする。遺構の傾斜は南東・北西方向では北側に徐々に高くなっている。また東西方向では西が高くなっており、遺構の残存深度が浅くなり、北西側では幅 30～40cm 程度の轍状の硬化面のみが検出される。

SR717 と SR718 では SR718 が古く、北西側の硬化面の切り合い状況では徐々に南東・北西方向から東から西方向へと変化している状況が看取される。西側に隣接する医学部附属病院第 2 中央診療棟地点では、この遺構の続きが検出されており、軸は東西方向である。

遺物

1 は土製羽釜。鏝付き土器の口縁である。薄手で鏝の裏側にはススが付着している。14・15 世紀頃のものか。

SR3692 (Ⅱ-23 図)

F～G・12～15 グリッドに位置する。西側を SK3、東側と中央を攪乱に削平される。上面も削平されている可能性がある。道で東西 1540cm、南北 472cm、b-b' ラインで深さ 86cm を測る。硬化面が確認されており硬化面の幅は東側で 238cm、西側で 80cm を測る。道は東側から西側に傾斜しており、傾斜角度は 3° である。道の軸は残存部から真北から 95° 東に振れる。

F 層出土遺物 (Ⅱ-25 図)

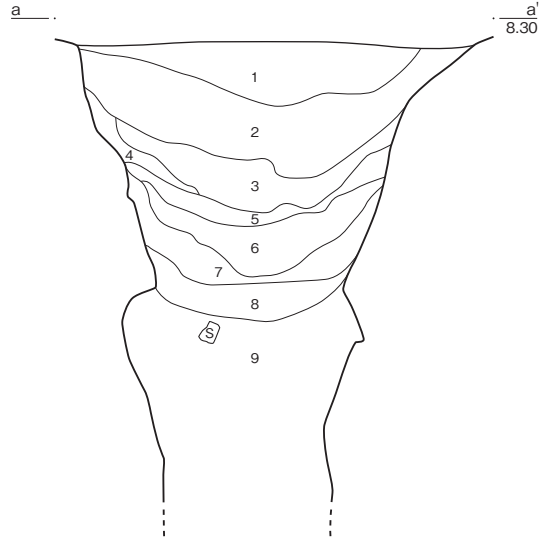
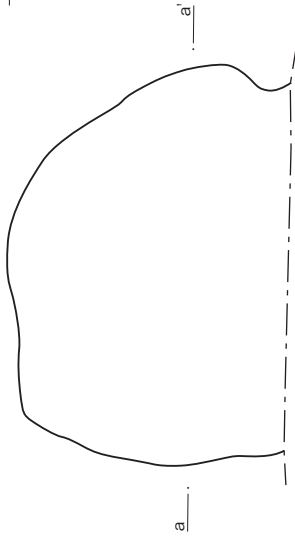
1 は須恵器甕の口縁部。焼成は良好。胎土は灰色で白色粒子を含む。焼成は良好で密である。口縁部直下に薄く自然釉が掛かる。2 は須恵器長頸瓶。頸部から肩にかけて。胎土は灰色で、鉄分を多く含んでおり、黒色粒子が多く見られる。焼成は良好で密である。自然釉が掛かる。

3 は白磁皿の口縁。中国陶磁。端反皿。口唇部は「コ」の字状に幅広くなっている。破片下部は釉が掛かっておらず、体部下半は露胎であろう。胎土は灰黄色。口唇部の釉の薄い部分は淡く橙色に発色している。13 世紀。4 は青磁碗の口縁。中国陶磁。龍泉窯系。外面片彫り蓮弁文。蓮弁がシャープである。胎土は灰白色。13 世紀。

5 は知多半島産のこね鉢の口縁部。口唇部は肥厚して玉縁状になっている。胎土は灰色で粗い。白色粒子、鉄分と思われる黒色粒子を含む。器形は口の付くものが多い。13 世紀。6 は常滑系鉢の口縁部。口唇部は角張って内外に拡張する。胎土は内部は褐灰色、外面は橙色のサンドイッチ状になっている。15 世紀後半。7 は常滑系鉢の口縁部。口唇部は角張って内外に拡張する。胎土は褐灰色。外面は暗褐色。白色粒子を含む。見込みには灰が降った痕が残る。15 世紀後半。



C14 S2m



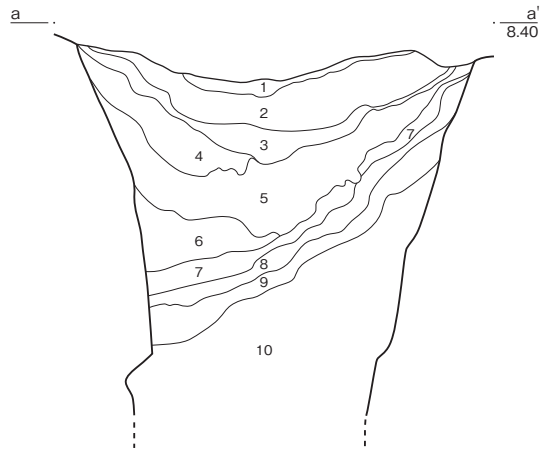
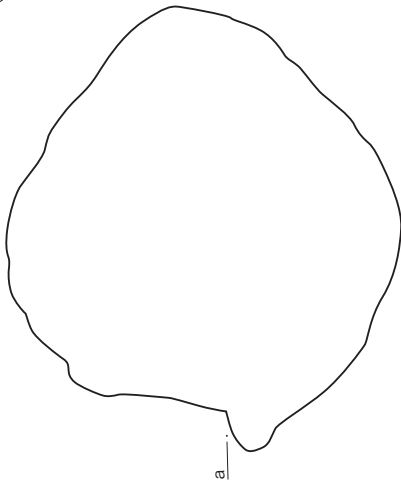
- 1 暗褐色土 (ローム粒・黒色土粒・黒色土ブロック少含、ロームブロック・新期テフラ微含、粘性・しまり強)
- 2 暗褐色土 (黒色土粒・黒色土ブロック多含、ローム粒・ロームブロック少含、スコリア粒・スコリアブロック微含、粘性・しまり強)
- 3 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロックやや多含、黒色土粒・黒色土ブロック少含、粘性・しまり強)
- 4 黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック・黒色土粒・黒色土ブロックやや多含、粘性強)
- 5 褐色土 (ローム粒・ロームブロックやや多含、黒色土粒・黒色土ブロック少含、スコリア粒微含、粘性極強、しまり強)
- 6 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック多含、黒色土粒・黒色土ブロックやや多含、粘性・しまり強)
- 7 黄褐色土 (ロームブロックやや多含、粘性強)
- 8 黒褐色土 (黒色土粒・黒色土ブロック多含、ローム粒・ロームブロックやや多含、粘性やや強)
- 9 暗褐色土 (ローム粒微含、粘性やや強)



II-19図 SE3917



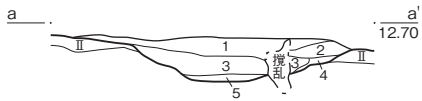
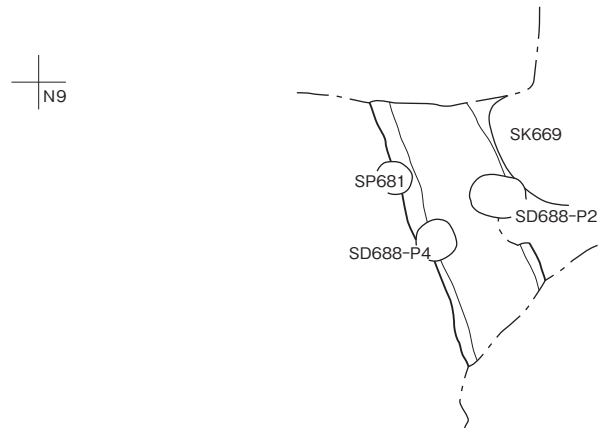
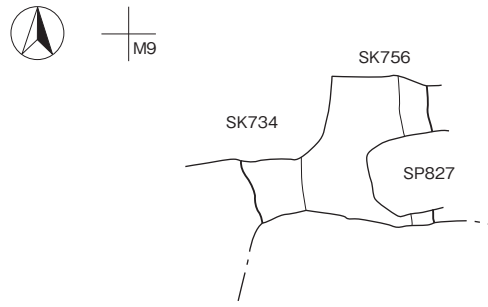
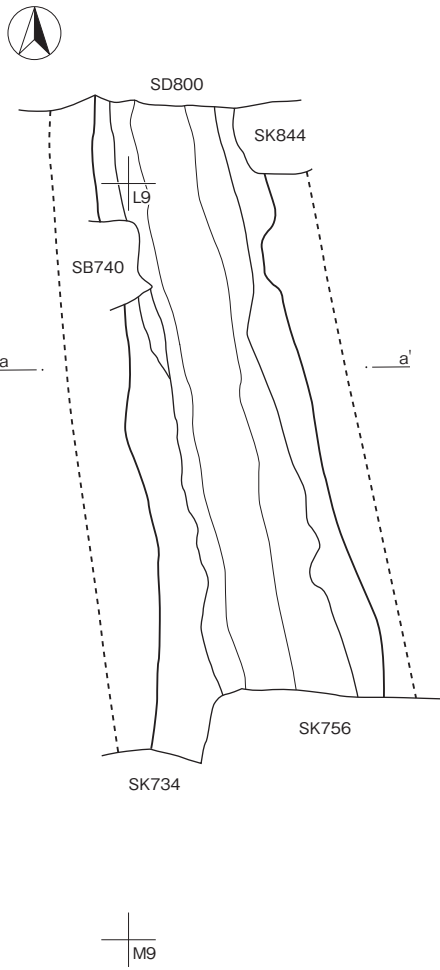
D14 a'



- 1 黒色土 (黒色土主体、ローム粒・ロームブロック・スコリア粒微含、粘性やや弱)
- 2 黒褐色土 (黒色土ブロックやや多含、ローム粒少含、スコリア粒微含、粘性やや弱)
- 3 黒褐色土 (黒色土主体、ローム粒・ロームブロック・スコリア粒微含、粘性やや強)
- 4 暗褐色土 (ローム粒・ロームブロック・黒色土粒・黒色土ブロック少含、粘性やや強)
- 5 暗黄褐色土 (ローム粒・ロームブロック極多含、明暗褐色砂・礫多含、黒色土粒・黒色土ブロック少含、しまりやや弱)
- 6 黒色土 (黒色土主体、ローム粒・ロームブロックやや多含、粘性強)
- 7 黒褐色土 (ロームブロック・黒色土ブロック多含、粘性極強)
- 8 暗褐色土 (ローム粒微含、粘性強)
- 9 黒褐色土 (黒色土粒・黒色土ブロックやや多含、ローム粒・ロームブロック少含、粘性強)
- 10 暗褐色土 (ローム粒微含、粘性強)



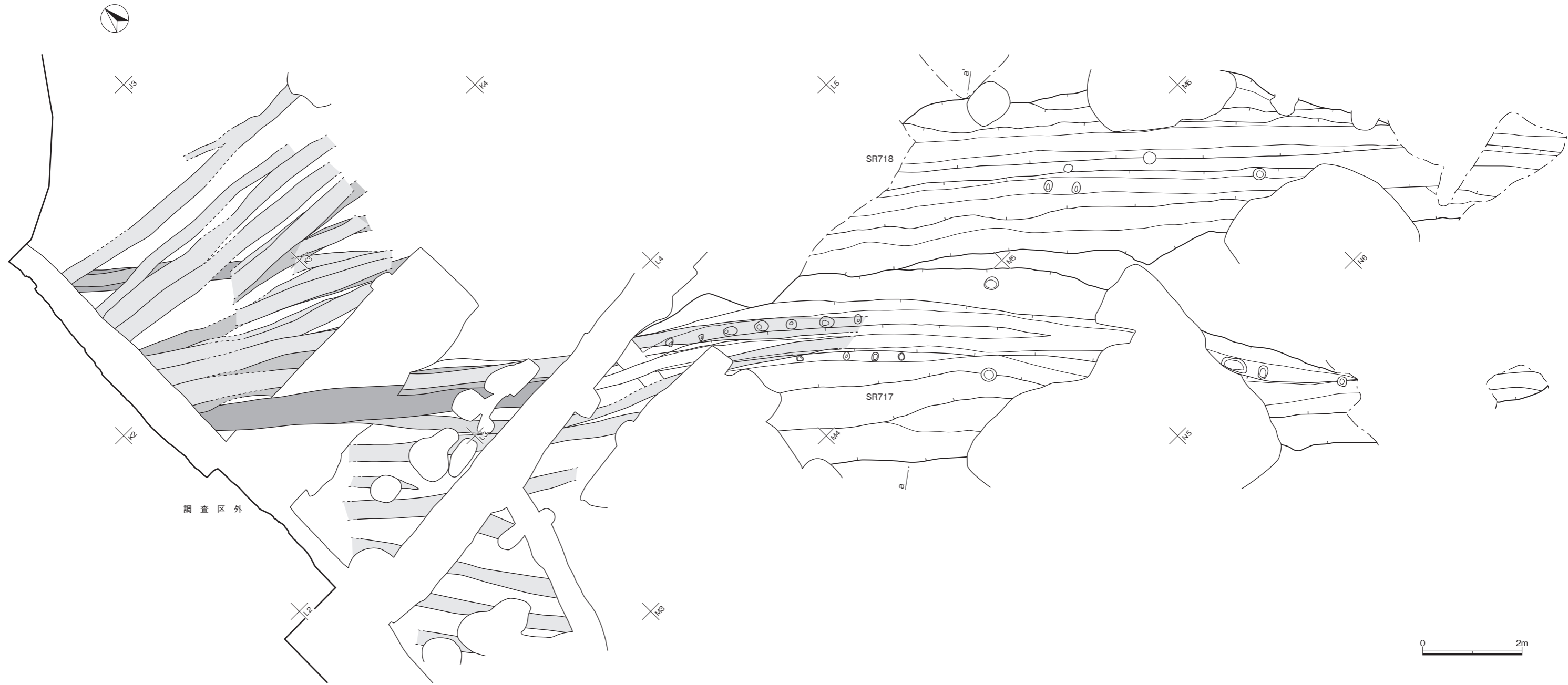
II-20図 SE3966



- 1 暗茶褐色土 (暗茶褐色土主体、ローム粒・赤色スコリア少含、礫微含、粘性・しまりやや弱)
- 2 暗褐色土 (暗茶褐色土主体、ローム粒やや多含、粘性・しまりやや弱)
- 3 黒褐色土 (黒褐色土と暗茶褐色土、ローム粒含、部分硬化顕著、しまり強)
- 4 暗褐色土 (暗褐色土主体、ローム粒多含、しまりやや弱)
- 5 暗灰褐色土 (暗褐色土中ローム粒多含、顕著に硬化、しまり極強)

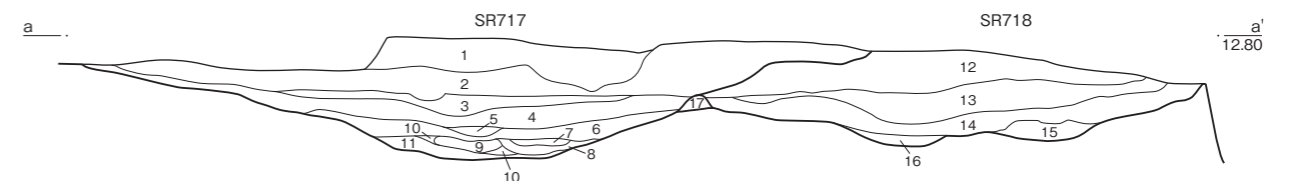


II-21図 SR832



調査区外

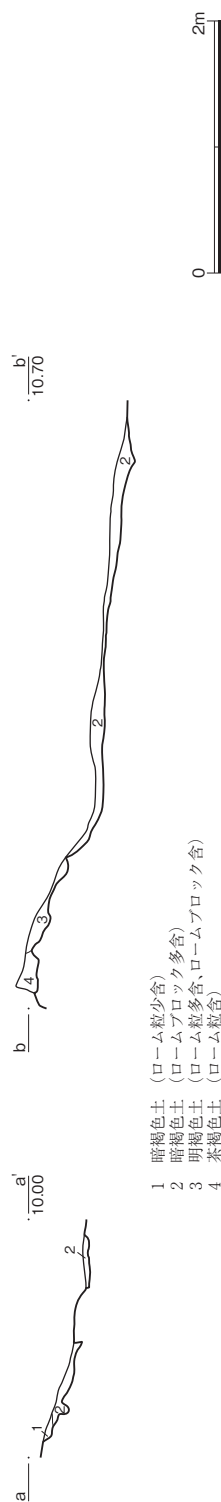
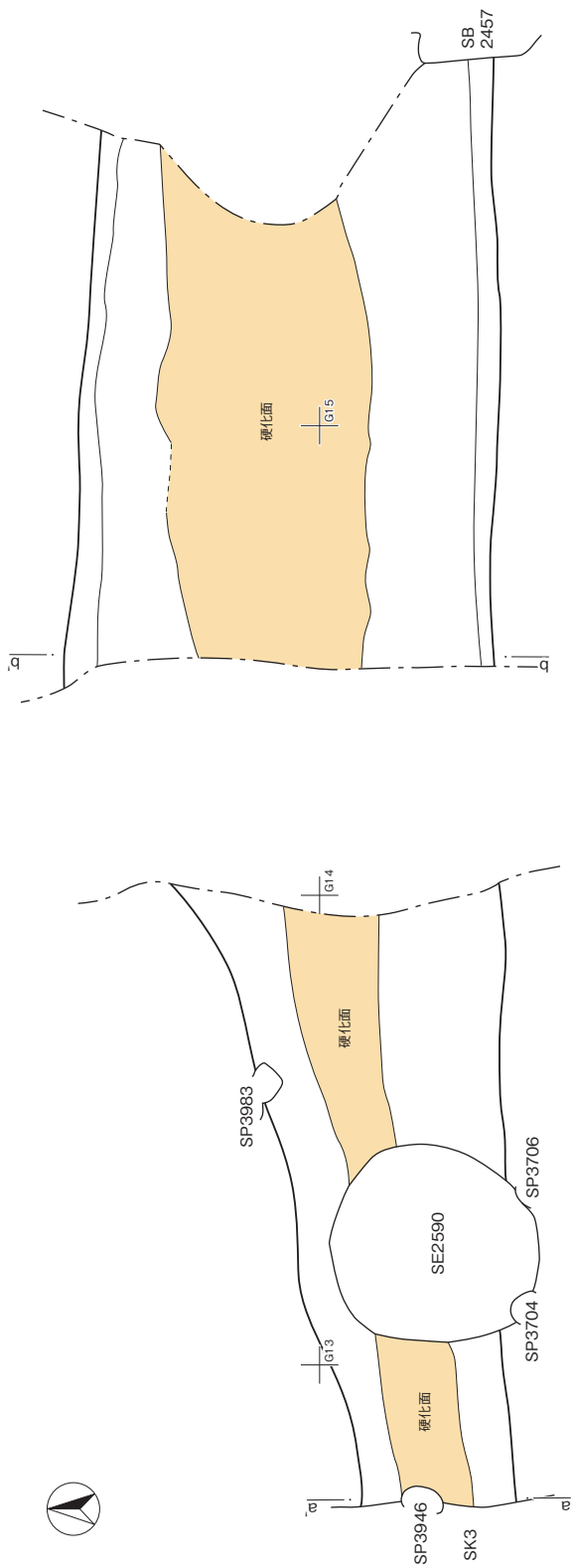
- 上部硬化面
- 中部硬化面
- 下部硬化面



- SR717・SR718
- | | |
|-------------------------------|--------------------------------------|
| 1 明褐色土 (ロームブロック含、炭化物少含、粘性やや弱) | 10 明褐色土 (13層と関連する層、同時に盛られたものか) |
| 2 明茶褐色土 (ローム粒・焼土粒含) | 11 明茶褐色土 (硬化面、粘性・しまり強) |
| 3 明褐色土 (ローム粒・焼土粒含) | 12 茶褐色土 (ローム粒多含、炭化物・焼土粒含) |
| 4 黒褐色土 (ロームブロック含) | 13 黒褐色土 (ローム粒・焼土粒含、粘性弱) |
| 5 黒色土 (ロームブロック含、粘性強) | 14 明褐色土 (ロームブロック含) |
| 6 明茶褐色土 (ロームブロック含) | 15 黒褐色土 (硬化面、粘質土、焼土粒含、粘性強、しまり極強) |
| 7 黒色土 (硬化面、粘質土、粘性・しまり強) | 16 明茶褐色土 (硬化面、粘性・しまり強) |
| 8 茶褐色土 (ロームブロック含、しまり強) | 17 暗茶褐色土 (地山、黒色土主体、ローム粒多含、ロームブロック少含) |
| 9 暗茶褐色土 (ローム粒含) | |

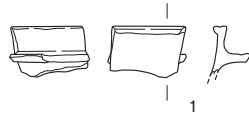


II-22図 SR717、SR718



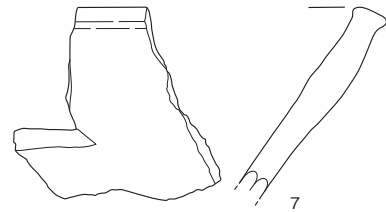
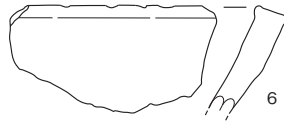
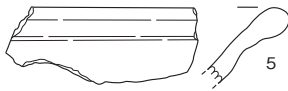
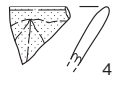
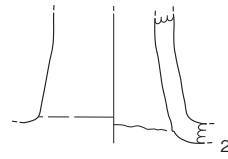
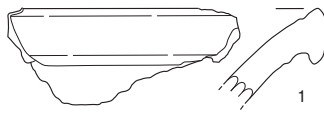
- 1 暗褐色土 (ローム粒少含)
- 2 暗褐色土 (ロームアブロック多含)
- 3 明褐色土 (ローム粒多含、ロームアブロック含)
- 4 茶褐色土 (ローム粒含)

II-23図 SR3692



SR718

II-24図 SR718出土遺物



II-25図 F層出土遺物

第Ⅲ章 江戸時代以降の遺構（1区）

第1節 調査の概要

第Ⅲ章 江戸時代以降の遺構（1区）

第1節 調査の概要

本地点は、西側に加賀藩邸、東側に講安寺が位置し、両者の境界は江戸時代（元和2年以降）を通し、普遍的であったことが絵図資料から窺い知ることができる。その境界線は、16ライン付近を南北に伸び、境界施設として、柱穴列、石積遺構が検出されている。本報告では加賀藩邸域を1区、講安寺域を2区と称し、本章は1区の加賀藩邸域を対象とする。また、文献、絵図資料から1区の土地利用は、天和2（1682）年の「八百屋お七の火事」による藩邸全焼を契機にそれ以前は加賀金沢藩（以下、加賀藩）の黒多門邸、以降は大聖寺藩邸に含まれ、ここに大きな画期を設定することができる。

江戸時代以前の本地点は、第1章第4節基本層序で述べたように、根津谷に向かう本郷台地縁辺緩斜面上に位置しているが、病院地区周辺を蛇行して根津谷方向へ開いていた開析谷が、本地点北側をほぼ東北東方向に伸びていたことから、東に向けた傾斜を基本としながらも、開析谷の谷筋に向けた緩斜面が加わる複雑な地形を呈していた。そのため、旧来の緩斜面に対し、切土および盛土造成を繰り返し、藩邸開発が実施された。その結果、江戸時代を通し最大2m数十cmの盛土と以下に述べる複数の生活面が確認された。

江戸時代の生活面はA～E面の5枚の遺構面に大別され、斜面地を順次開発したことによって、D面はさらにD1～D4面に細分される。そしてD1面上に広がるD面焼土が天和2年の被災瓦礫層に比定されることから、A～C面は大聖寺藩邸期、D1面以下は加賀藩邸（黒多門邸）期に大別することができる。以下、各遺構面の概要を列記したい。

自然堆積層最上面のF面では、井戸、道路状遺構など中世に帰属する遺構が検出されたにすぎず、確実に江戸期と判断される遺構は認められない。自然堆積層上の遺構には中央診療棟地点で検出された寛永6年銘の木簡を出土した「池」遺構などがわずかに認められるのみで、藩邸東域にあたる本地点周辺では、主立った土地利用が成されていなかったといえよう。初期造成土であるE層が盛土され、いよいよ緩斜面の平準化による藩邸開発が実施される。SD803、SD800、SD661はLライン付近を東西に伸びる地境溝であるが、その主軸は埋没谷の谷筋方向に沿うように、東に向けてやや北に傾いている。また本遺構を挟み南北の遺構面には比高差が認められ、旧地形の緩斜面に対し、段切り造成による平準化が行われていたことが確認される。その北側の谷筋内においても区画溝による段切り造成が行われており、東西方向のSX2715、SD2671、SD3528や南北方向のSD2714、SD2716などの地境溝に顕れている。また埋没谷から離れたQライン以南に位置するSA255、SB392なども東西南北からはずれた主軸方向を有しており、藩邸内の区画が大規模な統一設計に規制されていなかったといえる。H5グリッドに位置するSD3109のように畑の畝遺構も認められ、一帯が居住地として未確立の段階と考えられる。

D層のうち、D3、D4、E面上層は、SD803以北の特に谷筋で認められるスポット的な盛土層であり、それらが認められないエリアは同一段階でE面が機能していたことになる。低地域にあたるSD803ライン以北が広範囲に盛土整地されたのが、D2面である。一方台地上寄りのSD803以南は基本的にローム表面標高が高く盛土層が薄いことから、後に調査区一帯が平準化されるC面下の盛土遺構面

は1枚のみで、それを形成する層序をD層と一括した。SD803ライン以南の上面区域では攪乱、削平などの要因もあり、不定形土坑、ピット、井戸などが散漫に分布する。SD803は本段階には埋め戻されているが、南北の高低差は残っており、SG595、SG719、SX772の石積み遺構が擁壁として構築される。比高差以北の下面区域では、階段付きのSU1886や複数の室部を有すSU327などの御殿空間タイプの大形地下室および半地下室が、H～Kラインの下面区域南側に分布、さらにその南側には詰人空間タイプの地下室が比高差に沿うように東西方向に分布している。また断片的ではあるが、扁平川原石を用いた礎石建物も認められる。建物自体は確認されなかったが、その付随施設と考えられる炉状遺構が多数検出され、下面区域は一帯の平準化という大規模開発の結果、前段階に比べ活発な土地利用が行われていたといえる。

SD803ライン以北のD2面上には再び盛土造成が行われた。それがD1面である。本遺構面の詳細については、第三章第3節に委ねるが、D1面からは礎石長屋建物が南北方向に7棟、その北側、富山藩邸境に東西方向の1棟が並び、道路状遺構、長屋群のインフラ施設として木柵下水溝、井戸、厠、ゴミ溜と推定される長方形土坑などが検出された。本長屋群は火災によって焼失し、その瓦礫を含む焼土層がD面焼土としてD1面直上に均された様に堆積していた。焼土層に含まれる陶磁器類の年代観と延宝8(1680)年銘の釘書きを有す砥石の存在から、天和2(1682)年に本郷邸が全焼した「八百屋お七の火事」を下限とする遺構・遺物群であることが検証された。この長屋建物の礎石には掘方がなく、D2面上に計画的に配置され、D1層の造成をもって固定されていた。この本遺構面を形成するD1層には陶磁器をはじめとする多量の遺物が含まれていたが、その年代観と新寛永通宝・文銭の存在より1660年代末以降に造成されたと考えられる。

天和2年の火災後に、本地点、特にSD803ライン以北の下面を中心にC層としたロームブロックを主体とする大規模な盛土造成が行われた。この造成土中にはC2層とした瓦礫整理の焼土層が含まれ、この焼土層中より多量の陶磁器類が出土した。この陶磁器群の組成は肥前磁器が約8割と特化し、特に揃いの中皿(6～7寸)、大皿、小坏を中心としており、その様相から藩邸内で執り行われる宴に用いられる一群であると評価される資料である。そして本資料の一部が加賀藩邸御殿空間を調査した医学部教育研究棟地点出土資料と接合したことにより、加賀藩邸内で保管されていた食器が火災時の瓦礫処理によって本地点に運ばれてきたことが検証された。

この大規模造成は隣接する中央診療棟地点、第2中央診療棟地点の調査でも確認され、黒多門邸の西側に位置し、やはり本地点との比高差を持つ大聖寺藩邸の生活面レベルに合わせ、一帯の平準化を図る造成であった。中央診療棟地点で検出された6号組石は、藩邸北端を東西に伸び富山藩邸に続く道路手前で南方向へ直角に折れ(6号組石南北部分)、火災以前の藩邸を取り囲んでいたが、火災後の造成によって、道路を横断し東端部がさらに東へ延長された。その延長が本地点のSD1103に該当する。この区画施設の改築は、文献にみられる天和3年の大聖寺藩邸区画変更によるものと考えられる。ロームブロック主体の造成土上面には、C0層とした山砂を多量に含む褐色土層が敷き詰められる。このC0層はSD803ライン以南でも確認され、大聖寺藩邸再開発によって、いよいよ旧地形の影響を受けた邸内の比高差は解消され、それは大聖寺藩邸東端部の富山藩邸御表門に通じる南北方向の道路との境に移動した。しかしその造成直後にB～L、9～13グリッドにおよぶ南北約50m、東西約20m、C面からの深さ最大約4mを測る巨大遺構SK3が掘削される。SK3はその形状から採土坑と考えられ、大聖寺藩邸造成後の事業であることから、加賀藩邸での需要に対応した採土坑と推定される。本遺構の覆土はシルト質ブロックを主体とし、パリオ・サーヴェイに委託した科学分析から沼池など水流のない場所が由来とされる。このような土質から多量の木製品が遺存し、生活財とともに

木っ端、鉋屑などの建築廃材も多量廃棄されていたことから、火災後の藩政再建による廃材と推定される。このことは供伴する陶磁器年代の下限が1680年代に比定されることもそれを裏付けている。埋め戻されたSK3上にはローム土が盛られ、その上面には植栽痕、建築遺構、土塁遺構、漆喰を貼った池遺構などが構築され、この一帯は庭園となった。ローム土と遺構の様相から造成が2回行われたことが認められ、上面をCR1面、下面をCR2面とした。検出された中之島を有す軍配形の池と、瓢箪形の池は前者がCR1面、後者がCR2面に帰属する。またCR1面直上には遺物年代より元禄16(1703)年の「水戸様火事」に比定されるC面焼土が堆積しており、それが庭園の下限と位置付けられる。この火災を契機に再びA層とする盛土造成が行われた。A面の遺構は、近代以降の攪乱を受け遺存状況は悪く、藩邸の様相は断片的にしか捉えられない。L～M・2～5グリッドで築山を伴う石組遺構が検出された。SD337など底石が階段状を呈する遺構形態より、庭園の園路の可能性が考えられる。また、SD236の底には宝永の火山灰が敷き詰められていたことから、本遺構群が元禄16年火災後の藩邸再建の一環として造成されたことが考えられる。そのほかP～R・4～7グリッドに御殿建物と考えられる礎石列、Q～R・8～11グリッドに御殿下記念館地点で検出された厩遺構と同形態を呈す1間四方の柱穴内に円形便槽を有す厩遺構、G～I・10～11グリッドの建築遺構と推定される方形土坑群、地下室、半地下室などが検出されたが、本遺構面上が全て削平されていたことより、元禄16年～幕末までの長期間を対象としながらも、詳細な土地利用の変遷を復元することは難しい。

第 2 節 藩邸開発関連遺構

地境遺構

第2節 藩邸開発関連遺構

（1）地境遺構

○北側地境遺構

SD1103（Ⅲ-1～6図）

A5～10グリッドにかけて東西に伸びる石組溝である。本遺構は、中央診療棟地点6号組石および10号組石の延長で、さらに隣接する台東区茅町二丁目遺跡第1号遺構へ続く排水及び境界を目的とした石組溝である。また藩邸地境施設として天和2年以前はSB2457などの塀施設が、天和3年以降はSD1が接続していたと考えられる。石積み最上段の一部は調査前現況で地表面に露出しており、当初から遺構の存在が確認されていた。また残念ながら西側は中央診療棟建設時に車輛搬出入用スロープ建設のため大きく削平されてしまった。

本遺構下にはそれ以前の溝、柱穴などが確認されなかったことより、境界施設設置当初より石組溝として構築された施設と考えられる。

掘方は溝部分が一段テラス状に高く、両石積み側が溝状に低い。また南側には幅約100cmを測るテラスが設けられている。テラス高は1段目築石上面レベルとほぼ一致する。このテラス内には天和2年の火災を下限とするSD1601、SD1603の掘方が接続する。そのうちSD1603の掘方は本遺構テラス部より深く掘られ、そのため底石と側縁石の一部が残存していた。一方、掘方坑底がテラス部とほぼ同レベルのSD1601では底石の根石がわずかにテラス上に残存しているのみであった。この状況から、天和2年の火災以前、即ちD1面段階までの本遺構掘方はテラス部の内側までであったと考えられ、その奥行きはほぼ築石の奥行きと一致する。

南側石積み下には2本の胴木が敷かれていることが確認された（Ⅲ-2図）。胴木自体は遺存状況が悪く組み方などの工法を確認することができなかったが、胴木下よりそれを固定するための杭痕が検出された。杭痕間は200～330cmと一様ではなく、セクションラインg-g'を通る杭痕を断ち割った所、その深さは約100cmであることが確認された（Ⅲ-6図）。また胴木は杭で固定した上にその周囲に凝灰岩質の破碎礫を充填して固定している。北側石積み下は調査区際にあたり詳細部分まで把握できなかったが、可視的には胴木は認められず、南側にのみ敷設されていたと考えられる。この胴木敷設状況は、中央診療地点12号組石に共通する。すなわち本区画（当時の黒多門邸範囲）を囲い込む側にのみ存在するといえる。

南側石積みは基本的に布積みを呈しており、最大9段が確認された。構築順に説明を加えるため、便宜上最下段を1段目と呼称する。1段目の築石直下に敷かれた2本の胴木は築石のほぼ石面下と中央部を通っている。1、2段目の築石は間知石と切石が併用されている（Ⅲ-1図）。石面は基本的に方形ないし長方形を呈し、築石間の隙間に破碎礫を詰め込む打ち込みハギによって積み上げられている。また石面は山状に膨らんでいる。築石のなかには上部にほぞ穴が穿たれたり、柱接地痕跡の擦痕が認められるなど再利用と考えられる部材も含まれる。また○の中に×（Ⅲ-4図）、○の中に「や」の刻印や（Ⅲ-1図）、墨書、矢穴が認められるものもある。○の中に×は、中央診療棟地点2号組石刻印Dに共通する（医学部附属病院地点報告書Ⅲ-187図）。裏込には築石と同材質の安山岩や凝灰岩の角礫が詰められている。

3段目以上の築石は基本的に亀甲形に揃えられ、切石間にほぼ隙間を持たない切り込みハギによる

布積みに変化する（Ⅲ-4図）。そのうち3、4段目に用いられた築石石面は1、2段目同様丸味を帯びて膨らんでいる石が目立つが、それ以上は丁寧に平坦に加工されている。9ライン付近では比較的小形の築石が用いられ、部分的に3段を成している。1～3段目まではほぼ垂直に積まれているが3、4段目付近から約81°の傾斜角を持つように変化する（Ⅲ-6図）。8段目の築石上端は全て平坦に揃えられ、天端石と考えられる。この天端石上端レベルはC面レベルと一致し、天和2年火災後の盛土造成時に構築されたことが確認される。1～8段目までの石積み高は、西端で270cm、東端で330cmを測り、16m80cm間で掘方比高差は60cm、傾斜角約2°を測る。7段目には排水口が認められる。築石に並ぶ排水口の1石は安山岩をコの字状に削り抜き成形している。それに続く排水溝は安山岩を加工した側縁石と凝灰岩の切石による底石で構築されている。その後A面にいたる造成時に9段目の築石が増築されるが、8段目までとは規模、形状、積み方も異なり、比較的雑な様相を呈している（Ⅲ-5図）。

一方、裏込めは天和2年を下限とする掘方内には、安山岩質および凝灰岩質の破碎礫が密に詰められている（Ⅲ-1図）。拡張された掘方内には破碎礫に加え、再利用された凝灰岩製の切石がほぼ水平状態で詰められている。覆土には焼土粒が多量に含まれ、D面焼土層形成後に構築し、その際の掘削土を埋め戻した結果と考えられる。レベル的には3段目の築石に対応する。さらにその上には、築石を加工した際に生じたと考えられる安山岩質の破碎礫、数十cm大の円礫および角礫、間知石が裾拡がり状に積み上げられている。裏込内覆土にはローム主体土（C層）が用いられており、盛土造成と連携して増築されたことが窺われる（Ⅲ-4、6図）。

本遺構の溝内覆土は、近代以降の攪乱のため4段目以上はおおむね削平されている（Ⅲ-6図e-e'）。18層から19層にかけて凝灰岩製の切石が不規則に詰め込まれた状態で検出された（Ⅲ-4、6図）。この様相は中央診療棟10号組石でも認められている。この凝灰岩切石は拡張掘方部の裏込に使用されたものと類似する。Ⅲ-6図g-g'ラインは凝灰岩切石堆積層以下の層序を示した図で、部分的ではあるが、底石下に焼土の堆積が確認され、火災後の行為であることが確認されている（15層）。また焼土層直下には炭化物層の拡がりや、水性堆積した粘土層表面に被熱痕跡が認められる部分も存在する。18層直上には水性堆積を推測させる灰褐色粘質土（14層）が薄く堆積している。レベル的には2段目の上面付近に該当し、この状態でしばらく流路として使用されていたと考えられる。その直上には焼土層が堆積している。15～20cmとまとまった厚さを呈していることから、火災後に廃棄されたと推定される。火災年代については増築段階の3段目築石に接していることから天和3年以降の藩邸火災に絞られる。焼土層上には砂利層、粘土層が交互に堆積し、溝の底上げが数度にわたって行われた結果と考えられる。7層からは19世紀代の陶磁器が出土していることから、18～19世紀にかけて溝底の再整地が三度以上実施されたことが確認される。

溝覆土出土遺物は瀬戸・美濃産染付端反碗（Ⅳ-398図9）、湯呑み碗（同図10）など東大編年Ⅷb期に比定される製品などを下限とし、18世紀前半から19世紀前半の製品が多量に出土した。また溝底切石下の覆土からは景德鎮青花皿（Ⅳ-406図134）肥前産初期伊万里染付皿（同図135）など東大編年Ⅱ期に比定される製品が出土し、上限が17世紀第2四半期にあることを示している。この様相はやはり富山藩邸の南側境界にあたり17世紀から幕末まで機能した中央診療棟地点2号組石と同様で、本遺構も江戸時代を通し境界施設として機能していたことを示している。

このように掘方、石積み技法、裏込などに認められた様相差は、天和3年の藩邸内盛土造成に伴う段階差であることが確認され、2段目までの石積みがそれ以前の構築、3段目以上がこの造成に伴う増築であることが明らかになった。すなわち前者が中央診療棟地点10号組石に、後者が同地点6号

組石に該当する。さらに2段目上端レベルが天和2年を下限とするD1面レベルより低いことと、上端面が連続する平坦面を形成していないことから、天端石として設置された築石とは考えられず、石積み増築にあたり、新旧のかみ合わせを堅固な状態にするために、本来3段目に天端石として設置された築石を外し、2段目上端形状に合うように築石を加工し、積み上げていったものと考えられる。増築時の裏込石の中には天端石として成形されたと考えられる間知石が含まれており、増築時に外された天端石が裏込石として再利用された可能性が指摘できる。またこの増築時にSD1601、SD1603からの排水口も築石によって塞がれている。

○西側地境遺構

SA425・SA594・SA713・SA806・SA819（Ⅲ-7図）

D面に帰属する柱穴列で、M～P2グリッドに位置する。SA425はSA426と重複し、それを切っている。SA713はSA714と重複しそれを切っている。またⅢ-7図e-e'ではSP715もSA713に切られているが、SP715の11層直上には、SA713の切り込み面であるD層が堆積していることから、SP715は本柱穴列より、1枚下層に帰属する遺構と位置付けられる。個々の形態はおおむね不整形円形を呈している。規模は直径120～160cm、確認面からの深さ95～130cmとばらつきがあるが、平面規模と深さには明確な相関関係は認められない。SA806、SA425、SA713で幅約20cmを測る柱痕が認められる。柱痕下の坑底直上にはローム土を敲き締めて敷き詰めた状況が看取され、柱の荷重に対する措置と考えられる。またSA806には柱痕と同サイズの切石を用いた礎石が認められるが、柱痕は大きく西へ傾いている。SA425では柱痕が認められなかったが、覆土の堆積状況より3、4層が柱の抜き取りに関する堆積と考えられる。各柱痕間距離はおおむね360cmを測る。本柱穴列は黒多門邸西端に位置することからある段階の地境塀基礎と考えられる。確認面はSD422と同一面であることから同時に存在した可能性もある。柱痕及び礎石規模に対し、掘方規模が必要以上に大きい特徴を有するが、同類の柱穴列は、懐徳門地点で認められる（東京大学構内遺跡調査研究年報10所収）。懐徳門地点の柱穴列は3基検出され、完掘した1基は平面規模200×170cm、深さ200cmを測り、1辺8寸の柱痕が確認されている。柱痕間は2間間隔と本柱穴列と類似する。懐徳門地点は明暦の大火翌年に加賀藩邸に取り込まれた区域であるが、遺構内より梅鉢紋の軒丸瓦が出土していることから、加賀藩邸期の遺構と判断され、上下の遺構面との関わりから17世紀後半に位置付けられる。現段階では2例の事例ではあるが、このような大形柱穴列が17世紀後半の藩邸境界施設基礎構造の特徴の一つと考えられる。

SA598・SA716（Ⅲ-9図）

D面に帰属する柱穴列で、調査区西端SD422の西、N～P1グリッドに位置し、ほぼ平行に伸びている。SA598が4基、SA716が5基検出され、SB598は検出された全遺構がSB716と重複し、それより新しい。

SA598は南北方向に長軸を持つ楕円形を呈する柱穴列で、長軸80～100cm、短軸60～70cm、確認面からの深さ90～100cmを測る。いずれも遺構ほぼ中央に約15cm幅の柱痕が認められる。覆土上層の3層には小円礫が含まれている。柱痕間の距離は185～215cmを測り、均一性は認められない。本柱穴列は、位置関係、検出面から中央診療棟地点で検出された2号柱穴列の延長と考えられる（医学部附属病院地点、Ⅲ-143、144図）。2号柱穴列とそれと平行する1号柱穴列は、天和2年までの富山藩邸表門に伸びる道の東西両側、即ち東の黒多門邸、西の大聖寺藩邸と道とを区画する塀跡で、

第2中央診療棟地点で検出された1号柱穴列に続くSA1408及びSB1335(1. 医学部附属病院第2中央診療棟地点調査略報 図5、東京大学構内遺跡調査研究年報4所収)の様相から、天和2年火災後に応急措置として建設された仮塀基礎と位置付けられる遺構である。

SA716は南北方向に長い長方形を呈するピットで、長辺50～70cm、短辺40～50cm、確認面からの深さ75～85cmを測る。覆土にはローム粒、ロームブロックが多く含まれている。柱痕は認められなかった。本遺構もSA598同様黒多門邸に関する塀基礎と推定されるが、北接する中央診療棟地点では認められず、性格、年代の詳細は不明である。但しSD422の西側に位置することから火災直後に構築された仮塀の可能性が高い。

SA814 (Ⅲ-7、8 図)

SD422坑底より検出された溝で、N～P2グリッドに位置する。主軸方位はN-0.4°-W とほぼ真北方向を示す。SD422構築時にかなり削平されており、溝部分の遺存状況はあまり良好ではない。溝幅は約30cm、確認面からの深さは約40cmを測り、断面形は逆台形を呈す。溝底からは柱穴列が検出された。柱穴は芯々で120～150cm間隔で並び、全て溝と重なる位置関係にある。各柱穴には柱痕は認められず、南壁が幅約20cmの鋭利な鋏状工具で斜めに立ち上がり、北壁は凹凸が著しいことから、南から北方向に掘削し、柱が抜き取られたと考えられる。Ⅲ-8 図 m-m' の1、2層が抜き取り時の覆土と考えられる。遺物は出土していない。このような柱穴を“伴う”溝は隣接する第2中央診療棟地点などでも検出されており、いずれも17世紀中葉に帰属する遺構であることから、概期における藩邸を区画する塀基礎の特徴と捉えることができる。また本遺構に関しては、柱の抜き取り痕によって溝と柱穴との新旧関係を確認することができなかったが、伊藤国際学術研究センター地点(東京大学構内遺跡調査研究年報8所収)の調査で検出された同類遺構では、柱穴が溝を切っていることが確認されており、本遺構も溝から柱穴列への変化があった可能性がある。

SB957・SB1077 (Ⅲ-7、8 図)

E面に帰属すると考えられる礎石列で、L2グリッドに位置する。SB957はSP958をSB1077はSP1078を切っている。平面形は円形を呈し、直径90cm、確認面からの深さ最大45cmを測る。SB957では坑底に、SB1077では覆土中に切石を用いた礎石が置かれている。礎石表面標高はおおむね12mとほぼ等しく、礎石間は芯々で220cmを測る。柱痕は認められなかった。出土遺物は少なく、年代は不明である。

SD422 (Ⅲ-9 図)

2ラインをほぼ南北に伸びる石組溝で、隣接する中央診療棟地点で検出された12号組石に続く石組溝であり、天和2年を下限とする黒多門邸と富山藩邸に続く道路とを区画する排水施設と位置付けられる。L2グリッド周辺で、近代建築遺構SB343に削平されている。掘方は、断面長方形に掘削した後、東西両壁際を約10cm盛土し、テラスを作出している。東側にはさらにもう1段、表面が非常に敲き締められたテラスが設けられ、本遺構の掘方は左右非対称に構築されていることが確認された。さらに東側上段テラスはLライン南2m以北で奥行きが約40cm広がっている。また上段テラス硬化面は、遺構外へと伸びていることが確認され、D1面盛土造成と同時に本遺構が構築されたことも確認された。

続いて敷設された石組構造に触れる。本遺構はテラスに挟まれた溝底中央部が溝本体となり、側縁

石は西側残存部分の状況からテラス部に設置されたことが確認される。また東側の上段テラスにはJライン南1mからMライン南3mにおいて裏込石が検出されている。

西側縁の築石は1段が検出された。南から北へ1°30′の緩やかな勾配で下がっている。検出された築石は、縁石上面レベルがU-U'ラインにおいて12.95mを測る。隣接する第2中央診療棟地点では、本遺構に関連する天和2年までの路面が検出されているが、本セクションラインに最も近接する場所の路面レベルは、13.05mを測り、築石上面レベルとほぼ同一である。これは道路と石組溝双方が調査対象となった中央診療棟地点での成果とも一致していることから（医学部附属病院地点Ⅲ-146図）、本調査地点内の西側石列は検出された1段で構成されていたと判断できる。石列上面に凹凸が認められるが、路面の表層舗装で平坦に調整されていたことは中央診療棟地点で確認されている。築石には安山岩質の石材が用いられ、石面はいずれも長方形に整えられているが、全体形状は長方形、四角錐台形と概ね二通りのバリエーションが認められ、胴長は30～40cmと、面幅に対し総じて短い。遺存範囲内では側縁石周囲に裏込石は認められない。また、検出された側縁石のうち北から4点目と5点目は、平面長方形を呈し、上面は平滑、平坦に整形され、ほぼ水平に整然と配置されている。切石間は126cmを測る。この切石を合わせ南北各々2～3点までの側縁石は切石上面とレベルを合わせ、それ以南よりも約20cm低く揃えられている。このような様相からこの部分に通用門的な門があったと推測される。

一方、東側縁の築石は西側同様、安山岩質の石材が使用されているが、J～K2グリッドで胴から石尻までの一部が検出されたに過ぎず、Lライン以北は調査区域外に及び、以南は全て抜き取られていた。裏込石は基本的に凝灰岩質の切石が再利用され、一部に築石製作時に生じた安山岩質の破碎礫が混在している。この裏込石の構築状況は、先述したLライン南2mの掘方幅の変化と連動し、以北では重層的に非常に密に詰められているのに対し、以南では散漫な状態である。築石抜き取り時の影響も考えられるが、この様相変化は、掘方拡幅位置以北の掘方深度が南側の2倍程度に変化していることが要因と考えられる（I-3図）。掘方幅の変化するこの下にはE面に帰属するSD803が位置している。すなわち初期造成時にここを境にしてひな壇造成の南北段切りが行われていた場所で、その後の造成によって嵩上げされつつも、天和2年までは南北段差が存在した場所である。必然的に藩邸内区画が存在したことが考えられる。

この南北構造差について本遺構延長の中央診療棟地点12号組石の構造を参照したい。12号組石では溝両側縁石のうち、東側にのみ胴木を2本平行に敷き、その周囲を栗石でしっかり固定し築石を積み上げている。残念ながらLライン以北の掘方は安全上の理由から完掘に至ることができず、基礎構造を把握することはできなかったが、本遺構内も裏込の状態から同一構造と考えられ、壁際の築石下には胴木が敷かれていたと推測される。12号組石もしくは本地点SD1103で検出された胴木は丸杭を打ち込み地面に固定されているが、Lライン南2m以南の掘方内からは杭痕が検出されていないことから、胴木は敷設されていなかったといえる。また、中央診療棟地点12号組石の東側側縁石は、溝東側に広がる「黒多門邸」遺構面レベルに対し、約30cm低い位置に築石最上段上面レベルがある。これは使用された築石1段分の高さに相当することから、本来は天端石としてもう1段積まれていたと推定される。

このように本遺構の基礎構造は、12号組石も含め西側側縁石基礎には胴木や裏込石の補強は認められず、比較的軽量の構造をとっている。一方東側側縁石では、12号組石全域及び本遺構SD803位置に該当する段切りまでは胴木を使用し裏込石も多量に使用され、かなり強固な構造をとっているが、段切り以南では胴木を敷設した痕跡は認められず、西側同様軽量の構造をとっている。こうした基礎

構造の差異から、段切り以北の黒多門邸側縁石に対し強固に構築しなければならない理由が存在したと考えられる。この様相差の要因について、ひとつには石垣の高さ、すなわち土台への荷重に対する措置が考えられるが、藩邸外周の石組である中央診療棟地点6号組石、2号組石などにおいて胴木は検出されていない。2号組石の本来の高さは不明だが、6号組石は天和3年時の大聖寺藩邸屋敷割り変更による盛土造成部分にあたりSD1103と同様の高さが築かれた石積みである。築石は最下段を除き全て抜き取られているが、溝底から裏込石最上端までは180cmを測るため、裏込奥行きは築石表面から約200～250cmとかなりの控えをとり、頑丈に構築されていることが判る。しかし、それにも関わらず胴木は使用されていない。すなわち一連の石積みの中で特定の場所にもみ胴木工法が施工されたといえる。そしてそれは石積みの自重以上の荷重が掛かることを想定した工法と考えられ、石積み直上に建造物、それも長屋門などの重量建造物の建造を見据えた措置と推定される。

Lライン以南の東側築石は全て抜き取られていたことはすでに述べたとおりであるが、覆土の観察より築石が抜き取られた掘方内は焼土粒を多量に含有する覆土で埋め戻されている(Ⅲ-9図1～3層)。特に1層は基本層序の天和2年火災の被災遺物を多量に含むC2層に比定される焼土層であることから、天和2年の火災後、大聖寺藩邸屋敷割り変更に伴う盛土造成が施工される前に、使用されていた築石は、他所での再利用のため抜き取られたことが窺われる。

SD859 (Ⅲ-7、8図)

SD422の溝底より検出された溝で、N～P1グリッドに位置する。SA716、SP813に切られている。主軸方位は、N-0.4°-Wとほぼ真北方向を示し、SA814と平行して伸びる。溝幅は約40cm、確認面からの深さは20cmを測る。覆土は黒色土を基調とする。遺物は出土していない。黒多門邸初期段階の地境溝と考えられるが、SA814との関係は不明である。

SP426・SP714・SP817・SP820 (Ⅲ-7、8図)

D面に帰属する柱穴列で、N～P2グリッドに位置する。SP817はSA819に、SP426はSA425に、SP714はSA713に各々切られている。平面形は不整形を呈し、確認面からの深さも40～90cmとばらつきがある。SP817には幅12cmを測る柱痕が認められるが、かなり西へ傾斜しており、塀の控え柱の可能性もある。これらのピットは、ほぼ直線状に並んでいる。大形柱穴列に切られている。周辺の溝、柱穴列などと同主軸である。という点で共通するが、個々の遺構形態、規模、間隔に対する共通性は低く、一連の塀基礎と判断するのは難しい。遺物もほとんど無く、詳細な年代も不明である。

SP715 (Ⅲ-7図)

E面に帰属するピットで、P2グリッドに位置する。本遺構南北にはD面に帰属するピットが並んで構築されているが、確実にE面に帰属する遺構は他にない。平面形は楕円形を呈し、東西120cm、南北65cm、確認面からの深さ65cmを測る。覆土はほぼ水平堆積を呈し、ローム粒、ロームブロックが多く含まれる。遺物は東大編年Ⅱ期の陶磁器類が少量出土している。

SP958・SP1078 (Ⅲ-7、8図)

E面に帰属する柱穴で、K～L2グリッドに位置する。SP1078の西側は調査区外に及ぶ。SP958はSB957に、SP1078はSB1077に各々切られている。平面形は隅丸方形を呈すると考えられる。ピット間は芯々で約360cmを測る。柱痕は認められない。遺物も出土していない。周辺の地境関連ピット

トとほぼ同軸線上に位置していることから、その関連性も指摘できる。

○東側地境遺構

E～D1面（Ⅲ-10～12図）

B～K・15～16グリッドで検出された、礎石を伴う柱穴列および溝である。この地境は確認面E面からD1面で検出されている。時期としては加賀藩が同地に拝領されてから、天和2（1682）年の火災までの下屋敷時代に該当する。

地境は古い順にSD2768、SB898・SB2456B・SB2767、SB2456A、SB894・SB889・SB2457の大きく4時期に分かれ、最古期であるSD2768はE面と確定できるが、その後の3期は確認面としては確定できなかった。これは遺構上面の遺存度が不良であったこと、また地境の機能として、複数面にまたがって存続したことが考えられる。

SB894・SB889・SB2457（Ⅲ-11、12図）

調査時に別遺構を付したが、形状、配置から同一遺構と考えられる。礎石を伴う柱穴列である。

東側地境E～D1面の中では最も新しい時期に該当する。合計29基が検出されている。Eグリッド以南ではローム層まで掘り込まれ、底部は明確であるが、Eグリッド以北は谷の黒色土上に位置しており、壁の立ち上がりが明瞭ではなかった。それぞれの形状は概ね長軸130～160cm、短軸60～90cmの東西に長い長方形を呈し、断面形状は垂直に近い立ち上がりを有している。底部のレベルは谷に向かい徐々に低くなっており、一定ではない。遺構の軸はN-1°-Wである。

礎石の数量、形状などには特に規則性は認められないが、礎石の位置は掘方に対し、西側に多く据えられ、東側には少ないあるいは検出されない傾向が認められる。また礎石中心部の距離は150cm程度が多い。このことから、建物を構成する柱穴列ではなく、西側に土塀などの壁を有し、東側を控えなどの柱を埋設していた塀などの遺構の性格が考えられる。

SB898、SB2456B、SB2767（Ⅲ-10図）

SB898とSB2456Bは形状、形態から同一遺構と考えられる。合計5基検出されている。

SB2456Aの遺構形状が方形に近いのに対しSB898・SB2456Bは長軸100～200cm、東西60～70cmで南北に長軸を持ち大きく異なっていることから、SB2456Aとは別遺構と考えられ、SB2456Aより古い柱穴列で、底部レベルは概してSB2456Aより低くなっている。SB2456A・SB2457に攪乱されるため、遺存度は不良で、J～Hグリッドで検出された部分では、中心部で約360cm間隔が類推できるが確実ではない。SB2767はSB2456Bの西側に検出されている。10基検出されている。SB2456Bより古い遺構と考えられ、ほぼ構築時の掘方は残っていない。柱穴列としては最古期にあたる。

SB2456A（Ⅲ-11図）

18基検出されている。SB2456Bより底部レベルが高い遺構が多く、切り合いではSB894・SB889・SB2457より古い遺構である。50～100cm程度の方形を呈しているものが多い。N-1°-Wである。

SD2768 (Ⅲ-10、12 図)

地境遺構のうち SB894・SB889・SB2457、SB2456A、SB898・SB2456B・SB2767 柱穴列とは異なり溝状の遺構である。南北は最大で 25.6m、短軸は最大で、220cm の幅を有している。断面形は逆台形となり、底部レベルは南から北へ下がっており、底部は E16～F16 付近で一段低く障子堀り状を呈している。一部に硬化面を持つことから道として利用された可能性も考えられる。上記の地境遺構と異なり、N-3°-W の傾斜を持ち、大きく西に振れている。直行する形になるが、遺構軸からは SD803 との関連が看取できる。

C～A 面 (Ⅲ-13～23 図)

B～N・13～16 グリッドで検出された地境遺構である。大きくは SD1、SR1826、SG1586 で構成され、大聖寺藩と講安寺の地境として機能したと思われる。その他の遺構はこの 3 遺構に関連すると考えられる。C～A 面で検出され、時代としては天和 2 (1682) 年の火災以降から明治期に該当する。以下各遺構について詳述する。

SB1582、SB1583、SB1584 (Ⅲ-20 図)

B～C15 グリッドで SR1826 硬化面で検出される。長方形の平石を硬化面に据えた形態で、掘方は確認されていない。性格は不明である。

SB1637、SB1638 (Ⅲ-20 図)

C15 グリッド、SR1826 硬化面上で検出される。南北に長軸を持つ隅丸方形が重なるような平面形を持ち、SB1637 部分が一段低い底面を有する。SB1637 部分の覆土はしまっておらず、柱が埋設されていた可能性は高い。また上部で検出される切石は柱の補強の可能性が考えられ、SB1637・SB1638 は同一遺構の可能性が考えられる。

SB2125 (Ⅲ-13、19 図)

SR1826 東側、検出レベルが低位で、礎石列である。20～30cm 程の石を据えている。石の間隔は 90～150cm と不均一である。遺構主軸は N-0.3°-W である。

SB2126 (Ⅲ-13、14、19 図)

H～I15 グリッドで検出される。検出レベル、遺構形態は SB125 に類似するが、遺構軸が N-4.2°-E と SB2125 に比べ東に振れていることから、別遺構と考えられる。

SD1 (Ⅲ-10～12、16 図)

C14、E～F14、F～N13 グリッドで検出された溝状遺構および石垣残存部からなる。

C 面から A 面に帰属する。調査区全体で検出され、南北とも端部は検出されていない。遺構の主軸は胴木部分で N-0.3°-W である。

F ライン北側の遺存状態は不良で、上部は大きく攪乱を受け、ほぼ胴木を固めた栗石が残っているのみである。F ライン南側は、北側よりは遺存状態は良好ではあるが、間知石はなく、西側に裏込め石・栗石が C 層に堆積している状況であり、盛土と同時に、石垣を構築したと思われる。本来据えられていた間知石は、ほぼ遺存していないことから、SD1 の掘方自体は石垣構築時の状況では無く、

間知石を回収するための掘方と推測され、胴木部分（11層）と掘方（12層）また8～10層が石垣本来の覆土と考えられる。

石垣本来の掘方は、残存部分から推測すると、胴木を最深部とし後述する「道」SR1826側に一段平場が形成されていたと思われ、間知石などで段差を構築していた可能性が考えられる。また上部が攪乱を受け、接合部が確認できなかったが、Gライン付近でSD1108（A面）と接続していたと思われ、排水機能を有していたと考えられる。

SD1581（Ⅲ-20、21図）

C～D・14～15グリッドでSR1826上で検出された溝状遺構である。確認面はC面に相当すると思われる。北西側、南東側を攪乱され、長軸820cm、短軸の最大幅は150cmでN-36°-Wの軸を持ち、溝底は北西から南東へ下っている。同面、またはその他の面で検出された遺構軸と大きく異なっており、この遺構の性格を表すと考えられる。掘方両側に一部に間知石を使用し一段に石を据え、溝の上部に方形の凝灰岩切石を置きSR1826硬化面とフラットに作られ、暗渠状を呈しており、SR1826と同時に構築されたと思われる。SR1826の項でも記述したが、道の南北レベルはSD1581付近を最下部としていることから、排水機構を有していたとおもわれ、茅町2丁目遺跡で検出された石組みとの関連が窺える。

SG1586（Ⅲ-22、23図）

B～K16グリッドで検出された石垣状遺構である。中央部で攪乱され、南北に分かれて検出されており、北側と南側では様相を変えている。攪乱より北側は40～50cmの間知石を使用し一段で検出されたが、本来の段数は不明である。南側は30cm程の間知石を使用し、遺存している最大段数は、5段であるが、SR1826の使用面から推測すると、6段であった可能性が考えられる。この検出状況の違いから構築時期が違う可能性が考えられるが、間知石東面は直線状に構築されていることから、最終使用状況の性格は、同一と思われる。遺構主軸は間知石東側の面でN-0.8°-Eであるが、南側はIライン付近より南は東西に波打っている。

溝の掘方は調査区北端で鍵状に屈曲し、さらに北側へと続いている。屈曲部から北側は南から続いていた間知石ではなく、方形の切石または河原石、南側部分に使用していたものより一回り小さい間知石で構築され、改築、拡幅などの可能性も考えられる。掘方も北側、南側では様相を変え、北側では溝底に、径10cm程のピットが検出される。南側ではピットは検出されず、I16グリッド南側では一段低い溝状の掘方が検出され、胴木などが据えられていた可能性が考えられる

SK9、SP10、SK145、SP146、SP147、SP148、SP149、SP188、SP192、SP193、SP210、SP262、SP264、SP265、SP266、SP267、SP268、SP277、SP278、SP357、SP361、SP362、SP363、SP364、SP365、SP369、SP371、SP373、SP376、SP677（Ⅲ-14～17図）

SR1826の西側、大聖寺藩側であるK～N14グリッドで検出されたピットおよび土抗である。検出レベルから「道」SR1826上面から構築された遺構である。ピットの直径は20～30cm程度のものが多く、形状は方形を呈するものが多い。またピットが近接して検出され、底部レベルも10～50cmと一定ではないことから、立て替えなども想起される。また配置からはピット列が何条か想定でき、「道」東端の柵列などの機能が類推できる。以上がSR1826範囲内で西側で検出されたピット群である。

SP354、SP511、SP512、SP513、SP514、SP515、SP1585、SP1589、SP1590、SP1591、SP1592、SP1593（Ⅲ-14、15、17 図）

SR1826 の東側で検出されたピットの内、底部レベルが高位で SR1826 の中央に近い位置で検出されている。いくつかの列をなすピット列と思われるが、確定できる組み合わせは少ない。この中でピット列として考えられるのは SP354、SP511、SP512、SP513、SP514、SP515 で J～L・15 で検出される。形状は方形から長方形を呈する。長方形を呈するものは南北を長軸とするものが多い。土層の堆積状況から柱痕が確認でき、柵列などの性格を有していたことが考えられる。SP1585 は D15、E15 で検出される。平面形状に比べ、遺存深度が低くなっており、土抗状を呈している。性格は不明である。その他に SP1589、SP1590、SP1591、SP1592、SP1593、SP1580、SP1587、SP1588、SP1598、SP1599、SP1600、SP1623、SP1624、SP1625、SP1627 が検出位置、検出レベル、遺構形態から上述ピット群と関連性があると思われる。

SP1572、SP1573（Ⅲ-13、14、18 図）

SR1826 東側で検出されたピットの内、底部レベルが高位で東側に位置する SG1586 に最も近接し検出されたピット列である。ピットの直径は約 10cm、深度も 20～30cm 程度と均質で、間隔も 45～50cm と整って検出されている。柵列などの性格が考えられる。

SP1576-1、2・SG1586-1、2、3、4（Ⅲ-13、14、18 図）

SR1826 東側で検出されたピットの内、底部レベルが高位で上記 SP354、SP511、SP512、SP513、SP514、SP515、SP1585、SP1589、SP1590、SP1591、SP1592、SP1593 より東側で検出されているピット群である。

遺構の最大径が 40～60cm と他のピットに比べ規模が大きく、深度も 30～60cm と深くなっている。

SP1630、SP1631（Ⅲ-13、16 図）

F～H14 グリッドで検出されたピット列である。ピットの間隔は 70cm 弱～90cm 強と一定ではなく、底部レベルも同様である。SP1630 と SP1631 は遺構軸を若干異にしているが、遺構規模、深度などからは同じような機能を有していたのではないかと思われる。SD1 本来の石垣掘方内で検出されていることから、後述する「道」SR1826 の東端付近に位置すると思われる。

SP1636（Ⅲ-20 図）

C15 グリッドで SR1826 硬化面で検出される。一辺約 45cm の方形のピットである。遺存深度は確認面より 15cm 程であり、覆土の状況からは、柱などを据えていた可能性は低い。性格は不明である。

SR1826（Ⅲ-13～16 図）

B～L・14～15 グリッドで検出された道路状遺構である。南北 49.5m、東西幅は最大で 600cm となり、南北両端は共に調査区外へ広がっていると思われる。上面に砂利を敷き詰め硬化面を形成する。東西方向ではほぼフラットであるが、南北は調査区内ではほぼ、南から北へ下り、SD1581 付近が一番低くなっており北へ上っている。しかしながら、SD1581 付近はロームを浸食する大きな谷が、東西方向に走っていることから、土圧によって当該部分が下がっている可能性も考えられる。堆積状況からは、D 面焼土堆積後、少なくとも三回は水平面を形成している。明治 16 年測量の道の標高は 14m の

等高線が道を横切っており、その後もかさ上げされ、使用面が形成されたと考えられる。

最終使用状況としては、SR1826の西側がSD1によって抜きとられた石垣、東側にSG1586上端に合わせた石垣に挟まれ、段切り状の道であったと考えられる。

本来ならばこの道上には全面で硬化面が形成されていたと思われるが、攪乱を受け硬化面の遺存していない部分が多く、その部分からピットが多く検出されている。

第3節 加賀金沢藩下屋敷期

E面の遺構

E～D2面の遺構

D2面の遺構

D面の遺構

第3節 加賀金沢藩下屋敷期

（1）E面の遺構

K2～4グリッド周辺ピット列（Ⅲ-24図）

SD803の北側をほぼ平行して伸びるピット列群である。東端は4ラインから東へ2m付近で収束する。各ピットの新旧関係、形態、方向性から、以下の3列の柵列を復元することができる。最も南側に位置するSB996、SP1005、SB995、SB1028は、平面形が楕円形を呈する一群で、ピット間隔は芯々で180～200cmを測り、主軸方位はN-82°4'-Eを示す。SB996には柱痕が認められる。SP1080、SP998、SP997、SP1005、SP1004、SP855、SP856、SP1025、SP956は、主軸方位N-86°42'-E上にほぼ整列すると考えられる。このうちSP1004には柱痕が認められる。またSP1080、SP998は、SP1007、SP1006、SP1029、SP932、SP955、SP880、SP1026と合わせ、主軸方位N-80°40'-E方向へ伸びる可能性も考えられる。南側のSD803の主軸方位はおおむねN-86°-Eを示し、SP1080からSP956を一行とするラインとほぼ一致する。いずれにしてもSD803によって段切り区画された区域を規定する柵列と考えられる。また、本ピット群が4ライン東2m以東で検出されないこと、本ピット群以北にもE面帰属ピットが集中することから、SD803区画内をさらに区画する施設の可能性もある。なおSP855、SP856などに切られるSP857は覆土に土灰層及び焼土層を含むことから、炉床の可能性もある。

SB831（Ⅲ-25図）

L8グリッドで検出される。遺存状況はSB831-1、SB831-2は上部から遺存しているが、SB831-3は遺存状態が悪く底面から10cmほどしか残っていない。いずれも柱痕がセクション断面で確認できる。遺構プランは柱穴に対し南北に長い形状である。各柱痕間の距離は180cmほどであり、建物跡が考えられるが、その範囲は不明である。

SB1986、SB3149、SB3150（Ⅲ-27図）

SB1986はE～G13グリッドに位置する。9基の礎石が南北に2列並び、礎石の軸はほぼ真北である。掘方は9基のうち2基で確認されている。西側の4基の礎石列は北から144cm、282cm、258cm間隔で並ぶ。

SB3149はE～F13グリッドに位置する。6基の小穴が南北に並び、最も南側の小穴には礎石を伴う。遺構の軸は西に9°傾く。

SB3150はE～F12グリッドに位置する。4基の小穴が南北に並ぶ。遺構の軸はSB3149同様、西に9°傾く。小穴列は2列で東側に小穴3基が西側に1基並ぶ。南端の東西に並ぶ小穴は近接して検出され、それ以外の2基には、対応する西側に小穴は検出されなかった。

SB2571（Ⅲ-26図）

小穴列で、C～D6グリッドに位置する。SD2714、SX2715と重複し、それらより新しい。平面形は直径約40cmを測る円形を呈し、確認面からの深さは最大30cmを測る。主軸方位はN-5°-Wを示す。小穴間は芯々で365cmを測り、江戸間を基準尺度としていた可能性が高い。覆土には柱痕は

認められない。遺物は少量出土している。

SB2580 (Ⅲ-28 図)

小穴列で、C6 グリッドに位置する。D2 面検出の SE2295 によって削平されている。平面形は円形を呈し、直径 35cm を測る。覆土はロームブロック主体の暗黄褐色土である。小穴間は芯々で 225cm を測る。形態、覆土ともに類似性があり、一連の遺構と考えられる。性格は不明。遺物は出土していない。

SD641 (Ⅲ-29 図)

溝状遺構で I ~ K・14 ~ 15 グリッドに位置する。平面形は長方形で断面形は逆台形、東西 80cm、南北 670cm、深さ 70cm を測る。北側の坑底に平面形が長方形で東西 40cm、南北 43cm の小穴がある。

SD661、SD800 (Ⅲ-32、33 図)

E 面に帰属する溝状遺構で、SD800 は K8 ~ 9・12 ~ 13 グリッドに、SD661 は K14・15 グリッドに位置する。ともに SD803 の屈曲部東側延長上にあり、遺構主軸方位も SD803 と同じく真北よりわずかに北へ振れる。SD800 は中央を上位面の SK3 で攪乱されるが東西長約 26.60m を測り、SD661 はその東端を上位面の SK899 に攪乱されるが東西長約 9m を測る。両遺構とも南壁面がわずかに外へ膨らみ、南壁が北壁より高い状況が確認されるが、断面形は概ね箱薬研形を呈し、壁面は工具痕による凹凸が著しい。坑底レベルは SD800 の e-e' ラインで 11.34m、g-g' ラインで 11.56m、SD661 の f-f' ラインで 11.90m と、SD803 の屈曲部あたりが最も低く、SK3 による攪乱部より東側は SD800 の坑底レベルが徐々に高くなり、SD661 では SD803 の坑底レベルよりも高い状況となる事が確認された。覆土はローム粒やロームブロックを多く含むしまりの強いものであり、流水痕跡は認められない。遺構の覆土、形態、蛇行しながら東西に伸びる状況、主軸方位など SD803 と共通する点が多く、また坑底レベルなどを考慮すると SD661、SD800 は SD803 より東側へ続く境界施設であったと考えられる。ただしその幅が最大で 90cm 近く SD803 より広がる理由は不明である。周辺の土地利用状況によるものか。

遺物は SD661 では確認されず、SD800 はごく少ないなど、両遺構のみでは遺構年代の特定は難しいが、遺構の検出状況や特徴などから SD803 と同段階に構築された遺構と推定される。

SD803・SD2686 (Ⅲ-31、32 図)

溝状遺構で、SD2686 は、SD803 の延長である。J8、K3 ~ 8、L1 ~ 5、G ~ J7・8 グリッドにかけて、多少蛇行しながらも逆 L 字状に伸び、東西長 31.34m、南北長 24.23m を測る。南北部分の主軸方位は N-5°-W と西に振れる。東西部分の主軸方位は E-4°-N と北へ振れる。両者はほぼ直角に折れる。断面形は基本的に箱薬研形を呈する。壁面は工具痕による凹凸が著しい。坑底レベルは SD803 の a-a' ラインで、11.60m、d-d' ラインで 11.70m、SD2686 の h-h' ラインで 11.40m、i-i' ラインで 11.45m と、SD803 に対して SD2686 が約 20cm 低い各々はほぼ水平であり、覆土にも流水痕跡が認められないことから、境界施設と考えられる。また SD803 では南壁が北壁より高く、段切り際に沿って構築された平坦部を囲む施設であると考えられる。本遺構の北側に位置して逆 L 字状の区画を構成する SX2715、SD2716 も同様に東西部分の SX2715 の北壁が低く、段切りをして L 字状区画内を平準化している。また本遺構屈曲部の東側には SD803 と同方向に伸びる SD800、さらに SD661 が存在

する。これらの遺構は、近世最下面に帰属することから藩邸内で最も古い開発行為のひとつと考えられる。遺物は東大編年Ⅲ a 期を下限とし、17世紀第3四半期初頭頃までの土地利用のあり方と推定される。

SD838（Ⅲ-30 図）

L～M2グリッドで検出された溝状遺構である。覆土はE層に類似した土質で埋まっている。遺構の規模は長軸7.85m、短軸は最大で58cmで、遺構の軸はN-22°-Eで同じE面で検出された遺構軸よりも大きく東に振れている。平面形状は南に行くに従い、狭くなっており収斂するが遺構坑底レベルは、北から南へわずかに下っている。遺物は出土していない。

SD1018（Ⅲ-34 図）

溝状遺構で、J～K・3～4グリッドに位置する。重複するSP862、SP863、SK945、SP935、SP1015、SP1017、SP1026、SP956に切られている。南端はSD803に接し、北方向へクランク状に伸び、溝幅は20～30cmを測る。断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは約10cmと浅い。溝底からは流水痕跡は確認されなかった。性格は不明。

SD2209（Ⅲ-35 図）

G～H13グリッドに位置する。溝状遺構で遺構の軸はほぼ真北である。北側をSK2210に切られるため本来の規模は不明である。断面形は逆台形、東西50cm、南北474cmを測る。

SD2570（Ⅲ-36 図）

溝状遺構で、C～E・6～7グリッドに位置する。遺構主軸方位は、東西溝がN-94.7°-E、東西溝北側南北溝がN-6.8°-W、南側南北溝がN-0.4°-Wといずれも直交はしていない。溝幅はおおむね30cm前後、確認面からの深さ5cm前後を測る浅い溝である。本遺構の西側には同形状のSD2626、SD2565が位置し、また南側には東西に伸びるSX2715、東側には南北に伸びるSD2716が位置している。その配置からSX2715、SD2716区画内の小区画もしくは建物に付随する雨落ち溝と考えられる。遺物は出土していない。

SD2577（Ⅲ-37 図）

溝状遺構で、E～F・3～5グリッドにかけて東西方向に伸びる。SX2715埋没後に構築され、ほぼその直上に位置している。主軸はほぼ東西方向を示し、溝幅は50～70cmを測る。断面形は皿状を呈する。覆土にはローム粒、ロームブロックが多量に含まれる。遺物は出土していない。境界施設と考えられる。

SD2652（Ⅲ-38 図）

溝状遺構で、C3～4グリッドに位置する。重複するSK2670より古く、SK3156より新しい。溝幅は50～60cmを測り、東西方向に伸びるが、やや弓なりに曲がっている。確認面からの深さは約10cmと浅く、覆土にはローム粒を多量に含む暗褐色土が堆積している。本遺構の方向性から南側約1mに位置するSD2671と関連性が高く、地境遺構と考えられる。

SD2671 (Ⅲ-41 図)

溝状遺構で、G～J・7～8グリッドにかけて東西方向に弓なりに伸びる。西端は調査区域外へ達する。SX2715、SE3292埋没後に構築されている。断面形は皿状を呈し、全体的に整形は粗い。北側に位置するSD2652とほぼ同一方向に伸びており、関連性が指摘できる。17世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土している。地境遺構と推定される。

SD2695 (Ⅲ-39 図)

溝状遺構で、F7グリッドに位置する。東西長115cm、幅20cm、確認面からの深さ20cmを測る。17世紀前半に比定される陶磁器類がわずかに出土している。本遺構周辺部にはピットが散漫に分布しているのみで性格は不明。

SD2702 (Ⅲ-40 図)

溝状遺構で、C6グリッドに位置する。重複するSK2673、SX2701より古い。形態はL字状を呈し、東端はSK2673に削平されているため、SD2714との関係は不明である。溝幅は35cm、確認面からの深さ10cmを測る。断面形は皿状を呈している。地境溝もしくは雨落ち溝と考えられる。遺物は出土していない。

SD2714 (Ⅲ-42～44 図)

溝状遺構で、A～C・6～7グリッドに位置する。北端は調査区域外へ至る。また南端部上部はSX2715平坦部作出切土部分に若干削平されている。断面形は基本的には箱薬研形を呈しているが、セクションラインe-e'以北では西壁側にテラスが附属するようになる。また南端付近はCライン南約2mで掘方が浅く広く変化する。覆土は暗～茶褐色土を基調とし、上層にロームブロック、ローム粒が多く含まれる傾向が看取される。本遺構は東側に位置するSD2716とほぼ平行しており、その間は内々で約450cmを測る。この様相から遺構性格は境界施設と考えられ、本遺構とSD2716の間が道であった可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SX2715 (Ⅲ-42～44 図)

C～F・3～7グリッドに位置する。重複するSD2671より古く、SD2714、SE3292より新しい。本遺構は遺構確認時点で、大形不整形遺構として認識して調査を開始した。掘削した結果、遺構確認範囲南北端部は東西に伸びる不整形の溝状を呈し、それ以外は浅い落ち込み状に拡がった。さらに浅い落ち込み範囲内からは、やはり東西方向に伸びる不整形の落ち込みが検出された。これらの落ち込みと南北端溝状部分の覆土は浅い落ち込み部を覆う5層が堆積しており、全ての窪地がまとめて埋め戻され整地されたことが窺える。また南端部溝東端はSD2716南端と接続し、L字状の区画を形成し、北端部の溝は隣接するSD2652、SD2671の弓なり形状と同一方向に伸びている。このような状況から、本遺構は覆土範囲全体を浅く削平し、その南北端に溝を設けた構造と捉えられ、埋没谷によって南に向かう緩斜上に立地していることから、雛壇状の平坦面を作出する藩邸初期開発に伴う切土造成痕跡遺構と考えられる。また本遺構覆土は次段階の盛土造成(D層)に伴うものと推定される。遺物は東大編年Ⅱ期に比定される陶磁器類や金箔軒丸瓦片が出土している。

SD2716 (Ⅲ-42～44 図)

溝状遺構で、A～E・7～8グリッドにかけて南北に伸びる。断面形は逆台形を呈する。確認面での溝幅は120～140cm、溝底幅は70cm、確認面からの深さ60～70cmを測り、溝底は南に向かって下がっている。溝底直上にはロームブロックを極多量含む褐色土（12層）、その上に粘土質の暗灰褐色土（11層）がほぼ全域に堆積している。本遺構の壁面は沖積層から江戸盛土最下層（E層）にあり、12層は意図的な堆積を示している可能性がある。また11層が粘土質土であることから開構時に雨水が堆積していた可能性がある。但し、傾斜方向の南端が立ち上がっていることから、流路とは考えられない。本遺構の南端はSX2715西端と接続しL字状の区画を形成している。さらに南方の延長にはSD803から北へ伸びるSD2686が位置する。その配置からSD803で南北に大きく段切りされた北側エリア内はSD2686、SD2716でさらに東西に区画され、SX2715でその区画内に段切り造成による平坦面を造成したと考えられる。遺物は17世紀前半に比定される陶磁器類が出土している。

SD2829（Ⅲ-46図）

C～D14グリッドに位置する。溝状遺構で遺構の軸はほぼ真北である。東側と南側が削平されているため遺構本来の規模は不明である。平面形はL字形を呈し、東、南方向に伸びる。断面形は逆台形、東西95cm、南北830cm、深さ48cmを測る。

SD2830（Ⅲ-47図）

C14～15グリッドに位置する。溝状遺構で主軸はほぼ真北である。西側と北側が削平されているため遺構本来の規模は不明である。平面形はL字形を呈し、北、西方向に伸びる。断面形は逆台形、東西195cm、南北120cm、深さ18cmを測る。遺構の規模、位置関係、遺構の軸から西側に位置するSD2829と接続すると考えられる。

SD2881（Ⅲ-48図）

C～D・14～15グリッドに位置する。溝状遺構で平面形は不整形、断面形は三角形、東西76cm、南北269cm、深さ16cmを測る。南側が削平されているため遺構本来の規模は不明である。

SD2889（Ⅲ-49図）

D15グリッドに位置する。溝状遺構で平面形は溝の西端が膨らんでいる。断面形はU字形、東西206cm、南北55cm、深さ10cmを測る。東側が削平されているため遺構本来の規模は不明である。

SD2898（Ⅲ-50図）

D15グリッドに位置する。溝状遺構でa-a'ライン、b-b'ラインの遺構の深さ、平面形から上面が削平され東側と西側に分かれ別遺構のようにになっている。断面形は逆台形、東西265cm、南北50cm、深さ24cmを測る。

SD2972（Ⅲ-51図）

D～E12グリッドに位置する。溝状遺構で平面形はL字形を呈し、南、西方向に伸びる断面形はU字形、東西164cm、南北565cm、深さ22cmを測る。遺構の角の中央部が盛り上がっている。西側がSK2964に削平されているため遺構本来の規模は不明である。

SD3034 (Ⅲ-52 図)

溝状遺構で、H～I6 グリッドに位置する。南北方向に主軸を有し、全長 120cm、幅 25～40cm、確認面からの深さ 4cm を測る。断面形は皿状を呈す。本遺構周辺には同形態の SD3109、SP3217 が存在し、畝跡の可能性はある。遺物は細片がわずかに出土したにすぎない。

SD3109 (Ⅲ-53 図)

溝状遺構で、H5 グリッドに位置する。重複する SK3140 より新しい。各溝の主軸方位は N-8.5°-E を示し、溝間は 30～40cm を測る。断面形は皿状を呈し、確認面からの深さは 5cm を測る。その形状から畝跡と考えられる。遺物は出土していない。

SD3113 (Ⅲ-54 図)

溝状遺構で、I5 グリッドに位置する。南端は SP3229 に削平されており、残存長で 225cm を測る。溝幅は 25～30cm、確認面からの深さは 8cm を測り、断面形は皿状を呈する。その形状は近接する SD3109、SP3217 と類似性が認められ、畝跡の可能性はある。遺物は少量出土しているにすぎない。

SD3499 (Ⅲ-55 図)

溝状遺構で、H～I4 グリッドに位置する。断面形は皿状を呈し、全長 165cm、幅 25cm、確認面からの深さは 10cm を測る。周辺部には畝状遺構 SD3109 が存在していることから、本遺構も畝跡の可能性はある。遺物は出土していない。

SD3528 (Ⅲ-56 図)

B～C・12～14 グリッドに位置する。東西に伸びる溝状遺構で断面形は U 字形、東西 1063cm、南北 174cm、深さ 56cm を測る。東側と西側が削平されているため本来の規模は不明である。遺構の東側で小穴 2 基を検出している。

SE2407 (Ⅲ-57 図)

井戸で F14～15 グリッドに位置する。井戸の南側と北側に耳状の掘り込みを伴う。東西 204cm、南北 315cm を測る。深さ 204cm まで調査を行った。井戸部分の平面形は円形、東西 120cm、南北 124cm を測る。井戸枠、井戸の上部施設の材は残っていない。7～9 層は、井戸枠の外側の覆土と考えられる。

SE3292 (Ⅲ-58 図)

井戸で C～D・4～5 グリッドに位置する。重複する SD2671、SX2715 より古い。確認面での平面形は不整円形を呈し、東西 230cm、南北 250cm を測る。断面形はロート状を呈し、確認面下約 150cm で直径 90cm の円形に移行する。円形移行部より下では壁面に足掛け穴と考えられる孔が縦方向に 2 基確認された。覆土はローム粒、ロームブロックを含む黒色土を基調とする。遺物は出土していない。

SF1897 (Ⅲ-59 図)

炉状遺構で E12 グリッドに位置する。本来の平面形は長方形だったものが、北西側は削平される。

断面形は台形、東西 110cm、南北 108cm、深さ 18cm を測る。覆土の堆積状況より作り替えが行われたと考えられる。2層と3層の接する部分は被熱し焼土化している。

SF2697（Ⅲ-60 図）

炉状遺構で B5 グリッドに位置する。SK3136 と重複し、それより新しい。平面形は不整楕円形に不整円形の張り出しを持つ様相を呈し、東西 170cm、南北 75cm、確認面からの深さ最大 13cm を測る。覆土の堆積状況より不整円形張り出し部との境付近で 2層が立ち上がっていることから 2基の重複の可能性もある。不整楕円形側の覆土は橙褐色から赤褐色を呈する灰層が堆積し、坑底には 2箇所 of 浅い落ち込みが認められることから、カマド跡の可能性もある。遺物は出土していない。

SF2787（Ⅲ-61 図）

炉状遺構で B4 グリッドに位置する。重複する SD2794 より新しい。平面形は不整円形を呈し、東西 80cm、南北 70cm、確認面からの深さ 10cm を測る。坑底は被熱し暗赤褐色に変色している。覆土は遺構中央部に橙褐色を呈する灰質土が堆積し、壁際には焼土粒、炭化物粒を含む暗褐色土が堆積する。その様相から火地炉もしくはカマド跡と考えられる。遺物は出土していない。

SF3295（Ⅲ-62 図）

炉状遺構で C6 グリッドに位置する。平面形は西側に張り出しを有す不整楕円形を呈し、南北 108cm、東西 55cm（張り出し部除く）、確認面からの深さ 12cm を測る。坑底は被熱によってやや赤味を帯びる。また中央には炭化物が集中し、壁寄りには焼土が堆積している。その様相から火地炉もしくはカマド跡と考えられる。遺物は出土していない。

SF3436（Ⅲ-63 図）

炉状遺構で C12 グリッドに位置する。上面が削平されているため平面形は不整形だが、本来は方形もしくは長方形だったと考えられる。断面形は逆台形で、東西 52cm、南北 47cm、深さ 8cm を測る。覆土に炭化物、焼土が含まれる。

SK728（Ⅲ-64 図）

土坑で O2 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、南北 145cm、東西 110cm、確認面からの深さ 140cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底も比較的平坦であるが、全体的に工具痕による凹凸が著しい。覆土は 1、2層を除き、レンズ状堆積を呈し、5層上面付近より切断痕が認められるウマの四肢骨が大量に出土した。ウマの四肢骨に関しては、研究編の阿部論文に詳しい。それ以外にはほとんど遺物は出土していない。

SK815（Ⅲ-65 図）

土坑で K2～3 グリッドに位置する。SK860、SK861 を切っている。西側は調査区外へ伸び、全容は不明であるが、長方形を呈する土坑と考えられる。北壁、東壁ともにほぼ直線状に伸びる。南壁際に一段テラスを有し、壁面はやや波打っている。調査区内で東西 560cm、南北 190cm、確認面からの深さ 60cm を測る。南側テラス部は坑底上 10cm にあり、テラス面には工具痕が顕著に残存する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底もほぼ平坦に整形されている。覆土はほぼ水平堆積を呈し、1、2

層間には凝灰岩破碎礫が多量に含まれる。遺物は出土していない。性格は不明。

SK816 (Ⅲ-66 図)

土坑で L3 グリッドに位置する。南壁の一部は攪乱によって破壊され、北側では SK818 に切られ、西側で SK940 を切っている。平面形は不整長方形を呈すると考えられ、東西 300cm、南北（残存部）90～120cm、確認面からの深さ 50cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はほぼ平坦に整形されている。覆土はローム粒を含む暗～暗茶褐色を基調とし全体的にしまりが強い。遺物は陶磁器類の小片がわずかに出土しているにすぎない。性格は不明。

SK818 (Ⅲ-66 図)

土坑で L3～4 グリッドに位置する。SK816、SK940 を切っている。平面形は不整長方形を呈し、東西 450cm、南北 90cm を測る。東西壁際にテラス状の段を有し、東側では 1 段、西側では階段状に 2 段存在する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、確認面から坑底までの深さは 160cm を測り、幅に対してかなり深く掘削されている。覆土には全体的にローム粒が含まれるが、特に下層に多い。坑底直上の 11 層は、極めて粘性の強い土層である。遺物は陶磁器類の小片が少量出土したにすぎず、性格、廃絶年代ともに不明である。

SK2098 (Ⅲ-67 図)

土坑で B～C15 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は逆台形、東西 182cm、南北 99cm、深さ 75cm を測る。貝を含む 2、4、6 層とローム土を含む 3、5 層が交互に堆積している。

SK2208 (Ⅲ-68 図)

土坑で G～H13 グリッドに位置する。平面形と断面形、および覆土の堆積状況から遺構の西側と南側で二次的な掘削が行われたと考えられる。断面形は逆台形で坑底、南側の立ち上がりに凸凹がある。東西 143cm、南北 582cm、深さ 97cm を測る。坑底で 3 基の小穴を検出している。

SK2280 (Ⅲ-69 図)

土坑で、C14 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は台形、東西 54cm、南北 48cm、深さ 18cm を測る。

SK2586 (Ⅲ-70 図)

土坑で、H～I15 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形、長軸 184cm、短軸 54cm、深さ 95cm を測る。

SK2696 (Ⅲ-71 図)

土坑で、F7 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、1 辺 60cm、確認面からの深さ 25cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁がややオーバーハングする。覆土はローム粒を多量に含む暗褐色土の単一層である。遺物は出土していない。周辺部はピットが散漫的に分布してのみで、関連遺構、性格ともに不明。

SK2752（Ⅲ-72 図）

土坑で、G～H12 グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形はレンズ状、長軸 54cm、短軸 45cm、深さ 10cm を測る。

SK2757（Ⅲ-73 図）

土坑で、E～F・14～15 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形、東西 235cm、南北 347cm、深さ 67cm を測る。

SK2780（Ⅲ-74 図）

土坑で、E13 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形、東西 105cm、南北 75cm、深さ 20cm を測る。6、7 層上に平面形が台形の石を東西に 2 個配置され、1～5 層で石が固定されている。

SK2871（Ⅲ-75 図）

B8～9 グリッドに位置する遺構である。SP2870 と重複しており、SP2870 より旧である。残存している平面形は方形を呈し、規模は東西 275cm、南北 284cm、確認面からの深さは 38cm を測る。坑底は比較的平滑であるが、緩やかな段差を有す箇所もある。また壁はやや凹凸を有し、坑底からやや開きながら立ち上がる。覆土はロームと黒色土粒やブロックが主体で、しまりの強いものである。遺物は出土しなかった。

SK2875（Ⅲ-76 図）

G8 グリッドに位置する遺構である。SK2874 と重複しており、2874 より旧である。平面形はやや歪な円形を呈し、規模は長軸 194、短軸 220cm、確認面からの深さは最大 40cm を測る。坑底西側が全体より窪む。壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。覆土はロームと黒色土粒やブロックが主体で、しまりの強いものである。植栽痕か。遺物は出土しなかった。

SK2878（Ⅲ-77 図）

G～H・8～9 グリッドに位置する遺構である。SK2998、SK3084、SK3090 と重複しており、新旧はもっとも新である。残存している平面形は東側に張り出しを有す円形を呈し、規模は東西 287cm、南北 260cm、確認面からの深さは最大 65cm を測る。坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。覆土はロームと黒色土粒やブロックが主体で、しまりの強いものである。植栽痕か。遺物は陶磁器土器片が少量出土している。

SK3089（Ⅲ-78 図）

H9 グリッドに位置する遺構である。残存している平面形は半円形で、規模は長軸 195cm、短軸 105cm、確認面からの深さは最大 13cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土はローム粒やロームブロックが主体である。植栽痕か。遺物は出土しなかった。

SK3134（Ⅲ-80 図）

土坑で、H～I5 グリッドに位置する。重複する SK3167 より新しく、SK3133 より古い。平面形は

不整長方形を呈し、東西 235cm、南北 75cm、確認面からの深さ 60cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が著しい。性格は不明。17 世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SK3140 (Ⅲ-79 図)

土坑で、H5 グリッドに位置する。重複する SD3109 より古い。平面形は不整形を呈し、東西 125cm、南北 105cm、確認面からの深さ 35cm を測る。壁面、坑底ともに凹凸が著しい。坑底直上にはロームブロック主体土が堆積している。17 世紀中葉に比定される陶磁器類が少量出土している。

SK3166 (Ⅲ-80 図)

土坑で、H～I5 グリッドに位置する。重複する SK3167 より新しい。平面形は不整長方形を呈し、東西 145cm、南北 185cm、確認面からの深さ 30cm を測る。壁面、坑底ともに凹凸が著しい。性格は不明。17 世紀代の陶磁器類が少量出土している。

SK3167 (Ⅲ-80 図)

土坑で、H～I5 グリッドに位置する。重複する SK3134、SK3166 より古く、SK3166 坑底より検出された。平面形は不整長方形を呈し、東西 145cm、南北 85cm、確認面からの深さ 40cm を測る。坑底西側には東西 90cm、南北 80cm、坑底からの深さ 35cm を測る楕円形の落ち込みを有す。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が顕著である。性格は不明。遺物は出土していない。

SK3268 (Ⅲ-81 図)

土坑で、I3 グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、長軸 135cm、短軸 120cm、確認面からの深さ 25cm を測る。壁面、坑底ともに凹凸が認められる。また坑底中央が渦巻き状に一段高い。覆土にはローム粒が多く含まれる。その様相から植栽痕と考えられる。遺物は出土していない。

SK3276 (Ⅲ-82 図)

土坑で、G～H5 グリッドに位置する。重複する SX3275 より古い。東壁は上位面の遺構によって削平されている。平面形は方形を呈し、東西 110cm (残存値)、南北 125cm、確認面からの深さ 35cm を測る。覆土はレンズ状に堆積し、坑底直上にはロームブロック主体土が堆積している。壁面、坑底ともに凹凸が著しく、坑底には根痕が多数存在していることから、植栽痕と考えられる。17 世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SK3283 (Ⅲ-83 図)

土坑で、H～I・3～4 グリッドに位置する。重複する SK3273 より古く、SK3284 より新しい。平面形は不整長方形を呈し、北壁は SK3273 によって削平されている。東西 80cm、南北残存値 190cm、確認面からの深さ 30cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が著しい。覆土にはローム粒、ロームブロックが多く含まれる。坑底西側に存在する方形ピットの帰属は不明であるが、北側で SK3273 内に存在するピットと芯々で約 180cm を測り、関連性も考えられる。遺物は 17 世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SK3284 (Ⅲ-83 図)

土坑で、H～I・3～4グリッドに位置する。重複するSP3282、SK3283より古く、SK3283によって東側が大きく削平されている。平面形は不整形を呈し、規模ともに詳細は不明である。壁面、坑底ともに凹凸が著しい。植栽痕の可能性はある。遺物は出土していない

SK3502（Ⅲ-86図）

A9～10グリッドに位置する遺構である。SK3503とSK3505と重複しており、いずれより新である。残存する平面形は東西に細長い長方形を呈し、規模は東西460cm、南北100cm、確認面からの深さは最大32cmを測る。坑底は比較的平滑であるが、杭穴状のものが散見される。壁は凹凸を有し、坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。覆土はローム粒やブロックをやや多く含むもので、しまり強いものである。性格不明の遺構である。遺物は出土しなかった。

SK3503（Ⅲ-86図）

A9グリッドに位置する遺構である。SK3502とSK3506と重複しており、SK3506より新で、SK3502より旧である。残存している平面形は方形を呈し、規模は東西195cm、南北106cm、確認面からの深さは最大32cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土はローム主体である。坑底には根穴と考えられる跡が検出されており、植栽痕の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

SK3505（Ⅲ-86図）

A9グリッドに位置する遺構である。SK3502と重複しており、SK3505が旧である。本遺構北側は調査区外となっているが、残存する平面形はやや歪な長方形を呈し、規模は東西122～142cm、南北170cm、確認面からの深さは65cmを測る。坑底は比較的平滑であり、南側が全体より浅く一段窪む。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。覆土はローム粒やブロック主体である。性格不明の遺構である。遺物は瀬戸・美濃系播鉢片が1点出土しているのみである。

SK3506（Ⅲ-86図）

A9グリッドに位置する遺構である。SK3502とSK3503と重複しており、もっとも旧である。残存している平面形はやや歪な方形を呈し、規模は東西96cm、南北130cm、確認面からの深さは32cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底から開きながら立ち上がる。覆土はローム粒や黒色土を多く含む。坑底には根穴状の跡も確認されており、覆土の堆積状況なども考慮すると、植栽痕の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

SP2273（Ⅲ-84図）

C14グリッドに位置する。ピットで平面形は長方形、断面形は長方形を呈す。東西28cm、南北46cm、深さ19cmを測る。遺構上部と西側に石が確認されている。礎石であるかは不明である。

SP2729・SP2791・SP2793・SP2795（Ⅲ-45図）

ピット列で、A～B・4～5グリッドに位置する。重複するSD2794より古い。各ピットの平面形は東西に主軸を持つ楕円形を呈し、SP2795を除き、坑底には杭痕と思われる小ピットを有す。各ピット間隔は西から190cm、190cm、190cm、170cmを測り、SP2795、SP2729間以外は、190cmすなわ

ち京間1間を基準尺度としている。ピット列の主軸方位はほぼグリッドと平行のN-4°-Wを示し、SP2729のみ北へずれる。本ピット列は坑底に認められる小穴の存在から掘立柱の塀跡と考えられる。遺物は細片がわずかに出土したにすぎない。

SP2929 (Ⅲ-85 図)

ピットで、G6グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、東西50～60cm、南北150cm、確認面からの深さ25cmを測る。坑底南側には深さ30cmを測るピットを有し、破碎礫による礎石が置かれている。関連遺構は不明。遺物は細片がわずかに出土したにすぎない。

SX2245 (Ⅲ-87 図)

C8～9グリッドに位置する遺構である。南北にセクションラインを設定して、覆土を下げたところ北壁際から自然堆積層である暗黄褐色土(21層)と暗褐色土(22層)のブロックが階段状に確認された。壁面にも同層序レベルとは約40cmのずれが生じており、これらのブロックが2段階に崩落したことが読み取れる。またブロック間にはクラック状に18層、19層の土砂が入り込み、また壁面にもいたる所でクラックが存在する。そして覆土自体も南壁下部で確認されたオーバーハング部に向かって北から南に向かって傾斜している。このオーバーハング部は滑り落ちるように下方に向かって開いており、人的行為によるものとは理解し難い様相を呈している。さらに覆土を下げたところローム層下の砂層において円形の掘方が確認された。遺構調査終了後に壁面のクラックを断ち割ったところ、クラックは円形掘方を中心に傘状に下方へ広がっていることが確認された。このような様相は、文京区向丘高校149号遺構に類例が求められ(都内遺跡調査会1997)、密閉された井戸が大地震の影響で亀裂崩壊した様子と考えられている。本遺構も同様に本来E面に構築された井戸が廃絶、埋没後にD2層によって完璧にパックされたことがその要因と考えられる。出土遺物は東大編年Ⅱ期に比定される。

(2) E～D2面の遺構

SB825、SB977、SB983、SB1037、SB1042、SB1061 (Ⅲ-88 図)

J～K7グリッドに南北方向に6基の遺構が並ぶことが確認され、その主軸はほぼ真北にある。個々の遺構形状は歪な長方形か楕円形を呈し、SB977以外は南北方向にその長軸を有すが、規模は一律ではない。また確認面からの深さや遺構間の間隔などもばらつきがある。周囲に対応する遺構が確認されないことから塀跡とも考えられるが、確認面からの深さが80cm弱あるものもあり、上屋構造は荷重のかかるものであった可能性もある。遺物は陶磁器類がごく少量出土したのみである。

SB869 (Ⅲ-89 図)

L2～3グリッドに位置する礎石列である。SD803埋没後に構築されている。扁平川原石が用いられた礎石列で、主軸方位は、E-1°-Sとほぼ東西方向を示す。礎石は4基検出され、礎石間は西から芯々で120cm、110cm、90cmと一定でない。いずれの礎石も掘方は確認されなかった。同様の形態を有する礎石にD2面のSB730がある。本遺構からSB730南端礎石まで芯々で540cmを測り、距離的には江戸間3間となるが、SB730検出時には本遺構は確認されていなかったことから、関連性は不明である。遺物は出土していない。

SB1990（Ⅲ-91 図）

G～H・13～15 グリッドに位置する。13基の小穴、礎石が東西方向に8列、南北方向に5列並ぶ。西から4列目、南北に5基並ぶ小穴・礎石列（a-a'）の間隔は北から約120cm、120cm、100cm、30cmである。北から2列目、東西に5基並ぶ小穴・礎石列（b-b'）の間隔は西から約150cm、80cm、220cm、110cmを測る。北から3列目、東西に4基並ぶ小穴・礎石列（c-c'）の間隔は西から約490cm、約100cm、約90cmを測る。

SB2426、SB2428、SB2462、SB2464、SB2470（Ⅲ-90 図）

H～I・14～15 グリッドに位置する。平面が歪な楕円形あるいは長方形を呈す柱穴が東西に1列（SB2428、SB2470）、南北に2列（SB2426、SB2464、SB2462）並ぶ。いずれの柱穴間隔も芯々で約180cmを測る。

SB2648（Ⅲ-92 図）

C～E10 グリッドに位置する遺構である。南北方向に7つの円礫が並ぶ礎石列である。使用されている石の規模は概ね長軸20cm、短軸16cm程のものであるが、南から3つめと北端の石がそれよりは1まわり大きな円礫が使用されている。いずれも掘方は確認されない。遺構の主軸は真北から大きく西側へ振れている。石と石の間尺をみると一番南側のものから順に北側4つ目の石までは180cmないし90cmの間隔で並ぶが、それ以北の3つの石に関しては、使用される石の様子も南のそれとは異なり、大形のものであったり、複数の丸石を使用したものとなっている。またその間尺が全て異なり、北側の3つの石の主軸が南側の4つの石のそれよりわずかに東へずれている様子もある。以上のような状況からは、南側4つと北側3つは別遺構あるいは作り替えがあった可能性もある。

SD895（Ⅲ-96 図）

H～K13 グリッドに位置する。溝状遺構で小穴を20基を伴う。溝部分は東西70cm、小穴を含むと136cm、深さ92cm、南北19m38cmを測る。SD895-18、SD895-19、SD895-20は溝の中に配置されている。SD895-18は平面形が台形、断面形が台形、東西60cm、南北84cm、深さ60cmを測る。SD895-19は平面形が楕円形、断面形が凸形、東西44cm、南北56cm、深さ32cmを測る。SD895-20は平面形が台形、断面形が長方形、東西44cm、南北60cmを測る。SD895-18とSD895-19の中心の間隔は約200cm、SD895-19とSD895-20の間隔は約180cmを測る。その他の小穴は溝状遺構の立ち上がりに沿って配置されている。杭痕が確認されていない小穴は5基、確認される小穴は9基ある。SD895-7とSD895-13の杭痕、SD895-16とSD895-21の杭痕は東西に並ぶ。

SD1039（Ⅲ-93 図）

J～K7 グリッドに位置する南北に伸びる溝状遺構である。K7グリッドではSD1040と重複するが、SD1039が旧である。なお途中をSK1054に切られているため断定はできないが、J7グリッドに伸びる溝はSD1039ではなくSD1040の可能性もある。前述のように途中断絶するが残存規模は長さ282cm、幅16～24cm、確認面からの深さは10cmを測る。断面形は浅いU字形を呈す。幅、深度などにばらつきがあることを考慮すると、本遺構西側に近接するSB825、SB977、SB983、SB1037、SB1042、SB1061の柱列に伴う雨落ち溝の可能性もある。

遺物は陶磁器類がごく少量出土しているのみである。

SD1040 (Ⅲ-93 図)

K7 グリッドに位置する南北に伸びる溝状遺構である。SD1039 と重複するが SD1040 が新である。SD1039 と重複する付近で 2 つに分岐し、そのすぐ北側は SK1054 に切られ、南側にも伸びていなかったため全体像は不明である。残存規模は長さ 210cm、幅 54 ～ 24cm、確認面からの深さは 12cm を測る。断面形は逆台形を呈す。遺物は出土しなかった。

SD1066 (Ⅲ-94 図)

K6 グリッドに位置するごく緩く S 字状に蛇行する溝状遺構である。規模は直線距離で長さ 200cm、幅 18cm、確認面からの深さは最大 17cm を測る。溝の断面形は箱形に近い逆台形を呈す。遺物は陶磁器土器がごく少量出土しているのみである。

SD2139 (Ⅲ-95 図)

I ～ J13 グリッドに位置する。南北に伸びる溝状遺構で、確認される南端は一部東へ膨らむ。東西 112cm、南北 329cm、深さ 20cm を測る。

SD2388 (Ⅲ-97 図)

F ～ G7 グリッドに位置する南北方向に伸びる溝状遺構であり、D3 面に帰属する。主軸方位はほぼ真北である。北側は攪乱され、残存規模は長さ 425cm、幅 73 ～ 102cm、確認面からの深さは 35 ～ 42cm を測る。溝の断面形は概ね箱形に近い逆台形を呈すが、部分的に立ち上がり付近にテラス状の張り出しを有す。覆土はレンズ状に堆積し、除々に埋まった様子が確認される。屋敷内の区画溝か。出土した陶磁器類は東大編年Ⅱ期に位置づけられるものである。

SD2431 (Ⅲ-98 図)

F ～ G8 グリッドに位置する南北に伸びる溝状遺構で、D3 面に帰属する。主軸方位はわずかに東へ振る。規模は長さ約 290cm、幅 18 ～ 25cm、確認面からの深さは最大 8cm を測る。溝の断面形は浅い皿形を呈す。ごく浅く、また掘方も明確ではないことから雨落ち溝のようなものか。遺物は出土しなかった。

SD2541 (Ⅲ-99 図)

D ～ E9 グリッドに位置する南北に伸びる溝状遺構であり、D3 面に帰属する。主軸方位はほぼ真北である。SK2437、SP2542 と重複しており、新旧はいずれよりも旧である。規模は長さ 312cm、幅 22cm、確認面からの深さは 5cm を測る。溝の断面形は浅い「U」字形を呈す。規模、形状などから雨落ち溝の可能性が高い。遺物は出土しなかった。

SD2649 (Ⅲ-100 図)

C10 グリッドに位置する南北方向に伸びる溝状遺構であり、D3 面に帰属する。主軸方位はほぼ真北である。残存規模は長さ 220cm、幅は北端では 22cm、南端では 72cm と南側ほど広がっている。確認面からの深さは最大で 16cm を測り、断面形は箱形に近い逆台形を呈す。なお局所的に炭化した側板状のものや、遺構の立ち上がりに 4 箇所杭痕状のものが確認されたことから、本来は木樋のよ

うなものが存在していた可能性もある。壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。遺物は陶磁器類がごく少量出土しているのみである。

SD2685（Ⅲ-101 図）

D3面に帰属する南北方向に伸びる溝状遺構で、F～G7グリッドに位置する。北端でSK2386と重複し、それより古い。南端は削平されており全長は不明である。溝幅は約60cm、確認面からの深さ20cmを測る。断面形は逆台形を呈し、覆土にはローム粒を多量に含む暗褐色土が堆積している。本遺構西側には同一方向に伸びるSX2297が位置し、関連性が考えられる。地境遺構と考えられる。17世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SD2769（Ⅲ-102 図）

C～E・12～13グリッドに位置する。溝状遺構で平面形はL字形、断面形は台形、東西413cm、南北922cm、深さ25cmを測る。遺構内に小穴59基が配置されている。遺構の中央に南北に並ぶ小穴以外は遺構の立ち上がりに配置されている。

SD3061（Ⅲ-103 図）

I～J9グリッドに位置する南北に伸びる溝状遺構であり、主軸方位はほぼ真北である。規模は長さ610cm、幅30～68cm、確認面からの深さは22cmを測る。断面形は箱形に近い逆台形を呈す。坑底には南北に5基の方形ピットが検出され、その規模はいずれも南北60cm前後、東西30cm、溝の坑底からの深さは15cm前後を測り、概ね130～140cmの間尺で並ぶ。覆土は溝、ピット部分を含めローム粒やロームブロックが主体である。布堀基礎か。遺物は陶磁器土器片がごく少量出土している。

SD3521（Ⅲ-104 図）

C～D13グリッドに位置する。溝状遺構で遺構の南北の軸は東へ15°振れる。断面形は台形、長軸360cm、短軸56cm、深さ8cmを測る。

SE485（Ⅲ-105 図）

D2～D4面に帰属する井戸で、M～N・5～6グリッドに位置する。掘方平面形は1辺330～350cmを測る不整形を呈し、確認面下約50cmにテラスが設けられている。その中央には1辺170～180cmを測る方形の掘り込みが存在する。掘り込み壁面はやや粗いが平坦に整形されており、確認面下570cmで四隅に角材を立て、四方を板材で囲んだ枡が検出され、方形井戸であることが確認された。覆土はほぼローム土主体で、短期間で埋め戻されたことが窺われる。出土遺物は少量で、東大編年Ⅱ～Ⅲ期に比定される。藩邸内においてこのような方形を呈する井戸は、本遺構以外に類例がない。

SE2574（Ⅲ-106 図）

D2～D4面に帰属する井戸で、B～C4グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、直径約190cmを測る。壁は確認面付近でややハの字状に開く。覆土はレンズ状堆積を呈し、井戸側は認められなかった。本遺構は5ライン付近で南北に整列する炉状遺構の一群より西へ約2mに位置し、それらが帰属する建築遺構に関連する可能性がある。17世紀中葉の陶磁器類が出土している。

SE2590 (Ⅲ-107 図)

F～G・12～13グリッドに位置する。井戸で平面形は円形、断面形は上部が台形、下部は筒形。東西258cm、南北286cmを測る。深さ300cmまで調査を行った。上部施設、井戸枠は確認されなかった。1～6層は井戸枠撤去後の埋め戻し土、7層は井戸側内の埋め戻し土、8～10層は上部施設に係る覆土と考えられる。

SF1830 (Ⅲ-108 図)

G14～15グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。平面形は長方形、断面形は台形で東西67cm、南北78cm、深さ27cmを測る。2層は遺構の壁面に貼られた灰褐色土で厚さは約10cm。その内矩は東西54cm、南北60cm。この内側に灰色土が充填されている(3層)。

SF1970 (Ⅲ-109 図)

D12グリッドに位置する。東側が削平されているが覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。平面形は不整形で上部の削平により本来の形状を留めていないと考えられる。残存部分は東西31cm、南北98cm、深さ12cmを測る。5層はしまりの強い茶褐色土が堆積。1～4層には焼土、炭化物等を含む覆土が堆積している。

SF1971 (Ⅲ-110 図)

D13グリッドに位置する。北側は削平されているが覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。平面形は不整形で、断面形は台形。東西102cm、南北56cm、深さ30cmを測る。7・8層は炉の使用時の壁面と考えられ、焼成を受けた影響もありしまりが強い。1～6層は覆土に炭化物、焼土を含み、その堆積状況からは数度の作り替えが想定される。

SF2096 (Ⅲ-111 図)

D～E13グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。平面形は不整形、断面形は台形、東西76cm、南北58cm、深さ12cmを測る。遺構の中央に自然石2個が確認されている。

SF2122 (Ⅲ-112 図)

D12～13グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。平面形は長方形、断面形は台形、東西66cm、南北38cm、深さ16cmを測る。

SF2131 (Ⅲ-113 図)

D～E・12～13グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。SF2131-1がSF2131-2を切る。SF2131-1の周りに瓦3点が立てた状態で確認されている。内側に礫5点が確認されている。平面形は長方形、断面形は台形、東西58cm、南北73cm、深さ12cmを測る。覆土の堆積状況から作り替えが行われたと考えられる。SF2131-1と瓦を挟んで接している4層は北側をSF2212に切られているが覆土から別の炉の可能性もある。SF2131-1に切られるSF2131-2の平面形は長方形、断面形はU字形、東西67cm、南北59cm、深さ22cmを測る。7層は遺構全面で確認されている。

SF2364（Ⅲ-114 図）

D3面に帰属する炉状遺構で、A5グリッドに位置する。東西2基の重複と考えられ、東側が新しい。各々の掘方平面形は不整楕円形を呈し、掘方内にローム粒を多量に含む褐色土を敷き詰め、その上に灰層が堆積している。灰層の分布範囲は図版左の「内側」に該当し、不整形を呈す。この様相からカマド跡の可能性も考えられる。17世紀代の遺物が少量出土している。

SF3254、SF3256（Ⅲ-115 図）

SF3254はC～D12グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。平面形は長方形で断面形は台形、東西72cm、南北60cm、深さ14cmを測る。3、4層は灰、焼土、炭化物を含む覆土で遺構の底面で確認されている。1、2層は灰、焼土、炭化物を含まない。

SF3256はC12グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。北側が削平されている。平面形は不整形、坑底に楕円形の窪みが確認されている。断面形は浅い「U」字形、東西70cm、南北の残存部分70cm、深さ20cmを測る。2層は灰、炭化物を含み遺構全面で確認されている。

SF3329（Ⅲ-116 図）

C12グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。掘方は南北に方形と円形の掘り込みが重なっている。南北110cm、東西97cmを測る。炉状遺構内側の平面形は長方形で中央に円形の窪みが確認されている。断面形は凸形、東西62cm、南北74cm、深さ14cmを測る。1～5層は炉状遺構の内側覆土で1、2層は灰、焼土を含みレンズ状に堆積している。5層は被熱によって赤色化している。掘方覆土の6、7層はローム粒を含む。

SF3424、SF3425（Ⅲ-117 図）

SF3424、SF3425は2遺構は接しており、D12グリッドに位置する。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。ともに平面形は円形、SF3424の断面形は台形、直径45cm、深さ13cmを測る。覆土はレンズ状に堆積している。1、2層は覆土に灰、炭化物、焼土の他に貝を含む。SF3425は播鉢が配置されている。断面形はU字形、直径38cm、深さ18cmを測る。4層は灰を多く含む。6層は被熱によって赤色化している。

SK518（Ⅲ-118 図）

J～K・12～13グリッドに位置する。3基の遺構（SK518-1～3）が切り合っている。平面形は不整形でSK518-2の断面形は長方形、東西405cm、南北338cm。深さ103cmを測る。

SK660（Ⅲ-120 図）

K14～15グリッドに位置する。土坑で遺構の軸は真北から西へ16°振れる。平面形は長方形、断面形は台形、長軸308cm、短軸106cm、深さ132cmを測る。

SK642、SP643、SP644、SP2276（Ⅲ-119 図）

J14グリッドに位置する。SK642の平面形は長方形、SP643、SP644、SP2276は不整形を呈す。SK642の断面形は台形、東西66cm、南北66cm、深さ53cmを測る。SP2276はSP643、SP644の並

びより西に若干ずれるが、SP2276、SP643、SP644 は南北に並ぶ。各小穴の間隔は約 180cm を測る。SP643 は東西 68cm、南北 66cm、深さ 56cm を測る。SP644 は東西 66cm、南北 66cm、深さ 60cm を測る。2 層は杭穴と考えられる。SP2276 は断面形は台形、東西 67cm、南北 53cm、深さ 62cm を測る。

SK794 (Ⅲ-121 図)

J～K14 グリッドに位置する。土坑で平面形は不整形、断面形は台形、東西 203cm、南北 200cm、深さ 94cm を測る。

SK846・SK968 (Ⅲ-122 図)

K8 グリッドに位置する重複する遺構であり、SK846 が新である。また SU845、SU847 と重複しており、SK846・SK968 とともに SK845 より新であり、SK846 は SU847 より旧である。

SK846 は平面形は歪な円形を呈し、規模は直径 240cm、確認面からの深さは 116cm を測る。壁は坑底からやや開きながら立ち上がるが、北側のみに緩やかなテラスを有す。壁、坑底とも比較的平滑である。覆土はローム主体土でほぼ一度に埋め戻されている。

SK968 は東側大半を SK846 に切られているため平面形は不明であるが、残存規模は東西 190cm、南北 220cm、確認面からの深さは 126cm を測る。SK846 と同じく壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。坑底は比較的平滑に調整されているが、壁には工具痕が顕著に認められた。ローム粒やロームブロックを多く含む覆土が主体であるが、その覆土は本遺構下の SU845 の西室へ流れ込む状況が確認され、坑底が遺存していたのは北側のみである。北側には坑底付近より 10cm ほど上のあたりで平瓦片が弧状に並べられた状況が確認された。検出された平瓦片ほぼ同サイズのもので、いずれも表側を上にして 1 ないし 2 段並べられている。検出状況からは意識的に並べられた可能性もあるが、用途は不明である。

以上のような状況から推測されることは、SU845 の天井崩落に伴い、SK968 の坑底が崩落、その崩落部分を埋め戻したものが SK846 である。なお SK846 は掘方がしっかりとしたものであることを考慮すると、単純に落ち込みを埋め戻したのではなく、再掘削跡に埋め戻した可能性もある。出土遺物はともに少量であるが、17 世紀前半代に比定される陶磁器類が出土している。

SK853 (Ⅲ-123 図)

土坑で、K～L2 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西 200cm、南北 70cm、確認面からの深さ 20cm を測る。周辺の D2 面帰属遺構より、確認面レベルが 10～20cm 低く、遺構深度も浅いことから、上部が削平されている可能性がある。南北各壁際には小穴が各 3 基認められ、板枠によって囲まれた土坑であったと考えられる。坑底は凹凸が著しく、掘方的状況を呈している。覆土はやや灰色を帯び粘性が強く、芥溜の可能性もある。17 世紀代に比定される陶磁器小片が少量出土している。

SK978 (Ⅲ-124 図)

K6～7 グリッドに位置する遺構である。1 遺構として調査をはじめたが、2 基の長方形土坑 (SK978-1、SK978-2) が重複していることが判明した。新旧は SK978-2 が新である。SK978-1 の規模は東西 86cm、南北 128cm、確認面からの深さは 56cm を測る。壁、坑底ともに平滑に整形され、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。北西隅の坑底には、径 10cm ほどの円形の杭痕状の窪みが 1

箇所確認される。坑底付近の覆土は粘性の強い水成層であったことから、一時期水が溜まっていた可能性もある。

SK978-2の規模は東西160cm、南北100cm、確認面からの深さは60cmを測る。SK978-1と比較すると壁、坑底はやや凹凸が目立ち、また坑底からの壁の立ち上がりも鋭角ではなく、丸味を帯びて立ち上がる。南西および南東隅の坑底にはSK978-1と同じく杭痕状の窪みが確認された。この杭痕状の窪みは1と2の境目付近でも確認されており、2遺構の規模、形状などを考慮すると、SK978-2はSK978-1を作り替えようとしたものか。遺物は2遺構の半截時と、SK978-2のみで少量確認されているが、陶磁器類は17世紀前半代に位置づけられ、様相差は認められない。

SK1052（Ⅲ-125 図）

K6グリッドに位置する遺構である。SK1054と重複しており、新旧はSK1054より新である。残存する平面形は歪な円形を呈し、規模は直径150cm、確認面からの深さは30cmを測る。坑底は凹凸が顕著である。遺物は陶磁器類と銭がごく少量出土している。

SK1053（Ⅲ-126 図）

K6～7グリッドに位置する遺構である。SK1054と重複しており、新旧はSK1054より旧である。残存している平面形は長方形を呈し、規模は東西80cm、南北96cm、確認面からの深さは54cmを測る。壁、坑底は平滑に整形され、断面形は箱形を呈す。規模、形状、覆土の様子など本遺構南側に位置するSK978-1と類似する。遺物はごく少なく、陶磁器類は17世紀前半代に比定されるものが出土している。

SK1927（Ⅲ-127 図）

I～J13グリッドに位置する。土坑で東側が削平を受けている。平面形は長方形。壁面、坑底は平坦で、南壁はほぼ垂直に、北壁は47°の傾斜で立ち上がる。残存規模は東西76cm、南北248cm、深さ108cmを測る。

SK2135（Ⅲ-128 図）

H～I15グリッドに位置する。土坑で平面形は長方形、断面形は台形、東西178cm、南北478cm、深さ153cmを測る。1～4層、5層、6層、7層、8層、9・10層、11～13層、14・15層、16層、少なくとも9つの堆積の単位がみられ、数回の作り替えが想定される。

SK2138（Ⅲ-129 図）

D～E・15～16グリッドに位置する。土坑で平面形は長方形。北側がスロープ状を呈する。東西250cm、南北480、深さ220cmを測る。

SK2375（Ⅲ-130 図）

G7グリッドに位置する遺構であり、D3面に帰属する。平面形は長方形を呈し、規模は東西130cm、南北80cm、確認面からの深さは30cmを測る。壁、坑底は比較的平滑に整形されている。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。遺物は陶磁器・土器片が少量出土している。

SK2376 (Ⅲ-131 図)

G6～7グリッドに位置する遺構であり、D3面に帰属する。SK2377と重複しており、新旧はSK2377より新である。残存する平面形は楕円形を呈し、規模は長軸60cm、短軸60cm、確認面からの深さは40cmを測る。坑底南端で浅い窪みの中に割石が置かれた状況が確認されていることから、根石を伴う何らかの基礎遺構の可能性もあるが、周辺に対応する遺構は確認できなかった。ただし本遺構南側のSK2382の南西隅に長楕円形を呈すピット状の窪みが検出されており、根石は検出されなかったが、形態や規模などから本遺構と関連する遺構の可能性もある。遺物は出土しなかった。

SK2377 (Ⅲ-131 図)

G～H・6～7グリッドに位置する遺構であり、D3面に帰属する。SK2376と重複しており、新旧はSK2376より旧である。残存している平面形は東西方向に長辺を有すカギ形を呈し、規模は東西240cm、南北58～75cmを測る。壁は凹凸を有し、坑底には約120cmの間尺で方形ピットが2基検出される。東側のピットの方がやや深く、確認面からの深さは80cm、西側のピットは60cmを測る。布堀基礎の可能性が高いが、周囲に対応する遺構は確認されなかった。遺物は少量出土し、陶磁器類は17世紀代に位置づけられる。

SK2382 (Ⅲ-131 図)

H6～7グリッドに位置する遺構であり、D3面に帰属する。SK2383と重複しており、新旧はSK2383より旧である。遺構形態は方形の掘方を2段有す構造となっている。上部の方形掘方はやや歪で、規模は1辺173cm、確認面からの深さは30～50cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、南壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がるが、他は開きながら立ち上がる。上部掘方から34～50cm下で下部の方形掘方に移行し、その規模は東西110cm、南北126cm、深さ94～110cmを測る。上部の掘方より全体的に整形が丁寧で、壁、坑底ともに平滑である。また壁も坑底から垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。覆土の堆積状況も掘方の形態が変わるところで様相が様変わりする。すなわち下部は遺物を比較的多く含む褐色土が数回にわたり埋め戻されたような状況(12～15層)であり、上部はローム粒やブロックを多く含む黄褐色土が下部の窪みを埋めるような堆積状況(5～10層)を呈す。以上の様相からSK2382は、元々は下部の方形掘方を有す遺構であったが、何かの理由で掘方を広げ、検出時のような2段の掘方を有す遺構となったことが推測される。本遺構から出土した陶磁器類は東大編年Ⅲa期に位置づけられるものである。

SK2383 (Ⅲ-131 図)

G～H7グリッドに位置し、D3面に帰属する遺構である。SK2382と重複しており、新旧はSK2382より新である。残存している平面形は不整形を呈し、規模は長軸153cm、短軸124cm、確認面からの深さは56cmを測る。坑底中央付近に小さな段差を有し、遺構の南東方向が全体よりわずかに高い。壁は坑底から開きながら立ち上がる。覆土はローム粒やロームブロックをやや多く含む黄褐色土が主体で、数度にわたり埋め戻されている。性格不明の遺構である。遺物は少量出土し、陶磁器類は17世紀代に位置づけられる。

SK2402 (Ⅲ-132 図)

J14グリッドに位置する。土坑で平面形は楕円形、断面形は台形、東西40cm、南北48cm、深さ

42cmを測る。1層は杭跡でSK2402は柱穴と考えられる。

SK2414（Ⅲ-133図）

H15グリッドに位置する。土坑で平面形は長方形、断面形は台形、東西50cm、南北113cm、深さ35cmを測る。

SK2429、SK2508（Ⅲ-134図）

ともに土坑である。SK2429はH14グリッドに位置する。東側をSK2508と重複している。平面形は不整形、断面形は台形、残存部分、東西は85cm、南北は99cm、深さ92cmを測る。

SK2508はH14～15グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は長方形、東西190cm、南北238cm、深さ164cmを測る。

SK2440（Ⅲ-135図）

G～H6グリッドに位置する遺構で、D2面に帰属する。SK2441と重複しており、新旧はSK2441より新である。残存している平面形は歪な長方形を呈し、規模は東西134cm、南北150cm、確認面からの深さは102cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。覆土に炭化物をやや多く含む層（2層、4層）が認められる。遺物は陶磁器類が遺物収納箱1箱分出土しており、それらは東大編年Ⅱ～Ⅲa期に位置づけられるものである。

SK2441（Ⅲ-135図）

G～H・5～6グリッドに位置する遺構であり、D2面に帰属する。SK2440と重複しており、新旧はSK2440より旧である。平面形は歪な長方形を呈し、長軸470cm、短軸183cm、確認面からの深さは12～35cmを測り、SK2440を間に挟み、東側が浅い。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。覆土を観察するとローム粒やロームブロックを多く含む層（6、10層）と、炭化物を多く含む層（5、7、8、9層）とがブロック状に強く埋め戻されている。坑底には凹凸の他に四隅や北側の長辺壁際にピット状の窪みが確認されるが、それらには規則性が認められなかった。性格不明の遺構である。遺物は陶磁器類が遺物収納箱2箱分出土しており、それらは東大編年Ⅱ～Ⅲa期に位置づけられる。

SK2445（Ⅲ-136図）

E8グリッドに位置する遺構であり、D3面に帰属する。SK2444とSK2529と重複しており、新旧はSK2529より新で、SK2444より旧である。西側はトレンチ掘削時に攪乱され、残存している平面形は歪な長方形を呈し、規模は東西43cm、南北222cm、確認面からの深さは最大60cmを測る。壁、坑底ともに凹凸が顕著であり、北側は一部階段状を呈す。覆土はローム粒やロームブロックを主体とする黄褐色土を主体に、比較的強く埋め戻されている。性格不明の遺構である。遺物は陶磁器類が遺物収納箱1/2箱ほど出土しており、それらは17世紀前半代位置づけられる。

SK2449（Ⅲ-137図）

C9～10グリッドに位置する遺構であり、D3面に帰属する。平面形は長方形を呈し、東西85cm、南北118cm、確認面からの深さは最大18cmを測る。壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、坑底

中央は凸レンズ状を呈す。覆土は暗褐色土で一度に埋め戻される。性格不明の遺構である。遺物は陶磁器・土器片と金属製品が少量出土している。

SK2452 (Ⅲ-138 図)

I～J15 グリッドに位置する。南側は削平されている。土坑で、残存規模は東西 297cm、南北 310cm を測る。

SK2520 (Ⅲ-139 図)

H13 グリッドに位置する。土坑で東側と南側は削平され、平面形は不整形。底面は平坦で北壁は 54° の傾斜で直線的に立ち上がる。東西 111cm、南北 122cm、深さ 50cm を測る。坑底に石が配置されている。柱穴の痕跡は確認できなかった。

SK2535 (Ⅲ-140 図)

C10 グリッドに位置する遺構であり、D2 面に帰属する。開口部平面形は不整形を呈し、規模は長軸（東西）213cm、短軸（南北）183cm を測る。壁は凹凸を有し、坑底からの立ち上がりは、南北はほぼ垂直に近いが、西側はやや傾斜のあるテラス状、東側はオーバーハングする状況が確認される。坑底の平面形はやや歪な方形を呈し、東西 140cm、南北 162cm、確認面からの深さは最大 120cm を測る。坑底は壁と比べると平滑で、やや東よりに浅い窪みを有す。覆土は基本的に西から東へ流れ込んだ状況が確認されるが、西側テラス状部分から下の覆土（10 層以下）はその様子から壁からの崩落土ないし本遺構が開口していたことによる堆積層の可能性がある。9、10 層は遺物を比較的多く含むことから、何らかの廃棄行為にともなって埋め戻された覆土と推察される。なお 8 層以上はローム粒やロームブロック、礫などを含むしまりの強い覆土で埋め戻される。東側立ち上がり付近には壁から崩落したようなロームブロックを多く含む層が認められ、また坑底からほぼ垂直に立ち上がる西壁が、遺物を多く含む 10 層を境にテラス状に立ち上がる状況に変化することから、地下室などの深い遺構を構築する途中、壁の崩落などがあり、その構築を放棄し、廃棄土坑として再利用された可能性も考えられる。遺物は陶磁器類が遺物収納箱 1 箱分出土しており、それらは東大編年Ⅱ～Ⅲ a 期に位置づけられる。

SK2543 (Ⅲ-141 図)

D8 グリッドに位置する遺構であり、D3 面に帰属する。平面形は隅丸長方形遺構が南北に切り合っているような形態を呈す。覆土の堆積状況からは同時に埋め戻された状況が確認されたことから 1 遺構として扱ったが、本来は 2 遺構であった可能性もある。規模は、細長い隅丸長方形部分が東西 80～120cm、南北 326cm、確認面からの深さは最大 120cm を測る。また南西側に張り出した隅丸方形部分は東西は最大で 52cm、南北 194cm、確認面からの深さは最大 23cm を測る。壁、坑底はわずかに凹凸を有す。東西南壁は坑底からやや開きながらほぼ垂直に立ち上がるが、北壁は垂直よりは緩い角度で階段状に立ち上がる。覆土は北から南側へ埋め戻される状況が確認されたが、4 層には焼土粒や焼土ブロック、5 層には巻き貝などの貝殻片、6、7 層には炭化物がやや多く認められるなど、何らかの廃棄行為があった状況が観察される。遺物は陶磁器・土器片が少量出土しており、それらは 17 世紀前半代に位置づけられる。

SK2560（Ⅲ-142 図）

E9 グリッドに位置する遺構であり、D3 面に帰属する。平面形は不整形を呈し、規模は長軸 113cm、短軸 40cm、確認面からの深さは 12cm を測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土はロームブロック主体である。性格不明の遺構である。遺物は陶磁器土器片が少量出土しているのみである。

SK2581（Ⅲ-143 図）

F～G13 グリッドに位置する。土坑で東側を SD1725 に切られる。平面形は不整形で断面形は台形、東西 200cm、南北 214cm、深さ 68cm を測る。

SK2588（Ⅲ-144 図）

E12 グリッドに位置する。土坑で北側、南側が削平されている。平面形は台形、断面形は台形、東西 116cm、南北 123cm、深さ 12cm を測る。

SK2653（Ⅲ-145 図）

D2～D4 面に帰属する土坑で、B7 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西 200cm、南北 160cm、確認面からの深さ 100cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面、坑底ともに平滑に整形されているが、坑底東寄りに浅い落ち込みが存在する。覆土は西側からの流れ込みで埋め戻されている。木柵などの施設は認められなかった。17 世紀中葉に比定される陶磁器類が出土している。

SK2678（Ⅲ-97 図）

D2～D4 面に帰属する土坑で、F～G6 グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、東西 100cm、南北 145cm、確認面からの深さ 10cm を測る。覆土は褐色土を基調としており、坑底直上には粘土質土が堆積している。性格は不明。17 世紀中葉の陶磁器類が少量出土している。

SK2732（Ⅲ-142 図）

E8～9 グリッドに位置する遺構であり、D3 面に帰属する。平面形はやや歪な円形を呈し、その中央付近に丸石と方形の割石が検出された。規模は直径 105～120cm、確認面からの深さは最大 21cm を測る。壁、坑底は比較的平滑で、壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土はしまりの強いローム粒やロームブロックが主体であり、最上層には炭化物が集中する箇所も認められる。礎石を伴う基礎遺構の可能性もあるが、本遺構周囲に対応すると考えられる遺構は検出されなかった。遺物は陶磁器土器片が少量出土している。

SK2779（Ⅲ-146 図）

F13 グリッドに位置する。土坑で平面形は不整形、断面形は中央部が盛り上がり南側と北側が窪んでいる。東西 82cm、南北 146cm、深さ 32cm を測る。遺構上面で 3 個の石を確認しているが、本遺構との関係は不明である。

SK2814（Ⅲ-147 図）

B～C15 グリッドに位置する。遺構の北側、南側は削平されている。土坑で平面形は長方形、断

面形は台形、東西 128cm、南北 247cm、深さ 34cm を測る。

SK2964、SK2965（Ⅲ-148 図）

D12 グリッドに位置する。SK2964 は土坑で SK2965 を切る。不整形で東西 256cm、南北 216cm、深さ 45cm を測る。SK2965 平面形は長方形、断面形は長方形、東西 163cm、南北 104cm、深さ 228cm を測る。

SK3054（Ⅲ-149 図）

D2～D4 面に帰属する土坑で、J5 グリッドに位置する。西側が D2 面 SK1023 に削平され、形態、規模ともに詳細は不明である。平面形は不整形を呈し、壁面、坑底ともに凹凸が著しいことから採土坑と考えられる。遺物は 17 世紀中葉に比定される陶磁器類が少量出土している。

SK3130（Ⅲ-150 図）

D2～D4 面に帰属する土坑で、I4 グリッドに位置する。平面形は 1 辺 66cm を測る正方形を呈し、確認面からの深さ 10cm を測る。坑底各コーナーには杭痕が認められ、壁際に板枿痕跡も認められたことから、板枿を伴う土坑といえる。覆土は粘土質の灰褐色土が堆積し、それらの様相から、便槽の可能性もある。17 世紀中葉に比定される陶磁器類が少量出土している。

SK3196（Ⅲ-151 図）

D2～D4 面に帰属する土坑で、G～H5 グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、長軸 185cm、短軸 145cm、確認面からの深さ 30cm を測る。壁面、坑底ともに凹凸が顕著で坑底には比較的平坦で根痕が多数認められる。植栽痕と考えられる。また 1 層は粘土質で、炭化物粒が多く含まれ、釘をはじめ 17 世紀中葉に比定される遺物がまとまって出土していることから、伐根後の窪地を廃棄遺構として転用したと考えられる。

SK3223（Ⅲ-152 図）

D2～D4 面に帰属する土坑で、H4～5 グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、東西 190cm、南北 200cm、確認面からの深さ 40cm を測る。坑底壁面ともに凹凸が顕著で、坑底には根痕が多数認められる。その様相から植栽痕と考えられる。17 世紀中葉に比定される陶磁器類が出土している。

SK3524（Ⅲ-153 図）

C13 グリッドに位置する。土坑で平面形は不整形、東西 83cm、南北 66cm 深さ 14cm を測る。

SU845（Ⅲ-154 図）

K8 グリッドに位置する地下室である。本来の開口部形状は SK968 や SK846 に攪乱され不明である。残存する不整形の開口部から東西に室部が拡がり、坑底は東西 360cm、南北は西室では 180cm、東室では 150cm を測る。室部の東西両端の立ち上がりは緩やかな円弧を描く。なお西室は天井が崩落しているが東室は残存しており、坑底から天井部までの高さは 110cm を測る。坑底は比較的平滑に調整されていたが、壁面には凹凸が認められる。西室の北西壁面には歪なカマボコ形に穿ったような

痕跡も確認される。壁面のローム土（地山）は坑底から10cmほど上から水が付いたものに変質している状況が確認され、素掘りの状態で地下室として機能していたかは疑問である。

覆土は入口付近から凸形に東西両室部へ流れ込む状況が確認され、最下層の覆土には割石や瓦片が多く含まれている。ただしそれ以外の遺物はほぼ皆無であり、陶磁器ではわずかに初期伊万里碗、皿、丹波系播鉢、軟質瓦質丸火鉢などの破片が確認されたのみである。覆土の堆積状況からは、本遺構が埋め戻された後（4～11層）、その上にSK968が構築されるが、本遺構の西室天井部が崩落したことでSK968の坑底が陥没し、SK968の覆土（2、3層）が流れ込んだ状況が確認されている。

SU847（Ⅲ-155 図）

K8～9グリッドに位置する地下室である。平面形は隅丸長方形を呈し、東西190cm、南北132cm、確認面からの深さは最大で64cmを測る。坑底形状も長方形を呈すが、僅かではあるが四方にオーバーハンクしている。壁面は凹凸が顕著であるが、坑底は比較的平滑に整形されている。遺物は陶磁器土器片が少量出土している。

SU882（Ⅲ-156 図）

K7～8グリッドに位置する。北側をSU774によって削平されている。地下室で平面形は長方形、断面形は長方形、東西276cm、南北200cm、深さ100cmを測る。北、東、西壁がオーバーハンクしている。

SU1892（Ⅲ-157、158 図）

H～I・13～14に位置する。遺構の中央は攪乱によって削平されている。階段を伴う地下室で東西806cm、南北210cm、深さ214cmを測る。入り口には平面形が長方形のテラス状の段差があり3基の小穴を確認している。残存する6段分の階段部分の壁はほぼ垂直に立ち上がる。1段目の階段は小穴を伴い、それは1段目の北壁でも確認されている。階段の傾斜は50°。室部の平面形は台形、壁面は垂直に立ち上がる。室の入り口部分から約80cmの範囲には瓦片が敷き詰められているが、中央部のそれは少ない。室部奥部分も入り口部分程ではないが瓦が敷き詰められている。室部の床面として瓦片を敷いたのか。瓦片掘削後の坑底には5基の小穴を確認している。北壁と北東角の小穴、南壁と南東角の小穴の間隔はそれぞれ約130cmである。室の東壁に沿って検出した土坑の平面形は不整形、東西68cm、南北115cm、深さ44cmを測る。a-a'ラインの覆土には天井が崩落したと考えられるロームブロックは確認されていない。

SX3460（Ⅲ-159 図）

E12グリッドに位置する。東西260cm、南北134cmの範囲に10枚の丸瓦が並べられている。北側の土坑の立ち上がりの1枚の丸瓦は、西から4枚目が外れたものと考えられる。

（3）D2面の遺構

SB730（Ⅲ-160 図）

礎石建物基礎遺構で、J～K・2～3グリッドに位置する。扁平川原石を利用しD2面上に直に据えたと考えられ、掘方、根石は認められない。南北列3点の総距離は芯々で365cm、東西列は芯々で220cmを測る。主軸方位はN-3°-Eとやや東に傾いた方位を示す。本遺構の南側には流し状施

設を伴う下水施設、南東部には炉状遺構が存在し、本遺構との関連性が窺われる。また東西列礎石より265cm東側に切石が、南北列最北端礎石の西方からも川原石が検出されており、供伴する可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SB1949・SB1950・SB1951・SB1953・SB1958（Ⅲ-161 図）

建築遺構で、A～B・8～9グリッドに位置する。不整形円形を呈する掘方を有し、SB1949、SB1950には根石と推定される破碎礫が残存している。またSB1951南に位置する破碎礫も本遺構に伴うものと考えられる。東西間隔はSB1949・SB1953間が約180cm、SB1953・SB1958間が約360cmを測り江戸間1間を基準としていることが窺われる。南北間隔は、掘方が比較的小規模なSB1958は芯々120cm間隔で並ぶことから4尺間隔といえよう。よってセクションラインa-a'間は江戸間2間を測り、現況で、東西3間、南北2間の建物を復元することができる。本柱穴列内に位置するSF2029、SF2030などの遺構が帰属する可能性もある。

SB2015（Ⅲ-162 図）

礎石列でB4グリッドに位置する。破碎礫を用いた礎石列で、根石、掘方を伴わないことから、D2面整地時に構築されたと考えられる。礎石間隔は芯々で100cmを測り、京間を基準にした可能性が指摘できる。本遺構に囲まれたSF1948が供伴する可能性がある。

SB2150（Ⅲ-163 図）

礎石列でH～I5グリッドに位置する。扁平円礫を配した礎石列でL字状に残存していることから建築遺構と考えられる。円礫間は芯芯で90cmおよび180cmを測り、江戸間を基準尺度としていたと考えられる。掘方は認められない。主軸方位はN-3.6°-Wを示し、隣接するSK2149、SK2083とほぼ同一軸である。一方、本遺構の北西に位置するSK2250や北方に分布する炉状遺構群はN-1°-Wと約2.5°の開きがあり、本遺構と炉状遺構の関連性は低いと考えられる。また距離はあるが、L8～9グリッドに位置するSD740やLライン付近を東西に伸びるSD803が本遺構とほぼ同一軸を示していることから、SD803による段切りラインに影響されていることが考えられ、段切りラインからの距離もしくは構築年代に起因していると推定される。遺物は出土していない。

SB2161（Ⅲ-164 図）

J6～7グリッドに位置する石列で、東西方向に4基の石が検出された。掘方は確認されなかった。石の間尺は180～190cmで、遺構の主軸はわずかに西へ振る。なお最も東側の石は同主軸にあり、同一遺構と考えた。間尺から考えると、間に2基の石が配置されていた可能性があるが検出されなかった。

本遺構北側に近接してSX2115という瓦片と石列を伴う遺構があるが、遺構の軸や石の間尺が異なることから同一建物とは考えがたいが、何らかの関係性がある可能性もあるか。

SD688（Ⅲ-165 図）

Db面、N7～9グリッドで検出された溝状遺構である。東西ともに攪乱をうけており、遺構の全長は不明。遺構の長軸はN-85°-Wで、残存している長軸長は8.95m、短軸の最大幅は53cmであり、断面形は概ね逆台形である。溝底にピットが検出されるが、間隔、深度は不規則で溝底部のレベルは

東から西へ傾斜している。

SD688の北側にはピットが多数検出されているが、間隔、距離、坑底レベルなどから、確実に溝に伴うかは判明できなかったが、セクション a-a' では柱痕が確認され、覆土にはローム粒子・ブロックが多く含まれることから、人為的な埋め戻しが考えられ、柵列などの性格を有する可能性がある。

SD723（Ⅲ-166 図）

石組遺構で、K～L・2～3グリッドに位置する。西端はSD422に接している。掘方幅は120～130cmを測り、壁面は蛇行している。坑底中央には長さ70～80cm、幅30cmの切石が直線状に4枚敷かれている。切石列の主軸方位はE-18°-Sを指す。切石の両側には破砕礫が敷き詰められていることから、本来ここに測縁石があり、切石は溝の底石であったと考えられる。その東端部に同サイズの切石を3枚形状に設置している。この部分にいたると掘方は不明瞭になるが、石組溝末端に配置されていることから流し状施設の可能性がある。本遺構南側には段切り擁壁としてのSG595があり、北側には礎石建物SB730が位置することから、本遺構は、段切り下段に建設された礎石建物に付随する排水施設と考えられる。17世紀第3四半期に比定される陶磁器類が少量出土している。

SD740（Ⅲ-167 図）

K～L・8～9グリッドに位置する東西方向に伸びる溝状遺構であり、その主軸はほぼ真北方向に直交する。L～N・7～8グリッド付近のみが周囲と異なりC面からD面（ローム）までの間に1ないし2枚の整地面が確認され、それを上からDa面、Db面とした。本遺構は下の整地面であるDb面上で確認された遺構である。従って他のD2面遺構とは性格、年代が異なる可能性もあることから区別している。

確認された規模は長さ606cm、幅は100～122cmで西側ほど広い。確認面からの深さは最大82cmを測り、断面形は箱形に近い逆台形を呈す。覆土はローム粒やブロックを多く含むしまりの強いものである。坑底には大小規模の差はあるが計5基の長方形ピットを確認しており、布堀基礎の可能性が高い。これらのピットは深度も一律ではないが、配置状況を見ると大小2つのピットが1組で配されているようである。浅い方は控え柱の跡か。周囲に対応するような基礎遺構は認められなかったことから、藩邸内の区割りなどに利用された塀跡か。遺物はごく少量で、含まれる陶磁器類は17世紀前半代に位置づけられる。

SD2082（Ⅲ-168 図）

溝状遺構で、C8～12グリッドにかけて東西方向に伸びる。東西長は17m30cm、溝幅は70～90cmを測り、やや蛇行している。特に東端は弓なりに南へ曲がり収束する。南北両壁際に1段テラスを有し、溝底は1段低くなる。また溝底表面は鉄分により、著しく硬化している。このような形状から側縁石を有する石組溝の可能性が考えられる。また東端などに杭痕が認められ、一部に板枿が使用されていた可能性もある。但し、東西端ともに藩邸内で収束していることから流路と考えるのは難しく、地境の可能性も否定できない。遺物は東大編年Ⅱ～Ⅲa期に比定される陶磁器類が出土している。

SD2116（Ⅲ-169 図）

H8グリッドに位置する南北方向に伸びる溝状遺構で、主軸方位はほぼ真北にある。規模は長さ

297cm、幅 31cm、確認面からの深さは最大 12cm を測る。断面形は「U」字形を呈す。溝底は凹凸が著しい。本遺構は南側で端部を確認しているが、その約 20cm 南側、延長線上に同様の溝状遺構が確認されている。南側のそれはわずかしか残存していなかったため、SD2116 と一連の遺構と考えてよいか判然としないが、規模、断面形などは本遺構と似る。遺物は陶磁器土器細片が少量出土している。

SD2527 (Ⅲ-170 図)

C8 グリッドに位置する溝状遺構である。南端は調査できなかったが、規模は長さ 180cm、幅 22～40cm、確認面からの深さは 8cm を測る。断面形は浅い皿形を呈す。規模や形状を考慮すると雨落ち溝のようなものか。遺物はごく少量の陶磁器類が出土している。

SD2720 (Ⅲ-171 図)

溝状遺構で、F8 グリッドに位置する。東西方向に伸び、全長は 550cm、溝幅は 30～60cm と西へ向かい広がる。断面形は碗形を呈し、確認面からの深さは 15cm を測る。性格は不明。遺物は陶磁器類がわずかに出土したにすぎない。

SE729 (Ⅲ-172 図)

井戸で、K6 グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、直径約 100cm を測る。東西方向の壁面から足掛け孔が確認された。各足掛け孔は半月形を呈し、両側ともほぼ同レベルで約 40cm 間隔で構築されている。半截途中で覆土が崩落したため、様相は不明である。東大編年Ⅲ a 期に比定される陶磁器類が少量出土している。

SE1936 (Ⅲ-173 図)

F12～13 グリッドに位置する。井戸で平面形は楕円形、東西 152cm、南北 143cm、深さ 234cm まで掘削した。1～12 層は井戸側内の埋め戻し土で、13 層は井戸枠を固定するために充填した土である。井戸枠は確認できなかった。

SE2241 (Ⅲ-174 図)

井戸で、D～E4 グリッドに位置する。不整形の掘方を有す井戸で、掘方規模は、東西 190cm、南北 300cm、確認面からの深さ 85cm を測る。井戸本体は掘方北寄りに位置し、直径 140cm を測る。確認面から約 330cm 下で直径 80cm を測る井戸側が検出された。また掘方南北両壁際より上屋施設に伴うピットが検出された。ピット間は芯々で 255cm を測る。

遺物は 17 世紀中葉に比定される陶磁器類が出土しており、同遺構面検出の SK2477 および D1 面に帰属する SR1855・SR1857 と遺構間接合する。後者との接合から本遺構は D1 面構築時に廃絶された可能性が高い。

SE2295 (Ⅲ-175 図)

C～D6 グリッドに位置する井戸である。掘方の平面形は不整形を呈し、長軸（南北）252cm、短軸（東西）240cm を測る。また確認面より井戸側跡が認められており、その直径は 97cm を測る。調査は安全上の理由から確認面下 150cm にて中止した。井戸側壁面には幅約 5cm のタガの跡と思われる筋状の窪みが 3 段確認される。掘方の内側に 2 基の方形ピットが検出されているが、東側のそれに

は柱痕（7層）と判断され、確認面からの深さが83cmと深いものであった。上屋構造に伴うものか。覆土は井戸側内、掘方ともにローム粒やロームブロックをやや多く含む黄褐色土主体で埋め戻されているが、掘方部分の覆土中には径1cm大の礫がやや多く認められた（5、6層）。

遺物は遺物収納箱で3箱分ほど出土し、掘方から出土した陶磁器類は東大編年Ⅲ a 期に位置づけられる。

SE2572（Ⅲ-176 図）

井戸で、D～E6グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、210×195cmを測る。覆土はほぼ水平堆積を呈し、井戸側は認められなかった。本遺構は炉状遺構が南北に整列する5ライン、7ラインのほぼ中間に位置し、それらが帰属する建築遺構に関連する井戸と考えられる。17世紀中葉の陶磁器類が少量出土している。

SF721（Ⅲ-177 図）

炉状遺構でJ～K・2～3グリッドに位置する。平面形は不整長方形を呈し、東西86cm、南北42cmを測る。坑底は西に向かって傾斜しており、確認面からの深さは最大15cmを測る。覆土中位には灰が赤化したと考えられる赤褐色土が堆積し、その上層には焼土粒を含む灰層が堆積している。1層と4層がブロック状に堆積しているなどの状況から、本遺構内で発生、堆積した可能性は低い。

陶磁器類がわずかに出土している。

SF722（Ⅲ-178 図）

炉状遺構でK2グリッドに位置する。平面形は不整長方形を呈し、東西98cm、南北54cmを測る。坑底は東側に1段テラスを有し、西側で落ち込む。確認面からの最大深度は20cmを測る。西側の落ち込み部分には赤化した灰層が堆積し（3層）、その上に灰層が堆積している（1、2層）。1層と2層は色調以外は同質で、被熱の程度による色調差と考えられる。また3層直下では被熱によって表面の硬化も認められる。遺構形態や焼土層の偏りから、カマドなどの炉床と考えられる。

遺物は出土していない。

SF725（Ⅲ-179 図）

炉状遺構でJ3グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し、東西54cm、南北36cm、確認面からの深さ10cmを測る。断面形は皿状を呈す。覆土は最下層に灰が赤化した赤褐色土が堆積し、その上に焼土粒を含み暗灰褐色を呈する灰層が薄く堆積している。その様相から炉床の可能性が考えられる。

遺物は出土していない。

SF726（Ⅲ-180 図）

炉状遺構でJ～K3グリッドに位置し、SF725の南側に隣接する。平面形は不整隅丸三角形を呈し、南北50cm、東西48cm、確認面からの深さ8cmを測る。覆土は中央に焼土粒を多量に含む暗赤褐色土が堆積し、周囲には暗灰褐色を呈する灰層が薄く堆積している。その様相から炉床の可能性はある。

遺物は出土していない。

SF1894 (Ⅲ-181 図)

G12～13グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は皿状、東西82cm、南北61cm、深さ15cmを測る。覆土には灰を多く含み、その堆積状況から炉状遺構と考えられる。

SF1912、SF1913 (Ⅲ-182 図)

SF1912、SF1913はH12～13グリッドに位置する。西側はSK3の削平を受けている。2遺構は重複し、SF1912が新である。ともに覆土に焼土を多く含むことから炉状遺構と考えられる。SF1912の平面形は長方形、断面形は台形、東西の残存部124cm、南北63cm、深さ16cmを測る。SF1913は南側は攪乱による削平を受ける。平面形は不整形、断面形は台形、東西の残存部120cm、南北の残存部112cm、深さ6cmを測る。

SF1914 (Ⅲ-183 図)

H13グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形、東西65cm、南北76cm、深さ28cmを測る。2、3層には灰を含み、炉状遺構と考えられる。

SF1917 (Ⅲ-184 図)

C12グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形、東西87cm、南北53cm、深さ12cmを測る。4層には多くの灰と焼土を含み、炉状遺構と考えられる。

SF1918 (Ⅲ-185 図)

C12～13グリッドに位置する。SF1919と重複し、本遺構が新である。粘土枠(5層)を有する。掘方の平面形は長方形、断面形は台形、東西92cm、南北111cm、深さ16cmを測る。粘土枠内側の平面形は長方形、断面形は台形、東西68cm、南北70cm、深さ14cmを測る。1～4層はほぼ水平に堆積しており、2～5層の覆土は灰を含む。坑底中央が火熱を受けている。

SF1919 (Ⅲ-186 図)

C13グリッドに位置する。南西角でSF1918と重複し、本遺構が旧である。粘土枠(3層)を有する。掘方の平面形は長方形、断面形は台形、東西75cm、南北88cm、深さ12cmを測る。粘土枠内側の平面形は長方形、断面形は台形、東西64cm、南北の残存部42cm、深さ14cmを測る。1・2層は水平に堆積している。覆土に灰はみられない。

SF1942 (Ⅲ-187 図)

炉状遺構でA4グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、直径28cm、確認面からの深さ5cmを測る。壁は緩やかに開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈す。覆土は2層に分層され、上層に炭化物粒、焼土粒を含む灰層、下層に焼土層が堆積する。覆土の堆積状況から火地炉もしくはカマド跡と推定される。またこうした炉状遺構はA～B・4～5グリッド周辺に多く認められ、このエリアに建物が存在したことを示している。遺物は出土していない。

SF1945 (Ⅲ-188 図)

炉状遺構でB5グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、短軸43cm、長軸58cm、確認面から

の深さ8cmを測る。覆土は2層に分かれ、上層にはやや赤味を帯びた灰層が、下層には焼土粒を含む暗褐色土が堆積している。火地炉またはカマド跡の可能性はある。遺物は少量出土しているが、年代は不明である。

SF1946（Ⅲ-189 図）

炉状遺構でB5グリッドに位置する。平面形は方形を呈し、1辺80cm、確認面からの深さ16cmを測る。遺構確認時では押さえられなかったが、覆土の観察から本遺構壁際には暗褐色土を用いた粘土枠が存在したことが確認された。覆土は2層に分かれ、下層には灰が堆積している。また坑底表面は赤化し被熱したことが確認された。これらの様相から、本遺構は火地炉と考えられる。覆土中より17世紀代に比定される陶磁器類が少量出土した。

SF1947（Ⅲ-190 図）

炉状遺構でB5グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西73cm、南北100cm、確認面からの深さ8cmを測る。覆土は3層に分かれるが2層とした灰層が主体を占める。また2層中央部は被熱によって赤化している。この様相から本遺構は火地炉と考えられる。遺物は17世紀代に比定される陶磁器類が少量出土している。

SF1948（Ⅲ-191 図）

炉状遺構でB4グリッドに位置する。平面形は不整長方形を呈し、東西95cm、南北128cm、確認面からの深さ12cmを測る。覆土は3層に分かれ、1、2層が堆積する遺構北寄りに灰層が存在する。火地炉もしくはカマド跡と考えられる。遺物は少量出土しているが、年代を特定するには至らなかった。

SF1959（Ⅲ-192 図）

炉状遺構でA～B5グリッドに位置する。SF1960と重複し、それより新しい。平面形は長方形を呈し、東西62cm、南北80cm、確認面からの深さ10cmを測る。坑底直上に炭化物粒、焼土粒を含むやや赤味を帯びた灰層が堆積する。その様相から火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF1960（Ⅲ-192 図）

炉状遺構でB5～6グリッドに位置する。1層としたD2層にパックされている。平面形は不整長方形を呈し、東西110cm、南北73cm、確認面からの深さ最大12cmを測る。北寄りに灰層が堆積する（4層）。その様相から火地炉もしくはカマド跡と考えられる。17世紀中葉に比定される陶磁器類が少量出土している。

SF1980（Ⅲ-193 図）

D13グリッドに位置する。平面形は楕円形で断面形は三角形、東西44cm、南北42cm、深さ13cmを測る。2層は炭化物、灰、焼土を含む。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。

SF1981（Ⅲ-194 図）

D13グリッドに位置する。東側は攪乱により削平されている。平面形は長方形、断面形は台形、東

西の残存部分 28cm、南北の残存部分 30cm、深さ 4cm を測る。覆土の堆積状況から炉状遺構と考えられる。

SF1982 (Ⅲ-195 図)

E13 グリッドに位置する。東側は攪乱により削平されている。平面形は楕円形、断面形は長方形、東西残存部分で 20cm、南北 30cm、深さ 23cm を測る。4 層は焼土を多く含み、しまりが強い。炉状遺構と考えられる。

SF1983 (Ⅲ-196 図)

E13 グリッドに位置する。周辺の遺構検出状況や、本遺構坑底が火熱により赤化していることから、炉状遺構の可能性が高い。南東角は攪乱により削平されている。平面形は長方形、断面形は台形、東西 72cm、南北 69cm、深さ 10cm を測る。

SF1991 (Ⅲ-197 図)

I3 グリッドに位置する。粘土枠を有する炉状遺構である。SF1992 と重複しており、新旧は SF1992 より新である。掘方の平面形は長方形を呈し、規模は東西 107cm、南北 74cm、確認面からの深さは 13cm を測る。壁は坑底から緩やかな「ハ」の字に開いて立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。枠と同じ粘土層 (4 層) は坑底まで貼られ、粘土枠内側の 4 層上面には浅い円形の窪みが確認される。この窪みの周囲はわずかに火熱による硬化が認められる。

粘土枠を半截したところ、西側部分に丸瓦片と塩壺が南北に並んだ状況で確認された (DVD-ROM 収録データ参照)。炉の内側に近接する箇所であり、枠の補強として粘土枠構築時に入れられたものか。遺物は出土しなかった。

SF1992 (Ⅲ-198 図)

I3 グリッドに位置する炉状遺構である。SF1991 の粘土枠の下から検出された。残存している平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸 46cm、短軸 44cm、確認面からの深さは 8cm を測り、断面形は浅い皿形を呈す。覆土には、白色灰層が集中的に堆積する部分 (3 層) があり、坑底には火熱により赤色硬化した部分が認められる。遺物は出土しなかった。

SF1993 (Ⅲ-199 図)

I3 グリッドに位置する炉状遺構である。平面形はやや歪な長方形を呈し、規模は東西 50cm、南北 68cm、確認面からの深さは 12cm を測る。壁や坑底の凹凸は比較的顕著で、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は 3 層からなるが、灰層や炭化物などが多く認められるのは 1 層のみで、それ以下の層では灰層は認められず、ローム粒などをやや多く含むしまりの強い堆積土となっている。遺物は出土しなかった。

SF1994 (Ⅲ-200 図)

I2～3 グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、規模は長軸 78cm、短軸 48cm、確認面からの深さは 9cm を測り、壁、坑底ともに凹凸が著しい。調査時に遺構中央付近に白色灰層が集中する箇所が確認され、その周囲は炭化物をやや多く含む灰色土が取り囲む。完掘したところ白色灰層が集

中していたあたりに、火熱により赤色硬化した部分が確認される。遺物は陶磁器細片のみが出土している。

SF1995（Ⅲ-201 図）

I3 グリッドに位置する。平面形は歪な円形を呈し、規模は長軸 16cm、短軸 14cm、確認面からの深さは 5cm を測り、断面形は浅い皿形を呈す。ピット状の遺構であるが、通常の遺構より覆土に焼土や炭化物が多く、また白色灰層を含むことから炉状遺構と判断した。

SF2018（Ⅲ-202 図）

炉状遺構で B10 グリッドに位置する。北側を SD1103 に切られている。平面形は方形を呈すると考えられ、残存する東西長は 40cm、確認面からの深さ 13cm を測る。覆土は灰層が充填され、上層がより赤味を帯びている。ただし坑底には被熱痕は認められなかった。その様相から火地炉と考えられる。遺物はわずかに出土したにすぎない。

SF2020（Ⅲ-203 図）

炉状遺構で B10 グリッドに位置する。平面形は隅丸方形を呈し、1 辺 32cm、確認面からの深さ 7cm を測る。壁は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状を呈す。覆土は坑底直上にやや赤味を帯びた灰層が堆積する。その様相から火地炉もしくはカマド跡と考えられる。遺物は出土していない。

SF2021（Ⅲ-204 図）

炉状遺構で B10 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西 55cm、南北 100cm、確認面からの深さ 10cm を測る。坑底中央に楕円形の浅い落ち込みが認められる。覆土には灰が充填され、特に坑底内小土坑表層に赤化した灰層が認められる。その様相から火地炉と考えられる。遺物は 17 世紀代に比定される陶磁器類が少量出土している。

SF2023（Ⅲ-205 図）

炉状遺構で B11 グリッドに位置する。南西角を攪乱によって削平されている以外は比較的良好に残存している。平面形は長方形を呈し、東西 70cm、南北 56cm、確認面からの深さ 7cm を測る。覆土は灰が充填され、西寄りの 2 層には焼土粒が多量に含まれる。その様相から火地炉と考えられる。遺物は小片がわずかに出土したにすぎない。

SF2026（Ⅲ-206 図）

炉状遺構で A6 グリッドに位置する。西側約半分が削平され、遺存状態は良好ではない。平面形は長方形を呈すると考えられ、残存する南北長は 96cm、確認面からの深さ 8cm を測る。覆土には炭化物粒を多量に含む灰層が充填されている。その様相から火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2027（Ⅲ-207 図）

炉状遺構で B6～7 グリッドに位置する。西側半分が削平され、遺存状態は良好ではない。平面形は長方形を呈すると考えられ、東西 85cm、南北 66cm、確認面からの深さ 12cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、しっかりとした造りの掘方である。覆土はほぼ灰層で充填され、坑底中央には被熱

痕が認められる。その様相から火地炉と考えられる。遺物は小片が少量出土したにすぎない。

SF2029 (Ⅲ-208 図)

炉状遺構で A～B9 グリッドに位置する。南側で SF2030 と重複し、それより新しい。平面形は長方形を呈し、東西 68cm、南北 95cm、確認面からの深さ 14cm を測る。坑底、壁面にはローム粒およびロームブロック主体の暗褐色土が貼られているが、しまりはやや弱い。覆土は D1 層が入り込んだ 1 層を除き、灰が充填されている。その様相から火地炉と考えられる。遺物は小片が少量出土したにすぎない。

SF2030 (Ⅲ-208 図)

炉状遺構で B9 グリッドに位置する。北側で重複する SF2029 に切られ、遺存状態は良好ではない。平面形は不整長方形を呈し、残存する東西長は 75cm、確認面からの深さ 12cm を測る。坑底南側には浅い落ち込みが認められ、坑底は被熱し赤化している。覆土は灰で充填されている。その様相から火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2072 (Ⅲ-209 図)

炉状遺構で B8 グリッドに位置する。南側を SK2071 に、西側を攪乱に削平され、遺存状態は悪い。平面形は方形を呈すると考えられるが、詳細は不明である。覆土には灰が充填されている (1 層)。壁際にはローム粒を含む褐色土 (2 層) が堆積しているが、1 層との境界がかなり急斜度を呈していることから土枠の可能性もある。こうした様相から火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2073 (Ⅲ-210 図)

炉状遺構で B9 グリッドに位置する。東側に重複する SF2029、SF2030 に削平されている。平面形は長方形を呈すると考えられるが、詳細は不明である。確認面からの深さは 18cm を測る。坑底中央付近に浅い落ち込みが認められ、焼土粒を多量に含む灰層で充填されている (2 層)。その様相から火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2084 (Ⅲ-211 図)

炉状遺構で F5 グリッドに位置する。重複する SF2089 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 84cm、南北 98cm、確認面からの深さ 12cm を測る。坑底はほぼ平坦に整形され、中央部に直径 26cm、深さ 6cm を測る円形の落ち込みが存在する。この落ち込み内には被熱して橙褐色に変色した灰が堆積し (5 層)、その直上すなわち坑底一面に焼土粒を含む灰層が堆積している (4 層)。さらに暗褐色土の間層 (3 層) を挟み、再び被熱した灰が 5 層と同規模・同位置に堆積し (2 層)、その直上にも灰層が堆積している (1 層)。このように間層を挟んで火床が上下に 2 箇所認められることから、改修が行われたと推測される。本遺構はその形状から火地炉と考えられる。本遺構を含み C～G5 グリッドにかけて 5 ラインから東へ 2～3 m の範囲に火地炉と考えられる炉状遺構が南北に分布しており、南北方向の長屋建物の存在が想定される。遺物は 17 世紀代の陶磁器類が少量出土している。

SF2085 (Ⅲ-212 図)

炉状遺構で F5 グリッドに位置する。SK2352 埋没後に構築されている。平面形は長方形を呈し、

東西 100cm、南北 76cm、確認面からの深さ 12cm を測る。坑底中央やや南寄りに直径約 20cm、深さ 3cm を測る不整円形の落ち込みが認められ、被熱して橙褐色に変色した灰層が堆積している。さらに遺構内は焼土粒を含む灰層で充填されている。この様相から火地炉と考えられる。C～G5グリッドにかけて南北方向に整列する周囲の炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は陶磁器類が少量出土しているにすぎない。

SF2089（Ⅲ-211 図）

炉状遺構で F5 グリッドに位置する。重複する SF2084 より古い。平面形は長方形を呈し、東西 54cm、南北 77cm、確認面からの深さ 7cm を測る。坑底には 1 辺 33cm を測る方形の落ち込みが存在し、被熱して橙褐色に変色した灰が堆積している。その上に灰が充填されている。この様相から火地炉と考えられる。C～G5グリッドにかけて南北方向に整列する周囲の炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2113（Ⅲ-213 図）

H～I8グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、規模は長軸（南北）80cm、短軸（東西）38cm、確認面からの深さは 14cm を測る。壁は坑底から開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は上層に焼土、中層はローム粒やロームブロックを多く含む黄褐色土に白色の灰層が筋状に認められ、下層は中層と同じくローム粒やロームブロックを多く含む黄褐色土が確認される。覆土の状況から炉状遺構と判断されるが、灰層が筋状に確認される理由は不明である。灰をならしながらある程度の期間使用し、最終的な使用面が検出された可能性もある。

遺物は陶磁器類が少量出土しており、それらは 17 世紀代に位置づけられる。なお 1 点ではあるが、本遺構東側に位置する SU1885 と遺構間接合するものが確認されている。

SF2114（Ⅲ-214 図）

I8グリッドに位置する。西側は攪乱され、残存する平面形は半楕円形を呈し、規模は東西 60cm、南北 88cm、深さ 31cm を測る。壁は坑底から開きながら立ち上がり、断面形は浅い「U」字状を呈す。坑底は凹凸が顕著である。覆土上層はローム粒やロームブロックを多く含む黄褐色土、下層は灰層を含む灰白色が確認される。覆土の状況から廃絶された炉状遺構と判断したが、坑底には火床部と考えられるものは確認されなかった。遺物は陶磁器類の細片が少量出土している。

SF2118（Ⅲ-216 図）

I6～7グリッドに位置する、黄灰色粘土枠を有する炉状遺構である。検出時の平面形は長方形を呈し、残存している掘方の規模は東西 111cm、南北 286cm、確認面からの深さは 12～23cm を測る。壁、坑底ともに凹凸がやや顕著である。覆土の堆積状況から同場所で少なくとも 7 基の炉状遺構の構築と廃絶が繰り返されたことが判明した（a～g）。ただし覆土の切り合い関係から 7 基同時に稼働したのではなく、稼働期間は以下のような 4 つの段階が想定された。すなわち、① f と d、② e と g または c と g、③ b と g または b のみ、④ a と g または a のみというような状況が想定され、少なくとも 1 ないし 2 基の炉状遺構が稼働していた様子が窺われる。なお②の段階と④の段階では炉状遺構の周囲ないし坑底に粘土枠（3、8 層）を構築し、それまで使用していた炉状遺構を一部覆う状況が確認される。覆土はいずれも白色の灰層や炭化物、焼土粒などを多く含み、b、c、f、g では火熱し赤色硬化した

火床部（4、7、11、14層）も検出されている。

遺物は陶磁器類が a、c、e、粘土枠から出土しているが、いずれも細片のみであり、出土遺物から各炉状遺構の時期差などを確認するには至らなかった。

SF2141（Ⅲ-215 図）

炉状遺構で E～F5 グリッドに位置する。SK2352 の埋没後に構築されている。平面形は隅丸台形を呈し、東西 140cm、南北最大 96cm、確認面からの深さ 20cm を測る。坑底中央やや西寄りに被熱痕が認められる。覆土はほぼ灰で充填されている。この様相から火地炉と考えられる。本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は陶磁器類が少量出土しているにすぎない。

SF2142（Ⅲ-217 図）

炉状遺構で E5 グリッドに位置する。重複する SP2361 より新しい。北壁は攪乱によって削平されている。平面形は長方形を呈し、東西 114cm、南北 70cm、確認面からの深さ 13cm を測る。坑底には被熱痕が 2 箇所認められる。覆土はほぼ全体灰で充填されている。2、5 層間には炭化物が集中している。この様相から火地炉と考えられる。本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は陶磁器類が少量出土しているにすぎない。

SF2143（Ⅲ-218 図）

炉状遺構で D5 グリッドに位置する。重複する SF2147 より新しく、SF2147 の作り替えと考えられる。平面形は方形を呈し、1 辺 75cm、確認面からの深さ 13cm を測る。坑底やや西寄りに被熱痕が認められる。覆土はほぼ灰で充填されており、坑底直上には被熱して橙褐色に変色した灰が堆積している。この様相から火地炉と考えられる。本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は陶磁器類が少量出土しているにすぎない。

SF2144（Ⅲ-219 図）

炉状遺構で E5 グリッドに位置し、SF2141 と隣接する。平面形は不整長方形を呈し、東西 90cm、南北 60cm、確認面からの深さ 7cm を測る。坑底ほぼ中央に被熱痕が認められる。覆土は灰で充填され、坑底直上の 2 層は被熱してやや赤味を帯びている。この様相から火地炉と考えられる。本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する周囲の炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は陶磁器類が少量出土しているにすぎない。

SF2147（Ⅲ-220 図）

炉状遺構で D5 グリッドに位置する。重複する SF2143 より古い。平面形は不整形を呈し、東西 92cm、南北 92cm、確認面からの深さ 10cm を測る。その平面形状から 2 基重複している可能性が高い。坑底ほぼ中央に被熱痕が認められる。覆土はほぼ灰が充填され、坑底直上には焼土粒が多量に含まれる。この様相から火地炉と考えられる。本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2151（Ⅲ-221 図）

炉状遺構で C5 グリッドに位置する。重複する SF2157 より新しい。平面形は方形を呈し、壁面に粘土枠を有する。枠内の規模は 1 辺約 60cm、確認面からの深さ 22cm を測る。覆土最上層には D1 層が入り込み、以下坑底までは灰が充填されている。また坑底直上には被熱して橙褐色に変色した灰層が堆積する。粘土枠にはローム粒を含む黄灰褐色土が用いられている。掘方規模は東西 85cm、南北 68cm を測る。本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2155（Ⅲ-222 図）

炉状遺構で B10 グリッドに位置する。SF2020 と隣接する。西側約半分および上部が削平され、坑底中央部の焼土痕のみ検出された。A、B グリッドには炉状遺構が東西方向に分布しており、D1 面同様藩邸北端に東西方向の建物の存在が想定される。本遺構はその一角に帰属すると考えられる。遺物は出土していない。

SF2157（Ⅲ-223 図）

炉状遺構で C5 グリッドに位置する。重複する SF2151 より古く、SF2151 検出面にパックされている。平面形は不整長方形を呈し、東西 125cm、南北 82cm、確認面からの深さ 6cm を測る。坑底西寄りに楕円形状の浅い落ち込みがあり、被熱して橙褐色に変色した灰が堆積している。また覆土は全て灰層である。この様相から火地炉と考えられる。本遺構廃絶後に灰層をパックする整地作業が行われ、新たに SF2151 が構築されていることから、これら 2 基の遺構は同一室内に存在したと考えられる。また本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。17 世紀中葉に比定される陶磁器類がわずかに出土している。

SF2158（Ⅲ-224 図）

炉状遺構で G5 グリッドに位置する。SK2567、SK2568 埋没後に構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、東西 78cm、南北 103cm、確認面からの深さ 12cm を測る。坑底中央に不整円形状の浅い落ち込みが認められるが、顕著な被熱痕は確認されなかった。覆土には灰が充填されている。本遺構を含め C～G5 グリッドにかけて南北方向に整列する炉状遺構分布より、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF2176（Ⅲ-225 図）

D～E・8～9 グリッドに位置する。少なくとも 2 つの使用段階（SF2176 と SF2176 内側とした）が想定される炉状遺構である。最初の段階のもの（SF2176）は、平面形は歪な長方形を呈し、残存規模は東西 102cm、南北 84cm、確認面からの深さは 28cm を測る。壁は坑底よりやや開きながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。覆土中程に灰層が確認される（8 層）が、火床部などは検出されず、上層はしまりの強い黄褐色土で埋め戻され（6、7 層）、廃絶した状況が確認される。次の段階は廃絶していた SF2176 を再掘削し、その掘方に粘土やローム（4、5 層）で枠を構築し、炉状遺構として再使用したもの（SF2176 内側）で、火熱し赤色硬化した火床部と考えられる部分も確認された。規模は最初のものより二回りほど小さく、また確認面からの深さも 13cm と浅いものである。壁は坑底か

ら緩やかに立ち上がり、断面形は浅い「U」字形を呈す。遺物は陶磁器類が少量出土しているのみで、2つの使用段階の時期差はうかがえない。

SF2177 (Ⅲ-225 図)

E8～9グリッドに位置する。平面形は東西に長い五角形を呈し、規模は長軸(東西)106cm、短軸(南北)74cm、確認面からの深さは23cmを測る。坑底付近が方形に一段窪み、西側立ち上がりがテラス状を呈す。火床部は検出されなかったが、覆土中に灰層が繰り返し堆積する状況が確認されている(3～6層)。炉状遺構として長期にわたり使用されるなかで、灰の堆積と掻き出しが繰り返し行われたことを示すものか。なお坑底には炭化物が集中する状況が認められたが、何に起因するかは不明である。遺物は陶磁器類が少量出土している。

SF2179 (Ⅲ-226 図)

E9グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は不整形で、規模は長軸72cm、短軸47cm、確認面からの深さは9cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土中には白色灰を主体とする層(2層)の直下に焼土層(3層)が確認され、その周囲は火熱し赤色硬化した状況が観察される。遺物はかわらけ細片のみである。

SF2181 (Ⅲ-227 図)

炉状遺構でD5グリッドに位置する。東側が攪乱によって削平されている。平面形は不整長方形を呈し、南北176cm、東西最大80cm、確認面からの深さ14cmを測る。坑底には被熱痕が3箇所認められ、その直上には灰層が堆積している。また上層には暗～茶褐色土が堆積しており、遺構廃絶後に表面を整地された結果と考えられ、作り替えが行われていたことが推測される。本遺構を含め炉状遺構がC～G5グリッドにかけて南北方向に分布していることより、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2182・SF2183・SF2186 (Ⅲ-228 図)

炉状遺構でF6～7グリッドに位置する。3基の重複で、SF2186→SF2182→SF2183の順で作り替えられている。平面形はいずれも方形を呈する。規模はSF2183が東西78cm、南北92cm、確認面からの深さ14cm、SF2182が東西95cm、南北82cm、確認面からの深さ13cm、SF2186が東西(残存部)68cm、南北86cm、確認面からの深さ14cmを測り、ほぼ同規模である。またいずれも坑底には浅い落ち込みが認められ、被熱して橙褐色に変色した灰が堆積している。SF2182、SF2186上は茶褐色土で再整地されている。またSF2183の覆土には暗褐色土が堆積していることから、灰が取り除かれた可能性が考えられる。本遺構を含めD～I7グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることから、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF2184・SF2185・SF2189 (Ⅲ-229 図)

炉状遺構でF～G7グリッドに位置する。SF2189→SF2185→SF2184の順で作り替えられている。SF2189は上部が削平され、火床部がわずかに残存しているのみである。坑底には被熱痕が2箇所認められる。SF2184の平面形は不整方形を呈し、規模は東西68cm、南北(残存部)70cm、確認面か

らの深さ10cmを測る。覆土は全て灰層で、坑底には被熱痕が認められる。SF2185の平面形は方形を呈し、1辺63cm、確認面からの深さ12cmを測る。坑底中央に被熱痕が認められ、その直上の灰は被熱によって橙褐色に変色している。その周囲には暗褐色土が堆積し、その直上に灰層が堆積していることから、粗掘りをした後、坑底を整形した可能性がある。これらの遺構は隣接して作り直されていることから、1戸の居住区内での作り替えと考えられる。本遺構を含めD～I7グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることから、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物はSF2185から陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF2196（Ⅲ-230 図）

炉状遺構でG8～9グリッドに位置する。南側を攪乱で削平されている。平面形は長方形を呈し、東西84cm、南北（残存部）56cm、確認面からの深さ6cmを測る。上部は削平された可能性が高い。坑底西寄りに被熱痕が認められる。覆土には部分的にしか灰層が認められず、廃絶後に掻き出された可能性がある。本遺構を含めC～I・8～9グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることより、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物はわずかに出土したにすぎない。

SF2197（Ⅲ-231 図）

炉状遺構でG8～9グリッドに位置する。上部は大きく削平されて坑底付近のみ残存していた。平面形は長方形を呈し、東西90cm、南北70cm、確認面からの深さ2cmを測る。坑底中央には被熱痕が認められる。覆土は灰が充填されている。隣接するSF2198とは同一住戸に伴う施設と考えられる。遺物は出土していない。本遺構を含めC～I・8～9グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることより、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。

SF2198（Ⅲ-231 図）

炉状遺構でG9グリッドに位置する。上部は大きく削平されている。平面形は長方形を呈し、東西68cm、南北88cm、確認面からの深さ7cmを測る。坑底中央やや北寄りに被熱痕が認められる。覆土は灰で充填されている。隣接するSF2197とは同一住戸に伴う施設と考えられる。遺物は出土していない。本遺構を含めC～I・8～9グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることより、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。

SF2224（Ⅲ-232 図）

E～F9グリッドに位置する炉状遺構である。北側が攪乱されている。平面形は円形ないし隅丸方形を呈し、規模は東西84cm、南北78cm、確認面からの深さは12cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は白色灰層（1層）と焼土を主体とする層（2層）が確認されるが、2層は坑底中央付近のピット状の窪み内で検出される。遺物は陶磁器類が少量出土している。

SF2232（Ⅲ-233 図）

D7グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は方形を呈し、規模は東西60cm、南北53cm、確認面からの深さは14cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は皿形を呈す。覆土は黒色灰層が主体であるが、火床部などは検出されなかった。遺物は少量出土しており、陶磁器類は

17世紀前半代に位置づけられる。

SF2233 (Ⅲ-234 図)

E6～7グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は南西隅を欠いた長方形を呈し、残存している規模は東西106cm、南北47～70cm、確認面からの深さは13cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は皿形を呈す。坑底は凹凸が比較的顕著であるが、うち一箇所は他より深く円形に窪む。覆土は焼土や白色灰層をやや多く含む暗灰褐色土中に、黒色の灰層が筋状に確認される。火床部などは確認されなかった。遺物は少量出土しており、陶磁器類は17世紀代に位置づけられる。

SF2234 (Ⅲ-235 図)

E6～7グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は方形を呈し、規模は東西67cm、南北54cm、確認面からの深さは6cmを測る。壁は坑底よりやや開き気味に立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。覆土は灰層が主体であるが、上層は白灰、下層は黒灰が主体であり、上層の白灰は火熱により全体に赤色化している。遺物は陶磁器類が少量出土している。

SF2238 (Ⅲ-236 図)

E8グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は方形を呈し、規模は東西66cm、南北41cm、確認面からの深さは8cmを測る。壁は坑底よりやや開きながら立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。覆土上層は焼土粒や焼土ブロックをやや多く含む白色の灰層が主体で、坑底中央には焼土が局所的に集中する状況が確認された。火床部か。遺物は陶磁器類が少量出土している。

SF2281 (Ⅲ-237 図)

E7グリッドに位置する炉状遺構である。平面形はきれいな長方形を呈し、規模は東西56cm、南北42cm、確認面からの深さは11cmを測る。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。覆土は白色の灰層が主体であり、坑底付近のそれは全体的に火熱し、赤味を帯びている。遺物は基石状石製品が5枚出土している。

SF2283・SF2285 (Ⅲ-238 図)

D10グリッドに位置する炉状遺構である。重複関係があり、SF2283が新である。SF2283は平面形は不整円形を呈し、規模は直径37cm、確認面からの深さは6cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。SF2285は平面形は方形を呈し、残存している規模は東西20cm、南北33cm、確認面からの深さは4cmを測る。ともに覆土は白色の灰層が主体であるが、SF2283のそれは火熱し、全体的に赤色化している。遺物は両遺構ともに出土しなかった。

SF2296 (Ⅲ-239 図)

E～F・6～7グリッドに位置する炉状遺構である。南側をSF2296-1、北側をSF2296-2としたが、新旧は確認できなかった。

SF2296-1は平面形は逆台形を呈し、規模は東西46～64cm、南北46cm、確認面からの深さは9cmを測る。SF2296-2は平面形は歪な方形を呈し、長軸70cm、短軸50cm、確認面からの深さは8cmを測る。ともに壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。坑底は凹凸が

顕著であるが、SF2296-1の坑底北西隅にはピット状の窪みが確認された。両遺構ともに覆土中に灰層は認められなかったが、周囲に炉状遺構が集中して検出されていることや、SF2296-1の覆土には焼土主体層が確認されたことなどから炉状遺構と判断した。遺物はかわらけの細片が出土したのみである。

SF2298（Ⅲ-240 図）

F6～7グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は歪な長方形を呈し、規模は東西97cm、南北59cm、確認面からの深さは9cmを測る。壁は坑底より「ハ」の字状に立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。覆土は焼土粒や焼土ブロックをやや多く含む層（1、2層）と灰褐色土（3層）からなるが、3層は堆積状況から掘方補強のため貼り土された覆土の可能性もある。遺物は陶磁器類が少量出土している。

SF2337（Ⅲ-241 図）

E6グリッドに位置する炉状遺構である。東側は上位面で検出された遺構で攪乱されるが、残存する平面形は歪な方形を呈し、規模は東西46cm、南北68cm、確認面からの深さは12cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。坑底中央が全体より一段低く方形に窪む。覆土は焼土粒や焼土ブロックを含む白色土（1層）と焼土主体層（2層）が堆積することから、火を用いる何らかの行為が行われた可能性が高く、また本遺構の周囲に同様の形態、規模の炉状遺構が集中することから、本遺構も数度の作り替えが行われた炉状遺構の1つと判断した。遺物は出土しなかった。

SF2348（Ⅲ-242 図）

F～G9グリッドに位置する炉状遺構である。北側半分のみ調査にとどまる。残存している平面形は方形を呈し、規模は東西46cm、南北20cm、確認面からの深さは10cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。上層は白色灰主体層、下層は焼土主体層が確認されており、覆土の状況から炉状遺構と考えられる。遺物はかわらけ細片が出土しているのみである。

SF2368（Ⅲ-243 図）

炉状遺構でE5グリッドに位置する。SK2352埋没後に構築されている。平面形は直径約50cmを測る円形を呈し、確認面からの深さ4cmを測る。坑底には被熱痕が認められ、覆土は灰が充填されている。本遺構を含めC～G5グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることから、長屋建物に帰属する火地炉と考えられる。遺物は出土していない。

SF2390（Ⅲ-244 図）

D9グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は小さなピットがL字状に連結したような形態を呈し、規模は東西26cm、南北47cm、確認面からの深さは最大8cmを測る。南側部分は非常に浅いものであり、遺構ではなく窪みである可能性が高い。断面形は浅い「U」字形を呈す。覆土は2層からなり、1層は白色灰層、2層の焼土粒や焼土ブロックなどを多く含む層は北側のピットの坑底付近のみで確認される。遺物は出土しなかった。

SF2433 (Ⅲ-245 図)

D8グリッドに位置する炉状遺構である。南側は攪乱されるが、残存している平面形は歪な方形を呈し、規模は東西70cm、南北35cm、確認面からの深さは最大で4cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は焼土粒や焼土ブロックをやや多く含む黒色の灰層が主体である。火床部などは検出されなかった。遺物は陶磁器類が少量出土している。

SF2435 (Ⅲ-246 図)

D9グリッドに位置する炉状遺構である。南西隅は攪乱されるが、残存している掘方平面形は方形を呈し、規模は東西95cm、南北120cm、確認面からの深さは8cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は灰色の灰層を主体とする層(2層)が全体に堆積し、中央付近に焼土粒や焼土ブロックを主体とする層(1層)が浅いピット状に堆積する状況が確認される。この部分が火床部か。南側の掘方のみが溝状を呈し、その部分の覆土には黄色細砂が検出された。D1面で検出された長屋に伴う炉状遺構では粘土やロームを枠にする例が確認されたが、それと同じ役割を果たしたのか。

遺物は出土しなかった。

SF2450 (Ⅲ-245 図)

C～D8グリッドに位置する炉状遺構である。西側は攪乱され、残存している平面形はやや歪な円形を呈し、規模は直径62cm、確認面からの深さは最大7cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土はレンズ状に堆積し、上、下層が灰層主体(1、3層)、中層に焼土層(2層)が主として確認される。中層部分が火床部か。遺物は出土しなかった。

SF2483 (Ⅲ-247 図)

炉状遺構でD7グリッドに位置する。東側を削平され遺存状況は悪い。そのため平面形は円形もしくは不整形円形と推定されるが、規模ともに詳細は不明である。覆土は上層に灰層、下層に焼土層が堆積しているが灰層はそれほど顕著ではない。よってカマド跡もしくはたき火跡の可能性もあるが、本遺構を含めC～I・8～9グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることより、長屋建物に帰属する遺構と判断される。遺物は出土していない。

SF2484 (Ⅲ-248 図)

炉状遺構でD～E7グリッドに位置する。南側を削平されている。重複するSF2233より新しい。平面形は不整形円形を呈すると推定されるが、削平のため規模ともに詳細は不明である。覆土は遺構中央に灰層と焼土層が堆積し、その周囲は焼土粒を多量に含む暗褐色土が堆積している。よってカマド跡の可能性もあるが、本遺構を含めC～I・8～9グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることより、長屋建物に帰属する遺構と判断される。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF2485 (Ⅲ-249 図)

炉状遺構でD～E6グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈するが、南東部が削平されているため、規模ともに詳細は不明である。覆土は坑底直上に焼土粒を含む炭化物層が堆積しているが、灰層、

被熱面は顕著ではない。よってカマド跡もしくはたき火跡の可能性もあるが、本遺構を含めC～I・8～9グリッドにかけて炉状遺構が南北方向に分布していることより、長屋建物に帰属する遺構と判断される。遺物は陶磁器類の小片がごくわずか出土したにすぎない。

SF2523（Ⅲ-250 図）

C8～9グリッドに位置する炉状遺構である。SF2524と重複しており、新旧はSF2524より旧である。残存している平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は東西58cm、南北64cm、確認面からの深さは最大12cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は下層に白色の灰層主体層（4層）が確認されるが、火床部などは検出されず、上層はローム粒やロームブロックが主体のしまりの強い覆土（3層）が堆積している。廃炉にされた炉状遺構か。遺物は出土しなかった。

SF2524（Ⅲ-250 図）

C9グリッドに位置する炉状遺構である。SF2523と重複しており、新旧はSF2523より新である。残存している平面形は歪な方形を呈し、規模は東西64cm、南北74cm、確認面からの深さは最大5cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は黒色の灰層（1層）が主体であるが、坑底のピット状の窪みには焼土を主体とする層（2層）が確認されてる。遺物は陶磁器類が少量出土している。

SF2525（Ⅲ-251 図）

C9グリッドに位置する炉状遺構である。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は東西60cm、南北48cm、確認面からの深さは9cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は焼土粒や焼土ブロックをやや多く含む灰層が主体である。遺物は出土しなかった。

SF2765（Ⅲ-252 図）

D12グリッドに位置する。覆土の状況から炉状遺構と考えられる。平面形は円形、断面形は台形、東西40cm、南北37cm、深さ6cmを測る。SF2766と南北に並ぶ。

SF2766（Ⅲ-253 図）

D12グリッドに位置する。覆土の状況から炉状遺構と考えられる。平面形は長方形、断面形は台形、東西47cm、南北37cm、深さ4cmを測る。

SF2770（Ⅲ-254 図）

C12グリッドに位置する。覆土の状況から炉状遺構と考えられる。平面形は楕円形、断面形は台形、東西42cm、南北54cm、深さ11cmを測る。

SG595（Ⅲ-255 図）

石組遺構でL2～4グリッドにかけて検出された。主軸方位はほぼ東西方向を示し、石面は北側を向く。安山岩を加工した築石が最大2段検出され、築石間には隙間が認められ、随所に栗石が詰められている。いわゆる打込みハギによって構築されている。検出範囲内では約2/3の築石が抜き取られ、

築石の下には扁平破碎礫による根石が敷かれていた。本遺構には掘方は認められず、造成時に盛土に組み込まれる形で構築されたと考えられる。また断面観察などの結果、本遺構の北側には供伴する石組及びその痕跡は認められず、石組北側の盛土がD1層に比定されることより、D2面段階で行われた藩邸内ひな壇造成による法面を保護する施設と考えられる。本遺構北側には築石1段目の下端レベルで硬化面（D2面）が拡がっている。西端はSD422関連の黒多門邸西端と考えられるが、東側に関しては攪乱の影響を受け不明である。本遺構南側250cmの位置にも同様の石組遺構が存在し、南方の上段平坦面を拡張した段階で構築された可能性がある。

SG719（Ⅲ-256図）

石組遺構でL2グリッドに位置する。東西両端ともに攪乱を受け、全長は不明である。安山岩による築石が最大3段検出された。現存最上段の築石は3石残存しており、各石の上端はほぼ直線状に揃っているが、そのラインが西へ傾いており、天端石かどうかは不明である。本遺構北側には対になる石組の痕跡は認められず、SG595同様雛壇状の法面を保護する石積みと考えられる。そして最下段の築石の設置レベルはb-b'ラインで12.7mを測り、SG595の設置レベルとほぼ同一であることから本遺構を区画帯とした上段平坦面を拡張するために北側へ盛土造成を行い、新たな法面保護石積みとしてSG595が構築されたと考えられる。

SK596（Ⅲ-257図）

土坑でJ3グリッドに位置する。東側は攪乱により大きく削平されている。上方に方形のテラス施設を有し、そこから不整形円形を呈する土坑が構築されている。テラス部は1辺140cmを測る。円形部は直径130cmを測る。確認面からの深さは60cmを測る。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が著しい。覆土は1層に焼土粒が多く含まれ、埋没過程で火災が生じた可能性がある。性格は不明。17世紀中葉の陶磁器類が少量出土した。

SK698（Ⅲ-258図）

Db面、M～N・7～8グリッドで検出される。遺構の規模は長軸603cm、最大幅は152cmで、深度は深いところで確認面から40cm程度で、遺構の西側に一段低い部分が存在するが概ね平坦である。北西隅にピットが検出されるが、SK698に伴うものかは不明である。

SK734（Ⅲ-259図）

L～M・8～9グリッドに位置する。確認面はDb面である。Db面はL～N・7～8付近のみが周囲と異なり、C面からD面（ローム）までの間に1ないし2枚の整地面が確認され、それを上からDa面、Db面としたものである。従って他のD2面遺構とは性格、年代が異なる可能性もあり区別したものである。SK734はSK756と重複しており、それより新である。平面形は台形を呈し、東西180～200cm、南北は200～224cm、確認面からの深さは60cmを測る。壁、坑底は平滑で、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。半地下状の遺構で、坑底から約10cmほどの厚さでローム主体の黄褐色土（12、13層）による貼床が確認される。本遺構出土遺物として抽出した舟カマドは、上部を欠損していたが、それ以外はほぼ完形に近いもので、坑底中央付近の貼床直上で正位置で出土した。意図的に正位置で据えたのか偶然なのかは不明である。貼床より上層は褐色土（5、6層）とローム主体の黄褐色土（7層）が互層に堆積する状況が確認される。5、6層はいわゆる水成層であり、こ

の遺構にはしばらく開口期間があったと考えられるが、本遺構の利用の仕方として開口させておく必要があったのか、あるいは廃絶後、放置された結果であったのかは不明である。遺物は先述の舟カマド以外は、陶磁器類細片がごく少量出土したのみである。

SK756（Ⅲ-260 図）

L～M9グリッドに位置する。確認面はDb面である。Db面はL～N・7～8付近のみが周囲と異なり、C面からD面（ローム）までの間に1ないし2枚の整地面が確認され、それを上からDa面、Db面としたものである。従って他のD2面遺構とは性格、年代が異なる可能性もあり区別したものである。SK756はSK734と重複しており、それより旧である。残存する平面形は方形を呈し、その規模は東西190cm、南北234cm、確認面からの深さは86cmを測る。壁、坑底は平滑で、壁は坑底からハの字状に立ち上がる。覆土は5層以下はいわゆる水成層であり、本遺構は重複関係のあるSK734と同じく開口期間があった可能性が高い。遺物は少量ではあるが、陶磁器類は17世紀代に位置づけられる。

SK805（Ⅲ-261 図）

土坑でJ4グリッドに位置する。東側は攪乱によって破壊され残存していない。重複するSK1023内に構築され、それを切っている。平面形は北側に一段テラス状の張り出し部を有する長方形を呈すと考えられ、残存部で東西200cm、南北115cm（テラス部を除く）、確認面からの深さ最大70cmを測る。坑底は西側に一段テラスを有し、緩やかに東へ傾斜している。覆土はやや灰色を帯びた暗褐色土を基調とし、全体的に人工遺物、自然遺物、炭化材を含む。そのうち人工遺物は、特に1層中より多量に出土している。陶磁器類は東大編年Ⅲa期に比定される。板柁などは認められなかったが、芥溜の可能性はある。

SK885（Ⅲ-262 図）

J8～9グリッドに位置する。土坑で、杭で固定された側板で囲まれていたと推定される。平面形は長方形、断面形は台形で西側が掘り込まれ段差になっている。東西576cm、南北62cm、深さ94cmを測る。方形、長方形の杭穴が14基、遺構壁面に沿って確認されている。方形の杭穴は6cm四方で東西に並ぶ。b-b'ラインの杭穴は坑底から深さ55cmまで達している。遺構の東側では検出面近くでも杭が確認されており、本来は側板で囲まれた部分が地表面に出ていたと考えられる。

SK886（Ⅲ-263 図）

J～K・8～9グリッドに位置する。土坑で平面形は不整形、断面形はレンズ状で西側にテラスを有す。東西490cm、南北258cm、深さ106cmを測る。

SK899、SK905（Ⅲ-264 図）

SK899、SK905はJ～K・13～14グリッドに位置する土坑である。SK899は北側に位置するSK905を切る。東側は攪乱によって削平されている。平面形は不整形で、断面は、南壁がオーバーハングし、北側は直線的に立ち上がり、坑底は平坦である。東西337cm、南北493cm、深さ169cmを測る。

SK905は東側は攪乱によって削平されている。平面形は不整形で断面形は台形、東西463cm、南北300cm、深さ66cmを測る。

SK979 (Ⅲ-266 図)

J6 グリッドに位置する。北側を攪乱されるが、残存する平面形は長方形を呈し、規模は東西 170cm、南北 64cm、確認面からの深さは 76cm を測る。壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。

遺物は遺物収納箱で 1 箱分出土しており、比較的完形率が高い。陶磁器類は東大編年Ⅲ a 期に位置づけられる。

SK1023 (Ⅲ-265 図)

土坑で I～K・4～5 グリッドに位置する。南側で重複する SK1024 は、本遺構掘削時にほぼ遺構全体が掘り返され、81 層を残すのみである。また SK805 に切られている。平面形は不整形を呈し、南北 740cm、東西 450cm、確認面からの深さ約 200cm を測る。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が顕著で、特に坑底は複数遺構が重複しているかのように、5 回にわたって掘削された様相を呈している。この形態的特徴から採土坑と考えられる。1 層の焼土層は、D 面焼土に、2 層は D1 層に比定される。77 層より下層でロームブロックが多く認められ、中位に堆積する 65 層、72 層より東大編年Ⅱ～Ⅲ a 期に比定される遺物が多量に出土した。

SK1024 (Ⅲ-265 図)

土坑で K4～5 グリッドに位置する。SK1075 より新しく、SK1023 より古い。特に SK1023 には大きく切れ、覆土もほとんど残っていない。平面形は長方形を呈し、東西 310cm、南北 165cm、確認面からの深さ約 80cm を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、やや丸味を帯びて坑底に繋がる。壁面、坑底ともに工具痕が顕著に残っている。

SK1051 (Ⅲ-267 図)

K5～6 グリッドに位置する。SK1010 と重複しており、新旧は SK1010 より旧である。平面形は正方形を呈す。残存規模は一辺 260cm、確認面からの深さは 90cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。坑底には幅 20cm、長さ 240cm のごく浅い溝状の窪みが井桁状に検出された。また溝状の窪みのすぐ内側には、方形のピットや隅丸長方形の杭穴状のものが相対する位置に確認された。また覆土中には腐食した材のようなものがやや多く含まれていたことなどから、本来は方形の木組みを有す遺構であった可能性が高い。覆土の観察からは水が一時溜まるような状況があった事が推察される。遺物は陶磁器類が少量出土しているのみである。

SK1738 (Ⅲ-268 図)

D15 グリッドに位置する。木枠のある土坑で南側に位置する SK2001 を切る。木枠の内側の平面形は長方形、断面形は長方形、東西 100cm、南北 124cm、床面までの深さ 78cm を測る。床面に 6 枚の板材が並べられた痕跡を確認した。西壁、東壁で確認された柱状の窪みは壁材を固定した角材の跡と考えられる。木枠の外側の掘方の平面形は長方形、断面形は長方形、東西 110cm、南北 182cm、深さ 80cm を測る。1、2 層は粘土を主体とし 2 層には砂が含まれる。木枠と掘方の間は約 10cm で、3～5 層は木枠の外側に充填された覆土である。

SK1889 (Ⅲ-269 図)

土坑で B～C・5～6 グリッドに位置する。SP1943 に切られているが、遺存状況はおおむね良好

である。平面形は不整長方形を呈し、東西 430cm、南北 180cm、確認面からの深さ 140cm を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は凹凸が著しい。覆土はロームを多く含む褐色土を主体とし、ほぼレンズ状に堆積している。遺物は 17 世紀中葉に比定される陶磁器類が少量出土している。

SK1901（Ⅲ-270 図）

G～H13 グリッドに位置する。土坑で平面形は長方形、断面形は台形、東西 113cm、南北 180cm、深さ 33cm を測る。

SK1930（Ⅲ-271 図）

F～G13 グリッドに位置する。土坑で平面形は長方形、断面形は台形、東西 141cm、南北 270cm、深さ 84cm を測る。1～3 層はレンズ状に堆積している。4 層は灰色粘土が主体になっている。

SK1962、SK1965、SK1966（Ⅲ-272 図）

3 基の重複関係のある土坑である。SK1962 → SK1965 → SK1966 の順で構築される。SK1962 は C～D13 グリッドに位置する。平面形は長方形で、断面形は台形、東西 167cm、残存部分南北 290cm、深さ 32cm を測る。

SK1965 は D13 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形で、SK1962 と重複する部分は緩やかに立ち上がる。東西 126cm、南北 288cm、深さ 42cm を測る。

SK1966 は D～E13 グリッドに位置する。平面形は不整形。南側は直線的に立ち上がり、北側は緩やかに立ち上がる。東西 189cm、南北 524cm、深さ 47cm を測る。

SK2000（Ⅲ-273 図）

F3～4 グリッドに位置する遺構である。西側は攪乱される。平面形は長方形を呈し、残存規模は東西 120cm、南北 61cm、確認面からの深さは 44cm を測る。壁、坑底は比較的平滑に整形され、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土はローム粒やロームブロックをやや多く含むしまりの強いものである。遺物は陶磁器類がごく少量出土しているのみである。

SK2009（Ⅲ-274 図）

C4～5 グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸（南北）96cm、短軸（東西）56cm、確認面からの深さは 12cm を測る。壁、坑底ともに凹凸が著しく、覆土のしまり、粘性もやや弱い。窪みの可能性が高い。

SK2031（Ⅲ-275 図）

D～E・3～4 グリッドに位置する。平面形は歪な方形を呈し、規模は東西 130cm、南北 93～106cm、確認面からの深さは 12～24cm を測る。壁は坑底より緩やかに開いて立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。坑底は凹凸が顕著で、東西両側に浅い楕円形の窪みがある。覆土はしまりが強く大きく 3 層から構成されるが、2 層には灰色の灰状のブロックや炭化物などをやや多く含む。炬状遺構の灰などを埋めたものか。遺物はあまり多くはないが、陶磁器類は 17 世紀前半代に比定されるものが出土している。

SK2032 (Ⅲ-275 図)

D3～4グリッドに位置する遺構である。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は長軸88cm、短軸58cm、確認面からの深さは7cmを測る。壁は坑底から緩やかに開きながら立ち上がる。覆土はローム粒やロームブロックをやや多く含む、しまりの強いものである。掘方や覆土の状況などから窪みの可能性が高い。遺物は陶磁器類細片が少量出土している。

SK2033 (Ⅲ-277 図)

E3グリッドに位置する遺構である。西側は攪乱あるいは調査区外で全体像は不明であるが、大きく2つのプランからなる。南西方向に不整形の平場、北東方向に円形遺構が構築され、その間には幅約10cm、高さ20cmの段差を有す。不整形の平場は長軸180cm、短軸140cm、確認面からの深さは15cmを測る。坑底にはわずかに凹凸を有す。円形部分の規模は直径126cm、確認面からの深さは117cmを測る。壁は坑底から開き気味に立ち上がるが、局所的にハングしている部分もある。覆土はしまりの強いもので数度にわたり埋め戻されるが、貝類を含む比較的多くの遺物が出土する層(3層)が観察されるなど、一時的に廃棄土坑として利用された状況も確認される。しかし最終的には円形部分の窪みに礫や瓦片を充填し埋めている。遺物は陶磁器類を中心に遺物収納箱に1箱あまり出土しており、それらは東大編年Ⅲa期に位置づけられる。

SK2034 (Ⅲ-276 図)

E3～4グリッドに位置する遺構である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸(東西)64cm、短軸(南北)50cm、確認面からの深さは13cmを測る。壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土はしまりが強いもので、下層に礫を多く含む層、上層は灰色粘土を主体とする層で埋め戻されることから、何らかの基礎遺構の可能性もある。

遺物は陶磁器類の細片が少量出土している。

SK2039 (Ⅲ-278 図)

H～I3グリッドに位置する遺構である。大半はSD1606に攪乱され平面形は不明であるが、残存している規模は長軸(南北)75cm、短軸(東西)24cm、確認面からの深さは17cmを測る。壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、浅い箱形を呈す。遺物の出土量はあまり多くないが、陶磁器類は東大編年Ⅲa期に位置づけられる。

SK2043 (Ⅲ-280 図)

C～D・3～4グリッドに位置する遺構である。西側立ち上がり部分は攪乱されるが、残存する平面形は長方形を呈し、規模は東西204cm、南北405cm、確認面からの深さは97cmを測り、壁、坑底は平滑に整形されている。壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。覆土はしまりが強いものではあるが、6層は明灰色極細砂が主体となっているなど、坑底に近い覆土ほど砂質感が強い。明灰色細砂が何に由来するかは不明である。

遺物は陶磁器類が遺物収納箱1箱分出土しており、それらは東大編年Ⅲa期に位置づけられる。

SK2044 (Ⅲ-281 図)

E～F・3～4グリッドに位置する遺構である。本遺構南側に位置するSK2047と重複するが、

SK2044 が新である。平面形は長方形を呈し、規模は東西 215cm、南北 370cm、確認面からの深さは 165cm を測り、壁、坑底は平滑に整形されている。壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、断面形は箱形を呈す。覆土は全体的に粘性が強く、特に 3、5、7 層には灰色粘土が多く含まれる状態が観察された。形状、規模などが本遺構北側に位置する SK2043 と酷似するが、関連性のある遺構か。

遺物は陶磁器類が遺物収納箱 1 箱分出土しており、それらは東大編年Ⅲ a 期に位置づけられる。また本遺構周辺の SK2043、SK2047 と遺構間接合することが確認されており、本遺構周辺の遺構は同時期に埋め戻された可能性が高い。

SK2047（Ⅲ-281 図）

F3 グリッドに位置する遺構である。本遺構北側に位置する SK2043 と重複するが、SK2047 が旧である。残存する平面形は方形を呈し、規模は東西 128cm、南北 152cm、確認面からの深さは 175cm を測る。壁、坑底は平滑に整形されるが、西壁中程はややハングし、内傾気味に立ち上がる。覆土はしまりが強く、ローム粒やロームブロックを多く含むものがほぼ水平に堆積している。

遺物は出土しなかった。

SK2083（Ⅲ-279 図）

土坑で I4～5 グリッドに位置する。重複する SK1023 より古く、SK2148、SK2149 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 120cm、南北 180cm、確認面からの深さ 130cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底、壁面ともに比較的丁寧な整形されている。覆土はレンズ状堆積を呈している。

遺物は東大編年Ⅲ a 期に比定される陶磁器類が出土しているが、出土遺物のうち D1 面に構築された道路遺構 SR1856 と接合関係を持つ資料が存在していることから、D1 面形成時に廃絶された可能性が高い。

SK2100（Ⅲ-282 図）

D15 グリッドに位置する。土坑で北西角を SK1738 に切られる。掘方を有し、その内側平面形は方形、断面形は台形で東西 122cm、南北 122cm、深さ 22cm を測る。3 層は粘土が主体である。掘方の平面形は長方形で東西 129cm、南北 148cm、深さ 22cm を測る。掘方坑底東側に 6cm 四方の杭穴 1 基を確認している。

SK2103（Ⅲ-283 図）

G3 グリッドに位置する遺構である。平面形はやや歪な方形を呈し、規模は東西 55cm、南北 50cm、確認面からの深さは 15cm を測る。壁は坑底から開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。性格不明の遺構である。遺物は陶磁器類が少量出土しているのみである。

SK2106（Ⅲ-284 図）

I8 グリッドに位置する。平面形は歪な方形を呈し、規模は東西 90cm、南北 90cm、確認面からの深さは 48cm を測る。壁は坑底から開きながら立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。性格不明の遺構である。遺物は陶磁器類細片が少量出土しているのみである。

SK2111（Ⅲ-285 図）

I～J8グリッドに位置する遺構である。平面形は細長い長方形を呈し、規模は東西95cm、南北240cm、確認面からの深さは115cmを測る。壁、坑底は工具痕が顕著である。壁は坑底からほぼ垂直に上がる。覆土上層（1～3層）は瓦片を多く含み、しまりの強いものである。また7層は初見では遺物を比較的多く含む層であり、本層出土陶磁器類の完形率は比較的高い。何かの理由でまとめて廃棄された可能性が高い。遺物は陶磁器類が遺物収納箱1箱分出土しており、東大編年Ⅲa期に位置づけられる。

SK2148（Ⅲ-286図）

土坑でI4グリッドに位置する。SK1023、SK2083と重複し、それらより古い。また東側でSK2149と重複しているが、それとの新旧関係は不明である。平面形は不整形を呈し、残存値で長軸270cm、短軸170cm、確認面からの深さ95cmを測る。断面形は播鉢状を呈し、全体的に工具痕が顕著に認められる。覆土はローム粒を含む暗褐色土を基調とし、坑底付近にはロームブロックが多く含まれる。その状況から採土坑と考えられる。遺物は東大編年Ⅲa期に比定される陶磁器類が出土している。調査当初隣接するSK2149と同一遺構として扱っていたため、出土遺物は両遺構を一括して取り上げたが、調査時の状況より、ほとんどの遺物が本遺構に帰属すると考えられる。

SK2149（Ⅲ-286図）

土坑でI4～5グリッドに位置する。SK2083と重複し、それより古い。また西側でSK2148と重複しているが、それとの新旧関係は不明である。平面形は長方形を呈し、東西190cm、南北230cm、確認面からの深さ50cmを測る。壁はハの字状に立ち上がり、壁面、坑底ともに比較的平滑に整形されている。覆土はレンズ状堆積を呈し、床面直上にはロームブロック、ローム粒が多く含まれている。調査当初隣接するSK2149と同一遺構として扱っていたため、出土遺物は両遺構を一括して取り上げたが、調査時の状況より、ほとんどの遺物がSK2148に帰属すると考えられる。

SK2154（Ⅲ-287図）

土坑でD～E・4～5グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西最大210cm、南北430cm、確認面からの深さ90cmを測る。壁はハの字状に立ち上がり、断面形は播鉢状を呈す。また坑底壁際に数10cm間隔で杭痕が検出され、断面観察では確認することができなかったが、壁面付近にわずかに木柢痕が残存していたことから、四周に木柢を伴う土坑と判断される。覆土はローム粒を含む暗～黒褐色土を基調とし、東西方向から交互に埋め戻されている。遺物は東大編年Ⅱ期に比定される陶磁器類が出土している。

SK2162（Ⅲ-289図）

J9グリッドに位置する。東側はSK3に攪乱され、残存している平面形は歪な小判形を呈す。規模は長軸165cm、短軸103cm、確認面からの深さは60cmを測り、壁、坑底は工具痕が顕著である。壁は坑底から開きながら立ち上がり、断面形は浅い「U」字形を呈す。覆土は全体的にしまり強いものであるが、最下層（3層）は瓦片や礫を多く含む、しまり粘性のとても強いものである。覆土や坑底の状況などから何らかの基礎遺構の可能性もある。遺物はあまり多くないが、陶磁器類は17世紀前半に位置づけられる。

SK2187（Ⅲ-288 図）

土坑で G8 グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、東西 150cm、南北 280cm、確認面からの深さ最大 110cm を測る。南壁際に 1 段階状のテラスを有し、遺構中央部が大きく掘り込まれている。壁面、坑底ともに凹凸が著しい。その様相から採土坑として掘削されたと考えられる。また覆土は黄灰褐色土を基調とし、2 層には炭化材片、人工遺物が多く含まれ、ゴミ穴として利用されていたことが分かる。出土資料の年代は 17 世紀中葉である。

SK2250（Ⅲ-290 図）

土坑で H4 グリッドに位置する。重複する SP2251、SP2252 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 75cm、南北 210cm、確認面からの深さ 40cm を測る。坑底壁際より角杭痕が 6 箇所検出され、本遺構の壁面は板枠で囲われていたことが確認される。坑底直上には約 8cm とほぼ均一の厚さで灰色粘土が堆積しているが、その様相から意図的に貼られた可能性がある。17 世紀前半の陶磁器類が出土している。

SK2333（Ⅲ-291 図）

C10 グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、規模は長軸 73cm、短軸 67cm、確認面からの深さは 5～18cm を測る。遺物は陶磁器類細片が少量出土している。

SK2352（Ⅲ-294 図）

土坑で E～F・5～6 グリッドに位置する。平面形は東南部が括れた方形を呈し、東西 650cm、南北 560cm、確認面からの深さ 100cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。東南部括れ部分から西方向へスロープが設けられ、坑底へ移行する。坑底はほぼ平坦である。本遺構埋没後に SF2085、SF2141、SF2144、SF2368、SK2254、SK2335、SK2336 が構築されており、本遺構は D2 面の中でも古い段階に構築された遺構である。覆土はローム粒を含む暗褐色土を基調として埋め戻されている。遺物は東大編年Ⅱ～Ⅲ a 期に比定される陶磁器類が比較的まとまって出土している。

壁面、坑底の整形状況から半地下室の可能性がある。

SK2358（Ⅲ-292 図）

土坑で C5～6 グリッドに位置する。重複する SF2157 より古く、SK2360 より新しい。平面形は不整形長方形を呈し、東西 290cm、南北 70cm、確認面からの深さ 35cm を測る。覆土は暗褐色土の単層である。SF2157 より古いことから、SK2352 などと同様に D2 面でも古い段階に位置付けられる遺構である。遺物は陶磁器類がわずかに出土したにすぎない。

SK2477（Ⅲ-293 図）

土坑で B～C・8～9 グリッドに位置する。不整形長方形を呈する土坑で、東西 605cm、南北最大 240cm、確認面からの深さ 75cm を測る。坑底には東壁際とほぼ中央部に方形の掘り込みが認められる。規模は前者が東西 160cm、南北 145cm、深さ 30cm を測る。後者（SK2477-b）は東西 175cm、南北 145cm、深さ 110cm を測る。覆土はローム粒、青灰色粘土粒を含む褐色～暗褐色土で、ほぼ水平堆積を示す。東側落ち込み内の覆土はローム粒を主体としている。中央落ち込み内の覆土もローム粒を含む暗褐色土を基調としている。中央の落ち込みに関しては別遺構の可能性も指摘できる。中央部の

掘り込みからはIV-541 図8の丹波産播鉢が出土している。遺物の年代観はいずれも東大編年Ⅱ～Ⅲ a期でa、bに変化は認められない。性格は不明。

SK2567・SK2568・SK2569（Ⅲ-295 図）

土坑でG5～6グリッドに位置する。不整形土坑3基の重複で、中央に位置するSK2567が最も新しい。いずれの遺構も壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が顕著で採土坑と考えられる。SK2567北壁寄り坑底に存在する楕円形落ち込みも覆土の観察から同一遺構と判断される。覆土はいずれの遺構もローム粒を含む暗褐色土を基調としており、坑底直上の覆土は、特にローム粒、ロームブロックの含有率が高いことから壁の崩落の可能性も指摘できる。遺物はいずれも17世紀中葉に比定される陶磁器類が出土しており、比較的短期間で土採り掘削と埋め戻し行為が繰り返されたことを物語っている。

SK2589（Ⅲ-296 図）

E13グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形、東西132cm、南北100cm、深さ96cmを測る。1層は杭跡と考えられる。

SK2721（Ⅲ-297 図）

土坑でF8グリッドに位置する。重複するSF2191より古い。平面形は不整長方形を呈し、南側に一段テラスを有す。規模は東西90cm、南北300cm、確認面からの深さ45cmを測る。覆土はレンズ状堆積を呈し、ローム粒を多く含む褐色～茶褐色土が堆積する。性格は不明。遺物は吹き墨染付皿、かわらけなど17世紀第2四半期に比定される陶磁器類が出土している。

SP1944（Ⅲ-298 図）

ピットでB5グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈し、東西50cm、南北65cm、確認面からの深さ15cmを測る。坑底には破碎礫を用いた礎石が置かれている。供伴遺構は不明であるが、本遺構周辺にはピット、炉状遺構が多く認められ、その関連性が考えられる。

SP2109（Ⅲ-299 図）

I7グリッドに位置する遺構である。平面形は歪な小判形を呈し、規模は長軸70cm、短軸45cm、確認面からの深さは8cmを測るごく浅いピットである。坑底が比較的平滑であり、その形状などから礎石などの抜き穴とも考えられる。遺物は金属製品が少量出土している。

SU327（Ⅲ-300 図）

J～K・11～12グリッドに位置する。地下室でいわゆる麴室の形状で、長方形の豎坑に羽子板形の室4基が接続している。豎坑、室部の坑底は平坦である。上部はSK3に切られており遺構検出面はSK3の坑底である。東西590cm、南北856cm、遺構検出面からの深さは230cmを測る。豎坑の規模は東西166cm、南北215cmを測る。東側の室の平面形は台形で東壁は緩やかな弧を描いている。東西212cm、南北236cmを測る。西側の室の平面形は台形で西壁は緩やかな弧を描いている。東西222cm、南北255cmを測る。南側の室の平面形は台形で南壁は平坦である。北側の室の平面形は台形で北壁は平坦である。1層はローム土で天井が崩落した部分である。

SU774（Ⅲ-301 図）

J～K・7～8グリッドに位置する。地下室で不整形の開口部と長方形の室部からなる。開口部は室の南西側にあり、東西206cm、南北250cm、深さ164cmを測る。室部は袋状で、南壁は直線的に立ち上がり、東壁、西壁、北壁はオーバーハングしている。坑底の平面形は長方形で東西206cm、南北227cmを測る。

SU804（Ⅲ-265 図）

地下室でK4～5グリッドに位置する。開口部の平面形は不整楕円形を呈し、東西215cm、南北115cmを測る。ただし西側の大きく開く部分は天井崩落による可能性がある。北壁以外の三方の壁面が緩やかにオーバーハングし、室部に至る。室部の平面形は隅丸方形を呈し、東西165cm、南北150cm、確認面からの深さ160cmを測る。壁際には壁溝状の浅い溝が巡っている。このような形態の地下室は法学部4号館地点B7-2号土坑など詰人空間における地下室に認められる。覆土は北方向からの流れ込みの様相を呈しており、42層より多量の遺物（東大編年Ⅲa期）が出土している。

SU874（Ⅲ-302 図）

地下室でJ3～4グリッドに位置する。開口部は西側にあり、東側にオーバーハングして室部を有す。オーバーハング部の天井は崩落しており、天井痕跡から開口部は本来、南北150cm、東西110cmを測る長方形を呈していたと推定される。開口部の壁面はほぼ垂直に立ち上がり平滑に整形されている。東側オーバーハング部はほぼ直角に折れ、奥行き約25cmを測る。床面はほぼ方形を呈し、南北125cm、東西130cmを測る。ほぼ水平に整形され、壁際が壁溝状にやや窪んでいる。確認面から床面までの深さは120cm、奥壁天井高は55cmを測る。覆土は床面直上の9層に天井崩落土を含むロームブロックが多量に含まれる。7層が西壁側で急な立ち上がりを観せていることから、1～6層は埋没後の別遺構の可能性もある。遺物はおおむね8層から出土し、東大編年Ⅲa期に比定される。

SU943（Ⅲ-303 図）

K4グリッドに位置する縦坑を有する地下室である。遺存状況は良好で、上部縦坑の形状は長方形を呈し、規模は東西80cm、南北110cmを測る。張り出し部が東西方向に50cm前後存在し、底面から天井部までは60cmであり、底面規模に比して、低いものとなっている。確認レベルから天井までは120cmあり非常に厚いものとなっている。縦坑部の西側、南側、東側に深さ10cm程度の足掛け穴が存在し、南側のみ2箇所になっている。覆土の堆積状況は全体的にロームブロックが多く、埋め戻しが一時期に行われたと考えられる。遺物は東大編年Ⅲa期に比定される陶磁器類が出土しているが、出土量は多くはない。周囲にも地下室が分布し、調査地点内の土地利用の類似性が考えられる。

SU1031（Ⅲ-304 図）

J～K8グリッドに位置する。開口部形状は南、西側が膨らむ隅丸長方形を呈し、東西166cm、南北118cm、確認面からの深さは90cmを測る。北側坑底には20cmほどの段差を設け、奥行き56cmの半地下状の室部を有す。室部内の天井高は54cmを測る。壁面は入口、室部ともに比較的平滑に整形されているが、坑底にはローム表面が鬼板化した状況が確認された。遺物は陶磁器類がごく少量出土しているのみである。

SU1050 (Ⅲ-305 図)

J～K6 グリッドに位置する。西側を SK1010 や SK1051 に切られる。開口部は東西 134cm、南北 202cm、確認面からの深さは 186cm を測り、平面形は隅丸長方形を呈す。壁面や坑底は比較的平滑に整形され、壁は坑底から垂直に立ち上がるが、南から西側の開口部付近がわずかにテラス状を呈す。覆土の堆積状況を見ると、ローム粒やロームブロックを多く含み、埋め戻しと掘削がくり返された状況が確認される。遺物は少量であるが、陶磁器類は東大編年Ⅲ a 期に位置づけられる。

SU1885 (Ⅲ-306 図)

地下室で I9 グリッドに位置する。東側は C 面の SK3 によって床面付近まで大きく破壊されている。また SU1886 と重複し、それより新しい。平面形は長方形を呈し、北壁がオーバーハングする。床面規模は東西 120cm、南北 95cm、確認面からの深さ 120cm を測る。壁面、床面には工具痕が残り、特に壁面下方で顕著である。床面は SU1886 の天井崩落後の窪地を埋め戻した土を掘り込んで構築されている。覆土はほぼ水平堆積を呈し、ロームブロック、ローム粒を多量に含む。遺物は東大編年Ⅱ～Ⅲ a 期に比定される陶磁器類が少量出土した。

SU1886 (Ⅲ-307 図)

地下室で H～J・8～9 グリッドに位置する。東側が SK3 によって大きく削平されている。本遺構は階段を有する地下室で、階段部、入口部、室部の要素で構成される。階段部はローム作り出しのステップが 5 段検出された。最も遺存状況の良い最下段は幅 145cm、奥行き 30cm を測る。各ステップの比高差はほぼ 30cm、斜度は約 35° を測る。補強施設は認められない。また階段側壁は緩やかに開いて立ち上がり、中位からロート状に大きく開く。入口部は奥行き 160cm を測り、東西壁際には坑底規模で南北 120cm、東西 35cm を測る長方形をの掘方が設けられている。東側の掘方中央からは直径 30cm を測る円形の掘り込みが認められ、本掘方は柱穴と考えられる。入口部壁際に位置していることから、入口部の天井を支える枠組みがあったと考えられる。室部坑底は南北 325cm、東西 225cm を測る長方形を呈し、南壁・西壁に奥行き約 40cm を測るテラスが設けられている。床面からの比高差は 40cm を測る。床面には山砂 (16 層) とロームブロック (15 層) による貼床が設けられており、15 層は入口部にも敷き詰められている。また壁面の痕跡から天井部は床面上 160cm に存在していたことが観察される。覆土は室部範囲で 15 層直上に天井部の崩落による厚さ約 1 m の巨大ロームブロックが存在する (5、11、14 層)。階段から入口部にかけて堆積する 6～13 層が本遺構廃絶後に階段方向より流れ込んだ覆土と考えられ、1～4 層は天井陥没後の窪地を埋め戻す際に堆積した層序と考えられる。

遺物は 17 世紀中葉に比定される陶磁器類が少量出土しているが、一部に被熱遺物が含まれるが、IV-484 図 2 は D 面焼土層中に同類土製品が存在し、天井陥没後の混入品と考えられる。

SU1931 (Ⅲ-308 図)

I13 グリッドに位置する。地下室で遺構の軸は 13° 真北から西に振れる。平面形は長方形、断面形は台形、長軸 206cm 短軸 142cm、深さ 206cm を測る。

SU2048 (Ⅲ-309 図)

G3～4 グリッドに位置する地下室である。開口部形状は歪な円形を呈し、規模は東西 136cm、南

北 120cm、確認面からの深さは 165cm を測る。坑底中央付近がマウンド状を呈し、全体よりわずかに高い。竪坑部の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南側は確認面下約 105cm で、北側は確認面下約 80cm でオーバーハングし、室の天井部へ移行する。ただし明確に天井部が遺存していたのは南側のみであり、アーチ状を呈することが確認された。室部床面の平面形は東西 225cm、南北 252cm を測り、南東方向に大きく拡がる歪な円形を呈す。壁、床面ともに工具痕の凹凸が顕著である。覆土は竪坑部が狭くなる中程から下では、しまりの弱い細砂から極細砂を主体とする層（5、6層）が北から南へ傾斜して堆積し、開口部付近はしまりの強いローム粒やロームブロックなどを多く含む層がレンズ状に堆積している状況が確認された。遺物はごく少量出土し、陶磁器類は 17 世紀前半代に位置づけられるものである。

SX772（Ⅲ-310 図）

K8～9 グリッドに位置する。東西 570cm、南北 173cm の範囲で 2 列の石列が確認されている。北側の石列は東西 326cm、南北 52cm、深さ 14cm を測る掘方に自然礫、破碎礫が一行に並べられている。石臼片、播鉢、瓦片も確認されている。1 段残存している。南側の石列は北側よりやや高い位置に配置されている。掘方は確認されていない。

SX1872・SX2102（Ⅲ-311 図）

SX1872 は F～G3 グリッドに、SX2102 は G3 グリッド位置する。SX1872 は掘方はなく、D2 面直上に瓦片が幅約 40cm の帯状に、カギ形に検出された。瓦片には平瓦片、丸瓦片などがあり、その大きさや配置される向きなどに規則性は認められない。性格は不明である。

SX2102 は SX1872 の瓦片掘削中に検出されたものである。長軸 62cm、短軸 52cm、確認面からの深さは 32cm を測り、歪な円形を呈す。掘方外周に完形に近い平瓦を数枚立て、その中にさらに端部を上に向けた瓦片を複数詰め込んだ状況が検出された。覆土はほぼ皆無である。SX1872 と合わせて布基礎状の遺構の可能性もある。

SX2008（Ⅲ-312 図）

C～D・9～10 グリッドに位置する遺構である。CR2 面下層で検出された SE1569 に大半を攪乱されているため SX2008 の坑底、平面形などは判然としない。残存している平面形はやや歪な方形を呈し、東西 222cm、南北 290cm、深さ 184cm を測る。覆土はローム粒、ロームブロックを比較的多く含み、数度にわたり埋め戻された状況が確認される。

断面調査時には断面写真の状態が SX2008 の坑底と判断したが、完掘中、さらに下に遺構の覆土が残存している状況が確認された。SX2008 の遺存状況が悪く、また SE1569 の坑底も未確認であったため、坑底で検出された覆土が SX2008 に伴うものか、SE1569 に伴うものか、または全くの別遺構に伴うものなのかが判断できなかった。可能性として本来別の深い遺構（井戸か）があり、そこに SX2008 を構築したか、あるいは SX2008 が井戸であり（調査した部分はその掘方か）、廃絶後、同場所に SE1569 を構築したということも考えられる。遺物は出土しなかった。

SX2105（Ⅲ-313 図）

I～J・6～7 グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、長軸（東西）323cm、短軸（南北）222cm を測る。坑底の凹凸が著しく、局所的にピット状の深い窪みが切り合う状況も検出さ

れる。全体的な深さは確認面から約 20cm 前後であるが、南北に並んで検出されたピット状の部分は北側が 50cm、南側が 85cm と深いものである。覆土はローム粒やロームブロックを多く含むものが堆積した状況であったが、南東付近のピット状の窪み内にはその覆土中、瓦片を多く含む状況が確認された。本遺構覆土中から礎石状の石が並ぶ SX2115 が検出されているが、SX2115 は SX2105 の平面プランを超えて広がっており、SX2105 が SX2115 構築の為に掘削された遺構とは考えがたい。可能性として SX2105 が SX2115 構築前の地固め、あるいは SX2115 の南側に構築されたタタキ状の硬化面とも考えられるが、推測の域はでない。

遺物は細片が多いが陶磁器類が遺物収納箱 1 箱弱出土しており、それらは 17 世紀前半代に位置づけられる。

SX2115 (Ⅲ-314 図)

I6～7 グリッドに位置する遺構である。本遺構南側に位置する SX2105 調査中、その覆土中より検出された石列と瓦敷きである。石は東西方向に約 90cm 間隔で並び、西から 2 番目と 3 番目の石の間や、3 番目と 4 番目の石の間の北側に約 110cm 四方に瓦片が敷き詰められた状況で検出された。遺構の主軸はほぼ真北方向にある。本遺構以外にも瓦片が敷き詰められた遺構があるが、建物基礎に関連する遺構か。遺物は出土しなかった。

SX2284 (Ⅲ-316 図)

D10 グリッドに位置する遺構である。平面形は長方形を呈し、東西 45cm、南北 36cm、確認面からの深さは 3cm を測り、断面形はごく浅い箱形を呈す。遺物は出土しなかった。

SX2297 (Ⅲ-317 図)

F6～7 グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形を呈し、東西 36cm、南北 23cm、確認面からの深さは 8cm を測り、断面形は浅い箱形を呈す。覆土は炭化物や焼土粒などを含む黒色の灰層が主体である。火床部は非検出であるが、本来は炉状遺構であった可能性がある。遺物は陶磁器類ではかわらけの細片が出土したのみである。

SX2341・SX2342 (Ⅲ-315 図)

I6 グリッドに位置する遺構である。SX2341 は SX2340 と重複関係があり、SX2341 が新である。平面形は歪な円形を呈し、規模は東西 20cm、南北 30cm、確認面からの深さは 6cm を測る。SX2342 は平面形は長方形を呈し、規模は東西 35cm、南北 42cm、確認面からの深さは 14cm を測る。ともにあまり深い遺構ではないが、覆土に焼土粒や焼土ブロック、あるいは灰層を含む。本遺構が帰属する D2 面では 5、6 ラインの間や 7 ライン付近に南北方向に炉状遺構が集中する状況が確認されており、火床部は確認されなかったが覆土の状況を考慮すると SX2341、SX2342 も炉状遺構であった可能性もある。

(4) D 面の遺構

SA255 (Ⅲ-318 図)

柱穴列で P～Q・6～10 グリッドにかけて検出された。主軸方向は E-10°-S を測り、屋敷外郭や他遺構とはかなりかけ離れた傾きを呈している。各柱穴間距離は平均 183cm を測るが、一様では

なく、南北の位置差も認められ、非常に簡素な柵列と考えられる。また本遺構東側に位置するSU390に切られているピットとその東に位置するSP339も本遺構の延長と推定される。SU390隣接ピットが伴うとなれば、本遺構の構築年代は17世紀中葉以前に比定され、主軸方位の傾きは、藩邸初期造成時に認められる旧地形に規制された空間利用によることが考えられる。覆土は柱穴掘削土と考えられるロームブロック主体の単一層で、柱痕は認められない。

SA341（Ⅲ-318図）

柱穴列でO～Q7グリッドにかけて分布し、4基検出された。周囲はかなり攪乱の影響を受けているため、全容は不明である。各柱穴の平面形は隅丸長方形を呈し、坑底北側に一段テラスを有していることから、南側に柱が据えられていたと考えられる。ピット間隔は芯々で平均190cmを測り、主軸方位はN-1.5°-Eとほぼ真北を示す。覆土はローム土を主体とし、柱痕は認められない。周囲に同形態の遺構は認められない。

SB392（Ⅲ-319図）

Q2～3、R3～5グリッドにかけて分布する柱穴列で、C層にパックされたローム面（D面）で検出された。主軸方位はE-9°-Sを示し、近接するSA255よりはやや東向きを示す。各ピットの平面形は隅丸長方形を基本とし、確認面からの深さ40～45cmを測る。ピット間の平均間隔は185cmを測り、1間6尺1寸5分を基準とする越前間に近い。いくつかのピットには幅6～9cmを測る柱痕が認められ、掘立柱形態の柵列と考えられる。また、主軸方位が東西方向から傾いていることより、藩邸初期段階の区画柵列の可能性が高い。

SB547、SB550、SB551、SB560、SB570（Ⅲ-320図）

柱穴列でL4～6グリッドにかけてE-1°-N方向に伸びている。各ピット間は西から芯々で200cm、180cm、300cm、440cmを測り一律ではない。また各遺構形態、遺構深度にも偏差が認められる。但しこれらの遺構を結ぶ主軸方位は、400cm北側に位置するSB842と共通することから、柵列としての可能性を指摘したい。またいずれも出土遺物は少量で、年代も特定することは困難である。

SB566（Ⅲ-321図）

柱穴列で調査区南端R8～10グリッドに位置する。検出された全てのピットが調査区外へ及んでいるために詳細は不明であるが、個々の平面形は50cm前後の方形を呈すると考えられる。確認面からの深さは50～70cmを測る。ピットは芯々約180cm間隔で、5基検出され、ピット列の主軸方位は、E-2°-Sとほぼ東西方向を示す。覆土はいずれもロームブロック、瓦片を含む黒褐色土で、柱痕は確認されなかった。本遺構は柵列と考えられるが、周辺部に位置する柱穴列の主軸方位は、いずれも本遺構より南に傾いており、本遺構との関連遺構は見当たらない。遺物は出土していない。

SB842（Ⅲ-322図）

L4、K～L・5～6グリッドに位置する柱穴列で、ローム（D面）に帰属する。東西方向に6基のピットが確認された。主軸はほぼ真北である。攪乱のため平面形がわかるものは東側2基のみであるが、南北に長い小判形を呈すピットのようなものである。一番遺存状況の良い東端のピットは長軸70cm、短軸40cm、確認面からの深さは26cmを測る。いずれのピットも短軸はほぼ同規模であるが、深さや間

尺にはばらつきがある。なお一番西端のものとそのすぐ東隣のピットの間尺は240cm強と他の物と比べ倍以上あることから、この2基のピット間にはもう1基ピットが存在したが浅かった為に削平されたか、あるいは西端のものは柱筋のみ揃えた別の柱穴列である可能性も考えられる。いずれのピットも覆土はローム粒やロームブロックで一度に埋め戻される状況であるが、西から2番目のピットでは柱痕状の痕跡が確認されている。遺物は東から5番目のピットからかわらけ細片が出土しているのみである。

SD381 (Ⅲ-323 図)

溝状遺構でQ～R・2～4グリッドにかけて東西方向に伸びる。SE382に切られており、その東側でやや南方向に曲がり収束する。断面形はやや丸味を帯びた逆台形を呈し、幅約70cm、確認面からの深さ25cmを測る。また西端部坑底に方形のピットが2基確認されている。ロームブロック主体土で埋め戻されている。東大編年Ⅲb期に比定される陶磁器類が出土している。SE392に関連する排水施設の可能性がある。

SD394 (Ⅲ-324 図)

Q2～3グリッドにかけて東西に伸びる溝で、ローム(D面)で検出された。西側は調査区外へ伸びているため、全長は不明である。東側では2基の重複が認められ、土層観察より南側の浅い溝が新しいことが判る。北側の溝は幅約50cm、確認面からの深さ35cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は工具痕による凹凸が著しいが、総じて断面U字形を呈す。覆土はローム土を主体として埋め戻され、水がついた痕跡が認められないことから、区画溝と推定される。検出面から判断して、本遺構の西端はSD422までと推定される。

SD438 (Ⅲ-325 図)

N8グリッドに位置する溝で、ローム面で検出された。南北方向に伸びる溝で、南端はSP439に切られ、北端は攪乱を受け残存していない。溝幅30～40cm、確認面からの深さ20cmを測る。覆土にはロームブロックが多く含まれる。遺存状態が悪く、性格は不明である。

SD473 (Ⅲ-326 図)

溝でO3～4グリッドに位置し、東西方向へ伸びる。西端をSK461に切られ、東側は攪乱を受けて消失している。幅は45～50cmを測り、断面形はほぼ箱形を呈している。確認面からの深さ25cmを測る。覆土はロームブロック主体土で埋め戻されている。周辺遺構との関連は不明。17世紀後半の陶磁器類が少量出土した。

SD553 (Ⅲ-327 図)

溝状遺構でL～M5グリッドに位置する。南端は攪乱によって、北端はSK545に切られて消失している。またほぼ中央で、SB560と重複し、それより新しい。幅は30～50cmを測り、北側が先細りしている。断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さ30cmを測る。覆土はローム粒を含む暗褐色土を基調とし、ほぼ水平堆積を呈している。主軸方位はほぼ真北を向き、約620cm西側に同様の溝状遺構SD581が存在する。性格は不明。

SD561（Ⅲ-328 図）

溝で N4～5 グリッドに位置し東西に伸びる。西端は攪乱を受け不明である。幅は 45～72cm と西に向かい広くなる。断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さ 45cm を測る。覆土はローム土を主体としている。性格は不明。遺物は出土していない。

SD581（Ⅲ-329 図）

溝状遺構で L～M4 グリッドに位置する。幅は 50～60cm、長さ 370cm、断面形は皿状を呈し、確認面からの深さ 15cm を測る。主軸方位は N-5°-W とやや西へ振れる。周囲には関連遺構も見いだせず、性格は不明。

SD600（Ⅲ-330 図）

溝状遺構で M6 グリッドに位置する。東側が SK584 によって切られている。幅約 40cm を測り、断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さは 35cm を測る。坑底には約 90cm 間隔でピットが並んでおり、境界施設と考えられる。溝の覆土にはロームブロックが多量に含まれ、短期間に埋め戻しされたことが窺われる。但し、ピット列の主軸方位がほぼ東西方向であるのに対し、溝自体の主軸方位は N-86°-E と約 3°の開きがあり、別遺構の可能性も考えられる。陶磁器類が少量出土している。

SD720（Ⅲ-331 図）

ローム面にて検出された溝状遺構で、P3 グリッドに位置する。攪乱によって北側は消失している。溝幅は 35～50cm を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が著しい。坑底からは約 100cm 間隔で楕円形を呈するピットが 3 基検出され、境界施設であることが確認された。本遺構の南側に位置する SP430 とその西側の SP431 が関連する可能性も考えられる。

SD742（Ⅲ-332 図）

L8 グリッドに位置する東西方向に伸びる溝状遺構であり、主軸方位は真北である。東西端ともに攪乱され、残存する規模は長さ 328cm、幅 50cm、確認面からの深さは最大 16cm と非常に浅い。溝の断面形は箱形を呈す。坑底には直径 16cm、深さ 18cm ほどの円形ピットが 6 基検出される。形態、覆土の状況などから布堀基礎であった可能性も高いが、本遺構に対応する遺構は確認されなかった。遺物は陶磁器類が少量出土しているのみである。

SD784（Ⅲ-333 図）

K～L13 グリッドに位置する。溝状遺構で東側を SK783、SK899、西側を SK3、南側を SK785、北側を SK786 に切られる。平面形は長方形で断面形はレンズ状、東西 293cm、南北 105cm、深さ 16cm を測る。

SE187（Ⅲ-334 図）

O12～13 グリッドに位置する。南東角は調査区外。井戸で方形の掘り込みのある北東角、南西角、北西角に上部施設の土坑を伴う。調査区外の南東角にも土坑が存在すると考えられる。土坑を含めた規模は東西 214cm、南北 212cm、井戸部分は、東西 148cm、南北 140cm を測る。144cm まで掘削を行った。井戸枠もしくは井戸側の痕跡は確認できなかった。

SE286 (Ⅲ-335 図)

N10 グリッドに位置する。上部施設の平面形は攪乱による削平により明確でないが、方形の土坑を伴いその中心に井戸が配置される。上部施設の土坑は長方形で断面形は台形と考えられ、確認された範囲で東西 191cm、南北 202cm、深さ 76cm を測る。井戸の平面形は楕円形で、東西 127cm、南北 121cm。深さ 236cm まで掘削を行った。足掛かりが南側で 3 基、北側で 2 基確認されている。断面形は三角形で幅は 14cm を測る。南側の足掛かりの間隔は 1 段目と 2 段目が 58cm、2 段目と 3 段目が 62cm、北側の足掛かりの間隔は 1 段目と 2 段目が 58cm を測る。8 層は井戸側の裏側に充填された覆土、1 層は廃絶後に堆積した覆土、9～12 層は上部施設方形土坑の覆土、2～5 層は井戸側内の覆土である。

SE338 (Ⅲ-336 図)

O5～6 グリッドに位置する井戸で、攪乱による削平を受け、ローム面で検出された。よって上部施設の有無やその構造については不明である。掘方は直径 90cm を測る円形を呈し、覆土の様相から、2 層が井戸側内の堆積土と考えられ、井戸側が極端に偏って埋設されていたことが確認された。遺物は 17 世紀代の陶磁器類が少量出土している。

SE382 (Ⅲ-337 図)

攪乱による削平を受けて、ローム面から検出された井戸で、Q3、Q～R4 グリッドに位置する。上部と掘方北壁は削平によって残存していないが、おおむね良好である。上部には 1 辺 250cm、確認面からの深さは最大 30cm を測る方形を呈するテラス状の掘方が存在し、その中央に直径約 130cm を測る円形を呈する井戸本体の掘方が位置する。また方形掘方内には、対角線上に位置する平面十字状の掘り込みが認められる。この十字状掘り込みの機能を窺い知る手掛かりは認められなかったが、角材を井桁状に据えるため、もしくは上部施設との関連が考えられる。このような形状を有す内部施設は、D 面帰属遺構に比定される SE187、SE399、SE484、SE908 でも認められ、1670 年代までの井戸構築構造の一類型と考えられる。また円形掘方内には井戸側の存在は確認されなかった。覆土最上層には焼土層が堆積し、本遺構がほぼ埋没した段階で火災が発生したと考えられる。出土遺物にも被熱遺物の存在が認められ、陶磁器の年代観より、天和 2 (1682) 年に比定される。

SE555 (Ⅲ-338 図)

井戸で N4 グリッドに位置する。SK482 に切られ、SK590 を切って構築されている。平面形は不整形円形を呈し、直径 135～150cm を測る。断面観察によって井戸側痕が認められた (2 層)。直径約 90cm を測り、掘方東側に偏っている。覆土はロームブロックを多量に含み、短期間で埋め戻されたことが推定される。出土遺物は量的には少ないが、いずれも東大編年Ⅲ a 期に比定される。

SE564 (Ⅲ-339 図)

井戸で M～N・4～5 グリッドに位置する。SK599 と重複し、それより新しい。本遺構は上部に方形の掘方施設を伴うことが断面観察の結果確認されたが、遺構確認面において、外側の SK559 との覆土の差が不明瞭であったため、面的な確認を行うことができなかった。上部方形施設は断面観察から 1 辺 250cm、確認面からの深さ 80cm を測ることが確認された。坑底上からは、井戸掘方南北に

上屋施設に関する柱穴が2基検出された。柱穴間は芯々で190cmを測る。井戸掘方は直径130cmを測る不整円形を呈し、下方に従い、緩やかに径が広がる傾向が看取された。覆土は暗茶褐色土～黒褐色土を基調とする。また掘方覆土にはロームブロック、白色シルトブロックが含まれている。遺物は東大編年Ⅲ a期に比定される陶磁器類が少量出土している。

SE908（Ⅲ-340 図）

M13 グリッドに位置する。井戸で、上部施設の平面形は長方形で対角線上に4基の扇形の土坑を検出している。上部施設は東西364cm、南北280cm、深さ130cmを測る。井戸は不整円形で直径140～150cmを測る。

SK299（Ⅲ-341 図）

M～N12 グリッドに位置する。土坑で平面形は楕円形、断面形は台形、東西108cm、南北117cm、深さ84cmを測る。5層と6層の間は空洞で柱痕と考えられる。幅14cmを測る。

SK334（Ⅲ-342 図）

P7～8 グリッドに位置する土坑で、攪乱によって上部を削平され、帰属面は不明であるが、出土遺物の年代観から天和2（1682）年以前に比定される。平面形は不整長方形を呈し、東西370cm、南北180cm、確認面からの深さ50～60cmを測る。壁面、坑底ともに工具痕が顕著で、凹凸が著しい。西壁寄りに平面長方形を呈するピットが存在するが、性格は不明である。覆土はローム土を主体とし、短期間に埋め戻されたと考えられる。

SK466（Ⅲ-343 図）

土坑でM2～3グリッドに位置する。遺構中央が攪乱によって消失し、西側に重複するSK585を切っている。平面形は不整形を呈し、南北330cm、東西360cm、確認面からの深さ70cmを測る。覆土は緩やかに堆積し、3層からは貝殻、陶磁器類がまとまって出土している。陶磁器の年代観はJB-2-s（Ⅳ-361 図3）を含むなど東大編年Ⅲ b期に比定され、かつ量産品を主体とする組成はD面焼土層に類似する様相を呈しているが、本遺構出土遺物に被熱痕跡は認められず、天和2年の火災以前に廃棄されたと考えられる。

SK476（Ⅲ-344 図）

土坑でN7グリッドに位置する。西側に重複するSK477を切っている。平面形は、南北90cm、東西130cmを測る不整楕円形を呈し、確認面からの深さ40cmを測る。壁面、坑底ともに凹凸が認められる。覆土はローム主体土で埋め戻されている。17世紀後半代の陶磁器類が少量出土した。

SK481（Ⅲ-345 図）

土坑でN6～7グリッドに位置する。SL480が入れ子状に重複し、それに切られている。平面形は不整長方形を呈し、東西235cm、南北115cmを測る。確認面からの深さは20～30cmを測る浅い土坑である。覆土にはロームブロック、ローム粒が多く含まれている。性格は不明である。

SK521（Ⅲ-348 図）

N～M・13～14グリッドに位置する。SD1、SE908に切られる。土坑で東西456cm、南北677cm、深さ194cmを測る。

SK548（Ⅲ-346図）

土坑でL4～5グリッド、SB547～SB570へ伸びる柱穴列の軸線上（SB550～SB560間）にはほぼ位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、東西140cm、南北120cm、確認面からの深さ60cmを測る。覆土は暗～黒褐色土が南から北方向へ緩やかに堆積している。性格は不明。

SK552（Ⅲ-347図）

土坑でL～M・5～6グリッドに位置する。平面形は不整形円形を呈し、東西235cm、南北265cm、確認面からの深さ50cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がり、壁面、坑底ともに凹凸が認められる。坑底ほぼ中央には1辺約30cmを測る不整形のピットが認められる。覆土は全般的にロームを多く含み、レンズ状堆積を呈している。この形態的特徴から植栽痕の可能性が考えられる。この坑底ピットはSB547、SB560の主軸線上に位置しているが、その関係は不明である。

SK559（Ⅲ-339図）

土坑でM～N・4～5グリッドに位置する。重複するSD563、SE564、SK590に切れ、SK712を切っている。またSK589との新旧関係は不明である。平面形は不整形を呈し、南北500cm、東西550cm、確認面からの深さ88cmを測る。壁は蛇行し、床面は凹凸が著しく、壁際には根痕が集中する。覆土はレンズ状堆積を呈し、下層は暗橙褐色土、上層は黒褐色土を基調とする。遺物は出土していない。採土坑の可能性が指摘できる。

SK584（Ⅲ-349図）

ローム面で検出された土坑で、L～M・6～7グリッドに位置する。南側はSE484に切れ、西側はSK599、SD600を切る。平面形は楕円形を呈し、東西355cm、南北300cm、確認面からの深さ最大100cmを測る。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が著しい。坑底中央部にはドーナツ状の浅い落ち込みが認められる。覆土にはほぼ全域にわたってロームブロック、ローム粗粒が多量に含まれ、短期間で埋め戻されたと推測される。本遺構は平面形がほぼ円形を呈すること、坑底中央部にドーナツ状の落ち込みを有することなどの形態的特徴から、植栽痕と推定される。本遺構の東側にはD1a面帰属の植栽痕SK607が位置し、同時期に存在した可能性も考えられる。

SK589（Ⅲ-350図）

土坑でN4グリッドに位置する。SK590に切れ、遺存状態は1/2以下である。平面形は円形を呈すると推定される。残存部における確認面からの深さは約10cmと浅い。壁面、坑底ともに凹凸が著しい。遺物は出土していない。性格は不明。

SK590（Ⅲ-350図）

土坑でM～N4グリッドに位置する。重複するSK482、SK486、SE555より古く、SK559、SK589より新しい。またSE584との新旧関係は不明である。平面形は不整形を呈し、南北485cm、東西340cm、確認面からの深さ85cmを測る。壁面、坑底ともに工具痕による凹凸が著しい。覆土全体に

わたりロームブロックが多く含まれているが、7～9層にかけて焼土粒、炭化物が認められ、埋没途中で火災に遭遇した可能性がある。出土遺物の年代観は東大編年Ⅱ～Ⅲb期に比定され、被熱遺物も含まれていることから天和2年の火災によると考えられる。

SK712（Ⅲ-339図）

土坑でM～N・4～5グリッドに位置する。SK589、SK559に切られ、東壁から南壁にかけてわずかに遺存しているにすぎない。平面形は不定形と考えられるが、規模、性格ともに不明である。遺物も出土していない。

SK797、SK798、SU799（Ⅲ-351図）

SK797、SK798はJ～K・9～10グリッドに、SU799はK9グリッドに位置する。土坑で南側をSK798に削平される。平面形はL字形、断面形は長方形、東西222cm、南北183cm、深さ83cmを測る。

SK798は土坑で北側のSK797、南側のSU799を削平する。平面形は台形、断面形は台形で、東西170cm、南北160cm、深さ194cmを測る。断面観察から2基重複（SK798-1、SK798-2）していることが確認された。

SU799は地下室で北側をSK798に削平される。室部の平面形はL字形で東側に開口部を有し、西側に天井が残る。坑底に段差がある。東西260cm、南北304cm、深さ228cmを測る。

SK907（Ⅲ-352図）

M12グリッドに位置する。土坑で北側をSK3、東側を攪乱に削平される。西側はSP163、SB164、SP912、SK909、SK910に削平されている。平面形は不整形で坑底に長方形の浅い掘り込みがある。東西432cm、南北305cm、深さ35cmを測る。

SL480（Ⅲ-345図）

N6～7グリッドに位置する。重複するSK481を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、東西80cm、南北65cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは30cmを測る。覆土は褐色から暗黄褐色を呈し、木枠は確認されなかった。遺構の形状、覆土の様相から便槽と考えられる。

SL497（Ⅲ-345図）

N7グリッドに位置する。SK481坑底より検出された。平面形は直径60cmを測る円形を呈し、確認面からの深さ15cmを測る。覆土は暗褐色土を主体とし、桶枠は確認されていない。遺構形状、覆土の様相から便槽と推定される。

SP395（Ⅲ-353図）

ピットでP2～3グリッドに位置する。重複する遺構はなく比較的良好な状態で遺存している。平面形は隅丸不整長方形を呈し、南北約100cm、東西70～80cm、確認面からの深さ35cmを測る。壁面は上方でやや開き、下層覆土にはロームブロックが多く含まれる。また坑底には浅い落ち込みが認められ、遺構間は芯々で約120cmを測る。形態的には非常に類似性が高く一対の構造物として使用されたと考えられるが、性格は不明である。

SP439 (Ⅲ-325 図)

N8 グリッドに位置する柱穴で、ローム面で検出された。北側に隣接する SD438 を切って構築されている。平面形は長方形を呈し、東西 120cm、南北 55cm、確認面からの深さ 70cm を測る。坑底は東西にテラスを有し、礎石が設置された中央部が一段下がる。礎石には切石が使用されている。覆土はロームブロックを主体とする暗黄褐色土で上層には玉砂利が含まれる (2 層)。礎石上には幅 20cm を測る柱痕が認められる。攪乱の影響も受け、本遺構の周辺には関連する遺構は検出されなかったが、本遺構から東へ 19.6m に位置する SP14 と掘方形態が類似する。主軸方位は E-2°-S とやや東西方向からは南へ振れている。

第3節 加賀金沢藩下屋敷期

D1面の遺構

（5）D1面の遺構

D1面長屋建物基礎遺構群

本遺構群は、E面段階でSD803を地境溝として段切り造成された北側の下段に拡がり、南北方向の長屋建物7棟、東西方向の長屋建物1棟が検出された。そのうち東西方向の長屋建物（SB1611・SB1612）と南北方向最西端の長屋建物（SB429）は個別記載で述べるように表長屋と考えられる。内長屋に該当する6棟（西からSB1697、SB1772、SB1782、SB1780、SB1822、SB1812）は、間口2間、奥行き3間を基本とするが、表長屋の奥行きはSB1611・SB1612が4間、SB429が3間4尺を測り、礎石配置から間口を2間と想定しているが、4間の可能性も考えられる。

礎石には扁平川原石が使用され、根石はない。また掘方が確認されなかったことより、D2面からD1面へと本エリアの土地利用改変時に、計画的に礎石を配し、D1層によって固定されたと考えられる。礎石のなかには完全に埋設された箇所も認められ、D面焼土を覆土とする柱痕が検出され、使用された柱は2寸角であったことが確認されている（附図5の礎石上白塗りピット部分）。礎石表面には柱と符合させるための数字と柱位置を示す十字の墨出しが認められるものもある。東西列、南北列の礎石で囲まれた2間×3間を基本とする空間内には置き石、柱穴など東柱の痕跡を示す遺構は確認されていない。

南北方向の長屋建物配置は、SB1782を中心に長屋建物→排水溝を伴う路地→長屋建物→長屋建物→排水溝を伴う路地→長屋建物と、長屋建物に沿って南北方向の路地が4筋配置され、各長屋建物は路地面向かって戸口を持つ。これらの路地と排水溝は北端で東西方向の路地および排水溝に繋がる。排水溝構造は木枠を基本としているが、北端部で集束しSD1103に接続する部分では石組構造に変化する。そのほか長屋建物群に付属する施設として井戸3基、便槽2基、芥溜と推定される木組長方形土坑6基が確認された。以下、各々の施設について述べる。また、礎石配置状況から、1区画と考えられる空間を便宜上@室と呼称する。

SB1611・SB1612（附図6、附図7、Ⅲ-354～371図）

D1面検出の長屋礎石遺構群で唯一東西方向に伸びる長屋遺構で、黒多門邸北端に位置する。1、2室は中央診療棟地点調査時に検出された。検出された礎石は東西方向に4列並び、南北方向では南から6尺、4尺、4尺間隔で、東西方向は1間間隔で配置され、南から北へ「一」から「四」西から東へ昇順に柱番号が墨書されている礎石が確認されている。しかし西から5列目の礎石には「二ノ四」と書かれており、それから西方向へ逆算すると中央診療棟地点調査時に検出された最西端の礎石が「零」に該当することになり、最先端の南北列が別遺構か検討を残す。またSB1611において1室中央の礎石には「二ノ十五」2、3室境界柱列には「十八」の柱番号が認められる。両遺構間には石組溝SD1601、SD1603と、それに挟まれた硬化面があり、礎石を兼ねたSD1601東側側縁石とSD1603西側側縁石間は2間を測り、この間も含めてSB1612からSB1611にかけて通し番号が振られていることが確認された。

4列目以北はSD1103増築時の掘方掘削によって削平されている可能性があるが、SD1103はその増築時にD1面段階の天端石を外して積み直されたことが確認されている（下から3段目）。また石積み基礎の胴木は黒多門邸側のみ設置されていた。同様の様相は中央診療棟地点12号組石でも確認され、黒多門邸側の石積みに多くの荷重が掛かることを想定した工法と推定される。12号組石は本

地点 SD422 の延長であるが、SD422 では胴木が検出されていない。胴木の設置範囲は SB429（中央診療棟地点 2 号石列）に重なることから、SB429 の柱を兼ねていたと考えられ、SB429 が表長屋であったと考えられる。本遺構も同一の観点から、抜き取られた SD1103 の D1 面段階の天端石が本遺構の礎石を兼ねていたと推定され、4 列目の礎石からの距離は 10 尺を測り、奥行き 4 間の表長屋建物が想定される。また、柱番号が通して付されていたことから SB1611 と SB1612 は一連の長屋建物と位置付けられ、SD1601、SD1603 間の硬化面が SD1103 まで続くことから、この部分に門が設置されていたと推定される。

各区画の空間構成は、攪乱による不明部分を除き、ほぼ間口 2 間間隔で炉が存在する。ただし南北列の長屋における炉の分布は戸口から奥行きほぼ 1 間半までの範囲に設置されていたが、本遺構では東西礎石列南から 2、3 列目間、即ち戸口から奥行き 1 間を明けた空間に設置されている特徴が認められる。また SB1611-2 室で検出された、炭、米の貯蔵穴も南北列の長屋には観られない施設であり、内長屋の南北列長屋群とは異なる、間取り、居住者層が想定される。

SD1601、SD1603（Ⅲ-361～363 図）

SD1601 は 8 ラインを南北に伸びる溝である。北端部は SD1103 に接続し、南端は SB1782-5 室北端部で止まる。SB1611 に隣接する部分は石組にそれ以南は木枠構造をとる。溝幅は波打ち 25～60cm と不定である。また SB1782-1 室中央から 2 室南端部にかけて、約 50cm 西側に屈曲し張り出している。張り出し部東側は土間状に敷き詰められているが、西側の SR1857 のように玉砂利は含まれず、SB1782 側の影響によるものと考えられる。SB1782 の北側では SR1855 をやや西に傾斜して横断し、石組部分へと移行する。石組部は両側縁部ともに安山岩製の築石を 2 段積み重ね、破砕礫による裏込めが詰められている。下段は両側ともほぼ同サイズの築石が使用されているが、上段に関しては、東側縁には厚さ約 30cm の割石が使用されているのに対し、西側縁には厚さ約 20cm の扁平割石が使用されており、東西側縁石の上端レベルに約 10cm の比高差が生じている。側縁石の形状は基本的に四角錐台形を呈しているが、東側側縁石のうち南から 1、5、8、10 点目の築石に限り上面がほぼ平坦かつ水平に加工、設置されている。この 4 点の築石が位置関係から隣接する SB1611 の礎石として使用されていたと判断される。石積み下には切石片を再利用した凝灰岩の根石が敷き詰められている。東側石積み直下から幅約 30cm、高さ約 15cm を測る断面長方形を呈する空洞が検出された。一部に木片痕が残存していたことから、胴木痕と考えられ、掘方から杭痕が検出されていないので、根石によって四周を固め、固定されていたことが判る。掘方西側には坑底からの比高差 10cm、奥行き約 50cm を測るテラスが設けられているが、根石は溝部分全体にも敷き詰められ、テラス部付近まで拡がり、西側石積み手前約半分にかかる。溝部分の根石上には砂利層（Ⅲ-362 図 4 層）が堆積しており、その直上には焼土層（2 層）が堆積していることから砂利層が火災までの使用面と位置付けられる。

SD1603 は 7 ラインを南北に伸びる溝である。北端部は SD1103 に接続し、南端は SB1772-6 室南端部付近で止まるが、その延長線上で 9 室北端部から再び溝の存在が認められる。SB1612 に隣接する部分は石組にそれ以南は木枠構造をとる。木枠部は SR1857 西端部に接し、西側の SB1772 との間隔も約 30cm と接近しており、SB1697、SD1605 間などに認められた水場関連施設は存在しない。溝幅は 40～50cm とほぼ均一で直線的に伸びる。SB1772-1～3 室に隣接する部分では、壁際に破砕礫や瓦片を埋め込み補強を行っている。SB1772 北端部付近で東側を平行して伸びる SD1602 が合流する。さらにその北側で西側から東西方向に伸びてきた SD1608-1 が合流し、SR1855 を横断して石

組部分へ移行する。また攪乱による削平を受け、詳細は不明であるが、SB1612-6室南側に隣接するSD1703も接続していたと推定される。石組部分は安山岩の築石を西側縁では2～3段、東側縁では2段積み上げている。その結果、東西の側縁石上端レベルには約45cmの比高差が生じている。西側側縁石最上段の残存築石のうち南から3、6点目の築石のみ上面が平坦かつ水平に加工され、その位置関係よりSB1612礎石列の南から2、3列目の延長上に位置することが確認される。溝部分には長方形の切石が底石として使用されている。底石はSD1103築石石尻付近まで伸び、底石上面レベルとSD1103最下段築石上面レベルはほぼ一致するが、対応する築石の形状が四角錐台形状を呈していることから、底石からの連続性が認められず、天和3年のSD1103石積み増築時に排水口パーツが外され積み直されたと推定される。石積み下には切石片を再利用した凝灰岩の根石が敷き詰められている。SD1601同様、中央に胴木痕が認められ、胴木を固定する役割を担っていたと考えられる。但し根石範囲が西側側縁石下ではほぼ収まっている点でSD1601と異なり、根石が胴木固定を主目的として設置されたことを窺わせる。またSD1601と同様に、根石設置範囲の掘方が一段低い形状を呈している。

SD1601東側側縁石とSD1603西側側縁石の一部は各々隣接する建築遺構SB1611及びSB1612の礎石としての機能も併せ持ち、礎石間隔は芯々で田舎間2間を測る。また両石組溝間は、周辺の道路状遺構と同質の玉砂利を含む敲き占め面で形成されていることから、この場所に邸外へ通じる門が存在したと考えられる。

SB1612-2室（Ⅲ-354、364図）

SB1612の西から2番目にあたる区画で、A～B・3～4グリッドに位置する。区画内の西側大半は中央診療棟地点調査区に該当し、1号石列の延長にあたる。本調査区内では3室との境に位置する礎石1基とD1下面に帰属する炉が1基検出された。検出された礎石表面には十字の墨出し線と「二ノ四」の墨書が確認された。本建築遺構に伴う他の礎石表面に墨書された文字と比較から、この数字は柱位置を示す符号と理解でき、「二」は南から2番目、「四」は西から4番目の柱位置を表していることが確認される。但し、東西方向の数字「四」を逆算していくと中央診療棟地点1号石列で検出された最西端の礎石が「零」に該当し、中央診療棟地点2号石列・本地点SB429で構成される長屋建物との関連を考慮する必要がある。

SD1657 東西に長い長方形遺構で、SB1612-2室南側、B4グリッドに位置する。西側は中央（Ⅲ-364図）診療棟地点で1号石列（K面帰属）として取り扱われた石列遺構のうちG20～21グリッドに位置する切石配列部分に続く。北壁は中央診療棟地点1号石列から続く切石列で補強されていた。一方南壁は平瓦をほぼ垂直に立てて補強を施していた。いずれも東壁寄りでは壁際に瓦片、破碎礫が不規則な状態で検出された。南壁に使用された平瓦列は中央診療棟地点では壁際に埋もれ検出されていない。坑底は壁面補強施設の範囲内で比較的平坦で玉砂利を含むが、それ以东では明確な平坦面は認められなかった。ゆえに瓦片、破碎礫片が散乱状態で検出された東部は、掘方内の可能性も考えられる。覆土は砂粒を多量に含む暗灰褐色土である。坑底直上に砂を敷き詰めるあり方は、本遺構周辺のSK1698など木枠を有する長方形土坑に認められる。本遺構を溝と想定した場合、東側は立ち上がっているため、中央診療棟方面の西方向へ排水されることになるが、それも確認されていないことより、ゴミ穴の性格を有す長方形土坑の可能性も考えられる。

SF1863 SB1612-2室に帰属する炉で、B4グリッドに位置する。2室東壁に近接し、D1下面(Ⅲ-364図)で検出された。平面形は方形を呈すると考えられるが、西壁と南壁の一部が削平され、詳細は不明である。覆土は灰白色を呈す灰層が充填されているが、厚さ4cmと薄く上部も削平されたと考えられる。坑底中央に被熱痕が認められる。遺物は出土していない。

SB1612-3室(Ⅲ-355、364図)

SB1612西から3番目の区画で、A~B・4~5グリッドに位置する。区画内の大半が攪乱によって削平され、礎石は南から2列目の東西列のみ残存する。残存礎石のうち2室との境界にあたる西側礎石上には十字の墨出し線と「二ノ四」が、4室との境界にあたる東側礎石上には東西方向の墨出し線と「二ノ六」が墨書されている。また中央の礎石には十字の墨出し線のみが書かれているが、両側の礎石に書かれた数字から、中央の礎石が「二ノ五」に該当することが読み取れ、東西方向の数字は1間間隔の礎石単位で付されていることが判る。室内施設としては「二ノ六」礎石南東部に隣接して、ほぼ同一位置にD1下面に帰属するSF1864とD1面に帰属するSF1653の2基の炉が検出され、炉の作り替えが行われた結果と考えられる。「二ノ四」礎石の北側から攪乱によって削平されたSP1658が検出されたが、その位置から礎石の抜き取り坑の可能性もある。

SF1653 SB1612-3室に帰属する炉で、B5グリッドに位置する。3室東壁際で、戸口から奥(Ⅲ-364図)行き1間ラインに北壁がほぼ揃う位置に構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、南北95cm、東西70cm、確認面からの深さ6cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底にはこぶ状の細かい凹凸が認められる。覆土は淡褐色を呈する灰層が充填されている。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF1864 SB1612-3に帰属する炉で、B5グリッドに位置する。SF1653のほぼ真下にあたる。(Ⅲ-364図)掘方平面形は不整形を呈し、南北43cm、東西57cm、確認面からの深さ12cmを測る。覆土は2、4層が灰層で、壁際にしまりがやや強い暗褐色土が堆積する(3層)。2層との境界の斜度が強く、その状況から3層は土枠として壁際に貼り付けられた層序と考えられる。灰層上に堆積する暗褐色土は(1層)、本遺構廃絶時もしくはSF1653構築時の埋め戻し土と考えられる。遺物は出土していない。

SB1612-4室(Ⅲ-355、365、366図)

SB1612西から4番目の区画で、A~B・5~6グリッドに位置する。攪乱による削平を受け、南から2列目の礎石列のうち西側と中央のみが遺存していた。3室との境をなす西側礎石上は平坦に加工され、東西方向の墨出し線と「二ノ六」が墨書されていた。中央の礎石上には十字の墨出し線が墨書されている。室内炉は東壁際に1基(SF1619)、室内ほぼ中央に粘土枠の炉が1基(SF1618)検出された。そのほかに戸口から奥行き1間範囲内で土坑、ピットなどが検出されているが、性格は不明である。

SF1618 SB1612-4室に帰属する炉で、A5グリッドに位置し、4室ほぼ中央部にあたる。(Ⅲ-365図)面形は方形を呈し、粘土枠内規模は1辺38cm、確認面からの深さ16cmを測る。また掘方規模は1辺約50cmを測る。掘方壁面に淡褐色粘土を貼り付け、厚さ5~6cmの

粘土枠を形成している。枠内には枠高の約2/3程度の灰を充填している。灰層表面には被災時の炭化物層が堆積していることから、火災直前の灰堆積状況と考えられる。遺物は17世紀後半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SF1619 SB1612-4室に帰属する炉で、A～B・5～6に位置する。戸口から2、3番目礎石間、(Ⅲ-365図)本区画東壁際にあたる。平面形は不整長方形を呈し、南北80cm、東西65cm、確認面からの深さ10cmを測る。壁面の立ち上がりは比較的緩やかで、坑底にも凸凹を有する。覆土は灰層を基調とする。遺物は出土していない。

SK1651 SB1612-4室に帰属する土坑で、B5～6グリッドに位置する。4室東壁際にあり、(Ⅲ-365図)東側は攪乱によって削平されている。平面形は不整楕円形を呈すると考えられ、南北90cmを測り、確認面からの深さは10cmと浅い。2、4層の状況から炉の可能性も考えられるが、詳細は不明である。遺物は出土していない。

SK1652 SB1612-4室に帰属する土坑で、B5グリッドに位置する。平面形は東西方向に長軸(Ⅲ-365図)を有する長方形を呈し、西壁は隣接する礎石と重複している。規模は東西110cm、南北60cm、確認面からの深さ約15cmを測る。坑底中央を境に東側がテラス状に1段高い。西側坑底に1基、東側テラス部に南北並んで2基の小穴が存在する。性格は不明。遺物は出土していない。

SP1671 SB1612-4室とSR1855間、B5グリッドに位置するピットである。平面形は不整円形(Ⅲ-366図)を呈し、直径は45～50cmを測り、確認面からの深さは5cmと浅い。北側にはSP1672ともう1基小ピットが存在するが、関連性、性格ともに不明である。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SP1865 SB1612-4室に帰属するピットで、B5グリッドに位置する。柱穴と考えられるピット(Ⅲ-366図)で、掘方は持たない。D1層造成時にD2面上に扁平川原石の礎石を置き、その上に瓦片を敷き、D1層盛土と同時進行で礎石縁辺上に沿って瓦を立て、壁面もしくは柱の補強としている。検出時には瓦片囲い内は埋め戻されており、被災時にはすでに廃絶されていたと考えられ、D1下面帰属とした。帰属関係は不明である。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SB1612-6室 (Ⅲ-356、366図)

SB1612西から6番目の区画で、A～B・7～8グリッドに位置する。南半部の多くが攪乱による削平を受け、礎石は西側礎石列の2基を含む3基が検出されたのみである。西側礎石列残存礎石は南から3基目と4基目にあたる礎石で、3基目の礎石表面には十字の墨出し線と「三ノ十」、4番目の礎石表面には十字の墨出し線と「四ノ十」の墨書が認められる。この墨書から、東西方向の番号は3室でも確認されたように西から1間間隔の全礎石に振られていることが追認でき、また南北方向へは、南から北へやはり全礎石を対象に番号が振られていることが確認できる。特に南北方向は1-2基礎石間が6尺、2-3基、3-4基礎石間が4尺と礎石間隔にバラツキがあり、付された番号は距離を表

す数字ではなく、礎石位置を表していることが確認できる。東西礎石列南から2列目中央に残存する1基の礎石表面には十字の墨出し線がかすかに認められた。

本区画は東側に石組排水溝 SD1603 が隣接する。SD1603 の事実記載でも触れたように1間間隔で配置された東西礎石列の延長がSD1603 の西側側縁石上にあたる。西側側縁石の天端石は被災時に幾つか抜き取られているが、残存する天端石のうち、東西礎石列南から2、3列目の延長に対応する築石が他の築石と比較し平面形が方形に近く、上面が平坦に据えられていることから、6室東側壁ラインは、SD1603 西側側縁石上に存在していたと考えられる。

SX1677 SB1612-6室に帰属する遺構で、A6グリッドに位置する。5、6室境界礎石列の残存(Ⅲ-366図)する南から3基、4基間で検出された。5室遺構面は6室より1段低く、その段差を補強するように粘土が帯状に貼られている。壁材などの上部施設への関連は不明である。

SB1611-1室(Ⅲ-357、367図)

SB1611 西側から1番目の区画で、A~B・8~9グリッドに位置する。礎石は4基検出された。2室との境の南北礎石列のうち、南から2、3番目の礎石が攪乱によって遺存していないが比較的良好的な状態で検出された。南から2列目の中央部の礎石表面には十字の墨出し線が2箇所とそれに伴う文字が確認されている。そのうち建物軸線からずれている北側の十字線には「ろ□」の文字が、建物の軸線と符合する南側の十字線には「二ノ十五」の文字が確認された。本遺構の柱位置を示す文字が全て漢数字の組み合わせであることから、北側の「ろ□」は本遺構との関連性は認められず、礎石が再利用されたことを窺わせる資料と考えられる。また距離にして3間東に位置する2室と3室の境界南北礎石列には二番目の数字が「十八」と記されていることから、2番目の数字が東西方向の柱位置を示していることが確認でき、さらにこの数字はSB1612から連番で続いていることが確認できる。

また、SB1612-6室同様、隣接するSD1601の東側側縁石が柱位置「十五」から1間の距離にあたり延長上の側縁石表面が平坦に加工されていること、この側縁石を「十四」とした場合、SB1612から通し番号で数えられることから、SD1601東側側縁石が本遺構西端に該当すると考えられる。

本遺構の南側に隣接するSD1613は1室東部で凸状にクランクし、クランク部には切石が敷かれている。また切石南側にはSD1613を横断する炭化材片が検出され、切石に向けて溝に蓋をしていたと推定される。このような状況から、この部分が玄関にあたると推定される。内部施設には2基の炉が検出されたが、SF1655は覆土の様相から被災までに廃絶されたことが窺え、被災時にはSF1680が機能していた可能性が高い。

SF1655 SB1611-1室に帰属する炉で、B8グリッドに位置する。東西礎石列南から2列目の(Ⅲ-367図)北側、東寄りにあたる。攪乱によって東部を削平されており、全容は不明であるが、不整長方形を呈すると考えられる。南北幅は最大80cm、確認面からの深さ15cmを測る。坑底には直径約20cmを測る被熱痕が東西2箇所認められ、特に西側の被熱痕が顕著で中心部は白色化している。覆土は壁際で灰層が認められるが(2層)、上部には遺構全体に暗褐色土が堆積しており、遺構廃絶後に埋め戻されたと考えられる。遺物は出土していない。

SF1680 SB1611-1室に帰属する遺構で、A8グリッドに位置する。1室のほぼ中央に位置し、(Ⅲ-367 図) 平面形は不整長方形を呈し、東西64cm、南北52cm、確認面からの深さ12cmを測る。坑底は被熱により白色及び橙褐色に変色している。また特に西側に炭化した板材が集中して出土し、薪を用いて直火が焚かれた痕跡と考えられる。覆土は暗褐色を呈し、焼土粒、炭化材、灰粒が多量に含まれる。遺構内に灰を充填しないケースである。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SB1611-2室 (Ⅲ-357、367、368 図)

SB1611西から2番目の区画で、A～B9グリッドに位置する。礎石は1室との境にあたる南北列上で2基攪乱を受けている以外は、比較的良好な状態で遺存している。西側南北列南から4基目の礎石表面には十字の墨出し線と「四」、東側南北列南から1基目の表面には十字の墨出し線と「十八」、2基目の表面には「(一八)」、3基目の表面には十字の墨出し線と「三ノ十八」、4基目の表面には墨出し線と「十八」の墨書が認められる。この配列から本南北ラインは「十八」番目の柱筋にあたり、南から一、二、三と振られていたことが判る。SF1656北東部では遺構面直上から畳表と考えられる織り込まれた繊維質炭化材、その下に厚さ2～3cmの繊維質炭化材が検出され、室内には畳が敷かれていたことが確認された。室内施設は炉1基、貯蔵穴2基、土坑2基が検出された。貯蔵穴、土坑は戸口周辺に集中し、その周囲には明確な土間状敲击占め硬化面は認められない。唯一検出された炉(SF1656)も覆土堆積状況から火災前に廃絶された可能性が高く、2室には各区画の基本構成要素である炉、敲击占め硬化面が存在しない。よって本区画は隣接する1、3室のいずれかとつながって一つの居住区を形成していた可能性が高い。

SF1656 SB1611-2室に帰属する炉で、B9グリッドに位置する。東西礎石列2列目中央の北(Ⅲ-367 図)側に隣接し、室内中央やや戸口寄りにあたる。西側は攪乱によって削平されているため、形態、規模の詳細は不明である。覆土は2層が焼土を含む灰質層で、その直上に暗褐色土が堆積していることから、被災以前に廃絶され埋め戻されたと考えられる。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SK1659 SB1611-2室に帰属する土坑で、B9グリッドに位置する。戸口から奥行き1間西側1(Ⅲ-368 図)間範囲内に構築された2基の土坑の西側にあたる。平面形は長方形を呈し、東西85cm、南北70cm、確認面からの深さ23cmを測る。覆土の大半は火災時の焼土層で、被災時に開口していたことが確認される。壁面、坑底からは炭化した板材痕とそれに伴う釘が数点検出され、掘方内に木柵施設が埋設されていたと考えられる。板材上の炭化材層(2層)からは直径2～4cmを測る炭化材が多量に出土した。この炭化材は形状から炭の可能性が高く、本遺構は炭を貯蔵するための施設であったと考えられる。遺物は出土していない。

SK1660 SB1611-2室に帰属する遺構で、B9グリッドに位置する。SK1659の東側に隣接し、(Ⅲ-368 図)戸口から1間範囲の本区画ほぼ中央にあたる。平面形は長方形を呈し、東西約70cm、南北約120cm、確認面からの深さ35cmを測る。掘方は北壁がオーバーハングしている以外はほぼ垂直に立ち上がり、坑底はわずかに波打っている。掘方内よりほぼ同規模の

炭化した木杵が検出された。さらにその内側にも木杵が検出された。内側の木杵底板は外側の木杵底板の直上にあり、底板、側板の拡がりも遺構の北半に偏在することから、外側木杵と異なる木杵施設の存在が確認できる。この内側木杵内から大量の炭化米が検出された。内側木杵南寄りでは一粒一粒の形を残していたが、北壁寄りでは原形をとどめずアメ状の固まりと化していた。炭化米の範囲と内杵の範囲がほぼ一致することから、内杵は米櫃の可能性が考えられる。炭化物層直上の2層は被災時の焼土層、1層は焼土粒を多量に含むもののロームブロック、ローム粒が含まれていることから火災後造成時の堆積土と推定される。炭化物以外には遺物は出土していない。

出土炭化物に関して、DNAなどの化学分析を試みたが、残念ながら品種を特定できるような成果は得られなかった。

SB1611-3室（Ⅲ-358、369図）

SB1611西から3番目の区画で、A～B・9～10グリッドに位置する。南から2列目の東西礎石列の中央、東側礎石が攪乱によって削平されている以外は比較的良好な状態で検出された。2室との境界にあたる西側南北礎石列には「十八」の墨書が、4室との境界礎石列には南から4番目の礎石に十字の墨出し線と「四ノ廿」の墨書が認められる。屋外施設では間口西側で建物とSD1613にはほぼ隣接して、スノコ状の木組遺構SX1695が構築され、その東側には敲击占め硬化面基礎SX2076が存在し、東側に玄関施設、西側に水場関連遺構が設置されていたことが確認できる。室内からは炉が3基検出されたが、そのうちSF1678は粘土杵内が暗褐色土で埋め戻されていたことから、被災時にはSF1615、SF1617の2基が機能していたといえる。またSF1617は4室に帰属するSF1618と接していることから間仕切り壁に接して構築されていたと考えられる。

SF1615 SB1611-3室に帰属する炉で、A10グリッドに位置する。本区画内の中央やや北寄り（Ⅲ-369図）にあたる。北壁はSD1103増築時に削平され残存していない。平面形は1辺約40cmを測る正方形を呈し、確認面からの深さ13cmを測る。覆土上半に純灰層が堆積している。また東西両壁の外側には土手状に低く暗褐色土を盛って杵を形成している。遺物は出土していない。

SF1617 SB1611-3室に帰属する炉で、B10グリッドに位置する。4室との境に接し、南北礎石列2、3基目間にあたる。南側が攪乱によって大きく削平されている。平面形は正方形を呈すると考えられ、確認面からの深さ15cmを測る。掘方は壁際に幅8cmを測るテラスを有し、坑底から壁面にかけてローム粒を含む淡褐色粘質土を貼り付け、杵を形成している。杵内には下層に暗灰褐色～黒褐色土、上層に灰褐色灰層が堆積し、覆土表面には被熱痕跡が認められる。この状況はSF1615と共通する。遺物は出土していない。

SF1678 SB1611-3室に帰属する炉で、B9グリッドに位置する。2室との境界にほぼ接し、（Ⅲ-369図）南北柱列2、3基目間にあたる。平面形は長方形を呈し、東西65cm、南北80cm、確認面からの深さ20cmを測る。北壁、東壁から坑底にかけて厚さ約15cmを測る灰褐色粘質土（7、8層）を貼り付け杵を形成している。杵内には補強材として瓦片を入れている。粘土杵坑底上ほぼ中央に橙褐色から灰白色に変色した被熱痕が認められる。粘土杵内に

は下層に灰層、上層に茶褐色土が堆積していることから、本遺構は被災以前に廃絶されたと考えられる。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SX2076 SB1611-3室とSD1613間に構築された敷石遺構で、B10グリッドに位置する。南側（Ⅲ-369図）東西礎石列の中央と東側礎石間にある。南東角を除く三隅に切石を配し、切石間には破砕礫、川原石、玉砂利、瓦片、摺鉢片が敷き詰められている。切石のうち北東角、南西角の切石表面は露出していた。北西角の切石は隣接するSX1695板材下にある。これらの敷石は敲击占め硬化面に覆われていることから、土間状敲击占め硬化面基礎と判断され、本区画の玄関施設と考えられる。

SB1611-4室（Ⅲ-358、370図）

SB1611西から4番目の区画で、A～B・10～11グリッドに位置する。5室との境界部分東側礎石列は南端の1基を除き、攪乱によって削平もしくは調査区外に至るため確認されていない。また南側礎石列中央礎石は被災直後に抜き取られていることが確認された（SK1691）。戸口とSR1855間には切石をコの字状に敷き詰めたSX1757が存在し、この部分が玄関にあたりと考えられる。屋内施設では炉が2基存在するが、SF1875はD1下面より検出されており、SF1875からSF1616への変遷が考えられる。

SF1616 SB1611-4室に帰属する炉で、B10グリッド、戸口から1間入った西壁際に位置する。（Ⅲ-370図）掘方平面形は不整長方形を呈し、東西85cm、南北最大105cm、確認面からの深さ最大17cmを測る。西壁には瓦片を芯材とした粘土枠が設けられている。坑底北側には浅い落ち込みがあり、中央から西壁にかけて顕著な被熱痕が認められる（4層）。また坑底南側には丸瓦を向かい合わせて立たせた施設があり、やはり中央部から西壁にかけて顕著な被熱痕が認められる。この状態から丸瓦は五徳として設置されたと推定される。覆土の堆積状況から5、6層は構築時の整形土と考えられる。本遺構は焼土の分布範囲が西側に偏っていることからカマド跡の可能性も指摘できる。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF1875 B10～11グリッドに位置する。D1層掘削中に検出された遺構であり、SB1611が被災した時点ではパッキされ廃絶していたことが確認されている。南側の一部が攪乱される。残存している平面形は長方形を呈し、規模は東西83cm、南北70cm、確認面からの深さは11cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。坑底は外周および中央部が全体よりやや窪み、中央部は火熱により赤色硬化している。覆土は白色灰層が主体である。出土遺物は陶磁器土器の細片のみである。

SK1691 SB1611-4室に帰属する遺構で、B10グリッドに位置する。平面形は不整楕円形を呈し（Ⅲ-370図）、東西95cm、南北60cm、確認面からの深さ14cmを測る。本遺構は南側礎石列の中央にあり、礎石の抜き取り痕と考えられ、覆土には多量の焼土が含まれていることから、火災直後に抜き取られた可能性が高い。遺物は17世紀後半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SX1674 SB1611-4室に帰属する遺構で、B10グリッドに位置する。戸口から奥行き1間、中(Ⅲ-370図)央礎石西側の範囲で、軒丸家紋瓦片、丸瓦片、平瓦片を不規則に敷き詰めた遺構である。地表面を約10cm掘り下げ、瓦片を敷き詰め、黄褐色粘質土が盛土されている。その様相から土間と推定される。瓦以外の遺物は含まれていない。

SB1611-5室 (Ⅲ-359、371図)

SB1611西から5番目の区画で、A～B11グリッドに位置する。区画の大半が調査区域外に及んでいるため、詳細は不明である。本区画を間口2間の単位と考えた場合、SD1846を構成する西側縁石列が東西礎石列中央部分に該当し、溝が床下を通ることになるため、SD1846を東端とする可能性も考えられる。

SD1846 南北方向に伸びる石組溝で、B～C11グリッドに位置する。南端部はSK3によって(Ⅲ-371図)削平され、詳細は不明であるが、位置関係からSD1613、SD1832が合流すると考えられる。本遺構はSR1855それに続きSB1611を横断し、北端部は調査区域外に至るが、SD1601、SD1603同様にSD1103に合流していると考えられる。使用された側縁石形状には板状、方形、四角錐台形などバリエーションがあり、転用もしくは再利用石を使用して構築されたといえる。そのうち西側側縁石板状切石裏側に使用された南北70cm、東西50cmを測る平面長方形の切石は(グレー網掛け部分)、上面が平坦かつ水平状態で設置されていることからSB1611の最南列礎石として共用されていた可能性が高い。

SF1654 SB1611-5室に帰属する炉で、A～B11グリッドに位置する。5室ほぼ中央にあたる(Ⅲ-371図)る。東側の一部が調査区域外になり、全容を把握することはできなかったが、隣接するSD1846との位置関係から南北に主軸を有す隅丸長方形を呈していると推定される。南北長は90cm、確認面からの深さ10cmを測る。北壁、東壁に灰褐色を呈す粘土枠が認められる。1層は灰層で2層上面に被熱痕が認められることから、2層が堆積した状態で使用されていたと考えられる。また本遺構直下にはSD1846の裏込め石が位置している。

SB429 (附図6、附図7、Ⅲ-372～378図)

本遺構は、D1面礎石建物群のなかで、南北に伸びる一群の最西端、黒多門邸西側境界部、B～K・2～3グリッドに位置する。礎石配置状況から12室の区画が想定されるが、そのうち1～7室が中央診療棟地点調査区域内に含まれる。また8、9室と10室の西側も同地点調査区域内に位置するが、攪乱による削平を受け遺存していない。本地点では、9、10室の東側一部と11、12室が調査対象となった。礎石配置は東から1列目と3列目の南北列のみ芯々江戸間1間間隔で設置され、それ以外の列は2間間隔で設置されている。また東西列は大小の礎石を交互に配置し、基本的に大形の礎石には扁平川原石が、小形の礎石には破碎礫、または切石転用石が使用されている。大形礎石間は東から芯々で6尺、8尺を測り、小形礎石は各々その中央に置かれている。12室北西部の礎石表面には「ろ廿五」、11室北側中央の礎石には「に」の墨書が認められ、西から東に向けて、い、ろ、は…と割り振られていることが確認され、「ろ廿五」礎石は西から2番目に位置していたことが判る。また「廿五」に

関しては、本遺構がSD458北側を南端としていることから北から割り振られていると考えられるが、1間間隔で北側へ逆算していくと検出礎石最北端に当たる1室北側の礎石列が「三」の位置に対応することから、本建物は北側へもう2間分存在した可能性も考えられる。

ところで、本遺構東側に並ぶ南北方向の建築遺構礎石配置は、南北2間、東西3間を基準として区画されているが、本遺構と北側の東西方向礎石建物SB1611およびSB1612のみ、1単位の長軸方向の礎石が独自の配置構造を呈している。これは部屋の間取り、礎石に掛かる荷重に起因していると考えられる。また先述したように検出された礎石の最西端が「ろ」と記されていることから、本来はもう一列西に本遺構に伴う礎石が存在したことが考えられる。すなわち大形礎石と小形礎石が交互に配された東から3点目と5点目の大形扁平川原石の礎石間隔8尺幅を西へ延長するとSD422の延長である中央診療棟地点12号組石東側側縁石上に該当する。中央診療棟地点12号組石は間知石による側縁石と切石による底石で構成されているが、東側側縁石のみ基礎構造に胴木を使用している。これは東側側縁石の土台を強固にするための基礎構造と理解され、西側に対して大きな荷重が掛かっていたことを示している。この片側胴木構造は、側縁石の一部を礎石として兼用したことが確認されたSB1611、SB1612においても認められることから、本遺構西端部礎石は藩邸地境としての機能も併せ持つ12号組石上に存在していたと考えられる。ただし、12号組石の東側側縁石は間知石の上端の形状と断面観察から天端石が抜き取られていたことが指摘され、対応する礎石は確認されていない。しかし、上述した状況から、本遺構は富山藩邸表門に続く道に面した表長屋であったと考えられる。

本遺構とSR1856の間には、5、7、9室各東側に土間状の硬化範囲と流し状の木柵施設が存在し、特に5、7室前では硬化範囲の東道路側に玄関石と推定される長方形切石が埋設されている。6、8室前は攪乱による削平を受け、施設の存在を確認することはできなかったが、SD1605からSR1856を横断する排水溝が、1～10室までは各室毎に伸びていることから、間口2間単位で排水を必要とする施設が存在した可能性が高い。

SB429-5室（Ⅲ-372、375図）

SB429の北から5番目の区画で、E～F・2～3グリッドに位置する。室部北東隅に礎石が1基、附帯施設として室部東側のSR1856との間にSX1669とした材を使用した遺構、SX1670とした土間状遺構と溝状遺構から構成される遺構が確認される。5室の東側附帯施設は間口2間幅全てを占めていること、またSX1670南東部からSX1669北東部にかけて入口に伴うような長方形の切石が南北に2基確認されたが、これらの切石のすぐ西側には礎石抜穴が確認されており、そのような柱位置正面に入口を設置するとは考えにくい。5室に隣接する6室北東隅の礎石抜き取り坑付近には、方形の切石と玄関を想定させる硬化面が検出されており、5室と隣接する6室と合わせて間口4間で1区画のような室部利用形態であった可能性も考えられる。

なお5室のSX1669、SX1670のような附帯施設を有す室部がSB429には7室、9室と1部屋おきに確認されており、これら2室についても5室同様、隣接する8、10室と合わせて間口4間で1区画という室部利用形態であった可能性もある。

SD1610 SB429-5室東端部に位置するSX1669に隣接する溝状遺構で、E～F3グリッドに位置する（Ⅲ-375図）。溝幅は45～60cmを測り、中央部がやや膨らむ。壁面、坑底には炭化した板材痕が認められることから、木柵構造であったことが読み取れる。東壁ほぼ中央部にSD1608-5が接続する。SX1669→SD1610→SD1608-5の坑底レベル差は約10cmを

測り、SX1669 から SD1608-5 へ向けて階段状に低くなる。SX1669 は坑底にスノコ状圧痕が認められたことや周囲の一部に壁材と推定される炭化材が検出されたことから木組遺構と捉えられ、長屋建物の入口部に構築されていることより流しなどの水場関連遺構と考えられる。よって本遺構は SX1699 で発生した排水を受け止め、SD1608-5 へ流し込む排水補助施設と推測される。

SX1669 SB429-5 室に帰属し E～F3 グリッドに位置する遺構である。南側は攪乱される。
(Ⅲ-375 図) SB429-5 室東側、SD1610 と隣接している。5 室の東側柱筋中央から南端の礎石抜き穴までの硬化面上に南北方向に炭化材が 2 本直交するような状態で釘とともに検出された。炭化しているため材が丸太状のものであったのか、あるいは板状のものであったのか不明であるが、遺存している炭化材はともに幅約 10cm、長さ 70～80cm を測るものである。また炭化材の延長線上と、平行するように幅約 10cm の細い溝のようなものが、南北方向に 2 条約 40cm 間隔で検出された。深さ約 4～8cm を測り、掘方は持たない。覆土は焼土粒や炭化物を多く含む。残存状況や規模などから炭化材と同じく材の痕跡である可能性が高く、硬化面 (D1 面) 上に縦横に材を組んだ構造物であったと推定される。なお本遺構は東側に近接する SD1610 に向かって傾斜しており、排水を意識した施設であった可能性もある。また本遺構南端に 1 辺約 6～8cm の方形の杭穴が約 60cm 間隔で東西方向に 2 基確認されたが、炭化材などとの関係性は不明である。本遺構に関連するというよりも SB429-5 室という長屋建物自体に関係のある杭穴か。ちなみにこれら杭穴とはほぼ相対する位置 (本遺構北側に近接する SX1670 の北側) にも同サイズの杭穴が 2 基検出されている。遺物は出土しなかった。

SX1670 SB429-5 室に帰属し E3 グリッドに位置する。SB429-5 室東側柱筋と SR1856 との間
(Ⅲ-375 図) に構築された、土間状遺構と溝状遺構から構成される遺構である。灰白色粘土、砂利などにより東西 194cm、南北 170cm の範囲を土間状に硬化させ、その南東隅に長辺 58cm、短辺 24cm の長方形の切石が敷設された部分と、北東隅に幅約 40cm、深さ約 5cm の溝状を呈す部分があることが確認された。溝状部分のみに炭化物が集中する状況が確認されたが、この炭化物はごく薄く拡がっており、それを除去したところ北側に釘が立った状態で 6 本確認された。またこの溝状部分が SD1608-4 にまで続くことも判明した。材を釘で固定するような構造物があった可能性もある。なお溝状部分に近接して瓦片の集中がみられるが、その関係性は不明である。土間状遺構を半截したところ、本遺構南側に近接する SX1669 の炭化材検出面から約 10cm 掘削し、灰白色粘土を主体とする覆土で坑底、壁面を充填し固め、土間とした範囲 (Ⅲ-375 図彩色部分) 付近のみ粘土上に砂利を敷き更に突き固めた構造が確認された。先述した溝状部分に伴うと考えた瓦片もこの土間状部分を構築する灰白色粘土に埋まった状況が確認されている。SX1669 と同じく排水を意識した構造を有す遺構である。遺物は瓦のみである。

SB429-6 室 (Ⅲ-372 図)

SB429 の北から 6 番目の区画で、F～G・2～3 グリッドに位置する。6 室では室部東側に礎石抜き取り坑が 3 基検出され、うち北東隅の礎石抜き取り坑際には、方形の切石が敷設され、その周囲が

土間状に硬化した状況も確認され、この付近が入口であった可能性がある。なお5室で詳細は触れたが、周囲の状況から長屋の利用形態としては6室と近接する5室と間口4間で1区画のような利用状況であった可能性も考えられる。

SB429-7室（Ⅲ-373、376図）

SB429の北から7番目の区画で、G～H・2～3グリッドに位置する。7室では室部北東隅に礎石抜き取り坑が1基、そのすぐ東隣に附帯施設としてSR1856との間にSX1663とした北側が方形プランと炭化材、南側が土間状硬化面で構成された遺構が検出されている。土間状硬化面からは方形の切石が東西に2基確認された。いずれも硬化面に埋まった状態で確認されるが掘方は持たず、土間状硬化面を構築する際に同時に据えたものと判断される。SR1856から7室へ入る入口施設と推定される。

SX1663 F～G3グリッドに位置する遺構である。SB429-7室東側、SD1608-6との間で確認（Ⅲ-376図）された。SB429-9室東側で検出されたSX1662と似た構造で、北側が方形プランと炭化材、南側が土間状硬化面という2つの形態から構成される。北側の方形プランは、東西90～100cm、南北100～130cm、確認面からの深さは20cmを測る。方形プランの中央寄りやや西に南北に細い「L」字状の窪みと、局所的に炭化材が検出された。方形プランの北東隅はSD1608-6と接続することから、SX1662同様、排水を意識した施設と考えられる。南側の土間状硬化面は不整形を呈し、規模は東西120cm、南北74～110cmを測る。北側の方形プランの間と、SD1608-6の間には切石が設置されている。土間状硬化面を半截したところ、壁際に切石を並べた南北方向に伸びる溝状遺構が検出された（Ⅲ-376図薄いグレー）。この溝状遺構は東西66cm、南北74cm、確認面からの深さは26cmを測る。土間状硬化面は溝状部分を埋めながら両側の切石を覆うように覆土を盛り上げ固めている様子が確認された。遺物はごく少量の陶磁器、土器が出土しているのみである。

SB429-9室（Ⅲ-373、376図）

SB429の北から9番目の区画で、H～I・2～3グリッドに位置する。9室では室部北東隅に礎石が1基、その1間南側に礎石抜き取り坑と考えられる窪みを1箇所検出している。また附帯施設として室部東側のSD1606との間に北側が方形プランと炭化材、南側が土間状硬化面から構成されるSX1662が検出されている。土間状硬化面に方形の切石を伴うが、その切石の西側にSB429の建物に伴う礎石またはその抜き取り坑があることから、この切石が入口に伴う石とは考えがたい。9室の南側に隣接する10室の北東隅にも長方形の切石が東西に2個並んだ状態で検出されており、5室同様、室部の利用形態として隣接する10室と合わせて間口4間で1区画を構成した状況であった可能性もある。

SX1662 H3グリッドに位置し、SB429-9室東側、SD1606との間で確認された遺構である。2（Ⅲ-376図）つの形態からなる遺構であり、北側は1辺約100cm四方の範囲内に幅20～30cm、長さ90～100cmの炭化材が東西方向に2本検出され、更にその炭化材に直交するように溝状の浅い窪みを確認した。この炭化材を設置するための掘方などは確認されなかった。炭化材の長辺端部では、釘が約10cm間隔で東西方向に遺存していた。以上のことから木製の箱状のものが設置されていたことが推測される。炭化材の東端部付近から、本遺

構の東側に近接する SD1606 に接続する形で幅 34cm（南北）、長さ 46cm（東西）の溝が伸びており、排水を意識するような施設であった可能性が高い。その南側は土間状に硬化し、部分的に玉砂利が敷かれている状況が確認された。なお全体的に南側の土間状部分が炭化材がある北側よりわずかに高い。遺物は土間を構築する灰白色粘土層からごく少量の陶磁器、土器が出土している。

SB429-10 室（Ⅲ-374、377 図）

SB429 の北から 10 番目の区画で I2～3 グリッドに位置する。10 室では室部南端の東西柱筋に礎石が 2 基遺存している。また SK1655 は礎石抜き取り坑と考えられる。屋内附帯施設として SF1666、SF1667 とした炉状遺構が 2 基検出されている。

なお 5、9 室で述べたように、附帯施設などの検出状況などから 9 室と 10 室と合わせて間口 4 間で 1 区画のような利用形態であった可能性も考えられる。

SD1664 SB429-9～10 室の東側を南北に伸びる溝状遺構で、H～I3 グリッドに位置する。（Ⅲ-377 図）溝幅は不定で全体的に不整形な造りである。南端部は SB429-10 室南端とほぼ揃い、そこから北へ伸び 9 室南端部付近でやや東寄りに向きを変え、SD1606 に接続する。比較的溝幅が安定する中央部には川原石、切石による側縁石が埋め込まれている。特に北寄りに位置する大形切石による側縁石は、上面が平坦に据えられており、隣接する SB429-10 室への入口施設としての性格を兼ね備えていたと推定される。覆土上層には被災痕跡が認められない瓦片が多量に含まれていることから、溝としての機能は火災以前に終わり、火災時には埋め戻されていたと推定される。また本遺構周囲には水場関連施設は認められず、性格は不明である。

SF1666 I2～3 グリッドに位置する。南東隅が攪乱される。10 室と 11 室との境、東から 4（Ⅲ-377 図）列目の礎石のすぐ東側で検出された。平面形は長方形を呈し、残存する規模は東西 190cm、南北 110cm、確認面からの深さは 28cm を測る。壁は坑底より「ハ」の字状に開いて立ち上がり、断面形はごく浅い逆台形を呈す。中央部分は長方形のピット状に一段窪み、この部分の壁や坑底には不規則な凹凸が顕著にみられる。坑底中央付近に火熱により赤色硬化した痕跡が 1 箇所確認された。遺物はごく少なく、陶磁器、土器では輪積成形の塩壺破片が出土しているのみである。

SF1667 I3 グリッドに位置する。SF1666 の東側に近接して検出された遺構である。南西隅が（Ⅲ-377 図）攪乱される。残存する規模は東西 112cm、南北 110cm、確認面からの深さは 12cm を測る。断面形はごく浅い皿形を呈す。覆土は炭化物などをやや多く含む層（2 層）や、灰質土層（3 層）からなるが、火熱した痕跡は確認されなかった。SF1666 に近接して構築されていることを考慮すると、炉というよりは一時的に灰などを溜めた穴か。遺物は出土しなかった。

SB429-11 室（Ⅲ-374、378 図）

SB429 のうち、北から 11 番目の区画で、I～J・2～3 グリッドに位置する。北東部は中央診療棟

地点調査区域内にあたる。西側にはSD422 東側側縁石裏込めに対比されるSB727が隣接する。南北列の東端と東から3列目の間口中央と、10室区画境東から2、3点目の礎石は抜き取られたためか確認されなかった。附属施設として炉状遺構3基、ピット3基が検出されている。炉状遺構は東から3列目礎石列の西側、11室区画の南半部に分布する。ピットは炉状遺構の西側に分布する。

SF423 SB429-11室に帰属する炉状遺構で、J2グリッドに位置する。SF471と重複し、それ（Ⅲ-378図）より新しい。平面形は長方形を呈し、東西48cm、南北38cm、確認面からの深さ8cmを測る。覆土はほぼ全体的に灰褐色土を呈する灰質土で充填され、下方は被熱して赤化している（2層）。遺物は出土していない。

SF428 SB429-11室に帰属する炉状遺構で、J2～3グリッドに位置する。平面形は方形を（Ⅲ-378図）呈し、東西70cm、南北75cm、確認面からの深さ13cmを測る。西壁を除く三方にテラスを一段有す。覆土は質差は認められるものの、全体に灰が充填され、坑底中央部の下方覆土が被熱によって橙褐色に変色している（4層）。遺物は出土していない。

SF471 SB429-11室に帰属する炉状遺構で、J2グリッドに位置し、SF428に隣接する。平（Ⅲ-378図）面形は不整長方形を呈し、東西70cm、南北55cm、確認面からの深さ13cmを測る。坑底中央部がやや下がっている。覆土はほぼ灰質土で充填され、坑底中央部直上覆土が被熱して橙褐色に変色している。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SB429-12室（Ⅲ-374、378図）

SB429最南端の区画で、J～K・2～3グリッドに位置する。西側にはSD422 東側側縁石裏込めに対比されるSB727が隣接する。使用された礎石は3箇所では抜き取られていた（11室との境界ライン上の2箇所とSK441）。間口2間の北側1間部分に間口方向に長軸を有す切石が2点二の字状に埋設されている。切石周囲の盛土は玉砂利を含み固く締まっており、この部分が入口施設の可能性がある。11室境界際の奥行きほぼ中央部付近に、炉状遺構が1基検出されている。

SF437 SB429-12室に帰属する炉状遺構で、J2グリッドに位置し、12室北側境界にはほぼ隣（Ⅲ-378図）接して構築されている。平面形は不整長方形を呈し、四周に浅いテラス部が付設されている。テラス部内側の規模は、東西58cm、南北42cm、確認面からの深さ7cmを測る。覆土は灰白色～灰褐色を呈する灰で充填されている。またテラス部は炭化材片を伴う灰褐色土でしまりが強く、壁面補強施設の可能性も考えられる。遺物は出土していない。

SK441 本遺構はSB429-12室礎石抜き取り坑で、J～K・2～3グリッドに位置する。平面（Ⅲ-378図）形は不整形を呈し、東西47cm、南北45cmを測る。断面形は楕円状を呈し、確認面からの深さは最大20cmを測る。覆土は焼土層で、D面焼土層に対応することから、火災後の瓦礫整理時に礎石が抜き取られたと考えられる。遺物は被熱した陶磁器類が少量出土している。

SB1697 (附図6、附図7、Ⅲ-379～390図)

南北に伸びる礎石建物遺構で、C～J・4～6グリッドにかけて位置する。西側にSR1856、SD1605、東側にSD1604が隣接する。建物規模は、江戸間を基準尺度とし東西3間、南北18間を測り、南北4列のうち、中2列が2間間隔で配置されていることより、間口2間奥行き3間を単位とした9区画で構成されていたと考えられる。そのなかで4室のみ東側に奥行き4尺の張り出し部が併設されている。各単位には西側から奥行き1間半の範囲に炉状遺構、土間状硬化範囲が構築されている。硬化範囲が建物西側に偏在していること、隣接する道路状遺構がSR1856のみであることから、本遺構は西側を正面とする長屋建物であることが判る。またSD1605とはSE1706北側で180～220cm、南側で130～150cmの間隔を有し、その間には硬化範囲や水場関連施設と考えられる木柵遺構(2室前南側、5室前北側)が構築されている。

礎石は地中に埋設され、礎石表面がかろうじて露出する箇所と、地表下14cmに埋設された箇所などがある。いずれの礎石も掘方を有していないことから、D1層造成時に計画的に配置され、整地層によって固定されたことが窺われる。また9室南西角の礎石のように、地表下に埋設された礎石上には柱痕が認められる例があり、遺存状況が良好な事例から2寸角の角材が用いられていたことが確認される(附図7、U-U'最西端、K-K'南から3基目)。礎石レベルは南から北に向かって緩やかに下がっているが(附図7、K-K'、L-L')、これは埋没谷の影響による地盤沈下の可能性と考えられる。

SB1697-1室(Ⅲ-379、383、384図)

SB1697のうち最北端の区画で、C～D・4～6グリッドに位置する。約50cm西方にSD1620が位置し、その南端は1、2室境界柱筋とほぼ一致していることから、1室で生じた生活排水を流す目的で構築されたといえよう。使用された礎石は攪乱によって2箇所消失しているが全体的に遺存状態は良好である。北西角の礎石南側から壁面想定ライン東西両側に炭化した板材痕が検出され、建物に付随する木柵遺構が存在したと考えられる。その南側には長辺65cm、短辺約30cmを測る切石が、建物に接して埋設されている。そこから建物内には約1間四方の土間状敲击占め硬化面が広がっており、この切石が戸口の敷石であったと考えられる。切石の南側にも建物、溝間に炭化した板材が残存しており、なんらかの付帯施設があったことが確認される。敲击占め硬化面には、戸口から奥行き約半間に溝状の浅い落ち込みが南北に伸び、その南端には川原石が埋設されており、間仕切り施設の可能性が指摘できる。またこの溝を境にして室内側の硬化面はやや凹凸が認められるのに対し、戸口側の硬化面は非常に平滑かつ丁寧に仕上げられている。特に敷石から続く北側で顕著である。硬化面の北側には方形を呈する炉が東西に2基構築されているが、構造が異なることから、前後関係を持つと考えられる。また東側の炉は瓦片を炉芯構造材に利用しているが、その北側にも壁際まで敲击占め硬化面の芯材として瓦片が埋設されている。北壁には柱筋に沿って帯状の硬化面が伸びている。西から2基目の礎石上に認められた柱痕より、帯状硬化面は柱の北側を通っていることが確認される。また最西端の礎石から2基目の礎石間には帯状硬化面の南端に沿って杭痕と考えられる小穴がほぼ等間隔で2基存在し、壁下の土台状施設と推定される。一方、2室との境界の柱筋にも西から2基目の礎石付近まで帯状硬化面が認められ、さらに2基目の礎石東西両側には幅数cmの溝が伸び、壁構造との関連が考えられる。炉は先述した2基の他に奥壁際に土師質角火鉢を埋設した1基が存在する。さらに土間状敲击占め硬化面、瓦片埋設炉、瓦片埋設硬化面の下から3基が検出されており、室内構造や炉の改築が行われていたことが確認される。

SF1699 SB1697-1室に帰属する炉で、C4～5グリッドに位置する。東側に重複するSF1700（Ⅲ-383図）より新しい。掘方平面形は1辺80cmを測る方形を呈す。壁際には灰褐色粘土を貼り付けて枠を構築している。また東西両枠内には補強材として瓦片を直立した状態で埋設している。坑底中央には直径約20cmを測る橙褐色に変色した被熱痕が認められ、粘土枠形成後に直火が焚かれたことを物語っている。粘土枠内は1辺60cmを測り、灰褐色を呈する灰層が充填されているが、中央部がやや落ち込んだ状態で検出されている。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF1700 SB1697-1室に帰属する炉で、C5グリッドに位置する。西側に重複するSF1699より古い。掘方平面形は1辺90cmを測る不整形方形を呈す。掘方内には坑底、壁面ともに瓦片を敷き詰め、暗褐色～灰褐色土で地固めした上に、2～3cm厚の黄褐色ローム土を貼り、坑底を皿状に成形し、枠を形成している（5、6層）。坑底には直径約20cmの赤化した被熱痕が認められるが、その中央部分はさらに白色に変色している（5層）。枠内にはローム粒を含む褐色土が充填されているが、ローム枠直上に約5mm厚の灰層が堆積していることから、廃絶時に本来充填していた灰層を掻き出し、褐色土で埋め戻したと考えられる。また、西側で重複するSF1699は、本遺構の枠形成土を切っていることから、SF1700からSF1699へ変遷したことが窺え、火災時にはSF1699が、本居住区の調理施設として機能していたことが判る。また、基礎構造に使用された瓦片は、本遺構北側にも拡がり、敲击占め硬化面の基礎構造物材として約半間四方の硬化面を形成している。遺物は出土していない。

SF1708 SB1697-1室最奥部に構築された遺構で、D5グリッドに位置する。1辺約45cmの方形掘方内に1辺28cmを測る土師質角火鉢を埋設している。火鉢内には黄白色を呈する灰層が充填され、炉として機能していたことを窺わせる。本遺構面の長屋建物遺構に帰属する炉は、基本的に戸口周辺で土間状硬化面に隣接して構築されており、規模も本遺構より大形の事例が多い。本遺構同様、部屋の奥に位置する例として、SB1697-3室に帰属するSF1752、SB1611-3室に帰属するSF1615などいずれも本遺構と同様の規模を呈す。また居住区内に単独で検出された事例は無く、戸口周辺に構築された炉と併設される。このような状況から、調理施設というよりは、居室内での煮沸施設として構築された可能性が高い。埋設された土師質角火鉢はほぼ完形に近い状態で出土しているが、かなり風化が進行しており、取り上げの段階でほぼ細片状態となり、接合、実測を行うことができなかった。

SF1867 SB1697-1室に帰属する炉で、C5グリッドに位置する。SF1700北側瓦敷き硬化面下（Ⅲ-384図）から検出された。平面形は不整形方形を呈し、東西60cm、南北55cm、確認面からの深さ10cmを測る。坑底中央には赤化した被熱痕が認められ、覆土はほぼ灰で充填されていた。付帯施設は確認されなかった。南側に位置するSF1799も本遺構同様SF1700より古く、長屋建物の初期段階の炉施設として位置付けられる。遺物は出土していない。

SF1868 SB1697-1室に帰属する炉で、D5グリッドに位置する。室内南西部の土間硬化面下(Ⅲ-384図)より検出された。土間構築時の掘削で上部が削平され、坑底付近がわずかに遺存しているにすぎない。検出状況での平面形は不整形を呈するが、詳細、規模ともに不明である。覆土には灰が充填されており、特に中央部の灰層は黄褐色に変色している。遺物は出土していない。

SF1799 SB1697-1室に帰属する炉状遺構で、C5グリッドに位置する。SF1700と重複しそれ(Ⅲ-384図)より古い。SF1700調査終了時に確認された遺構であるが、重複部分以外ではSF1700周囲の盛土層にパックされて検出された。この検出面は下位遺構面D2面とは異なり、建物改築時に局所的に盛土整地された結果と考えられる。これをD1下面と称する。平面形は不整形を呈し、西側約1/2はSF1700によって削平されている。坑底中央部には橙褐色の被熱痕が認められる。覆土はほぼ灰層で充填されている。遺物は出土していない。

SB1697-2室(Ⅲ-379、384図)

SB1697北から2室目の区画で、D~E・4~6グリッドに位置する。2室を取り囲む礎石列のうち、北側礎石列の東から2基目と東側礎石列の中央部分が攪乱によって削平され、遺存していない。戸口とSD1605間は約1間のスペースが設けられ、戸口中央の礎石の南側には玉砂利を含む幅約半間の敲击占め硬化面が構築されており、この部分が建物の入口施設と考えられる。その南側にはやはり約半間幅の溝状掘り込みが東西に並び、溝内には炭化材が遺存していることから、SD1605に接続する水場関連木枠施設の存在が想定される。室内には戸口から奥行き1間内に硬化面が拡がっているが、北側の硬化面上には炭化した板材の残骸が遺存していることから板張りであった可能性がある。よって南側の硬化面が土間を形成していたと推定される。北側硬化面に隣接するSK1701は、位置、規模、覆土の様相から炉の可能性が指摘できる。

SK1701 SB1697-2室に帰属する土坑で、D5グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、(Ⅲ-384図)東西105cm、南北60cm、確認面からの深さ10~25cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっているが、坑底は凹凸が著しい。覆土上層には炭化物粒、焼土粒を含む淡褐色~灰褐色土が堆積しており、炉跡の可能性はある。遺物は出土していない。

SX2074 SB1697-2室に帰属する石敷き遺構で、D4~5グリッドに位置する。西側戸口の柱(Ⅲ-384図)筋とSK1701間に拡がる硬化面の構造材と考えられる。凝灰岩切石の転用品を四隅と中央にほぼ水平に配置し、その間に瓦片と玉砂利が詰められている。また西側礎石ライン上に直径約15cmの小穴が1基存在するが、性格は不明。瓦以外の遺物は出土していない。

SB1697-3室(Ⅲ-379、385、386図)

SB1697の北から3室目にあたり、E4~6グリッドに位置する。本区画を取り囲む礎石は全て遺存している。西側礎石列とSD1605間は約1間を測り、中央の礎石の南北両側に敲击占め硬化面が存在する。そのうち南側の硬化面は西側柱筋と接していること、室内部に硬化面が連続して隣接していることから、この部分が本区画の玄関施設と考えられる。室内部には戸口から約1間内に炉が分布し、

北壁際に1基、南側に南北に並ぶ2基が存在する。また東側奥壁付近にも1基検出されている。炉より東側の遺構面には波打つような凹凸が認められることから、床下と考えられる。

SF1702 SB1697-3室に帰属する炉で、南側柱筋西側2基目の礎石北側にほぼ隣接し、E5グリッド（Ⅲ-385図）下に位置する。掘方平面形は方形を呈し、1辺約65cm、確認面からの深さ8cmを測る。四方の壁にローム粒を含む灰褐色土を貼り付け枠としている。坑底には橙褐色の被熱痕が認められる。覆土は灰で充填されているが、中央部が灰白色と周囲に比べて白味を帯びている。遺物は出土していない。

SF1705 SB1697-3室に帰属する炉で、SF1702の北側、室内土間硬化面の東側に隣接し、E5（Ⅲ-385図）グリッドに位置する。掘方平面形は不整長方形を呈し、東西80cm、南北60cm、確認面からの深さ15cmを測る。坑底にはローム粒を含む粘質土が貼られ、四方の壁には灰褐色粘質土が貼られている。坑底の被熱痕はさほど顕著ではない。枠内には灰が充填されているが、中央が皿状に窪んだ状態で検出され、その周囲の灰層表面には炭化材が多く含まれていた。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF1709 SB1697-3室に帰属する炉で、E5グリッドに位置する。北側礎石列西から2基目の（Ⅲ-385図）礎石に本遺構北東部が接する形で構築されている。掘方平面形は長方形を呈し、東西70cm、南北77cm、確認面からの深さ5～10cmを測る。北壁と西壁に粘土枠が確認される（5層）。粘土枠はほぼ垂直に立ち、枠内には灰が充填されている（1～4層）。特に中央部分は被熱によって灰白色に変色していた（1層）。掘方直上には平瓦片が数枚埋設されているが、特に東側に偏在している。遺物は陶磁器類がわずかに出土したにすぎない。

SF1752 SB1697-3室に帰属する炉で、E5グリッドに位置する。3室最奥部に存在し、南側（Ⅲ-385図）約半分が攪乱によって削平されている。平面形は方形を呈していると考えられ、東西45cm、確認面からの深さ5cmを測る。坑底には直径約15cmの被熱痕が認められ、覆土は灰白色を呈する灰層で充填されている。枠施設は認められなかった。遺物は出土していない。

SF1869 SB1697-3室に帰属すると考えられる炉と考えられる遺構で、E5グリッドに位置する（Ⅲ-386図）。北側礎石列に隣接し、平面的にはSF1709の東側に位置するが、SF1709構築面を掘り下げ、D2層に至る途中より検出され、D1下面を帰属面とする。壁面は南東部のみ遺存しており、D1面整地時に大きく削平されたと考えられる。覆土は灰が充填され、坑底直上の灰層は被熱によって淡橙褐色土を呈している。遺物は出土していない。

SP1873 E5～6グリッドに位置する遺構である。SB1697北から3室目の東側柱筋の礎石下で（Ⅲ-386図）検出されたことからD1下面に帰属する遺構と判断した。東、南側は攪乱されているが、残存している平面形は台形を呈し、規模は東西36cm、南北12cm、確認面からの深さは37cmを測る。雑に整形された長方形の割石を2段積み、ローム粒やブロックをやや

多く含む黄褐色土で一度に埋め戻されている。遺物は肥前系磁器片が少量出土したのみである。

SB1697-4 室 (Ⅲ-380、386、387 図)

SB1697 で唯一裏手に張り出し部を有する区画である。四方の礎石は全て遺存しており、東側に奥行き 4 尺の張り出し部を持つ。張り出し部の礎石配置は北から半間間隔で 3 基、そして 1 間間隔で 1 基設置されている。南側の 1 間間隔部分ではほぼ柱筋に沿って、SD1604 西壁として丸瓦片が縦列に並べられている。戸口前の SD1605 とは 1 間間隔を測り、その間は瓦片を芯構造材にした硬化面が広がっている。瓦片は特に北側 1 間範囲に集中し、南側の硬化面表面は平滑かつ丁寧に整形されている。そして南側硬化面と西側礎石ライン間には南北 50cm、東西 35cm を測る切石が埋設され、切石東側室内部分にも約半間四方の硬化面が続く。その状況からこの切石部分が本区画の戸口にあたると思われる。室内部の硬化面はロームブロック層を基板としてその上に玉砂利を含む暗褐色土を盛り、敲き占められている。室内施設としては、戸口から 1 間半入った区画北側から炉が 4 基検出され、そのうち 3 基に切り合いが認められる。また戸口から 2～3 間内の区画奥部から南北方向の不定形溝状遺構が 1 基検出されているが (SD1756)、その性格は不明である。あるいは床下の凹凸にすぎない可能性もある。

SF1704 SB1697-4 室に帰属する炉で、E5 グリッドに位置する。4 室北側礎石列西側 2 基目の (Ⅲ-386 図) 礎石に北西角がほぼ接する。掘方平面形は長方形を呈し、東西 76cm、南北 60cm、確認面からの深さ 12cm を測る。また北壁には幅約 10cm の浅いテラス状の掘り込みが付随し、その部分に暗黄褐色土の粘土が貼られている。坑底中央には円形の被熱痕がわずかに認められる。その周囲には褐色土が堆積し、覆土上層は灰層で覆われている。また被熱痕は 3 層の上下に認められ、上面の被熱痕は 3 層が赤化、下面の被熱痕は 4 層が赤化したものと考えられ、構築時と使用時の被熱痕と考えられる。遺物は出土していない。

SF1707 SB1697-4 室に帰属する遺構で、E5 グリッドに位置する。灰層のマウント状態で検出 (Ⅲ-386 図) され、マウントの平面形は 1 辺約 45cm を測る不整形を呈する。また遺構面からマウントの高さは約 20cm を測る。マウント形成土は灰層を基本とし、非常に締まっている。表面および下面に被熱痕は認められなかった。灰層を取り囲む枠施設などは、確認されなかった。SB1812 に認められるマウント状の炉跡の可能性も考えられる。遺物は陶磁器類がわずかに出土したにすぎない。

SF1753 SB1697-4 室に帰属する炉で、E～F5 グリッドに位置する。北側には SF1704 が隣接し、 (Ⅲ-387 図) 西側で重複する SF1760 より新しい。平面形は長方形を呈し、東西 65cm、南北 60cm、確認面からの深さ 15cm を測る。坑底はほぼ平坦で、壁はやや開きぎみに立ち上がる。覆土下部には灰層が堆積しているが、2、3 層境界部に橙褐色に変色した被熱痕が認められ、被熱痕上の 2 層のみ灰白色を呈する。1 層はやや灰色を帯びた暗褐色土でローム粒、瓦片を含んでいることから、本遺構廃絶時に埋め戻された整地土と推定される。遺物は 1 層から瓦片が出土している程度である。

SF1760 SB1697-4室に帰属する炉で、E～F5グリッドに位置する。東側に重複する（Ⅲ-387図）SF1704、SF1753より古い。平面形は長方形を呈し、東西75cm、南北110cm、確認面からの深さ25cmを測る。坑底はほぼ平坦で壁はやや開きぎみに立ち上がる。本遺構は覆土の堆積状況より作り替えが行われていたことが窺える。まず坑底中央部やや南側に初期の炉床と考えられる被熱痕が認められ（7層）、その上に灰層が堆積している（5、6層）。5層とその直上のロームブロック主体層（4層）との境界は傾斜していることから、5層の灰をある程度取り出し4層を埋め新たな枠を形成し、再度、灰を充填した結果と推定される。さらに本遺構は廃絶時に再びロームブロック層（1層）で埋め戻され、本区画内の炉機能は、SF1704もしくはSF1753へ移行したと考えられる。遺物は陶磁器類が少量出土しているにすぎない。

SB1697-5室（Ⅲ-381、387、388図）

SB1697北から5番目の区画で、F～G・4～5グリッドに位置する。四方の礎石は全て遺存する。室部北西部外側1間範囲にはSD1605との間に角材を埋設した溝状遺構が存在し、そこから浅い溝がSD1605に伸びていることから、水場関連の木枠遺構と考えられる。その南側には敲击占め硬化面が西側柱筋まで広がる。また南側1間範囲ではSD1605が西へクランク状に屈曲し、溝と本遺構の間には、SE1706が構築されている。北側から続く硬化面はSE1706中央付近まで広がり、さらに室内方向へ伸び、木枠を埋設したと考えられる溝状遺構に接続する。さらにその東側には玉砂利を含む硬化面の広がりが確認され、その南側にはSF1758が構築されている。室内施設はこの木枠埋設遺構と戸口から奥行き1間付近に分布する炉跡群、そして室内木枠遺構の北側に性格不明の土坑（SX1751）が存在する。炉跡の東側には波打つような整地面が奥壁まで広がり、この部分が床下と推定される。また6室との境界柱筋を境に6室と5室で段差が生じているが、性格は不明である。

SF1758 SB1697-5室に帰属する炉で、G5グリッドに位置する。5室南側礎石列にはほぼ隣接し、（Ⅲ-387図）南東角が南側礎石列西から2基目に接する。掘方平面形は南北70cm、東西65cm、確認面からの深さ最大15cmを測る。坑底には瓦片が敷き詰められて、暗褐色土を詰めている。瓦片層上には暗灰褐色を呈する灰層が充填され、特に中央付近において灰白色に変色した被熱痕と焼土層が認められる。遺物は瓦片の他、陶磁器類がわずかに出土したにすぎない。

SF1800 SB1697-5室に帰属する炉で、G5グリッドに位置する。西側でSF1758と重複するが、（Ⅲ-388図）SF1758検出面にバックされた面より検出され、D1下面に構築された遺構と確認される。平面形は不整楕円形を呈し、南北88cm、東西70cm、確認面からの深さ10cmを測る。掘方内は灰層で充填され、坑底中央付近の表面は被熱によって赤化し、その直上の灰層のみ、淡褐色を呈している。遺物は極わずかに出土したにすぎない。

SF1870 SB1697-5室に帰属する炉で、F5グリッドに位置する。戸口より奥行き約1間、区（Ⅲ-388図）画北側でD1層下より検出された。ただし検出面がD2面に達していないことから、D1下面に帰属する遺構と考えられる。遺存状況はあまり良好ではなく、南壁がほぼ削平されている。平面形は方形を呈すると考えられ、残存する東西長は55cmを測る。覆土は

炭化材片を含む灰で充填されている。炉の残骸と考えられる。遺物は出土していない。

SK1861 SB1697-5室に帰属する土坑で、F～G5グリッドに位置する。平面形は長方形で、(Ⅲ-388図)東西75cm、南北45cm、確認面からの深さ20cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底もほぼ平坦に整形されている。覆土はロームブロックを含む暗褐色土を基調とし、ほぼ水平堆積を呈している。戸口から奥行き約1間の区画中央に構築されているが、使用痕跡を示す情報は認められず、性格は不明である。

SB1697-6室 (Ⅲ-381、388、389図)

SB1697北側から6番目の区画で、G5～6グリッドに位置する。北東部が攪乱によって削平され、南側礎石列東から1基目と2基目が存在しない。西側のSD1605張り出し部とは約1間半を測り、南側クランク部と、SE1706ほぼ中央部を結ぶラインで1段段差を有し、建物側が高く構築されている。段差上には西側礎石列中央礎石の南側に南北約65cm、東西約110cmの長方形を呈する敲き占め硬化面が存在し、その表面は平滑に整形されている。その状況からこの部分が戸口にあたりと考えられる。その南側には南側礎石列までの範囲で東西方向の溝状落ち込みが2条存在し、その間の地表面はこぶ状の凹凸が認められる。炭化材などの痕跡は明確ではないが、水場関連木柵遺構が存在した可能性が指摘できる。この直下には西側礎石列に隣接して切石と川原石が平行に埋設されている(SX2075)。前段階での玄関施設の可能性がある。玄関前敲き占め硬化面の東側には、東西約半間、南北約1間を測る同様の硬化面が続き、区画南西角にあたる硬化面南半には平行する2条の溝が認められ、室外に位置する溝状遺構との関連が考えられる。炉は北側礎石列に近接し、戸口から奥行き約1間の位置に東端を揃えるように構築されていた。また、その東にはD1下面に帰属する炉が1基確認されている。室内硬化面から東側礎石列にかけての地表面は全体に緩やかな凹凸を有し、床下と推定される。また本区画北東部地表面上からカワラケが1点逆位の状態で出土している(Ⅲ-388図、Ⅳ-465図)。

SF1759 SB1697-6室に帰属する炉で、G5グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東(Ⅲ-388図)西80cm、南北50cm、確認面からの深さ最大13cmを測る。南壁は平瓦を用いて補強され、東西両壁は粘土および暗褐色土で柵を構築している。覆土下層に淡褐色を呈する灰層を充填しているが(3層)、上層には顕著な灰層は確認されなかった。掘方は炉体より一回り大きな1辺100cmを測る隅丸方形を呈する。平瓦設置部の下には、それを固定するための溝状の落ち込みが存在する。遺物は遺構構成材の瓦片以外は出土していない。

SF1877 G5グリッドに位置する。SB1697被災時にはバックされ廃絶していた炉状遺構である。(Ⅲ-389図)平面形は不整形を呈し、残存している規模は長軸(南北)68cm、短軸(東西)36cm、確認面からの深さは14cmを測る。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。覆土最下層には白色灰層が堆積し、坑底には火熱により赤色硬化した部分が1箇所認められる。遺物は陶磁器、土器がごく少量出土している。

SB1697-7室 (Ⅲ-382、389図)

SB1697北から7室目の区画で、H5～6グリッドに位置する。室部約半分が攪乱による削平を受け、本区画に伴う礎石も約半数しか遺存していない。SD1605からの距離は約150cmを測り、溝のクラン

ク部に破碎礫を埋設した敲击占め硬化面が確認される。室内の敲击占め硬化面は区画南西部に認められ、間口南側に戸口が配置されていたと考えられる。唯一検出された炉は、D1下面に帰属し、北側礎石列に隣接して戸口から約1間東側に設置されている。最終段階の炉は攪乱によって削平された可能性が高い。

SF1881 SB1697-7室に帰属する炉で、H5グリッドに位置する。本遺構はD1下面から検出（Ⅲ-389図）され、北西部が大きく削平され、平面形、規模ともに詳細は不明である。残存部の壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁面構成土はD1下層と共通するロームブロックを多量含む暗褐色土である。覆土は最上層に本遺構廃絶後の盛土整地層が堆積し（1層）、それより下層に灰層が確認された。遺物は出土していない。

SB1697-8室（Ⅲ-382、389図）

SB1697北から8番目の区画で、H～I・5～6グリッドに位置する。東側は攪乱による削平の影響で北東角、南東角など3基の礎石が遺存していない。SD1605との間隔は130～140cmを測り、敲击占め硬化面が広がる。特に南側は周囲より1段高く玉砂利を含み敲击占められている。建物内は戸口より約1間幅で硬化面が広がっているが、硬化範囲縁辺には浅い溝状もしくはピット状の落ち込みが認められる。炉は北側礎石列の西から2基目の南東に近接して構築されている。

SF1790 SB1697-8室に帰属する遺構で、H5グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、（Ⅲ-389図）東西60cm、南北70cm、確認面からの深さ12cmを測る。坑底中央に浅い落ち込みが認められる。被熱痕は認められない。本遺構は形態、位置より炉と考えられるが、火災直前に灰が掻き出されたためか、覆土がほぼD面焼土で埋まっていた。

SB1697-9室（Ⅲ-382、389、390図）

SB1697最南端の区画で、I～J・5～6グリッドに位置する。東側が攪乱による削平を受け、東側礎石列を含む約1/2が残存していない。西側のSD1605とは約120cmの距離を有し、建物との間には一部に瓦片を敷き詰めた敲击占め硬化面が広がる。室内は戸口から約半間の範囲で地表面がやや窪み、西側礎石列中央礎石から室部に向かって平瓦が敷かれている。この瓦敷は北端が直線状に揃えられていることから、そこに境界意識が存在していたことが推定される。凹地東側には硬化面が広がり、その北側に2基、南側に1基、炉が構築されている。

SF1754 SB1697-9室に帰属する炉で、I5グリッドに位置する。南西部の粘土椀が一部削平さ（Ⅲ-389図）れている以外は、比較的良好な状態で検出された。粘土椀内の平面形は不整隅丸長方形を呈し、東西70cm、南北50cm、確認面からの深さ7cmを測る。粘土椀の内側には炭化した板材痕が一部残存しており、本来は粘土の内側に木椀があったと考えられる。粘土椀表面には多量の焼土粒、炭化物が付着し、被熱のため赤茶色に変色している。坑底には瓦片が敷かれている。椀内には砂質褐色土が堆積しており、火災時には廃絶されていた可能性がある。遺物は出土していない。

SF1755 SB1697-9室に帰属する炉で、J5グリッドに位置する。室内の敲き占め硬化面と南(Ⅲ-390図)側壁面に挟まれている。平面形は不整形を呈し、東西85cm、南北80cm、確認面からの深さ7cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がり、明確な枠施設は確認されない。坑底中央部には橙褐色に変色した円形を呈する被熱痕が認められる。西壁際には瓦片が1列敷き並べられ、その周囲のみ褐色を呈する灰層が堆積している。それ以外は灰白色を呈する灰層で充填されている。灰層表面には、被熱痕跡は認められない。17世紀代の陶磁器類が少量出土している。

SF1781 SB1697-9室に帰属する炉で、I5グリッドに位置する。SF1754と重複し、それより(Ⅲ-390図)古い。平面形は掘方、粘土枠内ともに不整形である。粘土枠内には灰が充填され、2層は白色に近く、3層には橙褐色焼土粒が含まれる。粘土枠は淡褐色を呈し、特に南側、東側で顕著に認められた。遺物は粘土枠内よりわずかに出土したにすぎない。

SB1772 (附図6、附図7、Ⅲ-391～400図)

C～J・6～7グリッドに位置し、D1面で検出された長屋群の中では西から3棟目の長屋建物である。SB1772は1室の規模は南北2間、東西3間を測り、南北方向に9区画で構成される礎石建物であるが、北から6室の南北方向の柱筋のみが半間間隔で礎石が据えられている。半間間隔で据えられた礎石は、他より小さな礎石を使用している。構造上、この区画に他よりも荷重がかかる要因があったのか。使用されている礎石の基本形状は楕円形を呈すものであるが、規模、形状、石材などは一律ではない。また北から9室の西側柱筋の礎石には「三八」と「×」という墨書が確認された。「×」は「三八」を消すように上に書かれていた。この礎石が転用石であり、転用前の墨書を「×」で消したのものが。

東側にSR1857とした道路状遺構(図中茶色)があることから各区画入口は東側柱筋に面していたものと思われる。北から2、6～9室には、SR1857から各室へ入るための戸口となっていたであろう場所が、他の地面よりわずかに高く、またタタキ状に硬化している部分として確認された(図中黄色)。いずれの区画も炉状遺構が1基以上あり、それらの構築位置は東側柱筋から1つ西側の柱筋に集中している。これは複数の炉状遺構が確認されている区画であっても同様で、奥側にあたる3～4番目の柱筋のあたりに構築される炉状遺構は検出されなかった。このような傾向は炉状遺構以外の遺構についても共通しており、多くの遺構が入口付近に集中して検出される。このような遺構検出状況は、長屋建物内の生活空間の利用状況を示している可能性が高い。すなわち入口側にナガシや火所などを使用する空間、入口より奥には寝所などを意識した何も施設のない空間を設定していたのではなかろうか。なお1室に複数基の炉状遺構が確認されているところもあるが、それらの多くは切り合いを有すものであり、室内で検出された全ての炉状遺構が同時に機能していたとは考えにくい。何かの理由で炉状遺構の作り替えが頻繁に行われたことを示すものであろう。

SB1772-1室 (Ⅲ-391、394図)

SB1772の北から1番目の区画で、C～D・6～7グリッドに位置する。北側半分が攪乱されているが、附帯施設として炉状遺構が4基、土坑が1基確認される。

SF1713 SB1772-1室に帰属する遺構で、D7グリッドに位置する。南側は攪乱される。平面(Ⅲ-394図)形は隅丸方形を呈し、残存している規模は東西70cm、南北44cm、確認面からの深さ

6cmを測る。壁は坑底から開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は白色灰層を主とする。遺物は陶磁器、土器の細片がごく少量で出土したのみである。

SF1715 SB1722-1室に帰属する遺構で、D7グリッドに位置する。北西隅は攪乱される。
(Ⅲ-394 図) SK1719と重複しており、新旧はSK1719より旧である。残存している平面形は不整形を呈し、規模は東西60cm、南北52cm、確認面からの深さは14～20cmを測る。壁は坑底より開き気味に立ち上がり、断面形は浅い「U」字形を呈す。覆土は灰白色の灰質土を主体とし、炭化物、焼土粒をやや多く含む。検出時に遺構中央に白色の灰層が円形プランとして確認されており、ここが炉床と考えられた。断面観察ではこの部分から下の覆土に焼土粒が比較的集中し、坑底が全体より一段浅いピット状に窪んでいることが確認された。遺物は陶磁器、土器が少量出土しているのみである。

SF1718 SB1722-1室に帰属する遺構で、D7グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、
(Ⅲ-394 図) 規模は東西76～88cm、南北70～82cm、確認面からの深さは14cmを測る。壁は坑底より「ハ」の字状に立ち上がり、断面形は逆台形を呈す。覆土は大きく2層に分かれ、上層では白色灰層（1層）、下層では焼土粒、瓦片を多く含む明赤褐色土層（2層）が確認された。西壁には4枚、北壁には3枚の瓦片を掘方壁面に沿って押し付けた状況が確認された。また覆土中の瓦片も積み重ねて並べようとした状況がうかがえるが、積み方に規則性は認められない。なおこれら瓦片は焼土粒を多く含む2層中で検出されたが、瓦片には2次的な火熱は認められなかった。遺物は出土しなかった。

SP1720 SB1722-1室に帰属する遺構で、D7グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、
(Ⅲ-394 図) 長軸58cm、短軸50cm、確認面からの深さは10cmを測る。覆土は灰白色粘土主体である。性格は不明である。遺物は出土しなかった。

SB1772-2室（Ⅲ-391、395 図）

SB1772の北から2番目の区画で、D～E・6～7グリッドに位置する。炉状遺構が3基、タタキ状の硬化面が1箇所確認される。硬化面はSR1857に面した室部北東隅に位置し、東西64～90cm、南北124～160cmを測る不整形を呈する。

SF1687 SB1772-2室に帰属する遺構で、D7グリッドに位置する。西側は攪乱される。
(Ⅲ-395 図) SF1688と重複しており、新旧はSF1688より新である。なお本遺構のすぐ東側に近接するSF1717とは外周の粘土枠を共有しているようであるが、時期差などがあったのかは不明である。なお南側には瓦片が東西方向に検出されたが、本遺構の南縁に意識して並べたものか。平面形は東側に2箇所の張り出しを有す不整形を呈し、残存している規模は東西120cm、南北212cm、確認面からの深さは34cmを測る。中央付近に丹波系播鉢（Ⅳ-465 図1）が埋設されていた。播鉢内には灰白色の灰層を多く含む土（1層）が充填されていたが、この層中に炉床として利用された痕跡は確認されなかった。播鉢内底部から逆位のかわけ（Ⅳ-465 図2）が検出されたが、かわけは口縁部付近を2次的に打ち欠いた状態のものである。播鉢もかわけの打ち欠いた部分とほぼ同寸法

に底部の一部が穿たれており、挿鉢とかわらけはともに2次的に打ち欠かれた部分を合わせた状態で設置されていることが明らかとなった。伏せたかわらけ内は空洞となっており覆土、灰層などの堆積物は認められず、2次的に火熱した状況は認められなかった。なお挿鉢を埋めた層の下の覆土（4、7層）も灰質土が堆積しているのが確認され、特に南東隅では4層上面で火熱し赤色硬化したと考えられる部分が検出されたことから、元々あった炉状遺構を作り替え、挿鉢を利用した形態の炉状遺構を再構築した可能性がある。東側の粘土枠下に4層が入り込んでいる状況が確認されていることから、粘土枠の構築は挿鉢を埋設した時になされた可能性が高い。遺物は陶磁器、土器が少量出土しており、それらは17世紀代に位置づけられる。

SF1688 SB1772-2室に帰属する遺構で、D7グリッドに位置する。西側をSF1687に、東側(Ⅲ-395図)をSF1717に切られるため平面形は不明であるが、残存規模は東西30cm、南北66cm、確認面からの深さは10cmを測る。壁は坑底より開き気味に立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は上層に灰層を主体とする層、下層には炭化物をやや多く含む層が堆積する。上層はSF1687の4層と同一層と考えられ、SF1688はSF1687構築前の炉状遺構の一部であった可能性が高い。遺物は陶磁器、土器が少量出土しており、それらは17世紀代後半に位置づけられる。

SF1717 SB1772-2室に帰属する遺構で、D7グリッドに位置する。SF1688と重複しており、(Ⅲ-395図)新旧はSF1688より新である。本遺構のすぐ西側に近接するSF1687とは外周の粘土枠を共有しているようであるが、時期差などがあつたのかは不明である。残存する平面形は歪な方形を呈し、規模は東西62cm、南北60～66cm、確認面からの深さは10cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。壁、坑底ともに凹凸が顕著である。西壁寄りの坑底では、炉床と考えられる火熱し赤色硬化した方形の窪みを確認した。覆土はしまりの強い炭化物や焼土粒などを含む白色から黒色の灰質土が主体である。遺物は陶磁器、土器がごく少量出土しているのみである。

SF2173 SB1772-2室に帰属する遺構で、D～E7グリッドに位置する。D1下面に帰属し、(Ⅲ-395図)長屋が火事で被災した時点では廃絶していた炉状遺構である。平面形は歪な方形を呈し、残存している規模は東西60cm、南北50cm、確認面からの深さは10cmを測る。壁は坑底より開いて立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は焼土粒や炭化物、灰などをやや多く含み、レンズ状に堆積している。遺物はかわらけの細片が出土しているのみである。

SX2146 D1下面に帰属する石組遺構で、D7グリッドに位置する。基礎固めとして瓦片、陶磁器片などを敷き詰めた上に、三方に再利用された切石を配し、中央に扁平川原石が敷かれている。本遺構は、SB1772-2室北東部の土間状敲击占め硬化面下に位置し、その基礎遺構と考えられる。使用された陶磁器類の年代は17世紀中葉に比定される。

SB1772-3室(Ⅲ-391、396図)

SB1772の北から3番目の区画で、E6～7グリッドに位置し、炉状遺構が3基、ピットが1基確認される。

SF1690 SB1772-3室に帰属する遺構でE7グリッドに位置する。西、南側は攪乱され平面（Ⅲ-396図）形は不明であるが、残存する規模は東西26cm以上、南北22cm、確認面からの深さは6cmを測る。覆土は灰色の灰層が主体であり、炭化物や焼土粒などを含む。灰層の周囲、坑底に灰白色粘土層が認められることから、本遺構も周囲、坑底に粘土枠を有し、検出面より盛り上がる形態の炉状遺構であった可能性が高い。遺物は出土しなかった。

SF1716 SB1772-3室に帰属する遺構でE7グリッドに位置する。平面形は歪な方形を呈し、（Ⅲ-396図）規模は東西64cm、南北70～74cm、確認面からの深さは11cmを測る。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。壁には灰白色粘土が貼り付けられ、枠状に巡らされていたが、その厚みは均一ではない。覆土は炭化物やローム粒・ブロックをやや多く含む灰質土が主体である。坑底中央付近には、炉床と考えられる火熱し赤色硬化した不整形の窪みが確認される。

SF1874 SB1772-3室に帰属する遺構でE6グリッドに位置する。D1層にパックされる状況（Ⅲ-396図）で検出された遺構である。平面形は歪な円形を呈し、規模は径26cm、確認面からの深さは5cmを測る。壁、坑底とも平滑に整形される。覆土は一部白色化した炭化物層が主体である。SB1772の長屋建物に伴うと考えられる炉状遺構が検出される位置は、東側柱筋から1つ西側の2番目の柱筋に集中しているが、本遺構は西側柱筋に近接している。検出状況なども考慮すると、本遺構は被災した当時の長屋で使用していた炉状遺構より古い、廃絶された炉状遺構の可能性が高い。遺物はかわらけ細片が出土しているのみである。

SF2049 SB1772-3室に帰属する遺構でE7グリッドに位置する。平面形は丸味を帯びた方形（Ⅲ-396図）を呈し、規模は東西80cm、南北62cm、確認面からの深さは12cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は上層はローム主体、中層は炭化物やローム粒・ブロックを含む灰白色土、下層は焼土が主体であり、覆土の状況から炉状遺構と判断した。なお本遺構北側のSF1706との直接的な切り合いは確認されなかったが、SF1706の坑底で検出されたローム土が本遺構上面で検出されたローム土である可能性が高く、SF1706構築前に存在していた炉状遺構と推測される。遺物は陶磁器、土器の細片が少量出土している。

SP1711 SB1772-3室に帰属する遺構でE7グリッドに位置する遺構である。平面形は方形を（Ⅲ-396図）呈し、南側に小さなテラスを有す。規模は長軸28cm、短軸26cm、確認面からの深さは33cmを測る。柱痕と考えられる1層には瓦片や礫をやや多く含み、しまりが弱い。SB1772の東側柱筋寄りに単体で検出されたピットであり、長屋建物に関わるピットなのかは判然としない。遺物は出土しなかった。

SB1772-4 室 (Ⅲ-392、397 図)

SB1772 の北から 4 番目の区画で、E～F・6～7 グリッドに位置し、炉状遺構が 1 基、ピットが 2 基確認される。

SF1774 SB1772-4 室に帰属する遺構で、F7 グリッドに位置する。ローム粒を多く含む枠(5層)(Ⅲ-397 図)を有す。掘方は東西 130cm、南北 96cm、確認面からの深さは 18～24cm を測り、平面形は長方形を呈す。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。覆土の観察からはローム主体層(3層)を間にはさみ、2 回の使用段階があったことが推察される。なお本遺構北西隅で確認されているピット状の遺構と SF1774 との切り合いは確認できなかった。遺物は風炉の細片が出土しているのみである。

SB1772-5 室 (Ⅲ-392、397 図)

SB1772 の北から 5 番目の区画で、F～G・6～7 グリッドに位置し、炉状遺構が 6 基確認される。

SF1689 SB1772-5 室に帰属する遺構で、F7 グリッドに位置する。平面形は北および南辺中(Ⅲ-397 図)央付近が飛び出した方形を呈し、東西 122cm、南北 104～122cm、確認面からの深さは 22cm を測る。壁は坑底より開き気味に立ち上がり、断面形は浅い鉢形を呈す。検出時には本遺構の平面全体を炭化物が多く含まれる黒色土(1層)が覆い、その下中央付近には土師質丸火鉢(Ⅳ-465 図 1)、北西隅には丸瓦が灰を主体とする層(3層)に埋設されている状況が確認された。なお丸瓦の東側には直径 20cm、確認面からの深さ 12cm の円形ピットが確認されており、丸瓦以外にも何か埋められていた可能性がある。火鉢、丸瓦いずれも上方に二次的な火熱による赤化した部分が確認されるが、使用中に火熱したのか、火災によるものかは不明である。火鉢や丸瓦中の覆土を観察すると、灰層を主体とする覆土であるが、炉床のような痕跡は観察されなかった。火鉢や丸瓦の周囲の覆土も灰層を主体とする覆土であることを考慮すると、もともと方形の炉状遺構があった場所を再利用して炉状遺構を構築する際に、火鉢や丸瓦を埋設して構築した可能性もある。

SF1712 SB1772-5 室に帰属する遺構で、G7 グリッドに位置する。SB1772-5 室南壁寄りの(Ⅲ-398 図)東から 2 基目の礎石近くに構築された炉状遺構である。SF1714-1 と重複しているが、SF1712 が新である。平面形は方形を呈し、東西 74cm、南北 60cm、確認面からの深さは 16cm を測る。壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。坑底中央北辺よりが東西 36cm、南北 41cm、確認面からの深さ 18cm を測る方形に窪む。この方形の窪みの壁は開きながら立ち上がり、北西隅付近はその開きが他より大きい。掘方上端もこの部分がやや外側へ緩やかに張り出している。覆土は坑底の窪み部分には黒色灰状の層(3層)、その上に白色灰状の層(2層)が掘方全体に広がる状況が確認されている。なお 2 層中にかわりが確認されたが、破片であり、用途などは不明である。

SF1714 SB1772-5 室に帰属する遺構で、G7 グリッドに位置する。SF1712 と重複しており、(Ⅲ-398 図)新旧は SF1712 より旧である。また検出時は 1 遺構として調査を始めたが、半截したと

ころ炉状遺構が重複する状況を確認、SF1712と切り合いのある方をSF1714-1、もう一方をSF1714-2とした。新旧はSF1714-1がSF1714-2より旧である。平面形はともにやや歪な方形を呈し、局所的に粘土枠を有す。SF1714-1は残存している規模で東西70cm、南北60cm、確認面からの深さは9～11cmを測る。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、北側立ち上がりに灰白色粘土が2cm厚の枠状に貼付られる。覆土をみると、3層上面で炉床と思われる焼土層や白色灰層が集中する箇所が認められ、その上に焼土粒、炭化物などを含む灰白色灰質土が堆積する。なお坑底には一段低い歪な窪みが存在する。SF1714-2は残存している規模で東西48cm、南北50cm、確認面からの深さは10cmを測る。SF1714-1と同じく壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、西壁に灰白色粘土が4cm厚の枠状に貼付けられる。覆土をみると局所的に灰白色の灰層が集中し、その下に焼土層が堆積する部分（3、4層）が認められたが、その部分の坑底が一段低くなる状況は認められなかった。

SF1764 SB1772-5室に帰属する遺構で、F7グリッドに位置する。SF1766と重複しているが、（Ⅲ-398図）新旧は不明である。平面形は長方形を呈し、東西74cm、南北90cm、深さ7cmを測る。壁は坑底より緩やかに立ち上がり、断面形はごく浅い皿形を呈す。覆土は灰状のもの、炭化物、焼土粒などを多く含む。本遺構中央付近では火熱により円形に赤色硬化した部分が確認された。

SF1766 SB1772-5室に帰属する遺構で、F7グリッドに位置する。SF1764と重複しているが、（Ⅲ-398図）新旧は不明である。平面形は長方形を呈し、規模は東西46cm、南北62cm、深さ8cmを測る。西壁は坑底より緩やかに立ち上がるが、東壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、小さなテラスを有す。覆土は炭化物や白色灰層が主体であるが、炉床などは確認されなかった。本遺構のすぐ西側のSF1764では炉床が確認されており、近接する位置関係を考えると、SF1764の灰捨て場か。

SB1772-6室（Ⅲ-392、398、399図）

SB1772の北から6番目の区画で、G6～7グリッドに位置し、炉状遺構が2基、タタキ状の硬化面が1箇所確認される。硬化面はSR1857に面した室部南東隅に東西92cm、南北38～70cmを測る歪な方形の範囲に確認される。

SF1761 SB1772-6室に帰属する遺構で、G7グリッドに位置する。確認面から約8cmの高さ（Ⅲ-399図）のマウント状に検出された炉状遺構である。平面形が歪な楕円形を呈することは確認できたが、半截したために全体規模は未確認である。残存している規模は東西70cm、南北40cmを測る。マウント部分は灰白色粘土で構築され、その東西両側は強く熱を受けたように黒く硬化した状況が看取された。マウント部分の東側は粘土を囲うように壁スサ状のものと焼土粒を多く含む白色土（3層）が検出されており、これが検出されなかった西側部分もその場所が小さなテラス状を呈している。もともとは東側と同じように白色土が盛土されていたが、崩落し、テラス状の痕跡となった可能性もある。前述のようにマウントの東西両側が強く熱を受けた状況が確認されたが、東西両側を補強するため

に白色土を盛土したとも考えられる。灰白色粘土の中央には白色の灰が厚さ約 4cm の楕円形状に検出され、その灰層の下には炭化物（一部白色の灰と化している）が灰とほぼ同範囲に厚さ約 2cm で集中する状況が確認された。このマウント部分の下から東西 60cm、南北 80cm、深さ 6cm を測る、平面形が歪な長方形の浅い窪みが、炭化材や炭化物とともに検出された。浅い窪み部分の覆土はしまりが強く、ローム粒やブロックと灰白色粘土粒をやや多く含む層がごく薄い白色の灰層を挟むような状況が確認されており、SF1761 のマウントの下の部分も炉状遺構であった可能性がある。もともと木枠を有する炉状遺構があったが、それを壊し、同場所に粘土をマウント状にした炉状遺構を構築したとも考えられる。

SF1771 SB1772-6 室に帰属する遺構で、G7 グリッドに位置する。平面形はやや歪な方形を（Ⅲ-398 図）呈し、規模は東西 72～76cm、南北 72～82cm、深さ 11～18cm を測る。壁は坑底より「ハ」の字状に開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。検出時にすでに中央付近が窪み、赤色化した炉床と考えられる部分（3 層）が確認されていたが、坑底付近においてもほぼ同位置、同規模の赤色化した炉床（7 層）と考えられる部分が確認された。覆土をみると、この 2 箇所炉床と考えられる部分は、灰層を主体とする層（5 層）を間層として上下に認められることから、使用時期に時期差があったと思われる。なお本遺構北側にはごく薄い灰白色の粘土枠を確認している。遺物は陶磁器類がごく少量出土している。

SB1772-7 室（Ⅲ-393、399 図）

SB1772 の北から 7 番目の区画で、H6～7 グリッドに位置し、炉状遺構が 1 基、硬化面が 1 箇所確認されるが、硬化面の北側は攪乱される。硬化面は SR1857 に面した南東隅に東西 90cm、南北 120cm を測る長方形の範囲に残存して確認されるが、硬化面の周囲の一段低い部分には炭化材が局所的に確認され、硬化面上にも火熱を受け黒色化した痕跡が認められた。硬化面の周囲あるいは硬化面まで含めて板状のものが敷設されていた可能性もある。

SF1762 SB1772-7 室に帰属する遺構で、H7 グリッドに位置する。東側は攪乱される。平面（Ⅲ-399 図）形は方形を呈し、残存している規模は東西 46cm、南北 44～54cm、深さ 14cm を測る。壁は坑底より緩やかに立ち上がり、断面形は浅い「U」字形を呈す。覆土下層には土師質火鉢、瓦片を、上層に焼土粒や炭化物を多く含み、比較的しまりの強いものである。もともと火鉢や瓦などを使用した炉状遺構を廃絶したもののか。

SB1772-8 室（Ⅲ-393、399 図）

SB1772 の北から 8 番目の区画で、H～I・6～7 グリッドに位置し、炉状遺構が 1 基、硬化面が 1 箇所確認される。硬化面は SR1857 に面した南東隅に東西 134cm、南北 94～112cm を測る方形の範囲に確認される。なおこの硬化面に東へ続くような状態で、SB1772 の建物東柱筋を超えた部分にもタタキ状の硬化面が確認されるほか、室内の硬化面上には縦横に長さ 100cm 強の溝状の緩やかな窪みが確認される。この硬化面の東側には SD1602 という溝状遺構が確認されているが、その形態や溝状遺構への近接状況を考慮すると、SB429 の北から 5 室などで検出されたような「流し状遺構」の可

能性もある。ただしSB429の「流し状遺構」と大きく異なるのは、SB429では外側に構築されていたの対し、8室のそれは室内にあるという点である。また室内から室外に続とした硬化面上には溝状の緩やかな窪みは検出されず、またSD1602へ流す排水路のようなものも認められなかった。

SF1765 SB1772-8室に帰属する遺構で、H7グリッドに位置し、西側は攪乱される。平面形（Ⅲ-399図）は不整形を呈し、残存している規模は長軸104cm、短軸48cm、深さ7～21cmを測り、坑底、壁ともに凹凸が著しい。覆土をみると3箇所白色灰層の集中箇所（1、3層）が確認され、その部分での作り替えが想定されるが、明瞭に火熱した痕跡が確認できたのは坑底付近のみである。

SB1772-9室（Ⅲ-393、400図）

SB1772の北から9番目の区画で、I～J・6～7グリッドに位置し、炉状遺構が3基、硬化面が1箇所確認される。硬化面はSR1857に面した室部南東隅に東西96cm、南北238cmを測る歪な楕円形の範囲に確認されるが、その東側はSK3で攪乱される。

SF1769 SB1772-9室に帰属する遺構で、I7グリッドに位置する。SF1770と重複しており、（Ⅲ-400図）新旧はSF1770より旧である。平面形は歪な方形を呈し、掘方は東西70～79cm、南北84～92cm、確認面からの深さは14cmを測る。壁は南、北、西側は坑底から垂直に立ち上がるが、東側は緩やかなスロープ状を呈し、坑底は凹凸が著しい。坑底の南西隅からほうろくや瓦などの破片が出土したが、その上には幅10cm、厚さ8cmの粘土枠を貼り、坑底全体にローム粒やブロックを多く含む層（5層）を貼っている。火熱のため赤色化した炉床と考えられる部分は、この5層上面で1箇所検出されている。

SF1770 SB1772-9室に帰属する遺構で、I7グリッドに位置する。SF1769と重複しており、（Ⅲ-400図）新旧はSF1769より新である。平面形は長方形を呈し、東西58cm、南北51cm、確認面からの深さは8～12cmを測る。ごく浅く、覆土もローム粒やブロックを多く含むしまりの強いもので一度に埋め戻されてる。火熱により赤色硬化した部分が北西隅に1箇所認められる。遺物は認められない。

SF1763 SB1772-9室に帰属する遺構で、I～J7グリッドに位置し、東側は攪乱される。平面（Ⅲ-400図）形は方形を呈し、残存している規模は東西36cm、南北40cm、深さ28cmを測り。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈す。坑底から4cmほど上部で、南側立ち上がりを除き炭化材が壁面から坑底にかけて確認された（Ⅲ-400図灰色部分）炭化材も断面箱形を呈すことから、木枠状のものが埋められていたと推測される。炭化材中の覆土はしまりのない焼土粒や塊が充填されていたが、これは長屋群の火災に由来するものである。炭化材の存在が確認されなかった南側立ち上がり周囲は強く火熱し、赤色あるいは黒色化した状況が確認されている。火熱を受けている状況も確認されたことから炉状遺構の可能性もあるが、通路（SR1858）に近いタタキしめられた土間状の部分に位置し、長屋内での位置が他の炉状遺構とは異なることから、別の機能をもった遺構の可能性も考えられる。

SB1782 (附図6、附図8、Ⅲ-401～411図)

南北に伸びる礎石建物遺構で、南北方向の礎石建物群中央にあり、C～J・8～9グリッドにかけて位置する。西側にSR1857、SD1601、東側にSR1858が隣接する。建物規模は、SB1772同様、江戸間を基準尺度とし東西3間、南北18間を測り、南北礎石列のうち、中2列が2間間隔で配置されていることより、間口2間奥行き3間を単位とした9区画で構成されていたと考えられる。また8室の南北両礎石列のみ半間間隔で配置されている。各区画には土間と考えられる敲击占め硬化面と炉が基本施設として付随する。その分布を観ると攪乱の影響が強い6室を除き、3～5室では炉、硬化面とも建物西寄りに、7～9室では東寄りに、1室では炉は東寄り、硬化面は東西両側に、2室では炉は中央やや東寄り、硬化面は西寄りに配置されていることが判る。各区画で施設配置が異なるのは、2室東側に厠遺構が存在する影響を受けていることに関係すると考えられる。西側に隣接するSD1601が4室南端で止まっていることから、5室以南の区画に接続する排水溝は、C面帰属遺構SK3によって削平され、詳細は不明であるが、SD1841が分岐してSR1858を横断し、本建物に接続していたと推定される。1室東側で水場関連遺構と考えられる木枠を設置した溝状遺構が検出されているが、その他の区画では確認されていない。SD1841が本遺構南端まで伸びていたと仮定するなら、SK3による削平部分に存在した可能性がある。礎石は1室北側礎石列、6室北側礎石列、9室南側礎石列など完全に地中に埋設され地表面に柱痕が確認される場所と、礎石表面がかるうじて露出する箇所があり、他の建築遺構同様、掘方、根石は存在しない。礎石表面には墨書によって「三ノ七」「二ノ十五」「四ノ十六」「三ノ十九」などの文字と十字の墨出しが認められる事例があり、その配置より西から東へ一から四、北から南へ一から十九と1間間隔で記されていたことが確認される。

SB1782-1室 (Ⅲ-401、404図)

SB1782北端の区画で、C～D・8～9グリッドに位置する。四方の礎石列のうち南西角のみ礎石が検出されず、礎石位置の地表面がやや変質していることから、礎石を地表面に直に置いていた可能性がある。一方、北側礎石列は全て地中に埋設されており、特に北西角の礎石は地表下5cmを測る。そのため地表面には柱痕を示す小穴が存在し、その規模から2寸角の柱を復元することができる。東側のSR1858との間には浅い落ち込みや平行する溝状遺構が存在する。そのうち溝状遺構に関しては他事例から木枠施設と考えられるが、本遺構に関しては排水溝を伴っていないことから性格は不明である。室内では土間と考えられる敲击占め硬化面が北東部と西側に2箇所存在する。炉の配置が南側礎石列東寄りに位置していることから、北東部の硬化面が戸口施設に関すると考えられる。またD1下面から室内西寄りに3基の炉が検出されていることから、西側の硬化面はD1下面段階に帰属する可能性もある。室内ほぼ中央には藁を編んだ痕跡を残す炭化材が拡がり、畳もしくは筵が敷かれていたことが窺われる。

SF1785 SB1782-1室に帰属する炉で、D9グリッドに位置する。平面形長方形を呈する四(Ⅲ-404図)方に粘土枠を有する炉で、枠内規模は東西82cm、南北60cm、確認面からの深さ最大20cmを測る。覆土1、2層は灰層で、1層はほぼ純粋な灰層であるのに対し、2層には炭化物が含まれている。3層はロームブロックを含む暗褐色土で炉床の構成土と考えられ、灰層の堆積は薄い。本遺構は検出段階において粘土枠と枠内覆土に約10cmの比高差が存在していたことから火災前に灰が掻き出された可能性がある。粘土枠は、ローム

粒を含む粘質灰褐色土で構成される。幅は15cm前後を測り、部分的に瓦片、川原石が芯材と埋設されている。遺物は出土していない。

SF2172 SB1782-1室に帰属する炉で、D8グリッドに位置する。D1下面に帰属し、長屋が火（Ⅲ-404図）事で被災した時点では廃絶していた炉状遺構である。平面形は方形を呈し、残存している規模は一辺60cm、確認面からの深さは7cmを測る。壁は坑底から緩やかに立ち上がり、断面形は浅い「U」字状を呈す。覆土は焼土粒、炭化物、灰などを含む暗灰色土が堆積しているが、上層の方がそれら混入物が多い。坑底からは瀬戸・美濃系播鉢が割れた状態で検出されたが、二次的な火熱は受けていない。また他の炉状遺構で検出された播鉢のように底部が欠損しておらず、ほぼ完形に近い状態のものである（Ⅳ-497図1）。同じ播鉢を利用した炉状遺構でも構造に差があるようである。

SF2227 SB1782-1室に帰属する炉で、C8～9グリッドに位置する。D1下面に帰属し、長屋（Ⅲ-404図）が火事で被災した時点では廃絶していた炉状遺構である。南西隅が一部攪乱されるが、平面形は歪な方形を呈し、残存している規模は長軸59cm、短軸34cm、確認面からの深さは4cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。南東側の掘方付近のみに幅10cmほどの枠状のものが検出されるが、ごく薄いものである。覆土は灰層が主体であるが、火床部などは検出されなかった。遺物は出土しなかった。

SF2228 SB1782-1室に帰属する炉で、C～D8グリッドに位置する。D1下面に帰属し、長（Ⅲ-404図）屋が火事で被災した時点では廃絶していた炉状遺構である。東側は攪乱され、平面形は半円形を呈し、残存している規模は東西17cm、南北48cm、確認面からの深さは3cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は白色灰層が主体であるが、火床部などは検出されなかった。遺物は出土しなかった。

SB1782-2室（Ⅲ-401、405図）

SB1782北から2番目の区画で、D～E・8～9グリッドに位置する。東側には厠施設が隣接する（SL1783、SL1784）。四方の礎石列のうち西側礎石列は南西角以外は検出されなかった。礎石位置の地表面がやや変質しており地表面に直置きしていた可能性がある。東側礎石列では南東角と北側半間の位置に直径15～20cmを測る小穴が存在し、この部分に限って掘立柱であった可能性がある。また南東角の小穴から西および北方向の隣接する礎石まで、帯状のマウントが伸びている。敲击占め硬化面は室内西端部に存在するが、炉はそれとやや離れた位置に築かれている。

SF1786 SB1782-2室に帰属する炉で、D9グリッドに位置する。西側に重複するSF1795より新しい。平面形は長方形を呈し、東西82cm、南北60cm、確認面からの深さ5cmを測る。北壁にのみ粘土枠があり、東壁の一部には瓦片が用いられている。また北東角には直径20cmを測るピットがあり、その西壁際には丸瓦片が立てかけられていた。性格は不明である。覆土は灰で充填され、坑底中央は被熱によって橙褐色に変色している。遺物は出土していない。

SF1795 SB1782-2室に帰属する炉で、D9グリッドに位置する。2室北壁際に構築されている。(Ⅲ-405 図) 東側に重複するSF1786より古く、作り替えが行われたといえる。平面形は長方形を呈し、東西75cm、南北62cm、確認面からの深さ16cmを測る。坑底中央には直径約10cmを測る被熱痕が認められ、表面が橙褐色に変色している。覆土下層には灰が堆積し(5層)、その上には廃絶時の埋め戻し土と考えられるローム粒を多量に含む暗褐色土が堆積している(4層)。SF1786は4層を切って構築されている。遺物は出土していない。

SB1782-3室(Ⅲ-401、405、406 図)

SB1782北から3番目の区画で、E8~9グリッドに位置する。南側を攪乱によって削平され、南側礎石列中2基が遺存していない。東側礎石列のうち2室との境界の北東角が掘立柱で、南東角は抜き取られている。また中間部には礎石痕、柱穴ともに認められなかった。西側礎石列のうち、中央と南側の2基が完全に地中に埋設され、検出時には焼土を覆土とする柱痕が確認された。本区画の北西部でSD1601が東側へクランク状に屈曲し礎石中心からの距離は40~60cmと接近するが、溝、建物間には硬化面が広がるのみで、施設は認められない。一方北東部ではSL1784の出入口と考えられる敲き占め硬化面が隣接する。それより南側はSK3によって削平され詳細は不明である。室内施設では西側礎石列中央礎石に北西角が接する幅65~85cm、奥行き約130cmを測る敲き占め硬化面が検出され、この部分が戸口内土間と考えられる。炉は北西角に重複する2基と硬化面東側に1基検出された。また東側奥壁際から10~20mm大の白色、黒色の玉砂利が20数点まとまって出土した。

SF1791 SB1782-3に帰属する炉で、E8グリッドに位置する。東側でSF1792と重複し、それ(Ⅲ-405 図)より古い。平面形は不整形長方形を呈し、東西150cm、南北85~94cm、確認面からの深さ20cmを測る。部分的ではあるが壁際には補強用の瓦片が埋設されている。坑底には東西に浅い落ち込みが存在し、西側の落ち込みほぼ中央部に橙褐色に変色した被熱痕が認められる。覆土は全て灰層で充填されているが、北壁中央の瓦片西端を境に西側の表面は淡褐色と灰白色を呈し、東側の表面は焼土粒、炭化物を多量に含む暗灰褐色を呈している。このような坑底と覆土の様相から、本遺構は東西に2基重複している可能性があり、重複するSF1792が覆土堆積状況から火災時まで機能していなかったと考えられることから、西側の灰白色部分が最終的に使用された施設と想定される。遺物は17世紀後半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SF1792 SB1782-3室に帰属する炉で、E8グリッドに位置する。西側のSF1791と重複し、それ(Ⅲ-405 図)より新しい。平面形は1辺約60cmを測る不整形長方形を呈し、確認面からの深さ15cmを測る。覆土は下層に黄白色を基調とした灰層が堆積し、上層には焼土粒を多量に含む暗褐色土が堆積する。その状況から火災時には廃絶されていた可能性が高く、SF1791西側の灰白色部分が火災時に使用されていた可能性が考えられる。遺物は陶磁器類がわずかに出土したにすぎない。

SF2175 SB1782-3室に帰属する炉で、E8グリッドに位置する。南側は攪乱され、残存している規模は1辺66cm、確認面からの深さは7cmを測り、平面形は方形を呈す。壁は坑底から緩やかに立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。坑底は凹凸が比較的顕著である。

覆土は黒色の灰層が主体である。長屋内で構築場所や覆土状況から炉状遺構としたが、火床部などは検出されなかったことから、本遺構は炉状遺構とは別の性格を有する可能性もある。遺物は17世紀代の様相を呈す陶磁器、土器が少量出土している。

SB1782-4室（Ⅲ-402、406、407図）

SB1782北から4番目の区画で、E～F・8～9グリッドに位置する。北側礎石列中央2基は攪乱によって削平され、遺存していない。また西側礎石列以外の礎石は、全て抜き取られている。西側に隣接するSD1601とは約40cmの距離を有し、SD1601は本区画南端付近で止まっている。西側礎石列中央礎石の南側では幅約90cmを測る溝から室内へ伸びる敲击占め硬化面が確認され、室内部分の奥行きは約110cmを測る。溝、建物間には玉砂利が多量に含まれている。この部分が本区画の戸口にあたると考えられる。硬化面以外の室内施設は炉が、北西角に1基（SF1793）、北壁寄りの奥行き1間付近に重複する2基（SF1794、SF1796）、その北側にD1下面に帰属する1基（SF2174）が検出されている。重複する2基の炉のうち、新しいSF1796の覆土が埋め戻された様相を呈していることから、SF1793が被災段階で使用されていたと考えられる。

SF1793 SB1782-4室に帰属する炉で、E～F8グリッドに位置する。四方に粘土枠を有する。（Ⅲ-406図）粘土枠平面形は方形を呈し、枠内規模は1辺約90cmを測る。粘土枠内は炭化物粒、焼土粒を含む灰で充填され、中央部の色調が灰白色を呈する。粘土枠は幅約10cmを測るが、北西角では肥厚し、直径約25cmを測る円を取り囲むように袖状の張り出し部が設けられている。東側の張り出し部先端には丸瓦を直立させて埋設している。一見するとカマドを彷彿させる形状であるが、円形部坑底には被熱痕、灰層は認められない。掘方平面形は長方形を呈し、東西120cm、南北100cmを測る。掘方坑底には瓦片が敷かれ、東寄りに被熱痕が検出された。この被熱痕の位置は粘土枠外側に及んでいることから、本遺構は作り替えが行われたと考えられる。遺物は17世紀代に比定される陶磁器類が少量出土している。

SF1794 SB1782-4室に帰属する炉で、F8グリッドに位置する。重複するSF1796より古い。（Ⅲ-407図）平面形は長方形を呈し、南北55cm、東西残存値62cm、確認面からの深さ10cmを測る。坑底、壁ともに灰褐色を呈する粘土が丁寧に貼られ（7層）、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。坑底中央部には橙褐色に変色した被熱痕が認められる。この被熱痕跡は掘方表面にまで及んでいる。覆土には灰が充填されている。遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

SF1796 SB1782-4室に帰属する炉で、F8グリッドに位置する。重複するSF1794より新しい。（Ⅲ-407図）平面形は1辺約60cmを測る方形を呈する。坑底東寄りに直径約30cmを測る円形の落ち込みを有し、落ち込み内と坑底直上に暗灰褐色を呈する灰層が堆積しているが、被熱痕は認められない。また1層は、ローム粒を多量に含む暗褐色土で、本遺構廃絶時に埋め戻されたと考えられる。遺物は出土していない。

SF2174 SB1782-4室に帰属する炉で、E～F8グリッドに位置する。D1下面に帰属し、長(Ⅲ-407図)屋が火事で被災した時点では廃絶していた遺構である。北側は攪乱され、残存している規模は東西60cm、南北40cm、確認面からの深さは9cmを測り、平面形は方形を呈す。壁は坑底からやや開き気味に立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。覆土最下層には白色の灰主体層(4層)が確認されるが、火床部などは検出されず、上層はしまりの強い覆土で埋め戻されており、廃絶した炉状遺構の可能性が高い。遺物は17世紀代の様相を呈す陶磁器、土器が少量出土している。

SB1782-5室(Ⅲ-402、407～409図)

SB1782北から5番目の区画である。東側礎石列はSK3によって削平され、北側礎石列も西端の1基を除き、全て被災後に抜き取られている。南側礎石列間には隣室との境に段差、溝状遺構が認められ、壁面に関する基礎施設と考えられる。屋外施設ではSR1857との間に切石片、瓦片を構造材とした敲き占め硬化面SX2159が存在する。その東側に隣接して土間状敲き占め硬化面が拡がることからこの部分が本区画への戸口に該当すると考えられる。屋内硬化面北側、室内北西部には、切石片、瓦片などを構造材とした硬化面が拡がり、その東側にSF1798が位置する。炉はもう1基戸口より2間の位置にSF1797が存在する。SF1798は灰が掻き出された状態で検出され、被災時にはSF1797が機能していたと考えられる。またSF1798の南東部にはD1下面に帰属するSK2168、SF2169、SF2170が、北側には円形を呈するSF2286が位置している。戸口から奥行き1間以東の遺構面は緩やかなこぶ状凹凸を有し、床下と考えられる。

SF1797 SB1782-5室に帰属する炉で、F～G9グリッドに位置する。戸口から奥行き2間(Ⅲ-407図)の柱筋ほぼ中央に設置されている。本遺構は木枠を有する炉で、木枠平面形は1辺約40cmを測る方形を呈し、確認面からの深さ12cmを測る。木枠は火災によって炭化し、南壁と東壁の一部が遺存していなかった。また坑底中央には底材と考えられる炭化板材も検出された。木枠内に充填された灰も、被熱によって全体的にやや赤化している。木枠、掘方間の上部には焼土層が入り込んでいることから、使用時に木枠外側上半は露出していたと考えられる。遺物は出土していない。

SF1798 SB1782-5室に帰属する炉で、F8グリッドに位置する。区画内戸口から1間付近の(Ⅲ-408図)北壁際に設置されている。角火鉢を埋設した炉で、1辺38cmを測る軟質瓦質角火鉢が利用されている(Ⅳ-472図1)。検出時にはすでに灰は取り除かれ、割れ口の隙間に若干残存している程度であった。火鉢周囲の掘方はかなり緩やかに傾斜して立ち上がり、炭化物、焼土粒、灰層を多量に含む褐色土が堆積している(1層)。この覆土が火鉢内に充填されていた可能性もある。遺物は出土していない。

SK2168 SB1782-5室に帰属する遺構で、F8グリッドに位置する炉状遺構である。いずれも
SF2169 平面形は歪な方形を呈す。SK2168とSF2169の新旧は不明である。SK2168の規模は東
SF2170 西54cm、南北40～49cm、確認面からの深さは6cmを測る。壁は坑底からわずかに開
(Ⅲ-408図) き気味に立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。覆土はしまりの強い灰褐色土で一度に埋め戻されている。遺構の性格は不明である。SF2169とSF2170は覆土の状況から

同時に廃絶した可能性が高い。SF2169は残存している規模は東西93cm、南北140cm、確認面からの深さは8cmを測り、東側がごく浅い。SF2170は残存している規模は東西46cm、南北40～49cm、確認面からの深さは8cmを測る。なおSF2170側に焼土粒やブロックを多く含む赤褐色土（2層）が確認されていることから、SF2169と同時に廃絶した後、炉状遺構として再び利用された可能性もある。

SF2286 SB1782-5室に帰属する炉で、F8グリッドに位置する。D1下面に帰属し、長屋が火（Ⅲ-408図）事で被災した時点では廃絶していた炉状遺構である。平面形は円形を呈し、規模は直径23cm、確認面からの深さは5cmを測る。壁は坑底より開きながら立ち上がり、断面形は浅い皿形を呈す。覆土は灰層主体であるが、火床部などは検出されず、また焼土粒や炭化物なども認められなかった。炉状遺構としているが、使用した灰を廃棄したものか。遺物は瓦燈破片が1点出土しているのみである。

SX2145 SB1782-5室に帰属する石敷き遺構で、F8グリッドに位置する。5室北西角に位置（Ⅲ-409図）し敲き占め硬化面の構造材である。切石片、瓦片と川原石で構成され、特に周囲に密集している。瓦片、切石片の中には直立した状態や斜めになっているものもあり、設置するときに平坦面を意識して丁寧に埋設する意識が薄い傾向が窺われる。硬化面表面はこぶ状の凹凸が存在し戸口内部施設とは考えにくい。東側にはSF1798が存在し、その関連も考えられる。

SX2159 SB1782-5室、SR1857間に構築された土間状敲き占め硬化面で、F～G8グリッド（Ⅲ-409図）に位置する。硬化面範囲は、5室西側礎石列中央礎石にほぼ北東角を合わせ南北約150cm、東西約110cmを測る不整長方形を呈する。構造材は切石、瓦片が用いられ、切石片は礎石正面位置に東西方向を長辺として2列敷き詰められている。その南側にほぼ完形の平瓦片が2枚配置され、それより南側は瓦片が比較的散漫に埋設されている。本遺構東側には室内部の硬化面が続くことから、この部分が戸口にあたると思われる。遺物は陶磁器類が少量出土しているにすぎない。

SB1782-7室（Ⅲ-403、409図）

SB1782の北から7番目の区画で、H8～9グリッドに位置し、炉状遺構が3基、タタキ状の硬化面が3箇所確認される。硬化面は本建物東側柱筋と、SR1857に面した室部西側北東隅に東西189cm、南北137cmを測るやや歪な方形の範囲に確認されるが、西側の硬化面上には炭化材や灰化したムシロ状の炭化物が検出された（Ⅲ-403図灰色部分）。

SF1775 SB1782-7室に帰属する遺構で、H9グリッドに位置する。確認面から方形のマウン（Ⅲ-409図）ト状に粘土枠が構築され、その中に灰白色の灰層を主体とした層（1層）が充填した状態で検出された遺構である。粘土枠の幅、確認面からの高さも一律ではないが、粘土枠上部の高さはほぼ同じ高さにされている。これは本遺構が構築されている地面の凹凸に合わせて粘土の高さを調整したためのものである。粘土枠内側の規模は東西120cm、南北90cmを測る。覆土中、縞状に焼土が確認されたが、赤色硬化したような箇所は認め

られなかった。

SF1853 SB1782-7室に帰属する遺構で、H9グリッドに位置する。SF1860はSF1853を完掘した際、その坑底で火熱により赤色硬化した部分のみ検出された遺構であり、掘方や覆土などは確認されなかった。SF1853構築前の炉状遺構の火床部か。SF1853は長辺94cm、短辺63cm、確認面からの深さは9cmを測り、平面形は歪な長方形を呈す。局所的に炭化物を含む灰褐色土の枠を有す。枠内は壁、坑底ともに比較的平滑であるが、枠部分は凹凸が著しく、とくに坑底には大きな窪みが4箇所確認される。炉床には火熱によりわずかに赤色化した部分が認められる。

SB1782-8室（Ⅲ-403、410図）

SB1782の北から8番目の区画で、H～I・8～9グリッドに位置する。室部中央付近がわずかにマウンド状に高くなっている。附帯施設には炉状遺構が5基、ピットが1基、タタキ状の硬化面が1箇所確認される。硬化面は本建物東側柱筋に沿って確認される。また室部西側のSR1857との境付近に土手状の高まりを有す。

SF1777 SB1782-8室に帰属する遺構でI8～9グリッドに位置し、周囲に粘土枠を有す炉状遺構である。平面形は方形を呈し、掘方は東西61cm、南北70cm、内法は東西58cm、南北60cm、確認面からの深さは20cmを測る。枠の厚みは均一ではなく、2重に施されていたようである。すなわち先に灰白色粘土、つぎにその外側に灰褐色土を貼った状況が確認された。坑底には枠の痕跡はなく、凹凸が顕著である。覆土は白色灰層が主体で、炭化物粒などを比較的多く含む、締まりの弱いものである。火熱により赤色硬化した部分は認められなかった。なお本遺構の坑底で検出された石は枠の下まで入り込んでおり、本遺構とは無関係のものと判断した。

SF1779 SB1782-8室に帰属する遺構でH9グリッドに位置する。SF1849と重複しており、新（Ⅲ-410図）旧はSF1849より新である。平面形は判然としないが、残存している規模は東西80cm、南北36～42cm、確認面からの深さは11cmを測る。壁は坑底よりごく緩やかに立ちがり、断面形はごく浅い皿形を呈す。壁面、坑底ともに凹凸が顕著である。火熱により赤色硬化した箇所が1層上面と、2層上面の計2箇所で確認されており、SF1779の中で炉床の変更があったことがわかる。

なお坑底からSF1849が検出されたが、SF1779はこのSF1849をバック（3層）し、作り替えたものであることを確認している。

SF1848 SB1782-8室に帰属する遺構でI8～9グリッドに位置する。平面形は歪な楕円形を呈し、規模は東西69cm、南北50cm、確認面からの深さは4cmを測り、断面形はごく浅い皿形を呈す。壁、坑底ともに凹凸が顕著である。炉床には火熱により赤色硬化した部分が1箇所認められる。出土遺物は陶磁器細片のみである。

SF1849 SB1782-8室に帰属する遺構でH8～9グリッドに位置する。SF1779と重複しており、(Ⅲ-410 図) 新旧は1779より旧である。平面形は方形を呈し、東西66cm、南北46cm、確認面からの深さ2～6cmを測る。本遺構を褐色土(SF1779-3層)でバックし、SF1779をほぼ真上に構築したために、SF1849の覆土の遺存は悪い。壁は坑底より緩やかに立ち上がり、断面形は浅い箱形を呈す。坑底中央が全体より少し窪む状況が確認されるが、火熱により赤色硬化したような箇所は認められなかった。

SP1850 SB1782-8室に帰属する遺構でH9グリッドに位置する。平面形は歪な円形を呈し、(Ⅲ-410 図) 直径26cm、確認面からの深さは6cmを測る。覆土はローム粒が主体である。SB1782-8室戸口と考えられるあたりで検出されたピットである。

長屋建物自体の柱筋などの延長上にはないことから性格不明である。

SB1782-9室 (Ⅲ-403、411 図)

SB1782の北から9番目の区画で、I～J・8～9グリッドに位置し、炉状遺構が2基、そのすぐ南側にタタキ状の硬化面が1箇所確認される。附帯施設ではないが、室部南西隅に長軸(南北)156cm、短軸(東西)119cmを測る不整形状にムシロ状の炭化材が検出された。(Ⅲ-403 図灰色部分)。なお室部南側柱筋はゆるやかな土手状の高まりを有し、南東隅付近では瓦片や播鉢片などが散見された。ただし南、東側ともに攪乱されているため全体的な状況を捉えるには至らなかった。

SF1778 SB1782-9室に帰属する遺構で、I9グリッドに位置する。SF1778はSF1852(9層)
SF1852 を廃絶後バック(8層)し、そのバックした盛土を掘削し、それを枠にするように構築(Ⅲ-411 図)された炉状遺構である。SF1778は東西76cm、南北50～66cm、確認面からの深さは10cmを測り、平面形は北東隅が突出した方形を呈す。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形に近い形状を呈す。覆土は炭化物をやや多く含む白色の灰層(1～5層)が主体で、その下の6層上面には火熱により赤色硬化した部分が2箇所認められた。

SF1852は東側をSK3に攪乱されるが、平面形は東西方向に長い長方形を呈し、断面形は浅い皿形を呈す。残存している規模は東西156cm、南北66cm、確認面からの深さは11cmを測る。覆土最下層はほぼ白色の灰層である。出土遺物はSF1778で陶磁器の細片が出土しているのみである。

SB1780 (附図6、附図8、Ⅲ-412～414 図)

東側大半がSK3に攪乱される長屋であり、残存しているのはC～E・10～11グリッド内のみである。D1面で検出された長屋群の中では西から5棟目の長屋建物である。SB1780は西側3棟の長屋(SB1697、SB1772、SB1782)より建物が1間分北側へ突出し、東側2棟(SB1822、SB1812)の長屋建物北縁と揃えて建てられている。通路状遺構SR1858を境に、西と東側の長屋建物の位置を違えていた可能性がある。またSR1858より東側の長屋建物で最も遺存状態のよいSB1812は、礎石の遺存状況から1室が南北2間、東西3間規模の室部を10室備えた長屋である可能性が高いが、SB1780やSB1822と建物位置を揃え、構造も同じくした建物であった可能性もある。

西側にSR1858という通路状遺構があることからSB1780の戸口は西側柱筋に面していたと思われる。なお西側柱筋に使用されていた大半の礎石の表面には墨書きがされていたが、いずれも判読は困

難であった。

SB1780-1 室 (Ⅲ-412、413 図)

SB1780 の北から 1 番目の区画で、C～D・10～11 グリッドに位置し、炉状遺構が 2 基、性格不明の遺構が 1 基、硬化面が 1 箇所確認される。なお硬化面検出箇所のすぐ東側に、炭化物と白色の灰が集中して拡がる状況が確認 (Ⅲ-412 図灰色部) された。この部分の断面観察をしたところ、この長屋が構築された D1 面を構築する D1 層整地層中にも炭化物と灰層がごく薄く層状に 3～4 層確認されている。

SF1844 SB1780-1 室に帰属する遺構で C10～11 グリッドに位置する。東側は SK3 に攪乱 (Ⅲ-413 図) される。平面形は歪な長方形を呈し、残存している規模は東西 152cm、南北 110～124cm、確認面からの深さは 14cm を測り、断面形は浅い箱形を呈す。壁は凹凸が顕著であるが、坑底は比較的平滑に整形され、壁には平瓦片を立てかけ、坑底には平瓦片を敷き詰め、それをローム粒やブロックを多く含む覆土で固めて枠を構築していることが判明した。なお枠内中央付近に火熱により赤色硬化した部分が認められたが、その部分の掘方坑底は他の坑底部分と比較すると瓦片が少なく、それが使用時の事を意識して瓦片を減らしたのか、偶然なのかは不明である。

SF1845 SB1780-1 室に帰属する遺構で C10～11 グリッドに位置する炉状遺構であるが、少 (Ⅲ-413 図) なくとも 1 度作り替えが行われたようである。最初の炉状遺構は、平面形はやや歪な方形を呈し、残存している規模は東西 48～70cm、南北 60～68cm、確認面からの深さは 8cm を測る。壁や坑底は凹凸が顕著で、断面形は浅い皿形を呈す。次の段階でこの方形の炉状遺構の覆土内に直に丹波系播鉢 (Ⅳ-474 図 1) を埋設し、炉状遺構として使用した可能性が高い。播鉢底部は欠損していたが、その部分の見込みに丸瓦と平瓦片が確認された。巴文様のある方を上に軒丸瓦瓦当部片を置き、それが平坦になるように平瓦片をその下に配した状況が確認された。瓦片は底部欠損を補うための設置か。播鉢内の覆土に火熱を受け赤色硬化した状況は確認されなかったが、灰を多く含む覆土が 4 層より上層で確認されることから、4 層上面が使用面か。なお播鉢と瓦片は 2 次的な火熱を受けている。

SB1780-2～3 室 (Ⅲ-412、414 図)

SB1780 の北から 2～3 区画で、D～E・10～11 グリッドに位置する。3 室には硬化面が 1 箇所確認される。SK3 で東側を大きく攪乱されたため全体的な拡がりには未確認であるが、SR1858 に面した西側柱筋の北から 5 つ目の礎石南側に東西 172cm、南北 198cm の範囲で確認される。この硬化面下からは 2 次的な火熱を受けていない箸、曲げ物の蓋、建築部材などが検出され、それらが検出された同レベルで硬化面が検出されていない北側の 2 室においても瓦片や建築部材などが散乱した状況で検出された (Ⅲ-414 図土間下上面)。また散乱した木材や瓦片の下からは、立ち上がりにわずかに材を残す小さな溝のようなものが検出された。この北側延長上には硬化面手前で止まること確認されていた SD1842 があり、この硬化面構築以前は SD1842 が SB1780-3 室前まで伸びていた可能性が高い (Ⅲ-414 図土間下下面)。多数の材が出土し、溝状遺構が伸びてきたことを考慮すると、硬化面構築

前は流し状遺構などが存在していた可能性もある。長屋利用の変遷の中で使用状況に応じたりフォームや施設の作り替えなどが行われた痕跡か。

SB1822（附図6、附図8、Ⅲ-415～423図）

SB1822の3～10室は西側をSK3、2室は東側が上位面の遺構による削平を受けている。3室、4室、7室、9室、10室は東側が攪乱による削平を受けている。遺存状態の良好なのは1室とSK3による削平を受けているものの3室。他の室は攪乱によって削平されているものの、炉の遺存状態は良好である。戸口は東側で、1～6室では90cm（半間）東に礎石、礎石抜き取り坑を確認していることから庇があったと考えられる。炉は戸口から1間半の間で検出している。1室の北列の3基の礎石上に墨書が書かれている。西から「一ノ廿一」「二ノ廿一」「三ノ廿一」。墨書は部屋と部屋の中の礎石に記されている。残っている墨書から南北は南から一～廿一、東西は西から一～四の数字を組み合わせていることが確認される。

SB1822-1室（Ⅲ-415、419図）

C～D・12～13グリッドに位置する。SB1822-1室はSB1822-2室より遺構検出面が高い。北側礎石列の礎石上面でそれぞれ墨書が確認されている。西から「+ 一ノ廿一」、「二ノ廿一」、「+ 三ノ廿（か）一」と記されている。「+」は柱の位置を示していると考えられるが3番目の礎石の「+」は長屋の軸とずれる。庇部分では遺構は確認されていない。炉はSF1810、SF1825、2基を検出している。北から2列目の礎石列の軸線上に並ぶ小穴2基、溝1基の他、直行する軸線上、並行する軸線上に並ぶ小穴列も検出している。東から4列目の礎石列に配置された溝状遺構、部屋内を斜めに縦断する浅い溝状遺構の用途は不明である。

SF1810 SB1822-1室に帰属する炉で、SF1810はC12～13グリッド、北壁沿い中央に位置する。

SF1825 平面形は掘方、内側ともに長方形、断面形は台形を呈する。構造は掘方壁面に砂を含む（Ⅲ-419図）
 締めりの強い灰褐色土を巡らせて炉壁にしている。内法は東西63cm、南北47cm、掘方は、東西77cm、南北64cm、深さ20cmを測る。

SF1825はC13グリッド、北壁沿い東側に位置する。平面形は長方形、断面形は台形を呈する。東西70cm、南北61cm、深さ10cmを測る。覆土には灰を含む。

SB1822-2室（Ⅲ-415、419図）

D12～13グリッドに位置する。全体の半分以上が上位面の遺構によって削平されている。SB1822-2室はSB1822-1室より遺構検出面が低く、北側礎石列の軸線上が段差になっており一部溝の部分もある。SB1822-3室との境目には礎石列の軸線上で帯状の高まりを検出している。北西角の礎石上面で墨書が確認されている。「+ □□ 一ノ十九」。「+」は長屋の軸とずれる。北側礎石列の軸線上とその南側で小穴を検出している。

SB1822-3室（Ⅲ-415図、419図）

D～E・12～13グリッドに位置する。南東角は攪乱、南西角はSK3によって削平されている。SB1822-2室との境目には礎石列の軸線上で帯状の高まりを検出している。部屋部分の西側で砂利敷き硬化面を検出している。北側礎石列の墨書を確認している。西から1基目、2基目の墨書は判読出

来ないが、隣接区画の墨書から推定すると西から1基目は「一ノ十七」、2基目は「二ノ十七」と推定される。炉は北側でSF1899、SF1900、SF1929、南側でSF1898を検出している。東から2列目の礎石列軸線上で溝状遺構と小穴、部屋部分の南側で溝状遺構を検出している。

SF1898 SB1822-3室に帰属する炉で、E12～13グリッド、SB1822-3室の南壁沿い東側に(Ⅲ-419図)位置する。平面形は長方形、壁は緩やかな曲線で立ち上る。東西107cm、南北76cm、深さ14cmを測る。北東角をSP1910に切られる。1層、4層で赤灰色土を検出している。

SF1899 SF1899、SF1900、SF1929はE12～13グリッド、SB1822-3室の北壁沿い東側に
SF1900 位置する。D1下面で検出された。SF1899の平面形は不整長方形、東西60cm、南北
SF1929 80cm、深さ5cmを測る。覆土は茶褐色土で焼土は認められない。SF1929との切りあ
(Ⅲ-419図) い関係は不明である。SF1900の平面形は長方形、東西67cm、南北50cm、深さ5cmを
測る。覆土は焼土粒を含む赤褐色土である。SF1900の平面形は長方形、東西62cm、南
北56cmを測る。

SB1822-4室(Ⅲ-416図、420図)

E～F・12～13グリッドに位置する。東側は攪乱、西側はSK3によって削平されている。東側に庇部分があったかは削平により明確ではないが、5室と4室の間に礎石抜き取り坑が確認されているため庇部分があったと考えられる。部屋部分で南東角に礎石1基、小穴1基を検出している。両遺構は東西に並ぶ。礎石の上面に「四ノ十五」の墨書が確認された。炉は北壁際でSF1808、SF1829、SF1833を検出している。

SF1808 SB1822-4室に帰属する炉で、SB1822-4室北壁沿い東側に位置する。SF1808は
SF1829 E12～13グリッドに位置する。遺構周りは削平されている。平面形は長方形、残存部
SF1833 分で東西90cm、南北71cm、深さ14cmを測る。1層は焼土と灰を含む赤灰色土、2層
(Ⅲ-420図) は灰色土で中央部が被熱により隅丸方形に赤色化、赤色化範囲は約36cm四方である。
3層は2層が焼土化したものと考えられる。削平されているため明確な炉壁の立ち上がりは確認できないが、3層が炉壁部分と考えられる。SF1808はSF1833を切る。

SF1829はE12グリッドに位置する。遺構上部は削平されている。平面形は長方形、断面形は台形を呈する。残存部分で東西83cm、南北58cm、深さ10cmを測る。被熱痕、炉壁は確認できなかった。

SF1833はE13グリッドに位置する。SF1808に上部を削平されており、残存部分で東西66cm、南北56cm、深さ17cmを測る。覆土は灰褐色土、被熱痕、炉壁は確認できなかった。

SB1822-5室(Ⅲ-416図、420、421図)

F～G・12～13グリッドに位置する。西側はSK3によって削平されている。東側の庇部分は東側礎石列の軸線上に礎石の抜き取り坑と考えられる小穴3基が並ぶ。5室と6室の間、礎石列の軸線上に段差があり5室側が低くなっている。部屋部分SF1807の西側は段差があり低くなっている。部屋部北東角の礎石上面で墨書を確認している。1～3室の礎石の墨書から推定すると「□(+)□□(四

ノ)十三」と考えられる。底部分は東側礎石列の軸線上に溝状遺構とその西側に並ぶ溝状遺構を検出。部屋部分の北端にSF1827、戸口中央付近でSF1807を検出している。D1下面でSF1895、その南側で小穴SP1922、SP1923、SP1924を検出している。

SF1807 SB1822-5室に帰属する炉で、東側中央の戸口沿い、F13グリッドに位置する。炉の(Ⅲ-420 図)遺存状態は良好で、床面から10cm盛り上がった上部構造が残る。上部構造を含めた平面形は長方形、断面形は台形を呈する。東西79cm、南北98cm、上部構造を含めた深さは24cmを測る。掘方は東西70cm、南北90cmを測る。6層は粘土を含む灰褐色土を用いた炉壁。1～5層は灰を多く含む覆土で炉内に充填されたものである。

SF1827 SB1822-5室に帰属する炉で、5室北側沿いの中央、F12グリッドに位置する。平面(Ⅲ-421 図)形は長方形を呈する。断面形は他の炉のように台形ではなく、坑底は北側に傾斜している。2層は焼土粒を含む赤灰色土で炉以外の性格は考えにくい。

SF1895 SF1895はD1下面に帰属する炉で、F12～13グリッドに位置する。平面形は長方形、(Ⅲ-421 図)坑底は緩やかな弧を描き、壁面は直線的に立ち上がる。

SB1822-6室(Ⅲ-416 図、421、422 図)

G12～13グリッドに位置する。西側はSK3によって削平されている。東側の底部分は礎石列の軸線上に礎石抜き取り坑と考えられる小穴4基が並ぶ。5室と6室の間、礎石列の軸線上に段差があり6室側が高くなっている。6室と7室の間、礎石列の軸線上に段差があり6室側が低くなっている。部屋部分北東角礎石の南側に礎石列の軸線上に4枚の瓦片、小穴が並ぶ。この軸線上の西側で小穴を検出している。部屋部分の北側でSF1805を検出している。D1下面でSF1835、SF1836、SK1920、SK1921を検出している。炉は区画境に沿って配置されている。

SF1805 SB1822-6室に帰属する炉で、北壁沿い、G12～13グリッドに位置する。平面形は(Ⅲ-421 図)長方形、断面形は台形を呈する。遺存状態は良好で床面から5cm盛り上がった上部構造が残る。東西137cm、南北136cmの範囲は一段高く、この範囲の南側に炉が配置されている。炉は東西83cm、南北65cm、上部構造を含めた深さは16cmを測る。掘方は東西92cm、南北74cmを測る。2、3層は炉壁で、3層は粘土を含む灰色土である。

SF1835 SB1822-6室に帰属する炉でD1下面より検出された。SB1822-6室北壁沿い、G12
SF1836 (Ⅲ-422 図)～13グリッドに位置する。SF1835の平面形は長方形、坑底は緩やかな弧を描き、壁は直線的に立ち上がる。残存部分で東西92cm、南北70cm、深さ22cmを測る。5層は明褐色土の炉壁で、西側と北側に残っている。3、4層は灰を多く含む覆土が充填されている。SF1836を切る。

SF1836は西側、東側を削平されている。残存部分で東西51cm、南北84cm、深さ9cmを測る。

SB1822-7室(Ⅲ-417 図、422 図)

G～H・12～13グリッドに位置する。東側中央は攪乱、西側はSK3によって削平されている。6室と7室の間、礎石列の軸線上に段差があり7室側が高くなっている。7室と8室の間、礎石列の軸線上に段差があり8室側が高くなっている。北東角の礎石で墨書を確認している。「□ノ九」で西側に「一」らしき文字が確認できる。1～3室の礎石の墨書から「四ノ九」と推定される。部屋部分でSF1823を検出している。

SF1823 SB1822-7室に帰属する炉で、東側の中央北寄り、H12～13グリッドに位置する。(Ⅲ-422図) 平面形は長方形、断面形は台形を呈する。炉の内側は東西70cm、南北59cm、掘方は東西92cm、南北70cm、深さ18cmを測る。3層は締まりの強い灰褐色土を含む炉壁で、炉内側の1層は茶褐色土、2層は灰と焼土粒を含む。

SB1822-8室 (Ⅲ-417図、422、423図)

H～I・12～13グリッドに位置する。西側はSK3によって削平されている。7室と8室の間、礎石列の軸線上と、8室と9室の間に段差があり8室側が高くなっている。北側礎石列東から2番目の礎石で「+ 三ノ七」の墨書を確認している。戸口北側周辺で土坑を検出している。部屋部分南東部でSF1804、SF1911を検出。D1下面からSF1837、SF1891を検出している。

SF1804 SB1822-8室に帰属する炉で、南側境界沿い東側に位置する。SF1804は、I12～13グリッドに位置する。遺存状態が良好で、炉の外周を取り囲む材が炭化して検出された。(Ⅲ-422図) 炉の内側、掘方とも長方形を呈する。坑底は緩やかな弧を描き、壁は直線的に立ち上がる。炉の内側は東西77cm、南北62cm、掘方は東西96cm、南北80cm、深さ20cmを測る。炉の内側の南東角に、陶器が据えられている。1、2層は炉内の覆土で1層は赤褐色土で灰、焼土を含む。2層は暗灰色土で灰を多く含む。3、4層は炉壁で、3層は4層が被熱によって赤灰色に色調変化したもので、4層は灰を多く含む暗灰色土で、炉の外周に配置された材を固定している。

SF1911は、I12グリッドに位置する。SK3に西側を削平される。残存部分で東西44cm、南北64cm、深さ14cmを測る。1層は灰褐色土で、瓦片を出土している。2層は灰色土で灰を多く含む。

SF1837 SB1822-8室に帰属する炉で、南側塀沿い東側に位置する。SF1837はI13グリッド**SF1891**に位置する。平面形は長方形、坑底は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。残存部分で東西(Ⅲ-423図) 58cm、南北50cm、深さ10cmを測る。1層は灰褐色土、2層は灰色土で灰を多く含む。3層は赤灰色土で焼成を受けている。SF1891を切る。

SF1891はI13グリッドに位置する。平面形は長方形、坑底は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。西側をSF1837に切られる。残存部分で東西90cm、南北84cm、深さ8cmを測る。炉はSF1891、SF1837、SF1804の順で構築されている。

SB1822-9室 (Ⅲ-417図、423図)

I～J・12～13グリッドに位置する。東側は攪乱、西側はSK3によって削平されている。東側に位置するSD1725とSB1822部屋部分との間隔は広い所で150cmだったのが9室南側から狭くなって

いる。北側礎石列の軸線上に段差があり9室側が低くなっている。北側礎石列、東から2列目の礎石に「三ノ五」の墨書を確認している。戸口から奥行1間付近で土坑を南東角でSF1803、その下層からSF1838を検出している。

SF1803 SB1822-9室に帰属する炉で、区画南東角、I～J13グリッドに位置する。遺存状態（Ⅲ-423図）は良好で、炉の南側を除く粘土枠内側で、炭化材を検出した。粘土枠に沿って南側、北側で瓦を検出している。掘方は長方形を呈する。坑底は東側に傾斜し西側と東側で遺構検出面の標高に差があるが、外周を取り囲む材の検出状態から、使用時も傾斜していたと考えられる。枠の内側は東西78cm、東西60cm、掘方が東西86cm、南北77cm、深さ18cmを測る。坑底中央部分に東西30cm、南北28cmを測る被熱した部分が認められる。

SF1838 SF1838はI～J13グリッドに位置する。東壁、西壁で立て掛けられた平瓦を検出し（Ⅲ-423図）ている。掘方、東側で瓦片を検出している。SF1803に北西側を削平される。平面形は長方形を呈する。残存部分で、枠内側は東西70cm、南北74cm、掘方は東西84cm、南北78cm、深さ17cmを測る。

SB1822-10室（Ⅲ-418図）

J12～13グリッドに位置する。西側はSK3によって削平されている。東側に位置するSD1725とSB1822-10部屋部分との間隔は65cmを測る。東側礎石列中央の礎石表面に「+ 四ノ二」の墨書を確認している。戸口西側で溝状遺構、SK3の立ち上がり部分でSK1938を検出している。

SB1812（附図6、附図8、Ⅲ-424～432図）

SB1812は東側と西側が攪乱によって削平されているが、それぞれの室の遺存状態は比較的良好で各室の炉などの配置が把握できる状態にある。戸口は西側である。礎石には墨書は確認できなかった。もともと記されていなかったのか、消えたのか不明である。炉は1室のSF1737が室の東側に配置されているが、2室、4～9室は間口から1間の範囲に配置されている。炉の平面形は長方形で炉の規模は長軸がほぼ半間の規模である。

SB1812-1室（Ⅲ-424、428図）

C～D・14～15グリッドに位置する。東側と西側が攪乱により削平されている。南北区画部で浅い溝状遺構を検出している。東から3列目の礎石列の軸線上で土坑を検出している。この軸線の東側に土坑、SF1742を検出している。SF1737は東から2列目の礎石列の軸線の東側で検出している。その他、不整形で浅い土坑、小穴を検出している。

SF1737 SB1812-1室に帰属する炉で、C15グリッドに位置する。粘土枠の内側、掘方の平面（Ⅲ-428図）形は長方形、断面形は台形を呈する。粘土枠の内側は東西43cm、南北34cm、掘方は東西60cm、南北50cm、深さ12cmを測る。1層は灰を含む暗灰色土、2層は灰を多く含む灰色土。4層は炉床で砂を多く含み、中央部に平瓦が配置されている。瓦の上部3層は赤色土で被熱している。5層は炉壁で炉の東側と北側で検出。粘土を多く含む灰色

土でしまりは強い。東側と北側の炉壁外側、南壁で釘を検出している。炉の周りにコの字形に材が配置されていたと考えられる。北東角の釘は北側と東側の材を接続したと考えられる。

SF1742 SB1812-1室に帰属する炉で、C15グリッドに位置する。坑底は凸凹があり壁は直線(Ⅲ-428図)的に立ち上がる。東西82cm、南北69cm、深さ19cmを測る。2層は暗灰色土、3層は灰白色土で2、3層とも灰を多く含む。

SB1812-2室(Ⅲ-424図、428図)

D～E・14～15グリッドに位置する。東側と西側が攪乱により削平されている。北側礎石列の軸線上で浅い溝状遺構を検出している。西側礎石列の軸線上に段差がありSR1859側より部屋部分が高くなっている。

SF1730 SB1812-2室に帰属する炉で、区画北東部、D14～15グリッドに位置する。西側は(Ⅲ-428図)攪乱により削平されている。粘土枠の内側、掘方の平面形は長方形で炉壁は北西角で北側に張り出し、そこで瓦を検出している。南壁に沿って炭化材を検出している。坑底は凸凹があり、壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存部分で枠の内側は東西82cm、南北62cm、掘方は東西96cm、南北89cm、深さ14cmを測る。3層は赤灰色土で焼土、灰を含む。4層は赤灰色土で被熱している。4層の範囲は炉の中央部で、平面形は不整形を呈し、東西25cm、南北24cmを測る。6層は茶褐色土で粘土を含む。逆凸形の掘方を掘削し、テラス部分に6層を貼り、枠を整形している。

SB1812-3室(Ⅲ-424図、429図)

E14～15グリッドに位置する。東側と西側が攪乱により削平されている。南側礎石列の軸線上で浅い溝状遺構を検出している。西側礎石列の軸線上に段差があり、SR1859側より部屋部分が高くなっている。

SF1731 SB1812-3室に帰属する炉で、E15グリッドに位置する。西側は攪乱によって削平さ(Ⅲ-429図)れている。平面形は残存部分で隅丸長方形、坑底は緩やかな弧を描き、壁は緩やかに立ち上がる。残存部分で東西62cm、南北54cm、深さ15cmを測る。1層は灰白色土で灰を多く含む。2層は茶灰色土で粘土を多く含み、遺構の内面全体で検出している。2層は炉壁と考えられる。

SB1812-4室(Ⅲ-425図、429図)

E～F・14～15グリッドに位置する。南東角部分、南西角部分を攪乱により削平されている。建物西側に小穴、礎石を検出している。攪乱により対応する礎石の存在は不明であるが、SB1812と西側のSD1735の間隔は約200cmを測り、SD1735東側の硬化面が3室で収束することから本区画には庇が存在する可能性がある。SF1729は区画北西角に配置されている。東から2番目の途中から4番目の礎石の軸線上に帯状の高まりがありSF1729に接している。北側礎石列の軸線上では溝状遺構を検出している。SX1749、SF1784はSF1729と東西に並ぶ。

SF1729 SB1812-4室に帰属する遺構で、E14グリッドに位置する。床面から炉を含むマウン（Ⅲ-429図）ト状の盛り上がりが拡がり、SB1812-3室側に張り出す。炉は南側に構築されている。炉の西側は削平されており炉壁は失われている。枠内西側に東西29cm、南北30cm、深さ25cmの小穴が掘削されている。枠の内側の平面形は長方形を呈す。残存部分で枠の内側は、東西80cm、南北58cm、掘方は東西79cm、南北76cmを測る。炉構築のための掘削は無く、炉の上部から底までの高さは13cmを測る。1、3層は灰を多く含む。4層は炉壁で、粘土を少量含む土が用いられている。坑底で検出した瓦片は4層で固定されている。

SF1748 SB1812-4室に帰属する遺構で、SF1729の東、E14グリッドに位置する。西側の立（Ⅲ-429図）ち上がりは削平を受けている。平面形は長方形、坑底は平坦だが小さい凹凸があり、壁は緩やかな弧を描いて立ち上がる。残存部分で東西77cm、南北55cm、深さ10cmを測る。2、3層は灰色土で灰を含む。3層は炉壁と考えられる。

SX1749 SX1749は小穴で、平面形は円形、直径19cm、深さ6cmを測る。（Ⅲ-429図）

SB1812-5室（Ⅲ-425図、430図）

F～G・14～15グリッドに位置する。北西角、東側を攪乱により削平されている。SD1750との間隔は約90cm。北西部に土間状硬化面が存在し、その周囲に坑痕、溝、土坑が存在する。また南西部に炉が位置する。

SF1721 SB1812-5室に帰属する炉である。区画南西角、G14グリッドに位置する。SB1812-（Ⅲ-430図）6室のSF1772とは壁を挟んで南北に並んでおり、東西142cm、南北205cmの硬化面から盛り上がった範囲に構築されている。盛土範囲はSB1812-5室とSB1812-6室の間の戸口から2列目に位置する礎石の上にかかっており、礎石を配置後に炉が作られている。枠の内側は東西75cm、南北50cm、炉の高さは24cmを測る。1～6層は枠の内側。3層は赤褐色、焼土を多く含む。枠の内側で検出した瓦は5層で固定されている。10層は炉枠で粘土が用いられている。8層は赤褐色で焼土を含むことから7～9層は別の炉の覆土と考えられる。

SB1812-6室（Ⅲ-425図、430図）

G14～15グリッドに位置する。南東角を攪乱により削平されている。SD1750から分岐したSD1723は本区画中央付近で東側へクランク状に折れSD1723と6室の間隔は、約90cmから70cmへ狭くなる。北側礎石列は東から2番目が抜き取られている。東側礎石列軸線上の西側に沿って溝状遺構を検出している。溝状遺構は5室側に伸びる。SF1722の南東に小穴を検出している。南西部に奥行き約90cmの硬化面が存在し、その東側に沿って木材を配したSD1736が位置する。

SF1722 SB1812-6室に帰属する炉で、G14グリッドに位置する。枠の内側は東西72cm、南(Ⅲ-430図)北60cm、炉の高さは土間から20cmを測る。土間を6cm掘削して炉を構築している。1～7層は枠の内側で8・9層は炉壁でローム土を含む覆土が用いられている。10層は灰を含む灰褐色土で別の炉の覆土と考えられる。

SB1812-7室 (Ⅲ-426図、430図)

G～H・14～15グリッドに位置する。北東角を攪乱により削平されている。8室との境に段差があり7室側は低くなっている。中央東西礎石列の軸線上に小穴2基を検出している。南側礎石列から北へ約90cmに東西方向の石列を検出。約2間幅にて礫が配されている。西側礎石列南側で平面形が長方形の溝状遺構を検出している。坑底から炭化した板材を検出している。SF1724は戸口から約90cm東、北壁に沿って配置されている。SF1724の東側、南側で溝状遺構を検出している。部屋部分北西角の溝状遺構は外側に伸びる。

SF1724 SB1812-7室に帰属する炉で、G～H14グリッドに位置する。SB1812-7室の北壁(Ⅲ-430図)間口から180cmの位置に配置された礎石に接して構築されている。炉の規模は東西124cm、南北100cm、炉の盛り上がりは土間から22cmを測る。炉の検出状況と掘方の切り合い関係から、少なくとも3回の作り替えが行われたと考えられる。一番古い炉は、床面を8cm掘削し9、10層を盛土している。10層は粘土を含む。次の炉の8層は炉壁で粘土を含む。最も新しい炉の1～3層は炉の内側と考えられ、6、8層を切る。一番新しい遺存状態の良好な枠の内側は、東西53cm、南北46cm、深さ23cmを測る。

SB1739 SB1812-7室に帰属する石列で、戸口から1～3間間、北から1間半を東西に並び、(Ⅲ-431図)H14～15グリッドに位置する。礫は約15～25cm大で7基が約50～60cm間隔で並ぶ。西から1つ目、4つ目の礫はそれぞれ、SB1812-7室の間口から1間目の礎石、2間目の礎石と南北に並ぶ。

SB1812-8室 (Ⅲ-426図、431図)

H～I・14～15グリッドに位置する。部屋部分は段差があり高くなっている。西側礎石列の軸線上でSD1747を検出している。溝底から炭化した板材が出土している。SD1747の西側約100cmで並行する溝状遺構を検出している。SF1726は北側礎石列東から3列目の礎石西側に接する位置に配置されている。

SF1726 SB1812-8室に帰属する炉で、区画北西部、H14グリッドに位置する。炉の規模は(Ⅲ-431図)東西106cm、南北93cm、炉の盛り上がりは土間から12cmを測る。炉の検出状況と掘方の切り合い関係から、少なくとも4回の作り替えが行われたと考えられる。一番古い炉は、床面を14cm掘削、13層を盛土している。掘方の平面形は長方形、残存部分で東西97cm、南北93cm、炉の検出面、盛り上がり部分と底まで12cmを測る。次の炉は、床面を16cm掘削、8～12層を盛土している。8層は粘土を多く含み、炉壁と考えられる。掘方の平面形は長方形、残存部分で東西82cm、南北80cm、炉の検出面、盛り上がり部分と底まで32cmを測る。次の炉は、床面を12cm掘削、7層を盛土している。7

層は粘土を多く含み、炉壁と考えられる。掘方の平面形は長方形、残存部分で東西 89cm、南北 80cm、炉の検出面、盛り上がり部分と底まで 18cm を測る。一番新しい遺存状態の良好な炉は、古い炉の覆土を炉壁とし、1～6層を盛土している。掘方の平面形は長方形、東西 67cm、南北 58cm、深さ 24cm を測る。坑底中央は直径 22cm の範囲が被熱している。

SB1812-9 室（Ⅲ-426 図、432 図）

I～J・14～15 グリッドに位置する。中央、戸口部分を攪乱により削平されている。北側礎石列の東から 1 番目から 3 番目の礎石の間で砂を帯状に検出している。部屋部分の南東側は低くなっている。8 室の西側礎石列の軸線上で検出した溝状遺構を 9 室で検出している。SF1727 は北西部に配置されている。南側で溝状遺構、西側で遺構検出面におかれた丸瓦を検出している。

SF1727 SB1812-9 室に帰属する炉で、北壁際、戸口から東約 90cm、I14 グリッドに位置する。（Ⅲ-432 図）炉の規模は東西 106cm、南北 104cm、炉の盛り上がりは床面から 16cm を測る。炉の検出状況と掘方の切り合い関係から少なくとも 4 回の作り替えが行われたと考えられる。一番古い炉は、床面を 18cm 掘削、7 層を盛土、炉の南西角に播鉢を配置している。播鉢の口縁部は欠損、上層の炉構築の際に欠損したと考えられる。掘方の平面形は長方形、東西 64cm、南北 76cm を測る。次の炉の西側は床面を 6cm 掘削、東側は掘削を行わないで 5、6 層を盛土している。6 層は粘土を含み、炉壁と考えられる。5 層は焼土粒を多く含む。掘方の平面形は西側が張り出した長方形、残存部分で東西 78cm、南北 75cm、炉の検出面、盛り上がり部分と底まで 16cm を測る。掘方の平面形は長方形を呈し、東西 112cm、南北 104cm を測る。一番新しい遺存状態の良好な炉は、古い炉の覆土を炉壁とし、1～4 層を盛土している。1、2 層は灰を多量に含み、3 層は焼成を受けた赤色土である。掘方の平面形は長方形、東西 70cm、南北 62cm、深さ 22cm を測る。

SB1812-10 室（Ⅲ-427 図、432 図）

J14～15 グリッドに位置する。北西側と部屋部分を縦断する攪乱により削平されている。北側礎石列の軸線上、東から 1 基目と 2 基目付近まで、粘土が帯状で検出している。SF1728 は攪乱により大部分が削平されている。

SF1728 SB1812-10 室に帰属する炉で、J14～15 グリッドに位置する。遺構の南西角以外の（Ⅲ-432 図）大部分を攪乱により削平されている。南壁にテラス状の 1 段が認められる。覆土には灰を含む灰色土とローム含む覆土が交互に堆積している。

D1 面溝

SD356（附図 6、Ⅲ-433 図）、SD1735、SD1750（附図 6）

C～J14 グリッドにかけて SR1859 と SB1812 間を南北に伸びる溝である。SD356 は SD1735 と同一遺構と考えられる。南端部は攪乱による削平のため詳細は不明だが、SD1735 が SB1812 南端部までは確認されている。また北端部は SD1832 に接続するが、溝底にレベル差があり接続部で段差が生じている。SB1812-9、10 室境付近でクランク状に西へ折れ、6 室中程まで北進して 5、6 室境

付近に隣接する SE1831 南側に達し、それを取り囲むように西へクランク状に屈曲する。東側へは SD1750 が分岐する。井戸北側は攪乱による削平のため詳細は不明であるが、おそらくこの 2 本の溝によって四周を取り囲み、SE1831 北側で再び合流し、北へ伸びていたと考えられる。E14 グリッド内では炭化した板材の遺存状況が最も良好で、壁面および溝底にも認められ、杭痕、釘などは認められなかったが、三方を板材で補強されていたと考えられる。

SD458 (Ⅲ-436 図)

K2～3 グリッドに位置する石組溝で、SB429 の南側に隣接し、東西方向に伸びる。SB429 の東西軸からは南へ約 5° 傾く。東端部は攪乱によって削平されており不明である。西端部は調査区外に至るが、同じく D1 面に帰属する SD422 に接続すると考えられる。SB429 東端部付近までは壁面に炭化した板材が遺存していることから板枠構造をとっていたことが判るが (b-b')、SB429 と並ぶ辺りから石組構造へ変化する。使用された石材は安山岩製で、東側では間知石を主体としているが、西側では切石に変化する。溝底には調査区西端から約 1.4m までは凝灰岩製の切石が敷設されているが、それ以東は砂利敷きへと変化する (3 層)。覆土はほぼ焼土で埋まっている。

SD463 (Ⅲ-437 図)

L3～4 グリッドに位置する石組溝である。南側及び西側を攪乱によって消失し、北側は SK350 (A 面) によって消失している。そのため形態、規模ともに不明である。側縁石には川原石が、底石には切石が使用されている。覆土には焼土粒が多量に含まれており、出土遺物の年代観から天和 2 年の火災で廃絶されたと考えられる。北側の SD458 との関連は不明である。

SD1602 (附図 6、Ⅲ-433 図)

SD1602 は、SB1772 北端部で SD1603 からクランク状に東側へ分岐する溝である。SD1603 とは約 35cm 間隔で平行して伸びる。断面形は箱形を呈し、溝幅は 30～35cm を測る。SB1772-4 室北半付近で東壁際にほぼ正方形の切石が設置されている。4 室への出入りに対する補強施設と推定される。壁面には炭化した板材痕が認められ、本来は木枠を有していたものと考えられるが、杭痕は認められなかった。溝底直上には玉砂利を含む暗褐色土がほぼ水平堆積し (3 層)、使用時の溝底状況を窺わせる。砂利層上には火災時の焼土層が厚く堆積している (1 層)。

SD1604 (附図 6、Ⅲ-433 図)

SB1697、SB1772 間を蛇行して南北に伸びる溝で、C～I6 グリッドに位置する。全体的な様相は不定形を呈す。南端部は SB1697 および SB1772-8 室中央付近で立ち上がり、そこから 5 室までは壁面が波打ち、断面形は浅い皿状を呈している。そこから溝幅は細くなり、4 室北端部と 3 室北端部で SB1772 方向へ 2 度クランク状に屈曲し、2 室南端部付近からはほぼ SB1772 に接するように北へ伸びる。北端部は攪乱によって削平され詳細は不明であるが、攪乱北側に位置する SD1608-1 の南壁が立ち上がっていることから、そこへの接続は難しく、SB1772 北端部で屈曲して東方向に進み、SB1772 東側に隣接して南北に伸びる SD1603 に接続していたと推定される。溝幅が狭く変化する 5 室以北では、それまで素掘りであった側壁の形状にも変化が認められ、SB1697-4 室張り出し部付近、SB1772-1、2 室付近では丸瓦片を縦列に設置して壁を補強、また 3 室中央付近の西壁では平瓦を 2 枚垂直に立てて壁面を補強している。また 2 室南端部のクランク部以北では、壁の立ち上がりも徐々

に垂直に近づき、壁補強材に丸瓦片を用いていない部分で、断片的ではあるが壁面に炭化した板材が認められ、瓦片と板材を併用して壁補強を行っていたことが窺われる。特に1室中央付近の丸瓦片壁補強北端部より北側は、壁は垂直に立ち上がり、両壁ともに炭化した板材が検出された。また溝底からも炭化板材痕が確認されたことより蓋材の存在も考えられる（Ⅲ-433 図 e-e'）。本遺構はその形態の様相から SB1697、SB1772 に伴う雨落ち溝と考えられ、流入した雨水は南から北方向へ流れていた。溝構造が北半に至りしっかりとしたものに変化していることは、雨水の集中との関連が考えられる。

G ライン付近の本遺構内溝底直上および SB1697-2 室と本遺構間遺構面直上から、ほぼ完形のかわらけが正位もしくは逆位の状態で押し潰されたように出土したが、いわゆる胞衣容器出土事例のような合わせ口の状態ではなくその理由は不明である。

SD1605、SD1606、SD1607、SD1608-1～6、SD1609、SD1614、SD1681

（附図 6、Ⅲ-433、434 図）

SB429 と SB1697 に挟まれ 4 ラインを南北に伸びる SR1856 に平行もしくは交差する溝群である。

SD1605 は SR1856 の東端部に接し、4 ライン東 250cm 付近を南北に伸びる。溝幅は 30～40cm を測り、断面形は箱形を呈す。SD1608-1 と接続する北端部がややハの字状に広がり最大幅 70cm を測る。途中 G4 グリッド付近で西方向へのクランク状の張り出し部を有す。この張り出しは、東接する SE1706 に規制されていると考えられ、井戸の排水溝としても機能していたことが窺われる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁面は道路部や長屋建物側の敲き占め部の構成土で非常に締まっている。クランク部南側では両壁際に杭痕が認められ、壁面には炭化した板材痕跡が残存しており、板枿が設置されていたことが認められる。また一部に坑底直上から炭化した板材が認められ、落下した蓋材の可能性が考えられる。一方クランク部北側には杭痕や炭化板材痕は認められず、素掘りの可能性もある。南端部は J ライン以南で攪乱による削平を受け不明であるが、SB1697 南端部までは伸びていたと推定される。本遺構には SR1856 を横断した SD1608-2～6、SD1606 が接続し、それらの排水が合流して北流し、SD1608-1 に合流する。

SD1608-1～6、SD1609 は、基本的に東西に伸び、SR1856 を横断する溝で、SD1605 の枝線と位置付けられる。断面形は箱形を呈し、溝幅は 30～45cm を測る。

SD1609 は SR1856 北端部に接し、SR1856 東端部付近で南側へ直角に折れる。先端部は攪乱によって状況を捉えることはできなかったが、その方向性から SD1608-1 に接続すると推定される。その位置から西側の SB429-1 室もしくは北側の SB1612-1、2 室に伴う排水溝と位置付けられる。

SD1608-1 のうち SD1605 接続部西側部分は、SR1856 を横断し、その西端で南側に直角に折れ、SD1614 に接続する。便宜上別遺構名を付与したが、同一遺構と捉えられる。断面形は箱形を呈し、溝幅は 35cm 前後を測る。北壁際から長さ約 10cm の鉄釘がほぼ直立した状態で 4 本検出された（Ⅲ-433 図 q-q'）。壁板を留めていたものと推定される。本遺構西側延長上の SD1614 は、SB429-1、2 室（中央診療棟地点 2 号石列）に伴う排水溝と考えられる。また接続部東側部分は、SR1855 の南端に沿って東へ伸び、SB1697 東端部の延長上で南側へ約 100cm クランク状に折れ、8 ライン西約 1m で南北方向の SD1603 に接続、合流する。

SD1608-2 は、SR1856 を横断した西端部で直角に折れ、SD1607 と接続する溝である。便宜上別遺構名を付与したが、同一遺構と捉えられる。断面形は箱形を呈し、溝幅は 40cm 前後を測る。覆土は上部に焼土層、下部に灰褐色土（Ⅲ-433 図 l-l' 層）の堆積が認められ、7 層が本遺構使用時の堆

積物と考えられる。SD1607は、SB429-3室に伴う排水溝と考えられる。また、南端は攪乱によって削平され詳細は不明であるが、次に述べる南側のSD1608-3がSD1681との接続部分よりもさらに西へ伸びていることから、本遺構に接続する可能性も考えられる。

SD1608-3の主軸方位はN-78°-Eを呈し、SR1856をほぼ直角に横断する他の支線と異なる方位を示す。断面形は箱形を呈し、溝幅は40cm前後を測る。西端部は攪乱によって削平されているが、先述したように、SD1607と接続する可能性がある。また西端部付近南壁にSD1681が接続する。SD1681は南方向へ伸び、南端部で西側へ直角に折れ、SB429方向へ伸びる。但し先端部は攪乱による削平を受け、詳細は不明である。ただしその方向性より、SB429-4室に伴う排水溝と考えられる。両遺構の覆土には焼土層下に灰褐色土の堆積が認められ、使用時の堆積物と考えられる（Ⅲ-433図m-m'9層、Ⅲ-434図y-y'）。

SD1608-4は、SR1856を横断した西端部で南側に直角に折れ、L字状を呈する溝である。屈曲部先端部はSB429-5室戸口北側に付随するSX1670東角で止まる。断面形は箱形を呈し、溝幅は35～50cmを測る（Ⅲ-433図n-n'）。屈曲部先端がやや先細りする感がある。本遺構先端部は隣接するSX1670の北壁際溝状部分と接続していることが確認され、SX1670に伴う排水施設と考えられる。

SD1608-5は、SR1856を横断した西端部で止まる溝である。断面形は箱形を呈し、溝幅は35～45cmを測り、西方へやや広がる様相を呈している。覆土にはロームブロック、ローム粒、礫が多く含まれ、C層によって埋め戻されたと考えられる（Ⅲ-433図o-o'）。西端部はSD1610に接続する。SD1610は西側の木組施設SX1669に接し、その排水施設としての機能を有していたと考えられる。本遺構はSD1610と接し、坑底が1段低い位置にあることから、SX1669からの排水がSD1610を介して本遺構に排水される構造と推測される。

SD1608-6はSR1856を横断した西端部で南側に直角に折れ、L字状を呈する。南端部はSB429-7室の入口施設と考えられる切石手前で止まる。断面形は箱形を呈し、溝幅は東西部で30cm、南北部で約45cmを測る。覆土にはロームブロック、ローム粒、炭化物粒、焼土ブロック、焼土粒が含まれ、その様相からD面焼土とした瓦礫整理層の流入は少なく、C層によって埋め戻されたと考えられる（Ⅲ-433図p-p'）。南北部西側にはSB429の付帯施設である木組遺構SX1663が隣接し、南端部がほぼ揃っていることからSX1663に伴う排水溝と考えられる。

SD1606はSD1605から分岐し、SR1856を南西方向に横断し、その西端部を南方向に伸びる溝である。溝幅は横断部で約30cm、南北部で40cm前後を測る。南北部ではSB429-9室に隣接するSX1662北東部に設置されたL字状の溝と接続し、SX1662からの排水を目的として設置された遺構である。またその南側ではSD1664が接続する。南端に関してはJライン以南が攪乱による削平を受けて不明であるが、SB429南端部まで伸びていたと推定される。

SD1613（附図6、Ⅲ-434図）

B～C・8～11グリッドに位置する溝である。東端はSB1780中央付近より始まり西方向へ伸びる。SB1780北西角で南から南北方向に伸びるSD1841、SD1842が合流、SD1841合流箇所以北方向へ屈曲しSR1855を横断する。さらにSR1855北端部で西方向に直角に折れ、SD1601に合流する。途中SB1611-3室に伴うと考えられるSX1695西端部に沿って北方向へ伸びる短支線が分岐、さらに1室東半部で箱形の張り出し部を有す。張り出し部北壁際には玄関石と推定される切石が設置されており、この張り出し部もそれに規制されていることが考えられる。また切石に向かって本遺構を横断する方向で炭化した板材片が検出されており、道路から玄関石に向かう蓋板の可能性も考えられる。壁面に

は炭化した板材が張り付いている箇所が複数認められ、板材による壁面補強がなされていたことが確認される。但し杭痕は確認されていない。また張り出し部以西では北壁面に平瓦による補強が、南壁面に丸瓦による補強が認められる。

SD1620（附図6、Ⅲ-434図）

C～D4グリッドに位置し、西側のSD1605とほぼ平行に南北に伸びる溝である。北端部は攪乱によって削平され、詳細は不明であるが、位置関係より本遺構北側を東西に伸びるSD1608-1に接続すると推定される。一方、南端部はSB1697-1室南端付近で止まっている。断面形は箱形を呈し、覆土は暗褐色土で埋め戻されていることから火災以前に廃絶された可能性がある。また坑底直上には小円礫を多量に含む2層が薄く水平に堆積しており、使用面であったと考えられる。本遺構東側にはSB1697-1室に帰属する切石や炭化材を敷設したスノコ状遺構が隣接しており、本遺構はSB1697-1室の排水を目的として構築された排水溝と考えられる。17世紀後半に比定される陶磁器類が少量出土している。

SD1648、SD1649、SD1650（附図6、Ⅲ-434図）

B～C・14～15グリッドに位置する溝で、SR1855の北側にクランクを伴う東西方向のSD1648、南側に東西方向のSD1649、その東側に南北方向のSD1650が位置し、SD1648およびSD1649の東端はSD1650に接続する。覆土は焼土で埋め尽くされ、壁面、溝底に炭化した板材痕が、壁際には杭痕も認められる。SD1648はSB1611-8室南側のSR1855残存部で認められないことから8～10室までの排水処理を目的として構築されたと考えられる。SD1649は、位置関係より西方のSD1832の延長と考えられる。SD1650は調査区内では石組の痕跡は認められなかった。また延長上にはSB1611部屋割り想定ラインが位置し、SB1611は本遺構の西壁際まで達していたか、もしくはその手前の礎石が東端部の可能性も考えられる。

SD1725（附図6、Ⅲ-440図）

SB1822の東側をC～J13グリッドにかけて南北に伸びる溝である。南端部は攪乱による削平を受け不明であるが、本遺構面一連の溝の機能からSB1822南端までは伸びていたと推定される。SB1822-9室と10室との境界付近でクランク状に約70cm東へ張り出し、それ以北はSR1859の西側側溝としてほぼ直線状に北方向へ伸び、SB1822北東端部でSD1832に接続する。東側への張り出しはSB1822底部および水場関連遺構との関連が考えられる。断面形は箱形を呈し、溝幅は30～40cmを測る。溝底壁際に杭痕が認められることと壁面に炭化した板材が部分的に残存していることから木枠溝であったことが窺われる。またSB1822-9室隣接部では溝両側に平瓦を主体とした瓦片や板材が敷設された痕跡が認められることから、9室入口部の補強と考えられる。

SD1832（附図6、Ⅲ-434図）

B～C・11～14グリッドに位置する。SB1822の北側を東西方向に伸び、建物中央付近で逆T字状に北方向へ伸びSR1855を横断する南北部分が接続する。またSB1822東側で南北方向に伸びるSD1725、SD1735が合流する。西端部は攪乱によって削平されているが、西側延長線上に位置するSD1613に接続すると考えられる。また東側に関してはやはり延長線上のSD1649に接続すると考えられる。東西部分壁際には杭痕が認められ、部分的に炭化した板材が残存していることから木枠を有

する溝であったことが確認される。南北部分も東西両壁に炭化した板材が良好な状態で残存していたことから、杭痕は認められなかったものの東西部分同様、木杵を有していたと考えられる。東西部接続部では南北部分の溝底が一段高いことから排水は南北部から東西部へ流れていたといえる。また、SR1855 北端部に沿って東西方向の溝への接続を確認したが、調査区北壁際であることと東側は攪乱によって削平されていることから詳細は不明であるが、SB1611-6～8 室の生活排水が建物に面する北側東西部分へ流され、南北部分を経由して SR1855 南側東西部分へ流入し、SD1846 より邸外へ排水されたと推定される。

SD1841、SD1842（附図 6、Ⅲ-434、435 図）

C～E10 グリッドにかけて南北方向に平行して伸びる 2 本の溝で西側が SD1841、東側が SD1842 である。いずれも北端部は SB1780 北西端部で SD1613 に接続し合流する。SD1842 の南端は SB1780-2 室中央で止まり、SD1841 の南端は SK3 による攪乱で削平されており詳細は不明だが、SB1780 とその東に位置する SB1822 間には道路が作られていないことから SB1780 南端まで伸びていたと推定される。断面形は箱形を呈し、溝幅は 25～40cm と総じて南側が狭い。壁際には方形の杭痕が認められ、板材によって補強されていたことが判るが、特に SD1841 南側では板材、杭痕ともに生焼け状態で比較的良好に遺存していた。溝の傾斜が南に向けて下がっているのは、本遺構下方に存在する埋没谷の影響と考えられ、本来は南から北へ向かう傾斜であったと推定される。

SE326（Ⅲ-441 図）

K10 グリッドに位置する。井戸で深さ 355cm まで調査、深さ 330cm で井戸杵を検出した。掘方の平面形は楕円形で楔形の足掛かり 1 基を確認している。掘方は東西 145cm、足掛かりを含めると 170cm、南北 124cm を測る。井戸側の平面形は円形で、東西 100cm、南北 96cm を測る。

SE377（Ⅲ-442 図）

J7 グリッドに位置する。井戸で上部にテラス状施設の基礎を伴う。井戸側は円形で東西 96cm、南北 97cm を測る。上部施設は隅丸方形を呈し、東西 190cm、南北 170cm、深さ 72cm を測る。東西両側に柱穴と考えられる方形土坑を伴う。中央に直径約 127cm を測る井戸掘方が位置する。1 層は井戸側を固定するために充填された覆土である。

SE399（Ⅲ-443 図）

攪乱による削平をローム層まで受けたため、ローム面から検出された井戸で、P～Q・10～11 グリッドに位置する。上部にテラス状施設を持っているが、各コーナーは攪乱のため遺存していない。テラス部の平面形は 1 辺約 300cm、確認面からの深さ約 30cm を測る方形を呈すると考えられる。テラス部中央には直径 130cm を測る円形の井戸掘方が位置する。またテラス上には井戸掘方に接して幅約 80cm、奥行き約 60cm を測る方形の掘り込みが十字状に配されている。SE484 など本遺構と同時期の井戸に認められる特徴である。さらに本遺構では方形掘り込みの間にピットが認められる。ピット間は各々約 180cm を測り、ピットを繋ぐ形は 1 辺 180cm の方形を呈し、テラスに対し約 45°の傾きを持つ。断面観察の結果、ピット覆土（17～18 層）はテラス部覆土（14～16 層）に切られていることが確認され、井戸の上屋基礎構造がピットから十字状の掘り込みを有すテラス施設へ変化したと考えられる。また井戸円形掘方覆土はテラス部覆土を切るように立ち上がっており、掘方壁際に井戸

側施設の存在が想定される。井戸側内覆土はロームと砂の互層で埋め戻され、上部は粘性の強い白黄色土で覆われている。テラス部はロームブロック主体土が埋められている。覆土には焼土が含まれていないが、出土遺物には被熱遺物が含まれている。遺物のひとつがC2層748（IV-319図）と接合する。この製品はSU390からも出土しており、天和2年の火災によって廃棄されたと考えられる。

SE484（Ⅲ-444図）

M6～7グリッドに位置する井戸である。北側で重複するSK584を切っている。掘方平面形は長方形を呈し、東西295cm、南北245cmを測る。確認面下約60cmにテラスを有し、中央に直径140cmを測る円形の井戸掘方が位置する。井戸掘方の周囲には不整形の掘り込みが十字状に存在する。D1面SE399、D面SE187、SE3882、SE908と同一形状で本段階において特徴的な形態を有す。そのなかでも本遺構は唯一井戸側の痕跡が確認されている。井戸側痕跡は直径100cmを測り、テラス部坑底レベルまで認められる。そしてテラス部坑底レベル以上は井戸掘方ラインで垂直に伸びる施設の痕跡が認められ、井戸側より一回り大きな枠がテラス部に設置されたことが窺われる。出土遺物の年代観は東大編年Ⅲb期に比定され、C3層と同一破片があること、被熱資料が含まれることから、天和2年の火災時に廃絶されたと考えられる。

SE1559（Ⅲ-445図）

J11グリッドに位置する。井戸でSK3に上部を削平されている。平面形は円形、東西130cm、南北128cm、深さ194cmまで調査した。SB1780-10室の位置から検出している。

SE1706（Ⅲ-446図）

SB1697-5室、SD1605間に構築された井戸で、F～G4グリッドに位置する。確認面での平面形は長方形を呈し、東西200cm、南北220cmを測る。確認面下110cmにテラス状の平坦面を有し、直径約150cmを測る円形の掘方に移行する。南壁中央には張り出しを有し、張り出し部直下のテラス面にも浅い掘り込みが認められる。詳細は不明であるが、上部施設との関連が考えられる。断面観察から直径約110cmを測る井戸側の痕跡が確認面レベルから認められる。井戸側内の覆土にはローム粒、ロームブロックが多量に含まれており、被災後の盛土造成土（C層）によって埋め戻されたと考えられる。上部方形掘方部壁面とSD1605は接しており、井戸使用による排水がSD1605に流されるように構築されたと考えられる。

遺物はⅢb期に比定される陶磁器類が出土しているが、C層造成時の2次廃棄遺物と考えられる（IV-466図）。

SE1831（Ⅲ-438図）

SE1831は井戸で、F～G・13～14グリッドに位置する。攪乱によって北側から南側にかけて半分程度が削平されている。遺構形態は2段構造になっている。上部は平面形が円形テラスで、東西は255cm、南北は確認された範囲で275cm、深さは112cmを測る。この円形テラスから直径127cmを測る円形の掘方に移行する。断面形は逆凸形を呈する。上部の円形テラスの覆土の締りは強く、井戸の上部構造に伴う掘り込みと考えられる。円形テラスを井戸掘方が切っていることから、井戸側があったと考えられる。SD1750に切られる。

SK355、SK883（Ⅲ-447 図）

SK355、SK883 は J13～14 グリッドに位置する。東側を攪乱により削平されている。SR1895 の南端に配置されており、南北に並ぶ。杭で固定された木枠を伴う土坑でごみ溜めと考えられ両遺構とも覆土にシルトを含んでいる。SK355 は東側と西側を残して 3/4 が削平されている。平面形は長方形で東西 236cm、南北 86cm、深さ 68cm を測る。木枠を固定した杭穴は北東角、北西角、南西角で検出している。杭には一辺約 5～8cm の角材を用いている。杭穴は深く、坑底から深さ 87cm まで達している。SK883 は東側と西側を残して 1/3 が削平されている。平面形は長方形で東西 376cm、南北 88cm、深さ 54cm を測る。木枠を固定した杭穴は東壁、西壁で約 30cm 間隔、南壁、北壁で約 50cm 間隔である。ただし北壁列西から 4 番目と 5 番目の杭の間隔は約 20cm である。

SK557（Ⅲ-448 図）

D1 面に帰属する土坑で、M2 グリッドに位置する。東壁側で SK585 と重複し、それを切って構築されている。平面形は不整長方形を呈し、南北 278cm、東西最大 136cm を測る。断面形は逆台形状を呈し、確認面からの深さ 75cm を測る。坑底、壁面ともに凹凸が認められる。覆土は最下層（4 層）以外は東側から堆積し、3 層中からは西壁際にかわらけを主体とする遺物が多量に出土した。焼塩壺が 3 点出土し、いずれも「天下一御壺塩師堺見など伊織」であった。本遺構は SD422 に近接する黒多門邸西端部にあたり、不定形な遺構形態であることから、一時的に邸内のゴミを処理するために掘削された芥溜めと考えられる。また、遺物の年代観は東大編年Ⅲ b 期に比定されるが、出土遺物に被熱痕跡は認められず、火災以前の日常的廃棄の一端と考えられる。

SK667（Ⅲ-449 図）

J～K・8～9 グリッドに位置する。土坑で平面形は長方形で、東西 605cm、南北 122cm、深さ 76cm を測る。西側に東西 141cm の窪みがある。ごみ溜めと考えられる。SB1782 の南に配置されている。SB1697、SB1772 の南に配置されている SK795 とほぼ同規模で東西に並ぶ。SR1859 南側の SK355、SK883 は木枠を伴うのに対し、SK667、SK795 は木枠を伴わない。遺構の立ち上がりは東側は西側に比べ緩やかな傾斜を呈し、西側の窪み部分の 5 層は灰色土で粘性が強く締まりのないシルトを含む覆土で、堆積状況から土圧で本来の堆積が下がっていると考えられる。

SK607（Ⅲ-450 図）

L～M・7～8 グリッドに位置する遺構である。確認面は Da 面である。本遺構が位置する L～N・7～8 グリッド付近のみが周囲と異なり近代の削平を免れ、遺構の遺存状況が良好であったことから C 面から D 面（ローム）までの間に 1 ないし 2 枚の整地面が確認され、それを上から Da 面、Db 面とし、本遺構は上の整地面である Da 面で確認された遺構である。従って他の D1 面とは性格、年代が異なる可能性もあることから区別したものである。

東側を上位面の遺構で攪乱されるが、平面形は円形を呈すと推測され、残存する規模は南北 348cm、東西 364cm、確認面からの深さは 120～130cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がり、中央に円形のテラスを有すドーナツ形の遺構である。覆土にはローム粒やブロックを多く含む。形態、覆土の特徴などから植栽痕と推定されるが、本遺構も含めて類似した形態、規模の円形土坑が東西方向に数基並ぶことから、敷地境として意識した植栽が行われたとも推測される。

遺物はさほど多くないが出土した陶磁器土器は17世紀前半に位置づけられるものであり、確認面はDa面であるが、本来の帰属面はD1面であった可能性が高い。

SK795（Ⅲ-451 図）

J～K・5～6グリッドに位置する。北西角を攪乱で削平されている。土坑でゴミ溜めと考えられる。底部は凹凸があり西側に傾斜している。SB1697、SB1772の南に配置されているSK667と同規模で東西に並ぶ。平面形は長方形で東西639cm、南北86cm、深さ60cmを測る。東西の立ち上がりは、ほぼ同角度で立ち上がる。7層は灰色土で粘性が強く締まりのないシルトを含む覆土で坑底全面に堆積している。

SK1698（Ⅲ-452 図）

SB1697北側、C5グリッドに位置する土坑である。平面形は長方形を呈し、東西340cm、南北100cm、確認面からの深さ70cmを測る。南北壁際から各5基の杭痕が検出され、壁面からは板材痕跡が認められたことから、板枠を伴う構造をとっていたことが確認された。Ⅲ-452図構築時平面図は板枠内の覆土を取り払った状態で、杭は坑底から60cmの深さで打ち込まれていた。木枠内の覆土は3層に大別され、ほぼ水平堆積を呈している。上層の1層はD面焼土が入り込んだ状態で、被災段階では木枠内には2、3層が堆積していた。2層は白色微細繊維状物質を含む黒褐色を呈する炭化物層で厚さは2～3cmを測る。被災時には2層が露出しており、火災熱によって蒸し焼きになり炭化したと推定される。3層は玉砂利を含む砂層で、本遺構の坑底上に敷き詰められていたと考えられる。砂層は鉄分で赤化しており、常時ある程度の水分を保有していたと推定される。以上の様相から本遺構は長屋に伴うゴミ溜め施設と考えられ、2層は日常的に廃棄された有機質廃棄物が炭化した結果と推定される。人工遺物は1層のD面焼土より出土したのみである。

SK1847（Ⅲ-453 図）

D1下面に帰属し、I6グリッドに位置する木枠を有する遺構である。中央は大きく攪乱され、残存する規模は東西294cm、南北100～110cm、確認面からの深さは70cmを測り、平面形はやや歪な長方形を呈す。壁は凹凸を有すが、坑底からほぼ垂直に立ち上がる。坑底は平坦で、覆土の観察で検出された木枠に伴うと考えられる方形の杭痕が壁際に多数検出されたが、間隔などに規則性はみられない。ただし杭痕自体の規模はほぼ均一で、1辺が約6cm、坑底からの深さは30cmを測る。木枠内側の覆土は、上層は遺物やローム粒などを含み粘性が弱い層であり、下層は遺物はほとんど含まない粘性の強い層である。

本遺構北側のSK1888も本遺構と同じく平面形が長方形を呈し、木枠を伴うと考えられる遺構であるが、覆土に焼土などは認められず、下層の覆土は粘性が強いものであり、同性格の遺構である可能性が高いが、覆土に焼土を含まないことなどから、SK1888は少なくとも長屋が焼失した火災時にはすでに埋め戻され機能は停止していたと考えられ、SK1847はSK1888を作り替えられた遺構と推定される。

SK1888（Ⅲ-454 図）

D1下面に帰属する土坑で、H～I6グリッドに位置する。SB1697、SB1772に挟まれ、SD1604南端部に接するが、覆土の様相から火災時には既に廃絶され埋め戻されていたことが確認される。平面形

は長方形を呈し、東西 105cm、南北 220cm、確認面からの深さ 70cm を測る。東西両壁際に杭痕が各 5 基存在し、壁面には板材の痕跡が認められたことから、木枠を有していたことが確認される。但し覆土には用途の推定に至る様相は看取されなかった。また本遺構南側には、同形態の木枠を有する土坑 SK1847 が存在する。SK1847 の覆土には D 面焼土が堆積していることから、本遺構から SK1847 へ作り替えられたと考えられる。17 世紀中葉に比定される陶磁器類がわずかに出土している。

SK1952 (Ⅲ-455 図)

SB1782 北側に構築された土坑で、C8～9 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西 450cm、南北 85cm、確認面からの深さ 70cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、坑底は平坦に整形されている。南北両壁際には各々おおむね 70cm 間隔で 7 基の杭痕が検出され、壁面には板材痕が確認される。覆土 1～3 層は焼土層で D 面焼土に該当する。特に 3 層には多量の炭化材が含まれていた。5 層は炭化物層、6 層は砂層で、これらが被災時に堆積していた覆土である。確認面から砂層表面までの深さは約 60cm を測り、この深度が本遺構が機能していた状態と考えられる。5 層の炭化物は焼土層との間に 4 層を挟んでいることから被災時以前の堆積物が火災熱によって炭化したものと考えられる。その様相から本遺構は、長屋群に伴うゴミ溜めで、5 層炭化物は有機物の日常的廃棄の結果と考えられる。6 層、掘方覆土 (7、8 層) からは 17 世紀中葉に比定される陶磁器類が出土している。

SK2587 (Ⅲ-456 図)

B～C15 グリッドに位置する。北側は調査区外に伸びる。杭で固定された木枠を伴う土坑でゴミ溜めと考えられる。SR1855 の東側に配置されている。平面形は長方形、東西 94cm、確認された範囲で南北 323cm、深さ 55cm を測る。木枠を固定した杭痕は一辺約 9cm で 10 基が確認されている。杭痕は南壁、東壁、西壁で確認されており、南壁際を除き東西に並ぶ。4 層は青灰色粘土を含み坑底全面で確認されている。

SL1783、SL1784 (Ⅲ-457 図)

SB1782-2～3 室、SR1858 間に構築された厠遺構で、D～E9 グリッドに位置する。全体構成としては、北側に円形、南側に方形の便槽を有し、その南北両側には土間状の敲き占め硬化面が構築されている。また東西両側には小ピット列が並び、ピット間には部分的に溝状の掘り込みを有する。

北側の SL1783 は、直径約 60cm を測る円形を呈し、確認面からの深さ 45cm を測る。遺構上に堆積していた D 面焼土を取り除いたところ、確認面下約 10cm で被災までの堆積物である暗灰褐色土が確認された。覆土は 3 層に分けられほぼ水平堆積を呈している。全体的に灰色系を示すが、2 層にはローム粒が多量に含まれていた。壁面と坑底には桶枠痕が認められ、坑底の桶枠痕下には 2～3cm 大の玉砂利が認められた。掘方は桶枠より一回り大きく直径約 85cm を測る。掘方内からⅢ a 期に比定される陶磁器類が少量出土している。

南側の SL1784 は、平面形は長方形を呈し、東西 70cm、南北 80cm を測る。確認面からの深さ 45cm を測る。SL1783 同様、遺構上に堆積していた D 面焼土を取り除いたところ、確認面下約 15cm で被災までの堆積物である暗灰褐色土が確認された。覆土は 3 層に分けられ、ほぼ水平堆積を呈している。全体的に灰色系を示すが、SL1783 と比較してやや褐色調を帯びている。壁面には木枠が認められ、上部、中央、下部の 3 箇所釘が打たれ、板枠を固定している。坑底より約 20cm 浮いた覆土中より、瓦燈がほぼ正位で潰れた状態で出土した (Ⅳ-471 図 6、7)。台部の油皿置き上からはほぼ完

形のかわりが1点出土している（IV-470図5）。使用時に間違っただけで便槽に落としてしまったと推定されるが、台部の蓋受け直径が20cmであるのに対し、ドーム形蓋の下部直径は14cmと台部の中に収まってしまふサイズである。但し出土状況から投棄されたとは考えがたく、何らかの原因で片方が破損し、サイズ違いではあるが、代用されていたと推定される。掘方は木枠より約20cm大きな方形を呈す。

南北硬化面、便槽で構成される本施設は、D1層造成後に施設範囲全体を掘り下げ、便槽及び硬化面を構築している。南北硬化面の表面は平滑に整形され、便槽周囲は緩やかな凹凸がやや認められるものの強く敲き占められている。東側のピット列は芯々で北から85cm、135cm、135cm間隔で4基並び、西側のピット列は北側硬化面北西角に位置する溝を含めると、芯々で北から100cm、90cm、95cm間隔で3基並んでいる。ピット間を繋ぐ溝内には板材痕が認められることから、本施設が板壁で囲われていたことが確認される。特に西側ピット列の南北両端に位置するピットは、SB1782-2室の礎石上柱痕にあたることから本施設とSB1782は壁を共有していたと考えられる。

両便槽周囲の硬化面範囲、ピット、溝によって各々の区画を復元することができる。SL1783は北側硬化面から1段下がるラインを北端、溝を南端として南北120cm、ピット列を東西端とすると東西120cmを測り、正方形の区画を復元することができる。また北側硬化面北端部に切石が埋設されていることから、北側を入口と考えることができる。SL1784は、南側硬化面から1段下がるラインを南端、北側の溝を北端として南北100cm、東西幅はSL1783同様、ピット列を境界として120cmを測る区画を復元することができる。東側にはSR1858が隣接していることから、南側硬化面を入口と考えることができる。

SP2133、SP2134（Ⅲ-458図）

SP2133、SP2134はSB1822の北側に位置する。両遺構は東西に並ぶ。SP2133は小穴でC13グリッドに位置する。SB1822の東から3列目の礎石列の延長線上に配置されている。部屋部分との間隔は43cmを測る。平面形は不整形で東西16cm、南北20cmを測る。深さ52cmまで確認した。小穴は南へ60°の角度で打ちこまれている。遺構の周りから炭化米が出土している。

SP2134は小穴でC12グリッドに位置する。SB1822の西側礎石列の延長線上に配置されている。部屋部分との間隔は39cmを測る。平面形は方形で東西16cm、南北16cmを測る。深さ52cmまで確認した。小穴は南へ80°の角度で打ちこまれている。

SR1855、SR1856、SR1857（Ⅲ-435図）、SR1858、SR1859（附図5、6）

D1面長屋建物群に伴う道路状遺構である。SR1855はSB1611、SB1612南側を東西に伸び、それに接続して、西からSR1856、SR1857、SR1858、SR1859が櫛歯状に南北方向に伸びる。本道路状遺構群は、明確な掘方などが確認されなかったこと、各道路状遺構に新旧関係は認められなかったことから、D1層盛土時に計画的に構築されたと推定され、小円礫と瓦片を多量に含み、強く敲き占められた褐色混砂利層で構成される（Ⅲ-435図）。遺存状態は良好でないが、SB429の南側にもD2面に帰属するSG595を南限として砂利面の拡がり確認されている。またSK795、SK667、SK883と長屋建物間においても砂利面が確認されており、本来は南北列の長屋群南側にも東西方向の路地が存在していたと考えられる。

8ライン付近でSR1855を横断するSD1601、SD1603は、その北側で石組の排水溝に変化し、屋敷境の石組溝SD1103に接続するが、両遺構間にも小円礫を含む敲き占め面が存在し、この場所に黒多

門邸と富山藩邸間を東西に伸びる道路に繋がる門の存在が想定される。

SU390 (Ⅲ-459 図)

Q～R・10～11 グリッドに位置する地下室である。北側上部が近代建築基礎による攪乱を受けている以外は遺存状況は良好である。開口部の平面形は1辺約100cmを測る正方形を呈し、室部の北東部に設けられている。室部は1辺約180cmを測る正方形を呈し、確認面からの深さ210cmを測る。天井は開口部から奥壁にかけて傾斜し、開口部天井高140cm、奥壁天井高90cmを測る。北西部の天井に崩落が認められた他は良好に遺存していた。壁面は垂直に立ち上がり、平滑に整形されている。床面はほぼ平坦であるが、中央部に浅い掘り込みが認められ、工具痕も残る。覆土は開口部から奥壁に向かって流れ込み、ロームブロックを含む褐色土を基調としていることから、短期間に埋め戻されたものと考えられる。また床面直上には炭化物層の堆積が認められた(9層)。炭化物には布目が認められ、天井部にはススと考えられる黒色付着物が認められたことから、遺構内で布が燃焼したと考えられる。また炭化物直上には古寛永21枚、文銭50枚を含む総数96枚の銭が散乱して出土した。総枚数から銭縲が散乱した可能性もある。ただし先述したように覆土には火災痕跡は認められず、遺構使用時に室内で出火した可能性もある。覆土中からは東大編年Ⅲb期に比定される陶磁器類が出土しており、被熱遺物も含まれていることから、天和2年の火災との関連性も考えられる。

SU829 (Ⅲ-460 図)

K～L6 グリッドに位置する地下室である。平面形は長方形を呈し、東西130cm、南北170cm、確認面からの深さは120cmを測る。四方の壁面は平滑に整形され、坑底からほぼ垂直に立ち上がる。北壁付近の坑底には長軸46cm、短軸30cm、深さ10cm弱の不整形の窪みが確認された。覆土の主体はローム粒やブロックを多く含む黄褐色土であり、遺物はほとんど含まない。なお坑底付近の覆土には水性の細砂が薄く確認されたことから、開口期間があり、その後埋め戻されたと推測される。

SX1788 (Ⅲ-457 図)

SB1782北東部、1室北側礎石列の延長で道路状遺構SR1855、SR1857との境界付近に構築された円形土坑で、C9グリッドに位置する。平面形は直径30cmを測る円形を呈し、確認面からの深さ10cmを測る。坑底、壁面ともに炭化した板材痕が認められ、桶が埋設されていたことが確認される。覆土は全てD面焼土である。性格は不明である。

SX2088 (Ⅲ-461 図)

D1下面に帰属する遺構で、SK1952東側、SR1855下にあり、C9グリッドに位置する。SR1855の整地のためか遺存状況は悪く、坑底部が残存していたにすぎない。平面形は不整長方形を呈し、東西110cm、南北最大110cm、確認面からの深さ5cmを測る。坑底西側には瓦片を中心に陶磁器類が敷き詰められるように埋設されている。その直上には灰層が堆積している。覆土の状況から炉跡の可能性も考えられるが、被熱痕はなく、性格は不明である。

遺物は陶磁器類がわずかに出土しているにすぎない。

第 4 節 大聖寺藩上屋敷期

C 面の遺構
CR2 面の遺構
CR1 面の遺構
C ～ A 面の遺構

第4節 大聖寺藩上屋敷期

（1）C面の遺構

SA218、SA219（Ⅲ-462図）

R9～10グリッドにかけて東西に伸びる柵列遺構である。各ピットの平面形は1辺約30cm前後を測る方形ないし長方形を呈し、遺構面からの深さは20～30cmを測る。各ピットはおおむね芯々で180cmを測り、江戸間1間を基準として構築されたと考えられる。主軸はE-1°-Sとほぼ東西方向を示す。覆土はいずれも単層で柱痕は確認されなかったが、なかには坑底に幅10cm程度の浅い落ち込みが認められるピットがあり、柱の痕跡と推定される。具体的な性格は不明であるが、藩邸内での区画柵列と考えられ、その構造から、簡素な施設といえよう。北側に位置する既遺構との関連も考えられる。

SB152、SB154、SB162、SB166、SB325、SB522、SB525、SB658（Ⅲ-463、464図）

C面に帰属する遺構群で建築に伴う遺構と考えられる。M～N・8～13グリッドに位置する。SB152、SB154、SB162、SB325、SB525、SB658は一直線に並ぶ。柱穴、礎石は確認できなかった。各遺構の中心の間隔は180～210cm程度である。遺構の並びにSE159が構築されている。他の遺構の間隔を検討すると、SB162とSB325の間に同規模の遺構がある可能性がある。SB166、SB522はSB152、SB154、SB162、SB325、SB525、SB658の列の延長線上に位置する。遺構は南北に長く、両遺構から礎石を検出している。礎石はSB166～SB658の軸線上より南にずれた位置で検出した。SB162とSB168の遺構の中心の間隔はSB166～SB658と同じ200cm以内でSB168とSB522の間隔は600cmである。

SB222、SB224、SB231、SB232、SB233、SB249、SB332、SB562、SL223、SL225、SL227（Ⅲ-465図）

P～Q・8～11グリッドにかけて検出された遺構群である。周囲の攪乱によって消失している箇所があるが、1辺70～80cmを測る方形ないし長方形の土坑（SB）が、ほぼ東西方向（E-2°-S）に2列平行に伸びている。土坑間は芯々で約200cmを測る。また南北各列間は芯々で150cmを測り、直交する同軸上にあり、梯子状の配列を呈す。この2列の土坑群中央やや南寄りには、ほぼ同規模の隅丸方形土坑（SL）が、南北両列の中央位置に配置されている。隅丸方形土坑には直径40～50cmを測る木桶が埋設されている。このような遺構形態及び配置は、御殿下記念館地点（V、VI期）で検出され、絵図との対比から既遺構と判断された遺構群と類似性が極めて高く、本遺構群も既遺構と考えられ、現況範囲内では最低7頭立ての既舎の存在が認められる。また御殿下記念館地点V期の既遺構では一区画が200cm四方、VI期の既遺構では間口200cm、奥行き150cmと長方形に変化する。本遺構群の規模はVI期の既と共通する。中央の便槽に関しても木桶直径が50cmと規模的には共通するが、御殿下記念館地点事例が4本柱の中央に位置しているのに対し、本地点検出遺構は南壁寄りに位置している点が異なる。南寄りに便槽が位置することから、既は北を正面としていたと推定される。

SB502 (Ⅲ-466 図)

SB502-1はM8～9グリッド、SB502-2はL～M8グリッドに位置する建物跡である。東西(SB502-1)、南北(SB502-2)方向にL字状に布堀基礎が確認される。基礎はともに長さ220cm、幅80cm、確認面からの深さは15～20cm、平面形は細長い長方形を、断面形は箱形を呈す。SB502-1には2基、SB502-2には4基の丸石が据えられていたが、石は掘方を超えて地面に食い込んでいることから比較的大きな荷重がかかる上部構造を有す建物であった事が想像される。丸石の平面形はいずれも歪なものであるが、上面は平坦に整形されている。SB502-1は西側が、SB502-2は北側が攪乱され掘方の全長は不明であるが、それぞれの端部で確認された丸石の距離はおおよそ180cmを測る。覆土中には炭化物や焼土粒などをやや多く含む。

本遺構に近接するSB503、SB505は、ほぼ東西横一列に並び、間尺もSB502内の丸石間の距離と同じく180cmを測ることから、SB502に付随するピットの可能性もある。出土遺物はごく少量である。

SB503 (Ⅲ-466 図)

M8グリッドに位置する遺構である。平面形は歪な方形を呈し、規模は一辺72cm、確認面からの深さは18cmを測り、断面形は箱形を呈す。中央に長軸46cm、短軸42cmの長方形の礎石を有し、その上面は平らに整形されるが、中央部分が全体より僅かに窪む。本遺構東側に位置するSB502と関連する柱穴か。出土遺物はごく少量である。

SB505 (Ⅲ-466 図)

M8～9グリッドに位置する遺構である。東側は攪乱のため平面形は不明であるが、遺存部分は南北64cm、東西58cm、確認面からの深さは15cmを測り、断面形は箱形を呈す。西側に近接するSB503と同じく上面が平らに整形された礎石を有す。本遺構西側に位置するSB502と関連する柱穴か。出土遺物はごく少量である。

SB1254、SB1255 (Ⅲ-467 図)

C面に帰属するピット列で、A8～9グリッドに位置する。平面形は不整円形を呈し、直径70～90cm、確認面からの深さ45cmを測る。坑底は下部に存在するSD1103の裏込石が露出し、凹凸が著しい。覆土は共通するが、柱痕、礎石痕は確認されなかった。ピット間は芯々で150cmを測るが、2基以外に関連遺構は見当たらず、性格、年代ともに不明である。

SD98 (Ⅲ-469 図)

東西に伸びる溝で、P7～10グリッドにかけて検出された。攪乱による削平を大きく受け極一部分が検出されたにすぎない。幅は約60cm、確認面からの深さ10～15cmを測る。覆土には部分的に焼土が混入し、火災による廃絶の可能性も考えられる。本遺構の南側には同段階の厩遺構が位置し、その区画もしくは排水施設の可能性がある。

SE108 (Ⅲ-468 図)

Q7～8グリッドに位置する井戸である。遺構北側の大部分が攪乱によって削平されている。円形を呈する井戸本体の東西両側に切石による礎石を伴う不整隅丸長方形の付帯施設が配置されている。円形本体部分はA層まで遺存する南壁の状況から、上部では周囲にテラスを有し、隅丸方形を呈し

ていたと推定される。その規模はテラス残存部で210cmを測る。円形掘方規模は直径160cmを測る。東西付帯施設の礎石間は芯々で225cmを測り、確認面下約100cmで検出された。覆土上層の1、2層には焼土粒が含まれ、廃絶後の埋没過程で火災が生じたことが看取されるが、出土遺物の年代観から元禄16（1703）年の藩邸火災に比定される。また井戸本体は約200cm掘り下げたが、その状況で井戸側の痕跡は認められなかった。

SK3（Ⅲ-470図）

C面に帰属する大形遺構で、B～M・9～13グリッドに位置する。全体的形状は不整長方形を呈し、最大規模は南北53m80cm、東西19m70cm、深さ430cmを測る。本遺構は形状と掘削深度から北部の浅く掘削された部分、中央部の深く掘削された部分、南部の中央部より浅い部分に大別される。いずれも坑底には大小様々な形態のテラスを有する。壁面や坑底には、顕著な工具痕が認められ、表面調整が施された痕跡はない。その平面形態からは複数遺構が複雑に重複した印象を受けるが、覆土の堆積状況から遺構の重複は認められず、連続した掘削結果の表れと受け止められる。これらの形態的特徴から採土坑と位置付けられる。また、本遺構の覆土が4m以上の堆積にもかかわらず近似した様相を呈していることから、最終的な掘削が達成された段階で短期間に埋め戻されたものとして理解される。

本遺構の年代観について、C面より掘り込まれていることより、上限は天和3年以降であることは明確である。また、本遺構の直上にはローム土を主体とするCR1・CR2面が拡がり、多くの植栽痕を始め、土塁、漆喰で造形された池水などが配置され、本遺構埋設後は庭園として利用されている。この庭園が廃絶された後、さらに約1mの盛土造成が行われているが、この造成土中にもまとまった焼土層が認められ、火災を契機とした廃絶と造成であることが明らかとなった（C面焼土）。焼土層より出土した遺物の年代観より、天和2年に続いて藩邸を全焼させた元禄16（1703）年の火災に比定され、本遺構の埋没年代の下限はそれ以前であることが明らかになった。さらに本遺構出土遺物のうち最も新しい様相を示す資料がJB-1-dで、元禄16年の火災を下限とする資料より1段階古い東大編年Ⅳa期に位置付けられることから、1680年代後半から90年代前半頃までには埋め戻されたと考えられる。

本遺構の覆土は、坑底直上から埋没後の庭園整地層直下まで全て泥炭層で構成されている（この特徴的な土質を識別するために、本遺構にのみ層序番号の冠詞としてDを付した）。この泥炭層は、色調や含有物の層からD1～D4層に細分することができるが、それぞれの層位は約10～40cm大シルトブロック、ロームブロックの集合体で形成されていることが観察され、明らかに外部から人為的に持ち込まれた覆土であることが判明した。さらに、土質の類似性から同一場所から短期間にもたらされたものであることを物語っている。

本遺構からは、その体積に比例して多量の遺物が出土しており、総量はコンテナ数約300箱を数える。また、泥炭層を主体とする覆土を有していたことから、陶磁器、土器、木製品、金属製品、石製品など多彩な材質の遺物で構成されており、食具、調理具、貯蔵具、文房具、装身具、玩具、武器、工具など多様な組成を呈している。さらに、敷居など建築材の木っ端、鉋屑といった建築関連資料や鞆の羽口、るつば、鉄屑などの鍛冶関連資料が多量に含まれていることが特質される。そのなかでも鉋屑は覆土の流れ込みに沿って坑底付近にまとまって堆積した状態で検出されている。その出土状況より、本遺構の埋め戻し行為に並行し、藩邸内での建築事業が進行していたことは明らかで、前述した出土遺物の年代観から、火災後の藩邸再建に伴う廃棄行為と位置付けることができる。

SK132 (Ⅲ-471 図)

攪乱により整地層が削平されたローム面より検出された土坑で、O10 グリッドに位置する。上部は攪乱による破壊を受け、不明である。残存部での平面形は不整長方形を呈し、南北 180cm、東西 270cm、確認面からの深さ 70cm を測る。壁面、坑底ともに工具痕が顕著に残り、凹凸が著しい。また北壁がわずかにオーバーハングしており、元来袋状の断面形態をしていた可能性がある。坑底からやや浮いた 3、4 層からは多量の人工遺物、炭化材が出土した。遺物は半完形製品が多く含まれ、本遺構がゴミ捨て場として利用されていたことを物語っている。年代は東大編年Ⅳ b 期に比定される。また漆の漉し紙も出土している。

SK134 (Ⅲ-472 図)

O2 グリッドに位置する木桶埋設遺構である。良好な状態で検出され、南側で重複する SK135 を切って構築されている。平面形は直径約 140cm を測る不整円形を呈する。断面形は逆台形を呈し、確認面からの深さ 55cm を測る。遺構内ほぼ中央に直径約 60cm を測る木桶が埋設されており、桶の周囲は褐色土が充填されているが、本層は桶底下にも存在し、桶は坑底上約 10cm に位置する。桶内はほぼ純粋な焼土層が堆積し、残存する木枠も表面が炭化した状態で検出されている。検出遺構面から元禄 16 (1703) 年の火災によると推定される。遺物は出土していない。

SK135 (Ⅲ-472 図)

O～P2 グリッドに位置する遺構で、北側で SK134 と重複し、それに切られている。平面形は長方形を呈し、東西 115cm、南北最大残存長 170cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、遺構面からの深さ 60cm を測る。坑底、壁面ともに比較的丁寧に整形されている。覆土は褐色～暗褐色を基調としており、レンズ状堆積を呈している。遺物は出土していない。性格不明。

SK333 (Ⅲ-473 図)

R4 グリッドに位置する土坑である。調査区南端で検出され、遺構南半は調査区外に及ぶ。調査区内での平面形は不整形を呈し、東西 180cm、確認面からの深さ 70cm を測る。壁面、坑底ともに工具痕が顕著に残り、凹凸が著しい。覆土は東方向からの流れ込みで堆積し、3～6 層にかけて炭化物、焼土粒が含まれ、かわらけがまとまって出土した。出土遺物は東大編年Ⅳ期に比定され、被熱遺物も含まれることから、元禄 16 (1703) 年の火災に比定される。

SK540 (Ⅲ-474、475 図)

M7～8 グリッドに位置する遺構である。SK571、SK572 と重複する事が確認されたが、いずれの遺構よりも新である。残存している平面形は歪な方形を呈し、規模は長軸 190cm、短軸 120cm、確認面からの深さは 110～146cm を測る。坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。

出土遺物はごく少量であるが被熱しているものを含む。

SK571 (Ⅲ-474、475 図)

M7～8 グリッドに位置する遺構である。SK540 と重複しており、本遺構が旧である。平面形は一辺 180cm の正方形を呈し、確認面からの深さは 106cm を測る。四方の壁は垂直に立ち上がり、坑底はフラットであるが、ともに工具痕が残存している。また西、北壁には坑底にまで達する柱あるいは

杭状の細い窪みが認められ、本来は板枠のようなものを伴っていた可能性もある。出土遺物はごく少量である。

SK572（Ⅲ-474、475 図）

M7 グリッドに位置する遺構である。SK540 と重複しており、本遺構が旧である。遺存状況は悪く、平面形は不明であるが、規模は長軸 192cm、短軸 154cm、確認面からの深さは 72cm を測る。壁、坑底はフラットで、断面形は緩やかな U 字状を呈す。遺物はごく少量の土器が出土しているのみである。

SK1186（Ⅲ-476 図）

C 面に帰属する土坑で、C～D4 グリッドに位置する。上部を攪乱によって破壊され、西壁以外は坑底付近しか残存していなかった。平面形は不整長方形を呈し、東西 195cm、南北最大 165cm、確認面からの深さ 150cm を測る。西壁には 2 段のテラスが存在する。壁面、坑底ともに凹凸が認められる。覆土はロームブロック主体土で埋め戻されているが、坑底付近に炭化物層が認められる。遺物は 17 世紀末に比定される陶磁器類が少量出土し、被熱痕跡が認められることから、元禄 16（1703）年の火災で被災した製品と考えられる。性格は不明である。

SK1187（Ⅲ-477 図）

C 面に帰属する土坑で、C6 グリッドに位置する。攪乱によって大きく破壊され、南壁周辺が遺存していたに過ぎない。残存部での東西長は 155cm、確認面からの深さ 200cm を測る。壁面は凹凸が著しく、未整形である。覆土にはロームブロック、ローム粒が多量に含まれ、東側から埋め戻されている。遺物は 17 世紀後半の陶磁器類が少量出土している。被熱痕跡が認められ、火災時に廃棄されたものと考えられるが、年代観より 2 次廃棄の可能性が高い。

SK1265（Ⅲ-478 図）

I～J7 グリッドに位置する遺構である。平面形は歪な方形を呈し、規模は東西 422cm、南北 318cm、確認面からの深さは 194cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土にはローム粒やブロックをやや多く含み、ほぼ一度に埋められた状況である。遺構の性格は不明である。遺物はあまり多くないが、出土した陶磁器、土器は 17 世紀後半から 18 世紀前葉に位置づけられる。

SK1327（Ⅲ-479 図）

E8 グリッドに位置する遺構である。平面形は西側が膨らむ方形を呈す。規模は東西 195cm、南北 206cm、確認面からの深さは 84cm を測る。壁は凹凸を有すが、坑底は比較的平滑である。覆土はローム粒やブロックを多く含む。出土遺物はなく、性格も不明である。

SK1329（Ⅲ-480 図）

F～G4 グリッドに位置する遺構である。南側は攪乱される。残存している平面形は歪な隅丸長方形を呈し、規模は東西 408cm、南北 286cm、確認面からの深さは 146cm を測る。壁、坑底は凹凸を有し、東壁は坑底から「ハ」の字形に開きながら立ち上がり、西壁は開きながら緩やかな階段状に立ち上がる。中央付近に大きな空洞が確認されるが、これは SK1329 の下で確認される SE1706 の井戸側部分

の空洞崩落に伴い、その上部にあった本遺構覆土も崩落したものと考えられる。覆土はレンズ状に堆積し、ローム粒やブロックなどを多く含む。遺物はごく少量の陶磁器、土器が出土しているのみである。

SL576 (Ⅲ-481 図)

M8 グリッドに位置する。平面形が歪な円形遺構が南北方向に3基並び、主軸はほぼ真北である。規模は直径40～50cm、確認面からの深さは中央のものが一番深く35cmを測り、北側は18cm、南側は15cm程であるが、掘方はいずれも坑底からほぼ垂直に立ち上がる。3基とも覆土全体が砂質のやや強いものであり、中央の遺構の坑底では青灰色の砂礫主体層なども確認された。性格は遺構形態、覆土の様相から便槽と考えられるが、埋桶の痕跡などは認められなかった。遺物は陶磁器、土器がごく少量出土したのみである。

SL1291 (Ⅲ-482 図)

C面に帰属する遺構で、A9グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、直径50cm、確認面からの深さ10cmを測る。覆土は灰褐色粘土で充填されていることから、便槽と考えられる。遺物は出土していない。

SP640 (Ⅲ-483 図)

K～L9グリッドに位置する遺構である。平面形は不整形円形を呈し、直径54～60cm、確認面からの深さは46cmを測る。覆土全体はしまりがやや弱く、柱痕が確認されたほか、その部分に1辺5cmの直方体を呈す切石が直立した状態で確認された。栗石として入れられたものか。また坑底にも長辺38cm、短辺16cm、厚さ6cmを測る長方形の切石が根石のように据えられた状況も確認された。遺物は瀬戸・美濃系播鉢片のみである。

SP1645 (Ⅲ-484 図)

D13グリッドに位置する。小穴で礎石が配置されている。平面形は楕円形で東西72cm、南北58cm、深さ8cmを測る。周辺に対応する遺構は存在しない。

SU11 (Ⅲ-485 図)

C面に帰属する地下室で、Q～R6グリッドに位置する。旧病院建物基礎の攪乱によって縦坑北壁上部が削平されているが、残る三方の壁は遺構構築面であるC面から遺存しており、全体的に比較的良好な状態で確認された。

遺構形態は縦坑部と北東及び南西に拡がる2箇所の室部で構成される。確認時の開口部は南北250cm、東西235cmを測る不整形方形であったが、縦坑部の覆土を掘り下げたところ、北東側室部の西壁及び南壁延長ラインまでは丁寧な整形によって平滑に仕上げられていたが、それ以外の壁面上部には著しい工具痕が残されており、南西側室部の天井崩落に関連する再加工痕と考えられる。よって本来の開口部は南北90cm、東西110cmを測る長方形を呈していたと考えられる。また南西側室部オーバーハング部再加工は、工具痕がそのまま残され表面の起伏が著しいことから、加工後に使用した可能性は低く、遺構廃絶後の埋め戻し時に天井崩落防止措置として掘削されたと推定している。北東側室部は東西210cm、南北190cmを測る長方形、南西側室部は1辺270cmを測る正方形を呈し、各々開口部を除くと鉤形を呈す。両室とも天井は崩落しているが、奥壁際の室内高は190cmを測る。床

面は確認面下 380cm にあり、東京パミス上面に達している。床面には排水施設と推定される浅い掘り込みが 2箇所認められる。また壁面中位に浅い溝状の窪みが巡っているが、性格は不明。

覆土は焼土粒を含有する上層（1～7層）とそれ以下床面までの層序（8～14層）に大別される。8～14層は基本的に東側からの埋め戻しによって堆積し、特に 8、9層に遺物が多量に含まれていた。一方焼土含有層の遺物出土量は少ない。被熱遺物の年代観から火災年代は元禄 16（1703）年に比定され、覆土の堆積状況から本遺構は火災以前に廃絶されたと考えられる。

SU12（Ⅲ-486、487 図）

近代以降の削平によってローム面から検出された地下室で、N～O・11～12グリッドにかけて位置する。縦坑は近代の病院煉瓦建物基礎の攪乱を大きく受け、本来の壁面は全く遺存していない。特に北壁から東壁にかけては大きく削平されている。縦坑の状況に対し、室部は天井部も比較的良好な状態で遺存している。縦坑平面形は本来長方形を呈していたと考えられる。規模は比較的良好な状態の天井レベルで東西 225cm、南北 180cm を測る。室部は縦坑から西側と東側に 2部屋接続する。ともに奥壁幅がやや広がる撥形状の平面形態を呈し、西側室部は奥行き約 210cm、奥壁幅 220cm、奥壁際天井高 220cm、東側室部は奥行き約 220cm、奥壁幅 270cm、奥壁際天井高 180cm を測る。各壁面は丁寧に平滑に整形されているが、南室奥壁上部のみ左上から右下方向に工具痕が残る。天井部もやや波打っているが、丁寧に整形されている。また南室西壁と西室南壁の交点は面取りされている。覆土はほぼ水平堆積を呈し、床面直上覆土を含め、その大半に焼土粒が含有されていることから火災によって廃絶された遺構と考えられる。出土遺物の年代観より元禄 16（1703）年の火災に比定される。また床面付近の覆土には瓦片が大量に含まれていた。

SU247（Ⅲ-489 図）

攪乱による盛土層削平のためローム面にて検出された地下室で、O8～9グリッドに位置する。上部は攪乱によって削平されており、天井部も崩落して原形をとどめていないが、重複する遺構はなく、室部は比較的良好な状態で検出された。床面の平面形は北側に張り出しを有す凸形を呈し、壁面の状況から北側貼り出し部分が入口と考えられる。入口部床面から室部床面には 10cm の段差が存在する。室部は南北 140cm、東西 540cm、天井高は入口付近で 170～180cm、奥壁で 150～160cm と奥壁に向かいやや傾斜している。壁面、床面ともに丁寧に整形され、入口部から室部へ移行する壁面角は丁寧に面取りされている。また、入口部脇の南壁面ほぼ中央、床面からの高さ 130cm と天井に近い位置に灯火具置き場と推定される三角形の掘り込みが存在する。覆土には全体的に焼土ブロック、焼土粒を含み、基本的には火災時に廃絶されたと考えられるが、下層では入口部からの流れ込みによるレンズ状堆積を呈し、上層ではその逆、入口部に向けて皿状堆積に変化する。堆積方向の変化は、その過程においてロームブロックが多量に含有されていることから、埋没途中で天井が崩落したことが原因と推定される。火災年代は出土遺物の年代観から元禄 16（1703）年に比定される。

SU436（Ⅲ-488 図）

ローム面にて検出された地下室で、P4グリッドに位置する。上部は攪乱によって削平され、天井部も全て崩落している。室部床面平面形は扇形を呈し、南北 210cm、東西 190cm、確認面からの深さ 160cm を測る。壁面に認められる天井崩落痕跡より、入口部は室部南東部に位置し 1 辺約 90cm を測る方形を呈していたと考えられる。壁面、床面ともに丁寧に整形されており、床面南西隅には排

水処理施設と推定される楕円形の浅い掘り込みが認められる。覆土下層には焼土層（6、7層）、炭化材含有層（8層）が堆積しており、火災時の瓦礫廃棄が行われたことが認められ、出土陶磁器類の年代観より、元禄16（1703）年の火災に比定される。形態、規模から勤番武士長屋に伴うタイプと考えられるが、関連する地下室は、本遺構周囲には認められなかった。

SU445（Ⅲ-490 図）

L～M・7～8グリッドに位置する地下室である。天井部もほぼ遺存しており、比較的良好な状況で検出された。開口部の平面形は、崩落などの影響で不整隅丸長方形を呈しているが、本来は南北140cm、東西180cmを測る長方形を呈していたと考えられる。室部は南北230cm、東西280cmを測る長方形を呈し、南西壁面に幅125cm、奥行き50cmの張り出し部がある。この張り出し部を含む南西部分が開口部となる。床面中央には排水処理施設と推定される不整楕円形を呈し、深さ約10cmを測る浅い掘り込みが存在する。また床面直上壁面各コーナー及び東壁中央付近に幅数cmの掘り込みが認められ、床面施設が存在した可能性が考えられる。床面、壁面ともに丁寧に整形されているが、南壁には床面上約110cmに幅40cm、高さ30cm、奥行き20cmを測る棚状施設が構築されている。覆土は上部が攪乱、崩落のため残存していないが、残存する下層覆土にはほぼ全域に焼土粒が一定量含まれ、遺構廃絶が火災と関わっていると考えられる。出土した陶磁器類の年代観は東大編年Ⅳb期に比定されることから、火災年代は元禄16（1703）年の火災と推定される。

SU631（Ⅲ-491 図）

N～O・8～9グリッドに位置する地下室である。階段が付く入口部と逆「L」字状を呈する室部から構成される。入口の階段は幅96cm、長さ240cmで、7段分確認された。ローム（地山）を丁寧に削り整形した状態が確認されたが、階段を補強する板材や杭などの痕跡は観察されなかった。上から1、2段目は僅かに傾斜が付けられ、それ以下はほぼ垂直に削り出されている。1ステップの奥行きは30cm前後であるが、一番上のステップは24cmとやや狭い。また1ステップの高さは40～44cmで、下へ降りるほど高くなり、一番下のステップは室部床面までの高さが70cmを測る。室部は階段の延長方向に西、北方向へ拡がり、ともに北側がやや広い逆台形状を呈す。また西側室部では床面から高さ160cm、北側室部では150cmでロームからなる天井部がわずかに遺存しており、その状況から天井はドーム状を呈していたと推測される。西側室部は東西が最大で264cm、南北260cmを測る。壁、床面とも階段同様、丁寧に整形され凹凸は認められない。北東を除く床面隅には横方向に杭穴状の窪みが確認されたが、用途は不明である。北側室部は東西が最大で170cm、南北170cmを測る。東西壁面は丁寧に整形されていたが、北壁と床面は工具痕が顕著であった。

覆土の堆積状態からは少なくとも3度にわたる遺構埋没過程があったことが明らかとなったが、1度目は焼土や被災瓦を比較的多く含む覆土（16～22層）であり、火災後の瓦礫処理の中で行われた廃棄行為であったと思われる。本遺構の出土遺物をみると大半は被熱しており、この1度目の廃棄行為に伴うものと考えられる。火災は遺物の様相から元禄16（1703）年の火災に比定される。

SU1192（Ⅲ-492 図）

D8グリッドに位置する地下室である。遺構形態は二重構造となっている。外側（掘方）の平面形は歪な長方形を呈し、規模は東西244cm、南北330cm、確認面からの深さは212cmを測る。壁には緩やかな凹凸が、坑底には円形と不整形のごく浅い窪みが確認される。この窪みの性格は不明である。

掘方内側に東西140cm、南北270cm、確認面からの深さ192cmを測る長方形のプランが確認される。内側の長方形の壁面は平滑で、坑底からほぼ垂直に立ち上がり、断面形は縦長の箱形を呈す。断面観察をすると、内側の長方形の立ち上がりに沿って木材が腐食したような覆土（5層）が確認される。また腐食した木材の痕跡は、掘方坑底から20cmほど上部では、幅10cmほどの周溝状長方形プランとして検出され（Ⅲ-492左図）、そのプランの内側は硬化した状況（15層上面に該当）が確認される。以上のような状況からSU1192は素掘りの地下室ではなく、底板を伴う木組構造を有す地下室である可能性が高い。覆土の観察からは掘方坑底をローム粒やブロックを多く含む覆土（16、17層）で平滑にした後、木組構造物を設置し、その周囲も坑底と同様にローム粒やブロックを多く含む覆土を充填し、固定した様子がうかがえる。

遺物は遺物収納箱で2箱分ほど出土しているが、大半は木組内のものであり、東大編年Ⅳb期に位置づけられるものが中心である。なお掘方からも陶磁器・土器が少量出土しており、その年代観をみると木組内のものとほぼ同じであることから、本遺構は構築後さほど時間差がなくその機能を停止し、廃絶された可能性が高い。

（2）CR2面の遺構

SB22、SB1229、SB1230、SB1239、SD1235、SK1242、SP1240、SP1248、SP1249（Ⅲ-493図）

J～K・11～12グリッドに位置する小穴群である。SB22は柱穴で、礎石を検出している。東西90cm、南北113cm、深さ23cmを測る。SK1242も同規模の遺構であるが浅く、礎石は確認されていない。SB1229は柱穴で、東西93cm、南北100cm、深さ29cmを測る。SB1230は柱穴で、東西62cm、南北69cm、深さ20cmを測る。礎石を検出している。SP1240を切る。SB22とSB1229は南北に並ぶ同規模の遺構で、礎石を伴う。礎石の中心の間隔は約180cmである。SB1230もSB22とSB1229の線上に並ぶ。SB1229との間隔は470cmである。礎石上面の標高はSB22、12.42m、SB1229、12.48m、SB1230、12.58m。礎石上面の標高は徐々に上昇している。SD1235は溝状遺構で、確認された範囲で東西280cm、南北70cm、深さ12cmを測る。SP1240は柱穴で、礎石を検出している。SB1230に切られる。

SB43、SB45、SB56、SB57、SB292、SB293（Ⅲ-494図）

K～L・11～12グリッドに位置する。SB43は柱穴で、南北56cm、南北54cm、深さ36cmを測る。平面形は楕円形、断面形は台形。坑底で石材を検出している。SB45は柱穴で、北側を攪乱によって削平されている。東北77cm、南北82cm、深さ30cmを測る。平面形は円形、断面形は台形である。SB56は柱穴で、直径70cm、深さ37cmを測る。平面形は円形、断面形は台形である。坑底で石材を検出している。SB57は柱穴で、東西58cm、南北54cm、深さ48cmを測る。平面形は楕円形、断面形は長方形である。坑底で石材を検出している。SB292は柱穴で、東西77cm、南北75cm、深さ74cmを測る。平面形は楕円形、断面形は台形で坑底が凹んでいる。SB293は柱穴で、東西72cm、南北80cm、深さ32cm。平面形は不整形で、断面形は台形である。SB56、SB57、SB43、とSB293、SB292、SB45はそれぞれ東西に並ぶ。SB56とSB57の中心の間隔は100cm、SB57とSB43の中心の間隔は約140cm。SB293とSB45の中心の間隔は120cm、SB45とSB292の中心の間隔は約180cm。SB56とSB293は南北に並ぶ。両遺構の中心の間隔は約290cm。SB57とSB45、SB43とSB292は南北に並ばない。

SB1480、SB1560（Ⅲ-495、496 図）

CR2 面に帰属する溝状の基礎で、SB1480 は B～F11 グリッド、SB1560 は F9～11 グリッドに位置する。

SB1480 は平面形が長方形、断面形は台形を呈する。約 180cm 間隔で配置された礎石 7 基を検出している。南側の SB1560 と繋がる部分は攪乱、遺構の中央を SK1554 と攪乱、北側を攪乱によって削平される。礎石の検出状況から 10 基あったと考えられる。幅約 150cm、残存長 16m75cm、深さ 32cm を測る。SB1560 では礎石の上部で柱と横材を組んだ部材を検出したが SB1480 では確認できなかった。南から 1 番目の礎石と 2 番目の礎石の間、2 番目と 3 番目の礎石の間で南北に並ぶ杭列を検出している。南から 1 番目の礎石の上に重ねられた材の上面の標高は 11.6m、2 番目の礎石の上面の標高は 11.55m、5 番目の礎石の上面の標高は 11.8m である。

SB1560 は平面形が長方形、断面形は台形を呈する。約 180cm 間隔で配置された礎石 6 基を検出している。東側の SB1480 と繋がる部分は攪乱により削平されている。残存部分で東西 10m64cm、南北 220cm、深さ 180cm を測る。西から 2 番目、3 番目、5 番目、6 番目の礎石上部には柱と横材の痕跡が残っている。6 番目の礎石の横材は、他の横材が南北の軸であるのに対して約 45° 傾き、SB1480、SB1560 の南東角にあたることを示している。西から 5 番目の礎石は、柱を含めた遺存状態が良好である。覆土の堆積状況から SB1560 は、溝を掘削し礎石を据える土坑を約 180cm 間隔で掘削、礎石を配置し盛土によって礎石を埋めてから、礎石の上に横材の臍に柱を釘で固定した十字の材を約 180cm 間隔で配置し盛土で固定して構築されている。柱は角材で 1 辺約 12cm、横材は長さ約 130cm を測る。各礎石上面の標高は、西から 1 番目は 11.65m、2 番目は 11.25m、3 番目は 11.3m、4 番目は 11.2m、5 番目は 11.22m、6 番目は 11.45m である。1 番目と 6 番目の標高が高くなっており、礎石を直線で結んだ断面は台形を呈する。

SB1480、SB1560 は南東部分を攪乱によって削平されているため別遺構に見えるが、遺構の構造、位置関係から平面形が L 字を呈する遺構と考えられる。SB1560 で検出した柱と横材は SB1480 では確認できなかったが、SB1560 の西から 6 番目の横材の検出状況から SB1480 の礎石上部に同じ柱と横材が配置されていたと考えられる。SB1560 では、角材を用いた柱材は東西に並ぶ。柱列に対して横材は直行するように釘で接合されている。この遺構の上部構造は不明だが、柱材が東西に並ぶのに対して南北に長い横材によって倒れるのを防いでいることから、塀の基礎と考えられる。塀によって、池である SX1138 が配置された区域を区画している。

SB1639、SB1640、SP1641、SP1642、SP1643、SP1644（Ⅲ-497 図）

D～E12 グリッドに位置する小穴群である。SP1639 は 2 遺構が南北に並ぶ。2 遺構の間隔は 264cm で杭穴と考えられる。SP1640 と SP1642 は南北に並ぶ。遺構の間隔は約 360cm。断面形は異なるが、ほぼ同規模の遺構で関連が考えられる。SP1643 と SP1644 は東西に並ぶ。遺構の間隔は、約 40cm と近いが断面形はほぼ同じであることから関連が考えられる。SP1639 は杭穴、SP1640、SP1641、SP1642、SP1643、SP1644 は杭もしくは柱穴と考えられる。

SD671、SD672、SD673（Ⅲ-498 図）

K～L9 グリッドに位置する。SD671 は溝状遺構で、北側は攪乱により削平される。断面形は台形、残存部分で南北 436cm、幅 28cm、深さ 23cm を測る。SD672 を切る。SD672 は溝状遺構で、南側と東側を攪乱により削平される。残存部分で東西 118cm、南北 40cm、深さ 22cm を測る。SD671

に切られる。SD673は溝状遺構で、北側を攪乱により削平される。断面形は台形、東西45cm、南北576cm、深さ30cmを測る。SK771に切られる。

SD1466、SD1473（Ⅲ-499図）

溝状遺構で、E～F・11～12グリッドに位置する。遺構内から木樋を検出している。両遺構とも東西両端は攪乱により削平されているが、木樋の規模からSD1466、SD1473は同一遺構と考えられる。SD1466の断面形は長方形、残存長392cm、幅140cmを測る。SD1473は残存長183cm、幅126cmを測る。木樋はSD1466で底板と側板、固定のための釘を検出している。木樋の延長線上で礫を検出している。SD1473で底板と側板、固定のための釘を検出している。残存部分で木樋の幅は18cm、高さ14cmを測る。木樋の接続部分で凹形の材を検出している。木樋の底板上面の標高はSD1473で11.77m、SD1466で11.65m、水は西から東に流れる。

SD1542（Ⅲ-500図）

溝状遺構で、C10グリッドに位置する。平面形は弧を描く。東側と西側を攪乱により削平されている。確認された範囲で長軸262cm、幅36cm、深さ10cmを測る。

SD1544（Ⅲ-501図）

溝状遺構でG～H12グリッドに位置する。西側に傾斜する斜面上に構築されている。断面形は台形である。南側を攪乱により削平され、北側をSK1409に切られる。確認された範囲で南北486cm、東西105cm、深さ84cmを測る。

SE1569（Ⅲ-502図）

井戸でD9～10グリッドに位置する。平面形は円形を呈する。直径は154cm、深さは295cmまで確認した。1～5層は埋土、6～8層は井戸側の裏に充填された覆土である。

SK1227、SK1228（Ⅲ-503図）

土坑でI～J11グリッドに位置する。SK1227の平面形は楕円形、坑底は平坦で、緩やかに弧を描いて立ち上がる。東西166cm、南北158cm、深さ35cmを測る。覆土はローム粒を主体とする。植栽痕と考えられる。SK1228に切られる。

SK1228は西側と北側を攪乱に行って削平されている。残存部分で東西106cm、南北170cm、深さ50cmを測る。覆土はローム粒を主体とする。植栽痕と考えられる。SK1227を切る。

SK1236（Ⅲ-504図）

土坑で、I～J・11～12グリッドに位置する。平面形は楕円形、底面に凹凸があり、壁面は弧を描く。東西195cm、南北220cm、深さ38cmを測る。1層には漆喰片を含み、SX1095、SX1138などで使用された漆喰が混入した可能性がある。2層はローム土を主体とする。植栽痕と考えられる。

SK1394（Ⅲ-505図）

土坑で、C10グリッドに位置する。平面形は凸形で、断面形は長方形を呈する。長軸178cm、短軸65cm、深さ14cmを測る。土留めと考えられる木枠、底板の痕跡、板材を固定した釘を検出している。

遺構の軸は真北から 58° 東へ振れる。他の遺構で、この軸の遺構は確認されていない。

SK1483 (Ⅲ-507 図)

土坑で、D～E11 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。壁面に沿って杭が打たれているが、板材は確認できなかった。杭は約 80cm 間隔で検出している。北西側を SU1474、中央部を攪乱で削平されている。

SK1502 (Ⅲ-506 図)

土坑で、F～G10 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は台形を呈する。東西 123cm、南北 124cm、深さ 40cm を測る。植栽痕と考えられる。

SK1558 (Ⅲ-508 図)

土坑で、F～G・10～11 グリッドに位置する。平面形は楕円形で、断面形は長方形を呈する。坑底北西側で木の根を検出していることから、植栽痕と考えられる。東西 260cm、南北 247cm、深さ 80cm を測る。

SP1449、SP1450、SP1451、SP1452、SP1453、SP1455、SP1456、SP1457、SP1458、SP1459、SP1462、SP1463、SP1464、SP1467、SP1468、SP1469、SP1470、SP1471、SP1472 (Ⅲ-510 図)

D～E・9～10 グリッドに位置する小穴群である。SP1449、SP1450、SP1451、SP1452、SP1453、SP1455、SP1456、SP1457、SP1459、SP1462、SP1463、SP1464、SP1467 は、SX1138 の覆土を切る。掘削深度は SX1138 の漆喰層まで達している。SP1453 以外の検出状況は浅い遺構であるが、最低でも SX1138 の検出面から掘削されていると考えられる。SP1449、SP1450、SP1451、SP1452、SP1453 と SP1458 は南北に並ぶ。SP1449、SP1450、SP1452、SP1453 は土層断面に柱もしくは杭痕を検出している。これらの遺構の中心部の間隔は約 100cm である。SP1455、SP1456、SP1459、SP1457 は南北に並ぶが、遺構の配置は等間隔ではない。SP1455、SP1457 は土層断面に柱もしくは杭痕を検出している。SP1457、SP1463、SP1462 は南北に並ぶ。東西は約 100cm 間隔で並んでいる。SP1467、SP1468、SP1469、SP1470、SP1471、SP1472 は平面形はそれぞれ異なり、遺構の並びに規則性は見出せない。

SX1138 (Ⅲ-511、512 図)

池で、D～F・9～10 グリッドに位置する。東側を攪乱で削平され、SK1514 に切られる。平面形は隅丸長方形、断面形は台形、東西 554cm、南北 958cm、深さ 86cm を測る。CR1 面に帰属する池 SX1095 同様、遺構の内面に漆喰を施しているが、検出面が異なるため関連は無い。坑底より上の漆喰は削り落されており、覆土下層に崩れた形で堆積していた。漆喰は一番厚い部分で 20cm で、SX1095 の漆喰の厚さが 10cm に比べ倍の厚みがある。漆喰の下層には掘方に盛土が施されていることから、池の形状の調整、池底の深さ調整が行われていたと考えられる。池底、漆喰上面の標高は北側で 12.20m、南側で 12.02m で、水は SX1095 と異なり南側に流れたと考えられる。木樋を伴う SD1466、SD1473 は SX1138 の南東側に位置する。東側が攪乱によって削平されているため関連性は不明だが、木樋の底板上面の標高は SD1473 で 11.77m、SD1466 で 11.65m、SX1138 の坑底標高から

すれば、池から木樋へ水が流れるのに何の問題もなく、SX1138とSD1466、SD1473の位置関係からするとSX1138の南東角に排水のための木樋が接続する可能性がある。給水施設については現在のところ明確に断言できる遺構は確認していない。

SX1540（Ⅲ-509図）

C10グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は長方形で、東西89cm、南北98cm、深さ68cmを測る。土坑の内側に長方形の石材4枚を五角形状に並べ破碎礫、粘土等で固定している。遺構の立ち上がりはほぼ垂直で石材もほぼ垂直に固定されている。9層の上に石材がおかれ7、8層で石を固定している。7、9層は粘土が多く含まれる。東側に石材は無く炉のようになっている。6層は焼土を多く含む。石材は被熱を受けており、東側は石材が無く炭化物が分布していることから焚口の可能性がある、遺構性格は炉の可能性はある。

（3）CR1面の遺構

SB1174、SB1250、SB1272、SD1349、SK1482、SP1271、SP1273、SP1316、SP1317、SP1318、SP1319、SP1320、SP1331、SP1332、SP1333、SP1334、SP1338、SP1339、SP1346、SP1350、SP1351、SP1352、SP1357、SP1369、SP1382、SP1383、SP1384、SP1385、SP1386、SP1387、SP1388、SP1390、SP1398、SP1410、SP1412、SP1413、SP1419、SP1440（Ⅲ-513、514図）

E～G・9～12グリッドに位置する。SP1398、SP1350、SP1385、SP1357、SP1412、SP1351はローム土で盛土された土塁上に東西に並ぶ。平坦部、SP1398の標高は13.45mである。これらは東西に長く、浅い遺構もあるが杭が打たれていたと考えられる。SD1349に重なるSP1316、SP1317、SP1319、SP1320は東西に並ぶ。SB1174-1西側の遺構とSP1346、SB1390、SB1272、SB1410、SP1419、SP1369は南北に並び、小穴、礎石を伴う遺構もあるがSP1346、SB1272を除き、約180cm間隔で並ぶ。SB1390を起点にSB1250（2遺構）、SB1272を起点にSB1272、SB1272、SP1271が並ぶ。

SD41、SD314（Ⅲ-515図）

溝状遺構で、J9～10グリッドに位置する。SD41は南北両側を攪乱によって削平されている。上面も削平されている。東西87cm、深さ24cmを測る。遺構内面は小礫を含んだ漆喰で固められている。漆喰面上の標高は12.5mである。SD314は東側を攪乱によって削平されている。遺構内面を漆喰で固められていること、位置関係からSD41関連遺構と考えられる。

SD1167（Ⅲ-516図）

溝状遺構で、C～G12グリッドに位置する。攪乱、SK1409による削平を受けているため、3つに分断されている。確認された範囲で南北23m40cm、幅約75cm、深さ25cmを測る。a-a'ラインの溝底標高は13.1m、b-b'ラインの溝底標高は12.95m、c-c'ラインの溝底標高は12.94m。覆土に砂を含む灰色土を確認していることから、水が流れていた可能性あり、溝底標高から流れは緩やかだったと考えられる。

SD1441（Ⅲ-517図）

溝状遺構で、SX1095と接続する排水溝である。E～F・11～12グリッドに位置する。南北両側

が攪乱により削平されている。幅は50～95cm、残存長10m22cm、深さ50～70cmを測る。遺構内から釘を検出していることから、木樋が埋設されていた可能性があるが、材は確認されていない。溝底に設置された長方形の切石は木樋の高さを調整するために配置されたと考えられる。SD1441の溝底標高は、南へ傾斜しているから、池の水は北へ排水されたと考えられる。SD41、SD314から池SX1059へ給水された水は、池尻の管で池と接続するSD1441へ排水されたと考えられる。

SD1570 (Ⅲ-518 図)

G11～12グリッドに位置する。遺構の東側、西側、南側が削平されている。溝状遺構で残存する平面形はY字形、断面形は浅いレンズ状で、東西447cm、南北219cm、深さ8cmを測る。北東から伸びた溝は分岐、西に伸びる溝の軸はほぼ東西、南に伸びる溝は真北から約5°西に振れる。

SK1175、SK1176 (Ⅲ-520 図)

D～E11グリッドに位置する。SK1175は長方形の土坑で断面形は台形。北西角と南東角を攪乱によって削平されている。SK1176に切られる。東西320cm、南北304cm、深さ100cmを測る。SK1176は長方形の土坑で断面形は台形、東側を攪乱で削平されている。SK1175を切る。

SK1219 (Ⅲ-519 図)

土坑で、E11グリッドに位置する。平面形は長方形を呈する。坑底南半分に落ち込みが存在する。SK1219の造成時に掘削した後、8層によって坑底を平坦に仕上げたと考えられる。CR1層をSK3の覆土直上まで掘削し4基の柱穴を北西角、南西角、南東角、東側の壁沿い中央に配置。杭の深さは坑底から30～50cmで、直径は10～16cmを測る。坑底で板材、礫を検出している。確認はできなかったが、板による土留めがあったと考えられる。

SK1309 (Ⅲ-521 図)

E11～12グリッドに位置する。土坑で東側を攪乱によって削平されている。平面形は長方形、断面形はL字形、東西246cm、南北218cm、深さ70cmを測る。

SK1313 (Ⅲ-522 図)

土坑で、B～C・10～11グリッドに位置する。遺構の北側を攪乱により削平されている。平面形は不整形で東西555cm、南北580cm、深さ84cmを測る。

SK1438 (Ⅲ-523 図)

土坑で、C～D・11～12グリッドに位置する。遺構の北側と東側は攪乱、南側はSK1176、SK1437に切られる。東西250cm、南北の残存部分614cm、深さ92cmを測る。

SK1474、SK1554 (Ⅲ-526 図)

D11グリッドに位置する。SK1474は土坑で、南側は攪乱により削平されている。平面形は長方形である。東西157cm、南北230cm、深さ64cmを測る。北壁と東壁で竹を使用した壁を検出している。東壁の北東角、南東角、壁の中程で竹の壁を固定したと考えられる3基の杭穴を検出している。杭穴の深さは坑底から60cmを測る。SK1554は土坑で、北側と南側は攪乱とSK1175により削平されて

いる。平面形は長方形、断面形は台形である。東西 184cm、南北 235cm、深さ 80cm を測る。

SX1095（Ⅲ-524・525 図）

池で、F～I・9～11 グリッドに位置する。東西 784cm、南北 11m67cm、深さ 50cm を測る。SX1095 は庭園の一番低い部分に造営されている。SK3 覆土を掘削し砂利を混和した漆喰を遺構全面に施している。漆喰は厚いところで 10cm ある。中央に瓢箪形と考えられる中島、北東角に排水溝があり、溝は木樋が埋設されたと考えられる SD1441 と接続する。SX1095 の南に位置する SD41、SD314 も遺構内を漆喰で固めた溝であることから、SX1095 の関連遺構と考えられる。池の北側は SK1179、SK1314 に切られる。SX1095 の南半分と中島の東側は攪乱によって掘削されているため、接続方法は不明である。7～9 層は中島の上部に施された盛土でローム土主体の 9 層の上に 8 層、ややしまりが強く砂利を含む 7 層を盛土し、側面に漆喰を施している。池の掘削面の断面は台形、池底は平坦である。池の東側で池底に敷かれた玉砂利を検出している。1～3 層は庭園を廃絶した際の盛土で、4 層は粘性の強いシルトで池の堆積土と考えられる。池の堆積土は部分的に確認されている。6 層は 5 層の漆喰の下から検出した溝状遺構の覆土で、池の護岸に沿って掘削されている。暗褐色土で埋められてから漆喰が施されている。池の北西角と護岸上部から漆喰で固めた景石を検出している。景石の北西側と漆喰の下で土坑を検出している。排水溝の接続部分の小穴は護岸の漆喰を切っている。

排水溝は池の北東角に接続している。池から 150cm で西に曲がり SD1441 に接続する。溝底に玉砂利が残っている。溝が西に曲がる手前の断面形は台形、北側では長方形に変化する。1 層は漆喰、2 層は坑底調整のための盛土、3、4 層は景石を固定するための盛土である。SD1441 に接続するための管跡を検出している。護岸に漆喰で固定された景石を 4 基検出している。

SX1095 と関連遺構の坑底、漆喰層の標高を検討した。SD41 の標高は a-a' ラインで 12.5m、SX1095 の池底の標高は、a-a' ラインで a' から a 方向へ 100cm のポイントで 12.26 m、a から a' 方向へ 380cm のポイントで 12.2m、b-b' ラインで b から b' 方向へ 150cm のポイントで 12.15m、b' から b 方向へ 70cm のポイントで 12.1m、c-c' ラインで 12.05m、d-d' ラインの標高は 12.05m。SD1441 の坑底標高は、c-c' 11.95m、a-a' 11.86m。それぞれの遺構の坑底標高から、SD41、SD314 から池へ給水された水は、中島の両側を流れ排水溝へ、池尻の管で接続する SD1441 へ排水されたと考えられる。

SX1139（Ⅲ-527 図）

遺構で、E-9 グリッドに位置する。南北両側は攪乱による削平を受ける。南北に伸びる 3 段の段差で、1 段目と 3 段目に玉砂利を一行並べている。残存部分で東西 66cm、南北 162cm、1 段目と 3 段目の高低差は 11cm を測る。

SX1443（Ⅲ-528 図）

遺構で、C11～12 グリッドに位置する。北側は攪乱により削平されている。壁面に瓦が固定されており、ほぼ垂直に立ち上がる。残存部分で東西 36cm、南北 18cm、深さ 36cm を測る。性格は不明である。

(4) C～A面の遺構

SB226 (Ⅲ-529 図)

P～Q・10～11グリッドに位置する礎石遺構で、攪乱による削平を受け、ローム面上で検出された。北側の礎石はSE399直上、南側の礎石はSU390直上に位置しているが、これらの遺構はともに天和2年の火災時に廃絶された遺構であることから、本遺構はそれ以降、すなわちC面段階以降に構築されたといえる。平面形は不整楕円形を呈し、粗加工を施した扁平川原石が根石として置かれている。根石間は芯々で330cmを測り、主軸方位はN-13°-Wを示す。本遺構周囲には関連遺構は検出されていないが、根石間距離が約11尺と半端であること、大聖寺藩邸の基本土地利用は東西南北を基準としていることから、攪乱を受けて消失した遺構の存在が推定される。

SK1156 (Ⅲ-530 図)

H5グリッドに位置する遺構である。西側半分は攪乱される。残存する平面形は歪な長方形を呈し、長軸84cm、短軸54cm、確認面からの深さは10cmを測る。断面形はごく浅い皿形を呈す。性格不明の遺構である。遺物はごく少量である。

SK1261 (Ⅲ-531 図)

G4グリッドに位置する遺構である。東側は攪乱される。残存する平面形はやや歪な隅丸方形を呈し、東西88cm、南北96cm、確認面からの深さは62cmを測る。壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。本遺構は規模、形態、覆土の状況などが、A面で検出されたSK1123、SK1127、SK1128、SK1129、SK1130、SK1153、SK1207、SK1208の土坑群(Ⅲ-567 図)と類似することから、これらと一連の遺構である可能性もある。

SL1201 (Ⅲ-532 図)

E8グリッドに位置する。本遺構北側のC面に帰属するSK1327との新旧関係は不明である。残存する平面形は半円形を呈し、東西60cm、南北50cm、確認面からの深さは52cmを測る。壁は坑底からほぼ垂直に立ち上がる。覆土の様相が材の痕跡を挟んで大きく2つに別れることから、円形状の掘方を掘削し、そこに桶状のものを埋設した遺構であることが推測された。材内側の覆土の様相から本遺構は便槽と推定される。

SX1154 (Ⅲ-533 図)

F6グリッドに位置する遺構である。掘方の形状は円形を呈し、直径140cmを測る。中央付近に直径100cmほどの炭化した桶状のものが確認され、その中の覆土は焼土が主体であり、周囲の覆土はローム粒やブロックを多く含むものである。最下層付近では掘方壁際に炭化した桶状のものを囲むように割石が並べられていた。性格不明の遺構である。遺物はごく少量出土している。

第4節 大聖寺藩上屋敷期

B面の遺構

A面の遺構

（5）B面の遺構

SB118、SB119、SB120、SB121（Ⅲ-535図）

B'面に帰属する柱穴列で、R10グリッドに位置する。遺存状況は比較的良好である。平面形は各ピットで異なり、確認面からの深さも20～40cmとばらつきがあるが、約140cm間隔でほぼ直線上に位置していることから供伴する柵列と考えられる。4基のうちSB119、SB120では断面観察の結果、幅約10cmの柱痕が認められ、掘立柱構造であることが確認された。本遺構群周辺にはピットが比較的集中しているが、関連性は認められない。

SD256（Ⅲ-534図）

B面に帰属する溝状遺構で、P8グリッドに位置し、ほぼ南北方向に伸びる。断面形は浅い皿状を呈し、幅は30～50cmを測る。平面、断面ともに整形は甘く、雨落ち溝的な性格が考えられる。

SK130（Ⅲ-536図）

B'面に帰属する長方形土坑で、Q～R・8～9グリッドに位置する。北壁の大半が攪乱によって失われているほかは、遺存状況は比較的良好である。平面形は長方形を呈し、東西640cm、南北200cm、確認面からの深さ50cmを測る。壁面、坑底ともに著しい工具痕が認められる。覆土の状況からほぼ一気に埋め戻されたことが窺われる。本遺構の南壁位置は柵列SB119～121の延長上にあたり、このライン付近で土地利用に関する何らかの規制が働いていた可能性も指摘できる。

（6）A面の遺構

SB93（Ⅲ-537、538図）

礎石建物で、P～R・4～7グリッドに位置する。検出された各礎石は根石のみが残存している状況で、確認面もほぼ根石上面レベルであることから本来の遺構面は削平されている状況である。掘方の平面形態は北側の一群が隅丸方形、南側の一群が不整形円形を呈す。北側の一群では再利用と推定される角礫が坑底上に隙間なく比較的整然と敷き詰められ、ローム主体土によって固められている。東西列礎石間の距離は芯々で約190cmを測り、京間を基準単位として建造された建物と考えられる。但し京間を基準尺度と想定した場合、南北列は礎石間が芯々で約170cmを測り、京間に換算すると約0.9間となる。一方、南側の一群も京間が基準と推定され、各礎石間は西から1間、1間、1間半、2間、1間を測る。大名藩邸の殿舎では柱間距離が間取りに左右されることが認められ、本礎石列も殿舎の一角と考えることができる。また両礎石群を一連の建物とすると南北方向のb-b'ラインと東西方向の各礎石列の角度は直角から2.5°の傾きが認められることから殿舎を結ぶ廊下基礎の可能性が指摘できる。

SB294（Ⅲ-539図）

布堀と考えられる建物基礎でN11～12グリッドに位置する。北側は削平を受けている。東西445cm、残存部で南北76cm、深さ55cmを測る。坑底に80～100cm間隔で配置された円礫、角礫を検出。方形もしくは不整形の土坑を掘削して配置している。坑底直上には砂利が認められる。上層から破碎礫が散乱したが、ほぼ坑底に配置された礫の周辺にあり、栗石の可能性がある。

SB318 (Ⅲ-541 図)

L12～13グリッドに位置する。北側が攪乱による削平を受けている。平面形はL字形、断面形は台形、東西242cm、南北178cm、深さ38cmを測る。方形もしくは長方形の切石を2段重ねている。1段目は約10cmの厚さの石材を坑底に直接配置している。2段目は1段目の石材上に約20cmの厚さの石材を配置している。

SB321 (Ⅲ-540 図)

布堀状の基礎でM9～10グリッドに位置する。北側は攪乱に切られている。遺構上部は削平を受けている。東西150cm、南北175cm、深さ35cmを測る。坑底に礫を配置している。礫は2段を確認している。円礫と方形もしくは長方形の切石が用いられている。

SB322 (Ⅲ-542 図)

布堀状の基礎でL9グリッドに位置する。南側は攪乱に切られている。遺構上部は削平を受けている。東西75cm、南北223cm、深さ15cmを測る。坑底に円礫、破碎礫が配置されている。

SB1173 (Ⅲ-543 図)

E12グリッドに位置する。礎石を伴う遺構3基が並んで検出された。それぞれの遺構から礎石1基が検出している。礎石の間隔はほぼ100cm程度である。周辺にこの遺構と平行もしくは直行する遺構は確認されていない。

SB1263 (Ⅲ-544 図)

F7～9グリッドに位置する建物跡である。東西方向に5基の柱穴が150～160cmの間隔で確認されたが、各柱穴の規模、形態は不規則であり、根石を伴うという点のみ共通する。ただし根石として利用された石の形状、石材などは様々である。本遺構南側に位置するSK1123～SK1208(Ⅲ-567 図)の土坑群と一連の遺構の可能性も考えられたが、土坑群の主軸は真北であり、SB1263はそれよりはわずかに南へ振れている。遺物はごく少量である。

SD65 (Ⅲ-545 図)

本遺構はA面に帰属し、調査区の東南隅Q～R11グリッドに位置する南北に伸びる溝状遺構である。北側が攪乱によって削平され全長は不明である。断面形は箱形を呈し、幅約20cm、確認面からの深さ約15cmを測る。坑底と壁面下部には炭化した板材がわずかに残存し、板枠を伴う溝の可能性が高い。ただし残存部において坑底から板枠固定に伴う杭痕は確認されていない。また残存範囲ほぼ中央に楕円形ピットが検出されている。覆土は炭化材を含む焼土層で、火災によって廃絶されたと考えられる。出土遺物は少量で遺物からの廃絶年代は特定できないが、帰属面から享保15(1730)年以降の火災に関連すると考えられる。

SD236、SD259、SD260、SD337、SD340 (Ⅲ-546 図)

A面に帰属する石組遺構で、L～N・1～6グリッドに位置する。これら5遺構は、側縁石に粗加工を施した川原石が用いられている形態構造と、SD260を除き、覆土に焼土層が含まれ、同一火災によって廃絶されたと考えられる点で共通し、周囲に攪乱が入り断片的な遺存状況ではあるが、目的を

共有する一連の遺構群として捉えることができる。以下に各々の状況を述べる。

SD236の東側は攪乱に切られ、西側はSB343に切られている。但しSB343西壁と共通する調査区西端壁面で本遺構断面が認められ、さらに西へ伸びていることが確認されているとともにA面に帰属する遺構であることも確認される。本遺構の西端は本地点西側に隣接し、その延長が1999～2002年度に調査を実施した医学部附属病院第2中央診療棟地点で検出されている（SD828）。残存範囲では東西方向に直線的に伸びている。側縁石は北側では人頭大から50cmくらいまでの粗加工川原石が2段積まれ、背後には破碎礫が栗石として詰められている。南側側縁石は攪乱の影響からか1段のみ検出されているが、使用されている川原石は総じて北側側縁石より大きい。溝幅は90cmを測る。坑底は平坦に整形され、直上には宝永テフラ層が堆積している。厚さは平均5cmを測り、ほぼ均一に堆積していることから意図的に敷き詰められたものであることが推定される。覆土は宝永テフラ層（5層）から間層を挟み焼土塊を多量に含む赤褐色土が堆積していることから、火災を契機として廃絶されたことが推測できるが、宝永テフラ層との上下関係より、享保15（1730）年もしくは元文元（1738）年の火災が最も有力である。

SD259、SD260、SD337、SD340はA面上に築かれた築山状マウントに構築されている。

SD340は南北に伸びる石組溝である。SD260と接続する北方向に向けて緩やかに上がっており、切石を利用した階段ステップが2段残存している。残存部からみた側縁石の状況は西側側縁に粗加工川原石が、東側側縁に切石が用いられており、溝幅は約80cmを測る。残存するステップの南側はほぼ水平で坑底に宝永テフラが敷かれていた。SD236の延長を検出した第2中央診療棟地点SD828でもSD236から続く宝永テフラ層が検出されているが、SD340同様、階段際までの水平部分にのみ敷き詰められていた点で共通する。

SD259、SD337は築山状のマウント傾斜面に構築された石組溝で、現存範囲内ではS字状に蛇行して伸びている。側縁石は粗加工川原石を中心に間知石、切石が再利用されている。上部には階段ステップを形成する川原石が敷かれており、特にSD337では下方坑底にも飛び石状に切石が配されている。いずれも溝幅は約80cmを測る。遺構最上部はマウント最上部とほぼ同一面にあり、攪乱の影響で断定はできないが、SD259、SD337はマウント頂部で接続する同一遺構の可能性も考えられる。

SD260は東西に伸びる石組溝であり、他遺構同様に粗加工川原石や間知石を側縁石として利用しているが、その規模は約人頭大と小さく、溝幅も30～40cmと狭い。隣接するSD259との関係を観察したところ、それに切られていることが確認された。本遺構のみ覆土に焼土層が伴っていないこともその証左といえよう。但し遺構東側では北側側縁石が2段認められ、底石がその上面レベルで揃っていることから、SD259に揃えて改修された可能性も指摘できる。

以上の状況から、これらの石組溝遺構は階段を伴う通路施設と考えられる。さらにマウントを構築して造営していること、SD337、SD259のように意図的に蛇行させていること、SD236、SD340のように平坦面に意図的に宝永テフラを敷き詰めていることなど嗜好的要素が窺われ、庭園に伴う園路と考えられる。即ち、元禄16（1703）年の火災後から享保15（1730）年もしくは元文3（1738）年の火災までの間、この一帯が藩邸内庭園として利用されていたといえ、南側に位置する御殿建築基礎SB93との関係から、殿舎北側に庭園が広がっていた可能性が考えられる。

SD1118（Ⅲ-547～549図）

石組溝遺構で、F～H・10～13グリッドに位置する。溝の中央に底石、底石の両側に側縁石を配置した排水溝である。東西19m40cm、南北535cmの範囲で検出した。石積みは攪乱もしくは石材の

抜き取りにより使用時の状態をとどめていない。上部についても削平により石積みが失われている可能性がある。石組には間知石の他、礎石に用いたと考えられる方形の石材、河原石等が用いられている。SD1118-1は西端の石材が抜き取られ、SD1118-4との接続部分が攪乱により失われている。ほぼ東西の軸で東へ伸びているがSD1118-3接続部付近でやや北に折れる。側縁石は1～3段残存し、底石は東側に緩やかに傾斜している。また、底が傾斜するのに伴い、石組の高さは高くなっている。SD1118-1は東端でSD1と接続すると考えられるが、攪乱と石材の抜き取りのためどのように接続されていたかは不明である。SD1118-1の接続からSD1は排水施設を伴っていたと考えられるが、石材が抜き取られているため不明である。SD1118-3はSD1118-1にやや斜めに接続する。残存する側縁石は1段で主に河原石が用いられている。SD1118-1のように底石は認められない。SD1118-4は25cm程度の礫が並ぶ石列である。SD1118-5のSD1118-1への接続は、SD1118-3、4に比べ東へ傾く。石材はほとんど抜き取られている。1層は砂粒とシルト粒を含み、2層は1層より粗い粒子を含む層が堆積している。堆積状況から底石はないと考えられる。SD1118-2では1段の石組を確認した。東側と西側が削平されており、他の遺構との接続は不明である。石組の間、1層は焼土を含む赤色土、2層は使用時の堆積層で砂粒を多く含む灰色土。

SD1121 (Ⅲ-550 図)

E～F・5～6グリッドに位置する南北方向に伸びる溝状遺構である。主軸方位は真北である。北側に隣接するSU1101と重複しているが、SD1121が新である。残存規模は長さ168cm、幅80cm、確認面からの深さは34cmを測り、断面形は箱形を呈す。坑底、壁は比較的丁寧に整形され平滑である。遺物はあまり多くないが、陶磁器、土器は18世紀代に位置づけられるものである。

SD1134 (Ⅲ-552 図)

溝状遺構で、C11～12グリッドに位置する。東西120cm、南北270cm、深さ25cmを測る。東西両壁際で礫を検出した。礫の検出状況から遺構の立ち上がりに沿って礫が並んでいたものが取り除かれたと考えられる。

SD1141 (Ⅲ-551 図)

溝状遺構で、F10グリッドに位置する。北側と東側は攪乱により削平され、東南側はSU1140に切られる。残存部分で東西60cm、南北216cm、深さ25cmを測る。覆土には焼土を多量に含む。

SD1629 (Ⅲ-553 図)

溝状遺構で、C12～13グリッドに位置する。遺構の北側はSK1133に切られる。遺構上部、南側は攪乱によって削平されている。東西128cm、南北165cm、深さ27cmを測る。他の遺構との関連は不明である。

SE159 (Ⅲ-554 図)

井戸で、M～N・11～12グリッドに位置する。遺構形態は2段構造になっている。上部施設の平面形は円形で、覆土のしまりは強い。壁面、坑底ともに工具痕が認められる。東西245cm、南北225cm、深さ80cmを測る。この円形テラスから直径135cmを測る円形の掘方に移行する。掘方は160cmの深さまで調査した。壁面は丁寧に調整されている。南北には平面形が隅丸長方形の掘り込み、

東西には浅い掘り込みが設けられている。これらは井戸の施設に関連する遺構と考えられる。

SE1155（Ⅲ-555 図）

G～H6 グリッドに位置する井戸である。北側は攪乱される。残存する掘方の平面形はやや南北に長い方形を呈し、東西 210cm、南北 244cm を測る。確認面では井戸側の痕跡が認められており、その直径は 160cm を測る。調査は安全上の理由から確認面下 344cm にて中止した。本遺構の南壁面から幅 30cm、奥行き 10cm、平面形がカマボコ形を呈す足掛け穴と思われる浅い掘り込みが 1箇所確認された。掘方覆土（1層）と井戸側の境界付近の壁面では黒く腐食したタガと考えられる木質痕跡が 60～70cm 間隔で検出された。出土遺物は少量であるが、掘方からは瀬戸・美濃系磁器碗破片を含む遺物が出土し、2層からはワインボトルの底部片と考えられるガラス製品が出土しており、本遺構は 19 世紀代に構築され、幕末頃に廃絶された井戸と推測される。

SK2（Ⅲ-556 図）

土坑で、L～M11 グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、東西 215cm、南北 240cm、確認面からの深さ 105cm を測る。覆土の粘性は強く、壁面、坑底ともに著しい工具痕が認められる。しまりは弱く、陶磁器類のほか、貝などの食物残渣が多く含まれている。

SK91（Ⅲ-557 図）

本遺構は A 面に帰属する埋甕遺構で、R7 グリッドに位置する。遺存状況は極めて悪く、甕の底部付近が残存しているにすぎない。残存部での掘方平面形は直径 70cm を測る不整形円形を呈し、確認面からの深さは 25cm に満たない。掘方内には常滑産大甕（Ⅳ-334 図 1）が埋設されているが、かなり細かく割れた状態で検出された。攪乱の影響と考える。わずかに残存する甕内覆土には焼土粒が多量に含まれており、火災によって廃絶された可能性が指摘できる。年代的には甕底部の形態から 18 世紀代と推定される。また本遺構の北西部には、殿舎基礎と推定される SB93 が拵がっており、本遺構の性格は、御殿に伴う水甕と推定される。

SK94（Ⅲ-558 図）

桶埋設遺構で、O～P7 グリッドに位置する。攪乱により西側上部が削平されている。平面形は隅丸方形を呈し、1 辺約 75cm、確認面からの深さは最大 90cm を測る。遺構内には直径 40cm を測る桶枠が埋設されており、ロームブロック主体土で固定されている。桶枠内覆土は焼土の単層で、瓦片を大量に含む。桶枠も炭化していることから火災によって廃絶されたと考えられる。本遺構の北側約 1m に焼土層を含む円形土坑が存在し関連性が考えられる。形態から便槽の可能性が推定される。

SK102（Ⅲ-559 図）

木桶埋設遺構で、O7 グリッドに位置する。遺構上部は削平されているが、比較的良好な状態で遺存している。平面形は直径 50cm を測る円形を呈し、確認面からの深さは 45cm を測る。壁際には炭化した木桶痕が認められ、ほぼ掘方と同規模の木桶が埋設されていたことが確認されている。覆土は焼土主体土で火災によって廃絶された後、瓦礫で埋め戻されたことが確認できる。本遺構の南約 1m に位置する SK94 も火災によって廃絶された木桶埋設遺構で、規模、形態共に類似しており、関連性が窺われる。

SK388 (Ⅲ-560 図)

A 面で検出された土坑で、M7～8 グリッドに位置する。遺構直下には C 面帰属の SK571 が存在する。重複する遺構はなく、遺存状況は良好である。平面形は不整五角形を呈し、南北 265cm、東西 250cm、確認面からの深さ 150cm を測る。坑底の平面形は長方形を呈しているが、これは下部の SK571 におけるローム壁面に規制されている。覆土は東側からの埋め戻しによって堆積し、覆土全般にわたって瓦片、漆喰をはじめ陶磁器類が多量に廃棄されていた。覆土中に焼土粒は少量含まれてはいたが、出土遺物に被熱痕跡は認められず建物修繕、解体などが廃棄原因と推定される。陶磁器類は東大編年Ⅷ c 期を下限する一群である。

SK1091 (Ⅲ-561 図)

土坑で D～E・9～10 グリッドに位置する。北西角、東南側は削平されている。長方形の遺構で南側にテラス状の張り出しがある。遺構の壁面は直線的に立ち上がり、坑底は北側に傾斜している。東西 251cm、南北 475cm、深さ 110cm を測る。

SK1092、SK1096、SK1097、SK1112、SK1113、SK1179、SK1180、SK1314、SK1315 (Ⅲ-562 図)

方形遺構群で、大聖寺藩邸の絵図と遺構の位置関係の検討から、後に櫓の基礎と判明した。G～I・9～11 グリッドに位置する。東西 968cm、南北 10m50cm の長方形の範囲に配置されている。西側と南側の遺構は削平によって失われていると考えられる。SK1096 は坑底に礎石を検出している。SK1112 は、SK1096、SK1113 に切られている。

SK1111 (Ⅲ-563 図)

土坑で、H10 グリッドに位置する。遺構の南側上部は削平を受けている。平面形は不整形で東西 42cm、東西 42cm を測る。3 層を除きややしまりが強く、4、5 層は L 字状に堆積しており、内部施設があったと考えられる。

SK1114 (Ⅲ-564 図)

土坑で、D13 グリッドに位置する。隣接する SK1115-1 を切る。遺構の北西角、遺構の東側の上面は削平されている。平面形は長方形で、東西 304cm、南北 108cm、深さ 250cm を測る。坑底西側にテラス状の段を持つ。この部分で鑿跡の残る石材を検出している。石材と遺構の関連は不明。

覆土中より多量の遺物が出土した。SK1115 と通して半截したため、両遺構不分離の資料が含まれるが、遺構規模からほとんどが本遺構出土資料と推定される。

SK1115-1 (Ⅲ-564 図)

D12～13 グリッドに位置する。平面形は不整形で、西側と東側を攪乱によって削平されている。確認された範囲で東西 283cm、南北 200cm、深さ 75cm を測る。調査中に下部遺構と識別されたため、上部を SK1115-1、下部を 1115-2 と区別したが、SK1115-2 の調査結果から両遺構は全くの別遺構と確認された。

SK1115-2（Ⅲ-565、566 図）

D12～13グリッドに位置する。南東角がSK1114に削平されている。半地下室で平面形は長方形、断面形は台形、東西358cm、南北336cm、床面の土坑をふくめた深さは187cmを測る。本遺構は5段階にわたって基礎が構築されており壁面は板材で囲まれている。遺構の構築の順に述べる。方形の室を掘削し5段目では、壁に沿って礎石を据えるための土坑を掘削し、礎石を据えている。礎石は自然礫で8基が確認され、すべての土坑で確認されていない。礫の大きさは長軸が22～44cmの範囲で大きさはまちまちである。4段目では柱痕が検出された。5段目の礎石の上のほか土坑の確認されていない部分にも角材を縦に配置している。南西角の柱痕の断面形は長方形で、東西12cm、南北18cm、深さ24cm、北西角の柱痕の平面形は方形で1辺13～14cm、深さ18cmを測る。北壁の西から2基目の柱痕は土坑、礎石のない部分に配置されている。平面形は方形で東西18cm、南北18cmを測る。3段目では木材痕を検出している。4段目の柱痕上に材が配置されている。材の痕跡の幅は約12～20cm、厚さ6～8cmを測る。柱痕の列に材が方形に並べられ、柱痕の内側は格子状に並べられている。2段目では木材痕の上部、遺構の壁面に沿って礎石が並べられる。遺構の角と西壁、北壁の中間にそれぞれ配置されている。1段目では2段目の上部に壁面に沿って胴木が方形に組まれている。胴木の痕跡の幅は14～22cm、厚さは4～12cmを測る。胴木の上に材を用いた壁があったことが残存する木杵痕から推定できる。7～9層は3段目までの盛土、2、3、6層は2段目までの盛土で締まりが強い。1段目の面はほぼ水平に整えられている。4、5層は木杵の裏込めである。室の地下構造から、木杵には厚い材が用いられたと考えられる。

SK1123、SK1127、SK1128、SK1129、SK1130、SK1153、SK1207、SK1208（Ⅲ-567、568 図）

F4、G4～7グリッド範囲に、西からSK1123、SK1127、ここで軸を南へ240cmずらし、SK1128、SK1129、SK1130、SK1153、SK1208、SK1207と東西方向に伸びる土坑群である。SK1207の東側に攪乱があるが、その攪乱を越えて伸びる同様の土坑は検出されなかった。SK1123、SK1127、SK1128、SK1129、SK1130については本調査地点のC面を切って構築されていることが確認された。

各土坑の残存規模をみると、SK1123は東西80cm、南北104cm、確認面からの深さは38cmを測る。平面形は南北に長い長方形を呈す。北西隅側は攪乱される。SK1127は東西120cm、南北120cm、確認面からの深さは98cmを測る。深さはこの土坑群内ではSK1207とともに深いものである。平面形は方形を呈す。SK1128は東西68cm、南北116cm、確認面からの深さは26～32cmを測る。平面形は南北に長い長方形を呈し、SK1123とともに本土坑群内で浅いものである。SK1129は東西80cm、南北108cm、確認面からの深さ40cm、西側は攪乱される。SK1130の西側は攪乱される。東西160cm、南北100cm、確認面からの深さは54cmを測る。平面形は東西に長い長方形か。SK1153の南側は攪乱される。東西108cm、南北128cm、確認面からの深さは66cmを測る。平面形は南北に長い長方形か。SK1208の西側は攪乱される。東西128cm、南北120cm、確認面からの深さは74cmを測り、平面形は方形を呈す。SK1207は東西108cm、南北120cm、確認面からの深さは92cmを測り、本土坑群のなかでSK1127とともに最も深いものである。以上のように規模や各土坑間の距離も均一ではないが共通点も多い。すなわちSK1129以外は掘形状は箱形を呈し、覆土はいずれもローム粒、ロームブロックを主体するしまりのある砂質の強いもので、一度に埋め戻された状況が確認されるなどである。遺物は各土坑ともにごく少量である。

SK1125（Ⅲ-569 図）

E4～5グリッドに位置する遺構である。北東隅は攪乱されるが、残存する平面形は西、南辺が丸味を帯びる隅丸方形を呈す。残存する規模は東西240cm、南北220cm、確認面からの深さは140cmを測る。西、南壁は坑底からやや開きながら立ち上がるが、北、東壁はほぼ垂直に立ち上がる。北壁には坑底より少し上のあたりに、小さなテラス状の張り出しが認められた。坑底は凹凸を有し、四隅には一辺20cm強の方形の窪みが確認される。本遺構の上屋構造に関わるものか。覆土には焼土や炭化物、被災瓦片などを多く含み、しまりが弱いことから、火災後の瓦礫処理に利用され廃絶した可能性が高い。出土遺物も2次的な被熱を受けているものが多い。火災年代は、出土遺物の様相から享保15(1730)年あるいは元文3(1738)年の火災に比定される。なお被災した遺物の中にいわゆる鍋島の色絵紅葉流水文皿片が含まれていた(IV-421図-1)。

SK1131 (Ⅲ-570 図)

土坑で、D11～12グリッドに位置する。遺構の西側、北東側は攪乱を受けている。平面形は不整形で東西233cm、南北195cm、深さ140cmを測る。

SK1133 (Ⅲ-572 図)

土坑で、B～C・12～13グリッドに位置する。隅丸方形の掘方内に板材で土留めされた長方形の土坑が構築されている。南北298cm、深さ100cmを測る。木枠を固定した杭跡を17基確認した。北東側の攪乱の深さは杭の底まで達しているため杭跡を確認できなかった。内側の長方形の土坑の壁面は直線的でほぼ垂直に立ち上がる。坑底は平坦で、南北220cm、深さ65cmを測る。杭跡の分布をみると、西壁では板材の両側に互い違いに杭を打ち、北側と南側は互い違いではないが、縦に配置した板材の両側に杭を打ち固定している。木枠で囲まれた土坑の規模を杭の位置関係から検討すると、東西180cm、南北214cmと推定される。掘方の覆土はしまりやや強く、杭の検出状況から板材を固定するための杭を打ち板枠の底まで盛土を施し、杭の間に板を嵌め、板材の外側に盛土を施したと考えられる。木枠内には陶磁器類の他、動物遺体が多く含まれることから、ごみ穴として使用されたと考えられる。

SK1137 (Ⅲ-571 図)

土坑で、E9～10グリッドに位置する。東西200cm、南北150cm、深さ102cmを測る。平面形は長方形、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

SK1140 (Ⅲ-573 図)

A面に帰属する地下室で、F10グリッドに位置する。SD1141を切る。北側は攪乱を受けているが北壁の立ち上がりの一部と坑底が残る。東西に掘方があり、上部の関連施設に伴うものと推定される。遺構の主要部分の平面形は方形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。坑底は平坦である。3～6層は焼土を含む覆土、7～10層は坑底の盛土と考えられる。壁面に沿って10基の柱穴を検出。柱は上部施設に伴うものと考えられる。13～16層は3～6層とは遺構の立ち上がりで明確に分かれていることから、遺構内は板材が嵌められていたと考えられる。板枠部分は東西186cm、南北180cm。掘方を含めると東西237cm、南北204cm、深さ156cmを測る。

SK1151 (Ⅲ-574 図)

I5～6グリッドに位置する遺構であり、北側は攪乱される。平面形は歪な方形を呈す。残存する規模は東西96cm、南北124cm、確認面からの深さは38cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がる。覆土は灰色から灰白色土が主体である。

本遺構からは瀬戸・美濃系磁器の端反碗、肥前系磁器の端反碗、広東碗などとともに鍋島の五寸皿（IV-428 図4）や、「あわた」銘のある京都・信楽系土器の涼炉（IV-429 図16）などが出土している。

SK1157（Ⅲ-575 図）

E5グリッドに位置する遺構である。周囲は攪乱され、西側に近接するSK1125との新旧関係は不明である。平面形は小判形を呈し、残存している規模は長軸は86cm、短軸74cm、確認面からの深さは130cmを測る。北壁は凹凸を有し、坑底は比較的平坦である。

遺物はあまり多くないが、陶磁器では肥前系広東碗、瀬戸・美濃系陶器瓶などが出土している。

SK1159（Ⅲ-576 図）

E8グリッドに位置する遺構である。北西隅は攪乱される。平面形は楕円形を呈し、残存する規模は長軸250cm、短軸184cm、確認面からの深さは100cmを測る。北壁は坑底よりほぼ垂直に立ち上がり、南壁はわずかにテラス状を有す。坑底は比較的平滑に整形される。覆土の堆積状況をみると、下層にローム粒やブロック、上層に焼土粒やブロック、炭化物などを多く含む土が堆積している状況が確認されたことから、火災後の瓦礫処理に利用された廃棄土坑である可能性が高い。

遺物は2次的に被熱したものを含み、陶磁器土器ではIV-429、430 図に提示したような肥前系磁器のいわゆるくらわんか碗、半球形碗、板作成形で大枠「泉州麻生」の刻印のある塩壺、刻印のある懐炉などが出土しており、火災年代は出土遺物の様相から享保15（1730）年あるいは元文3（1738）年の火災に比定される。

SK1160（Ⅲ-577、578 図）

E7グリッドに位置する。SU1194と重複しており、新旧はSU1194より新である。半截時にSU1194まで含めて掘削してしまったため南側の平面形は不明であるが、遺存している平面形は不整形であり、その規模は長辺388cm、短辺162cm、確認面からの深さ140cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底から開きながら緩やかに立ち上がる。覆土は遺物を多く含む灰色土で一度に埋まった状況であり、遺物には貝殻などの自然遺物も含むことから、SK1160は本遺構下のSU1194の窪地を利用した廃棄土坑の可能性が高い。

遺物は非常に多く、遺物収納箱に40箱近く出土しており、その内容をみると陶磁器、土器では、IV-430～439 図にあるような瀬戸・美濃系磁器の端反碗、湯呑碗、器壁のごく薄い坏、爛徳利やヨーロッパのスープボールなどが出土しており、その様相は東大編年Ⅷd期に位置づけられるものである。またIV-437 図86の瀬戸・美濃系陶器甕の底裏には「文化十ノ西ノ□月ノ□ノ□十」の墨書も確認されていることから、本遺構は文化10（1813）年を上限とする廃棄土坑と推測される。

SK1161（Ⅲ-579 図）

E10グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は台形。遺構の南東角が攪乱によって削平されている。東西150cm、南北114cm、深さ132cmを測る。

SK1181 (Ⅲ-580 図)

土坑で、A7～8グリッドに位置する。遺存状況は良好である。平面形は長方形を呈し、東西265cm、南北130cm、確認面からの深さ最大85cm、壁際で50～60cmを測り、坑底は皿状に凹んでいる。これは本遺構直下に位置するSD1103の裏込の影響を受けたことによるものである。覆土は暗褐色土の単一層で、廃絶後一気に埋め戻されたと考えられる。出土遺物は少なく、廃絶年代の特定には至らない。性格は不明。

SK1183 (Ⅲ-581 図)

土坑で、A9グリッドに位置する。平面形は不整形を呈し、東西230cm、南北170cm、確認面からの深さ70cmを測る。坑底は凹凸が著しい。覆土中内に方形の落ち込みを有し、その中には東側に灰褐色粘質土を覆土とする円形ピット、西側に人頭大の破碎礫が充填されている様相が確認された(1層上部の方形落ち込み部分)。その様相から別遺構が重複している可能性もある。覆土には焼土ブロックが多量に含まれ、火災時に廃絶されたことを窺わせる。

SK1189 (Ⅲ-583 図)

土坑で、A～B・9～10グリッドに位置する。南壁は攪乱によって大きく破壊されている。北東角付近でSK1188と重複し、それに切られている。また南東部でSU1190と重複し、それを切っている。平面形は不整形長方形を呈し、東西370cm、南北最大365cm、確認面からの深さ最大155cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がり、断面逆台形を呈す。また攪乱によって詳細は不明であるが、南壁には西から東へ降りる階段状のテラスが2段確認されている。坑底は概ね平坦に整形されている。覆土は6層に分層されるが、坑底寄りの5層から人工遺物、自然遺物、炭化材などが多量に出土した。東大編年V a期に比定される。その様相から日常的なゴミ捨て場として利用されていたと考えられる。

SK1231 (Ⅲ-582 図)

土坑で、F～G・10～11グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形、東西210cm、東西129cm、深さ83cmを測る。遺物の出土あり。

SK1253 (Ⅲ-584 図)

土坑で、調査区北端A～B・10～11グリッドに位置し、遺構東側は調査区外に至っている。また南側は攪乱によって破壊されている。西壁をSP1185に切られ、南側でSK1258を切っている。平面形は不整形を呈し、壁面、坑底ともに凹凸が著しい。また北壁にはテラス状の張り出し部を有す。覆土は水平堆積に近く、全体的に炭化材片が含まれている。また1層は焼土ブロック主体土で本遺構埋没最終期に火災後の瓦礫処理が行われたと考えられる。遺物は上層に多く、東大編年V a期に帰属する陶磁器類がまとまって出土している。西側に近接するSK1189と年代的傾向が類似し、18世紀前半頃にこの周囲ではゴミ捨て場の空間利用が行われていたと推定される。

SK1328 (Ⅲ-585 図)

J8～9グリッドに位置する遺構である。北東隅は攪乱される。平面形態は不整形を呈し、残存している規模は東西316cm、南北172cm、確認面からの深さは166cmを測る。壁、坑底は凹凸を有し、壁は坑底からやや開きながら立ち上がっている。覆土の堆積状況をみると最下層(5層)は自然遺物、

陶磁器、瓦片などを多く含む灰褐色土で埋め戻され、再度掘削し、再び自然遺物や陶磁器などを含む灰色土で埋め戻され、最後はローム粒やブロックを多く含む土で埋め戻されている。以上のような覆土、出土遺物の状況から日常的な廃棄土坑として少なくとも2回は廃棄と掘削（回収）が行われ、出土遺物の年代観から18世紀前半には廃絶した遺構と推測される。

SK1409、SK1415（Ⅲ-586 図）

SK1409はG12グリッドに位置する。SK1415を切る。平面形は不整形で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。東西114cm、南北118cm、深さは80cmまで確認した。SK1415はG12グリッドに位置する。東西135cm、南北135cm、深さ46cmを測る。SK1409に切られる。

SK1628（Ⅲ-587 図）

土坑で、E～F13グリッドに位置する。東側は攪乱によって削平され、遺存状態は悪い。坑底には凹凸がある。東西の残存部88cm、南北255cm、深さ35cmを測る。西壁に沿って杭跡を検出している。遺構検出面から80cmの深さまで杭が打ち込まれている。

SK1632（Ⅲ-588 図）

B～C13グリッドに位置する。遺構の北側は調査区外に広がり、東側は攪乱による削平を受けている。平面形は長方形を呈する土坑で、確認された範囲で東西231cm、南北167cm、深さ150cmを測る。坑底は平坦で南壁の立ち上がりはほぼ垂直で木枠の痕跡を確認している。南壁に沿って2基の杭穴を検出。杭跡は壁面の板材を固定するために打たれたと考えられる。

SK1633（Ⅲ-589 図）

土坑で、E13グリッドに位置する。遺構の北西角と南側は攪乱によって削平されている。平面形は長方形を呈し、東西198cm、南北157cm、深さ68cmを測る。壁際で柱穴を検出している。

SK1634（Ⅲ-590 図）

土坑で、G13グリッドに位置する。平面形は不整形で東西90cm、南北86cm、深さ30cmを測る。遺構内に直径48cmの円形の立ち上がりがある。覆土は灰色土を主体としている。桶枠は確認されていない。遺構形状、覆土の様相から便槽と推定される。

SL1124（Ⅲ-591 図）

16グリッドに位置する。西側は攪乱されるが、残存する平面形はほぼ円形を呈し、規模は直径46cm、確認面からの深さは28cmを測る。覆土は灰色シルト質極細砂が主体である。坑底には白色化および硬化した部分を確認された。遺構形態、覆土の様相から便槽と考えられる。壁際に桶の側板が部分的に遺存しており、5cm幅を単位とした板材であったことがわかる。出土遺物として提示した瀬戸・美濃系陶器のいわゆる腰鍔碗（Ⅳ-420 図1）は本遺構の坑底で確認されたものである。

SL1142（Ⅲ-592 図）

土坑で、E11グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は長方形、直径70cm、深さ60cmを測る。3層上部で礫を検出している。

SL1143 (Ⅲ-593 図)

遺構で、E11 グリッドに位置する。遺構内に甕が埋められている。口縁部は失われていることから上面は削平されていると考えられる。平面形は円形、断面形は台形を呈する。直径 67cm、深さ 59cm を測る。1、2 層は焼土を含み、3 層は炭化物が主体となっている。

SL1164 (Ⅲ-594 図)

土坑で、E10 グリッドに位置する。遺構の西側は削平されている。残存部で東西 55cm、南北 65cm、深さ 26cm を測る。

SP101 (Ⅲ-537、538 図)

礎石建物基礎遺構で、P7～8 グリッドに位置する。上部は削平され、根石上面レベルで検出された。掘方の平面形は隅丸方形を呈し、南北 110cm、東西 95cm、確認面からの深さ 30cm を測る。根石には中央に 65cm × 45cm 規模の隅丸三角形を呈する扁平川原石を配し、その周囲の四隅に人頭大の扁平川原石を用いた栗石を配している。坑底直上の 2 層は小円礫を含む締まりの強い層序で根石の固定に詰められたと考えられるが、1 層は根石を覆っていること、焼土が多量に含まれることから、遺構が廃絶され、礎石が抜き取られた段階の火災によるものと推定される。本遺構西側には礎石建物跡 SB93 が位置するが、遺構規模が大きく異なるため関連性は薄いと考えられる。また周囲は攪乱の影響が強く、供伴する遺構は検出されなかった。但し、遺構規模から御殿などの大規模建造物に伴う礎石であることに疑う余地はない。

SP1185 (Ⅲ-595 図)

ピットで、A～B10 グリッドに位置する。西側で SK1184 と重複し、それより古い。遺存状況は概ね良好である。平面形は円形を呈し、直径 135～145cm を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、確認面からの深さは 90cm を測る。坑底には破碎礫、円礫を用いた根石が敷き詰められ、その圧力による凹凸が認められる。根石はロームブロック・粘土ブロック主体土で固められ、その上に砂利層が充填され、突き固められている。遺物は 18 世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土している。おそらく砂利層の上には礎石が置かれていたと考えられるが、その痕跡は認められなかった。また周辺に供伴する遺構も無く、性格は不明である。

SU131 (Ⅲ-596、597 図)

半地下室遺構で、O3 グリッドに位置する。東壁を除き、攪乱によって上部が削平されている。また西側で SU212 を北側で SU389 と重複し、本遺構が最も新しい。平面形は長方形を呈し、南北 350cm、東西 260cm を測る。さて本遺構は床面構造から壁際に柱が建ち上屋施設を伴う半地下室と考えられる。以下、製作工程を追って本遺構の床面構造を述べる。本遺構の坑底掘方規模は南北 295cm、東西 255cm、確認面からの深さ 180cm を測る。その一回り内側にさらに南北 250cm、東西 210cm、深さ 40cm を測る長方形を呈する掘込が設けられている。この掘込の壁際にはピットが存在し北西角、南北各壁ほぼ中央、東壁中寄りの 3 基から直径約 10cm を測る柱痕が観察された。また各コーナーには扁平川原石や切石による礎石が配され、特に南西コーナーの礎石上には本瓦が 1 枚据えられていた。そして礎石表面レベルまでローム粒を含む褐色土で埋め立て、礎石直上に角材を口の字

状に組み置き、角材周囲に瓦片などを多量に含む土を入れ固定している。角材表面レベルは壁際のテラスと同レベルである。柱痕は西壁北半の3基は角材下に、東壁の3基は角材と壁の間に、南北各壁中央の2基は角材内側に位置している。角材表面レベルではいずれの柱痕も確認されていないことから、角材設置に関する補助施設と考えられる。この工程をもって坑底内側の掘込は完全に埋まり、床面は平坦になる。この上にロームを主体とする暗黄褐色土を敷き詰め、角材レベルから数cmの嵩上げを行い、その上に切石を設置し、周囲を玉砂利、扁平破碎礫を多量に含む暗黄褐色土で突き固めている。西側が攪乱の影響を受けているが、口の字状に設置されたと考えられる。切石列はⅢ-596図に示したように角材直上に位置するとはいえず、特に南壁、西壁では角材の位置と明らかにずれていることが判る。このように切石と角材の位置がずれ、なおかつ両者の間に間層が存在することから、角材設置と切石設置には時間的断絶があったと推定され、切石は遺構修築時に設置された可能性が考えられる。18世紀前葉の遺物が出土している。

SU212（Ⅲ-598図）

A面に帰属する地下室で、O3グリッドに位置する。SU131と重複し、遺構上部はSU131構築によって残存していない。SU131に削平によって開口部の形態は不明である。室部の平面形は長方形を呈し、南北245cm、東西210cm、確認面からの深さ350cmを測る。室部東壁にはローム削り出しの階段が2段分張り出しており、本来はこの階段部が東へ伸び、開口部へ繋がっていたと考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり丁寧に整形されている。天井は全く遺存していないが、覆土に含まれる大形ロームブロックの存在から、全て崩落したと判断され、壁面整形痕の範囲から奥壁天井高は140cmと推定される。床面北壁際にピットが掘られているが、性格は不明である。覆土は階段方向から室部方向へ緩やかに傾斜している。17世紀後半の遺物が出土している。

SU389（Ⅲ-599図）

遺構で、N～O3グリッドに位置する。南側でSU131、SU212と重複し、SU131に切られている、SU212との新旧関係は重複箇所が狭小であることから確認できなかった。平面形は不整長方形を呈し、南北330cm、東西160～190cm、確認面からの深さ最大340cmを測る。壁は緩やかにオーバーハングし表面には工具痕が顕著に観察される。壁から坑底へは丸味を帯びて移行し、坑底は皿状を呈し、壁同様工具痕が顕著に残る。覆土下層は山なりに堆積しているが、上層ではほぼ水平堆積に変化する。整形痕が認められないことから、小規模な採土坑の可能性はある。

SU446（Ⅲ-600図）

地下室で、K～L・7～8グリッドに位置する。A面上から切り込んでいるため、北壁側の造成土を掘り込んだオーバーハング部分が崩落している以外は、比較的良好な状態で検出された。開口部の平面形は、南北230、東西180cmを測る不整長方形を呈する。南壁はほぼ垂直に立ち上がっており、南側に開口部があったことが判る。床面は南北250cm、東西180cmを測る長方形を呈しているが、北西コーナーのみ丸味を帯びている。確認面からの深さ320cmを測る。覆土は床面直上から約60cm上まではほぼ水平堆積を呈し、ローム粒、ロームブロックを含むが、特に9～11層はローム主体土である。その上に堆積した5層は層厚130～140cmを測り、その全域にわたって、貝殻、炭化物、陶磁器類が多量に出土していることから、短期間での大規模廃棄行為が行われたことが考えられる。さらに5層をパックするようにローム主体土の4層が堆積し、再び食物残渣を含む廃棄行為が行われた

(3層)。出土した陶磁器類の年代観は東大編年VI b～VII期に比定される。最上層の1、2層は覆土の立ち上がりが急なことから、本遺構中に別遺構が掘削された可能性も考えられる。

SU593 (Ⅲ-601 図)

ローム面で検出された遺構で、L6～7グリッドに位置する。上部は攪乱による削平を受けて遺存していない。平面形は長方形を呈し、南北260cm、東西220cm、確認面からの深さ170cmを測る。壁はややオーバーハングする南壁を除き、ほぼ垂直に立ち上がっている。表面には工具痕が認められ、特に遺構南側で顕著である。床面は随所に工具痕を残すものの、ほぼ平坦に整形されている。また南壁両角と東西各壁ほぼ中央に方形掘方内に切石を用いた礎石が置かれている。特に東西各壁では壁面を箱形に掘り込み、柱が壁に埋まるように構築されている。南壁がオーバーハングしていること、北壁に礎石が認められないことから、北壁寄りを入口とし、南側の4本柱間に屋根をかけた半地下室構造の遺構と推定される。覆土上層の2層には炭化材、人工遺物、自然遺物が多量に廃棄されており、埋没途中で芥溜として転用されたことが窺われる。遺物の年代観は東大編年VI b期に比定されることから、A面に帰属する遺構と考えられる。本遺構周辺にはVII～VIII期の遺物が廃棄されたSK388、VI b～VII期の遺物が廃棄されたSU446が存在し、18世紀後葉から19世紀前半にかけてゴミ処理エリアとして利用されていたことが考えられる。

SU931 (Ⅲ-602 図)

ローム面にて検出された地下室で、K～L4グリッドに位置する。SD803直上に構築されている。開口部の平面形は不整隅丸方形を呈し、東西160cm、南北125cmを測る。壁は四方へ緩やかに湾曲しながらオーバーハングし、明確な天井は作出されていない。床面はほぼ平坦に整形され、壁際に周溝状の掘り込みが認められる。確認面からの深さは120cmを測る。覆土は4層以下に天井の崩落と考えられるロームブロックが含まれ、2層には瓦片が含まれている。出土遺物は18世紀前半に比定される陶磁器類が少量出土しており、A面に帰属する遺構と考えられる。

SU1101 (Ⅲ-603 図)

地下室で、E5～6グリッドに位置する。比較的良好な状態で検出された。南壁で重複するSD1121より新しい。確認面での平面形は隅丸長方形を呈し、東西282cm、南北195cmを測る。確認面下約150cmで東西250cm、南北150cmを測る一回り小さい長方形に変化し、壁は直立する。また北壁は最大約30cmオーバーハングする。壁面、坑底ともに丁寧に整形されている。覆土はほぼ水平堆積を示し、東壁際に杭痕と推定される痕跡が認められる。また坑底直上に多量の瓦片が廃棄されていた。遺物は東大編年V a期に帰属する陶磁器類が比較的多量に出土している。

SU1110 (Ⅲ-604 図)

地下室で、A7グリッドに位置する。天井部が崩落している以外は比較的良好な状態で遺存していた。確認面での平面形は西側に先端を有す砲弾形を呈しているが、これは天井部の崩落による結果で、本来は1辺90～100cmを測る方形を呈していたと推定される。西壁は確認面下約60cmからオーバーハングを始めるが盛土中に構築された天井部はほぼ崩落していた。開口部の壁面はほぼ直立している。床面は長方形を呈し、東西175cm、南北110cm、確認面からの深さ160cmを測る。床面、壁面ともに比較的平滑に整形されている。覆土には焼土ブロック、焼土粒が多量に含まれ、火災によって廃絶

されたことが窺われる。また床面直上の第4層にはロームブロックが多量に含まれ天井崩落土と考えられる。覆土中より18世紀前半に比定される陶磁器類がまとまって出土しているが、被熱遺物は少ない。

SU1122（Ⅲ-605 図）

G～H3グリッドに位置する地下室である。西側は攪乱されるが、残存する開口部は東西312cm、南北376cmを測る方形を呈し、北側立ち上がりはごく緩やかな階段状を呈す。しかし階段として利用したとすると、ステップ奥行きが20cm以下であり、昇降に利用するにはやや狭い。坑底は比較的平滑に整形される。中央付近に不整形な浅い窪みを有す。また北東、北西各隅では柱痕状の坑が検出された。覆土は南から北へロームブロックを主体に一時に埋め戻されたような状況が確認される。ほぼ坑底直上付近で南北方向に並ぶ割石が4基確認されたが、坑底にはこれら以外の石は検出されなかった。北側立ち上がりの割石の延長線上に割石が1つ確認されているが、関連性は不明である。また埋め戻された後、間隔は不規則であるが、幅20cm、深さ70～100cmほどの柱痕が3本確認されている。それらと割石が近接していたことから、礎石の役割を果たしていた可能性もある。遺物はごく少量陶磁器片が出土している。

SU1165、SU1178（Ⅲ-606 図）

地下室で、C～D・12～13グリッドに位置する。SU1165とSU1178の切り合い関係は確認できなかった。しかし、SU1178の北西角から西壁壁面に沿って配置されている柱穴はSU1178に伴う遺構と考えられること、SU1165とSU1178の間にも柱穴が確認されていることから、SU1178はSU1165を切っていると推定される。SU1165は上部が削平され、北西側はSU1166に削平されている。平面形が長方形を呈し、壁面は垂直に立ち上がる。北側に柱穴1基、南側には幅25cm、高さ13cmの段差があり、4基の柱穴がある。東西225cm、南北190cm、深さは残存部分で45cmを測る。SU1178は上部が削平され、南側が攪乱されている。平面形はL字形を呈する。東西194cm、南北の残存部分は270cm、深さは130cmを測る。

SU1166（Ⅲ-607 図）

C～D12グリッドに位置する。地下室で東壁に1段テラスを有し、その南北角に柱穴が配置されている。平面形は長方形、東西283cm、南北170cm、深さ237cmを測る。南側の柱穴の平面形は不整形で東西34cm、南北30cm、深さ32cmを測る。北側の柱穴は東西38cm、南北38cm、深さ37cmを測る。土坑は出入口の施設に関連するものと考えられる。

SU1182（Ⅲ-608 図）

半地下室で、B4グリッドに位置する。攪乱による削平を大きく受け、床面付近が遺存しているに過ぎない。平面形は1辺約240cmを測る方形を呈す。残存壁高は約20cmに過ぎない。壁際には柱穴が巡り、各コーナー間に東西壁では2基、南壁では3基認められる。北壁には不整楕円形の浅い落ち込みが存在する。こうした状況から本遺構は上屋構造を有す半地下室と考えられる。覆土にはロームブロック、焼土粒が多量に含まれ、火災によって廃絶された可能性がある。遺物は17世紀後半に比定される陶磁器類が少量出土しているが、被熱痕跡が認められ、火災時に廃棄されたことを窺わせる。本遺構の北壁部分は隣接する中央診療棟地点でF19-2として調査されており、当時の覆土5、6

層がそれぞれ1、2層に該当する。

SU1190（Ⅲ-583 図）

地下室で、B9～10グリッドに位置する。上部は攪乱とSK1189によって破壊され、C層中より検出された。平面形は不整長方形を呈し、東西270cm、南北最大200cm、確認面からの深さ120cmを測る。但し構築面をA面とすると実際は280cmと推定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、南東部でややオーバーハングしている。その形状から地下室と考えられる。覆土は東側からの流れ込みで埋め戻されている。遺物は17世紀末に比定される陶磁器類が少量出土している。

SU1194（Ⅲ-577、578 図）

E～F7グリッドに位置する地下室である。SK1160と重複しており、新旧はSK1160より旧である。長方形の室部北側に階段が敷設され、全体的な平面形態は長方形を呈す。規模は東西456cm、南北320cm、確認面からの深さは224cmを測る。階段部の全長は242cm、幅120cm、仰角40°を測り、4段のステップは周囲の盛土を掘削し構築されている。各ステップは奥行き、高さとも不規則である。入口より1～3段目のステップの北壁壁際には方形のピットが確認された。

室部は階段部最下段の踊り場から南側へL字状に広がっており、床面規模は東西410cm、南北206cmを測る。確認面から約200cm下で貼床が確認された（11～15層）が、その面で各壁際に一辺約20cmのピットが60～70cmの間隔で合計21基確認された。それらのピットは北側の階段部まで含めて柱筋を揃え、相対する位置に確認されていることから、階段部まで含めた上部構造を支えるための柱と考えられる。この貼床面とその直上の層（9、10層）から腐食した材が検出されている（Ⅲ-577図材検出）。これらの材を撤去した下からは多くの瓦片が出土し、南壁では板材状の痕跡が確認されていることから、上部構造は板壁を有す瓦葺きであった可能性もある。

遺物は遺物収納箱で2箱ほど出土しているが、18世紀後半の陶磁器がその中心である。

SU1264（Ⅲ-609 図）

I～J7グリッドに位置する地下室である。開口部形状はやや歪な長方形で、規模は東西260cm、南北146cm、確認面までの深さは360～386cmを測る。床面中央付近がマウント状に全体よりやや高い。縦坑部の壁はほぼ垂直に立ち上がるが、確認面下約160cmでひとまわり小さくなる。東側では確認面下約260cmで、西壁では約180cmほどでオーバーハングし、天井部へ移行する。ただし明確に天井部が遺存していたのは東側のみで、西側は開口部近くの天井部以外は崩落している（天井部ローム崩落土）状況であった。室部床面の平面形は東西339cm、南北220cmを測る長方形を呈す。坑底には工具痕の凹凸が残存していたが、壁面は袋状の天井部まで含めて比較的平滑に整形されている。覆土は縦坑部が狭くなる中程あたりまでは山状の堆積を呈し、それより上層から開口部までは凹レンズ状に堆積している。下層の9、10層は焼土粒、焼土ブロック、炭化物が多く含まれる層であり、その中に2次的に火熱した瓦や陶磁器が多く含まれていた。火熱した陶磁器、土器には、いわゆる上製かわらけ（DZ-2-d）が大量に含まれていた。火災の瓦礫処理に伴い埋め戻されたものと考えられる。この火災の年代は、出土遺物の年代観より元禄16（1703）年の火災の可能性が高い。9層より上の層から出土した遺物は2次的な火熱を受けておらず、遺物の年代観もそれより新しい18世紀前葉ぐらいまでのものが出土している。以上のことから本遺構は火災の瓦礫処理として埋め戻された際には完全には埋め戻されず、その後、少なくとも18世紀前葉までは開口していた可能性が高い。

SX1107（Ⅲ-610 図）

遺構で、藩邸北端付近 A～B8 グリッドに位置する。東側は攪乱によって破壊されており、全長は不明。幅 50cm、深さ 10cm 弱を測る浅い溝状遺構で、溝内には砂利が充填されている。藩邸境界遺構 SD1103 上端から約 2 間南側に位置し、それとほぼ平行に伸びている。雨落ち溝などの可能性も考えられるが、年代、性格とも確定できない。

第5節 東京（帝国）大学期

近代の遺構

第5節 東京（帝国）大学期

（1）近代の遺構

SB323（Ⅲ-611 図）

L9 グリッドに位置する。東側と西側を攪乱によって削平されている。建物基礎で切石、自然礫が並べられている。断面形は台形、確認できる範囲で東西 457cm、南北 90cm を測る。

SB343（Ⅲ-612 図）

A 面に帰属する建築基礎遺構で、L～M・1～2 グリッドに位置する。調査区西端部で検出され、さらに西へ伸びていたと考えられる。SD236 を切っている。坑底幅約 100cm の溝状の掘方で、深度は江戸の盛土を掘り抜き自然堆積層にまで達している。掘方内から根石を伴う 2 段積みロウソク基礎が 3 基検出された。南から芯々で 90cm、270cm 間隔で配置されている。遺構北側は根石上部まで攪乱を受けており、その部分の根石配置と規模から、さらに 90cm 間隔で 2 基の基礎があったものと考えられる。基礎の周りは破碎礫で充填され、その状態は確認面まで続いている。このような基礎構造は、同病院内外来診療棟地点で検出された医学校本館基礎（SB70）と共通し、同時期の大学建物基礎と推定される。明治 13 年に刊行された「東京大学医学部全図」と本地点を重ね合わせると、「科学教室」の東端部が重なってくることが確認でき、本遺構はこの科学教室の基礎と考えられる。この建物は明治 29 年度の帝国大学略図では更地となっており、その前年に解体されたことが確認される。

まとめにかえて



まとめにかえて

本調査で検出された遺構・遺物の詳細と各期の概要は、各節にゆずり、周辺遺跡の様相を含む評価と今後の展望を加え、まとめにかえたい。

（1）江戸時代以前

旧石器時代

L2グリッドを中心に立川ロームⅢ層中より礫と若干の剥片類が出土した。出土地点は埋没谷南斜面上にあり、散在的な出土状況より流れ込みの可能性が指摘される。

縄文時代

C～D・5～6グリッドおよびC7～8グリッド周辺の包含層より安行ⅢC式を主体とする2箇所の遺物集中区が確認された。土器片の分布状況および接合状況から2次的廃棄行為の結果と推測している。本地点周辺における概期の遺跡として湯島（切通し北）貝塚がある。湯島（切通し北）貝塚の調査は日本大学（昭和29年）と文京区（昭和43年）によって過去2回行われている（日本大学考古学会1957、文京区役所1967）。両調査とも現在の岩崎邸庭園の東から南にかけての崖線上にトレンチを設定して貝塚の確認を目的に実施された。調査の結果、縄文土器や貝の包含層が検出されたが、いずれもそれ以下の層位より近世の盛土層が確認され、縄文土器を含む貝層は、2次堆積による盛土層という結果であった。江戸時代の本遺跡周辺は、天正18（1590）年以降、江戸時代を通して、徳川家康四天王のひとり榊原康政を祖とする譜代大名榊原家の拝領地（池之端屋敷）が置かれた場所で、本来台頂部に近い北西部にあった貝塚が、藩邸開発による攪乱を受け、調査地点周辺へと2次廃棄された結果だと結論づけている。近年、榊原家屋敷の絵図面が発見された。それに両調査区を対比させると、文京区調査区は表御殿御式台付近、日本大学調査は表御門周辺と藩邸東側道路に接する低地部および藩邸南東部の泉水を含む庭園周辺に該当すると考えられる。この比較より藩邸期から近代岩崎邸期にかけての大規模土地改変によって、原位置からかなり離れた場所に土器、貝を伴った土砂が移動したと推測される。ただし池之端屋敷に関する調査はこれまでに、調査室が行った設備管理棟地点、給水設備棟地点のほか、文京区の龍岡町遺跡（第1地点～第7地点）、台東区の旧岩崎家住宅所在遺跡で実施されているが、縄文時代の遺構は認められず、大半の遺物は近世以降の二次堆積土から出土しており、現状で本貝塚の所在地を特定するには至っていない。

古墳時代

本地点からは古墳時代の竪穴式住居4軒（前期1軒、中期2軒、後期1軒）が検出された。古墳時代前期～中期の住居は、埋没谷北斜面に位置するC11～12グリッドより検出された。この埋没谷北側の台地上ではこれまでに看護師宿舍Ⅰ期地点（現1号棟）、Ⅱ期地点（現4号棟）、Ⅲ期地点（現5号棟）、MRI-CT棟地点、ドナルドマクドナルドハウス地点、病棟Ⅱ期地点、CRC-A棟Ⅰ期地点、国際科学イノベーション総括棟地点などの調査で、台地東側を中心に50軒以上の住居で構成される集落が確認されており、本地点で検出されたSI5はほぼその南端域に位置していると考えられ、集落範

囲を推定する上での一資料と位置付けられる。古墳時代後期の住居はB8グリッドで検出された1軒のみである。この段階の住居址分布は前段階に比べると非常に低くなり、中央診療棟地点2軒、第2中央診療棟地点1軒、看護師宿舎I期地点1軒、病棟II期地点2軒と、埋没谷北斜面の台地縁辺部やや中寄りに分布する傾向が看取され、弥生時代後期から続いた人口集中は古墳時代後期以降急激に拡散化していくといえる。

中世

中世に帰属するには、井戸2基(SE3917、SE3966)と道路状遺構4基(SR717、SR718、SR832、SR3692)が確認された。本郷構内では中世に帰属すると考えられる遺構は、これまでほとんど検出例がなく、江戸時代の遺構及び盛土層より常滑焼甕片、板碑片などが少量出土している程度である。SR717、SR718は埋没谷を横断する方向で伸び、その延長が第2中央診療棟地点で確認されている。また病棟II期棟地点では、坑底から板碑片を出土した井戸が1基検出されたが、本地点同様不整楕円形を呈し、その掘削深度は地下水位面までに達していない点で共通する。道路状遺構は断面箱葉研形を呈し、坑底からは帯状の硬化範囲が複数検出された。平行関係が認められるものはなく、例えば一輪車のような資材を押した痕跡がイメージされ、何らかの作業用道路と考えられる。

(2) 江戸時代

本郷構内での他の調査事例同様、本地点においても主たる遺構、遺物は江戸時代に帰属し、遺構総数3,567基、遺物量コンテナ約3,000箱という、膨大な情報を得た調査であった。

江戸時代の生活面はA～E面に大別され、さらにD面は盛土造成の変遷からD1面～D4面までに細分されることが確認された。ただし斜面地を基盤にしていることから、台地上に位置する南側では(特にPライン以南)C面下はローム層となり、埋没谷の影響を受けた北側ではD1、D2層を経て沖積層に移行する。さらに谷中心部付近などではD3、D4層の堆積も認められた。このような造成土堆積状況の中で、C面直上と、D1面直上において焼土層の拡がり広範囲で確認された。前者がC面焼土、後者がD面焼土とした焼土層である。D面焼土は含まれる遺物の年代観から、本郷邸が全焼した天和2(1682)年12月の「八百屋お七の火事」に伴う焼土層に比定される。「研究編」宮崎論考でも述べられているように、本地点1区はそれを境に黒多門邸から大聖寺藩邸へと土地利用が大きく変化しており、江戸時代の土地利用を考えるにあたり最大の画期と位置付けられる。そして本調査最大の成果もこの火災に関連した遺構、遺物から得られている。

D1面から検出された長屋遺構群は天和2年の火災で焼失した遺構群で、翌年に行われた屋敷割り変更による造成土でパックされたことから、礎石をはじめ、炉、三和土などの施設、通路と側溝などが比較的良好な状態で確認された。また礎石配置と各施設のあり方から長屋内の部屋割りを復元することができた。さらに遺構面直上に堆積したD面焼土層には、そこで使用された陶磁器類、石製品などが多量に含まれていたことで、居住者の生活相や、江戸屋敷での什器類調達のあり方を復元できる良好な一括資料と位置付けられる。

火災後の屋敷割り変更に伴う盛土造成土には、造成に乗じて火災瓦礫も廃棄された。C2層としたこの焼土層からは、肥前磁器を主体とする多量の陶磁器類が含まれていた。磁器の割合は約8割を数え、中皿、小坏など揃いの食器が多く含まれていた。その様相は、中央診療棟地点L32-1出土資料と類似し、御殿内で実施された饗宴などに用いられたと考えられた。この陶磁器類が、御殿空間に位置する医学部教育研究棟地点出土資料と接合したことにより、加賀藩邸御殿空間で所有された一群であ

ることが検証された。加賀藩邸は慶安3（1650）年に全焼したとされ、まさしくそれ以降に誂えられた一群と位置づけされる。さらに南川原窯ノ辻窯跡など生産地出土資料と同製品が含まれており、生産年代を知る上でも良好な資料と位置付けられる。

造成、屋敷割り変更直後に掘削、埋め戻しが行われた遺構 SK3 からは、陶磁器、木製品、金属製品など約 500 箱の遺物が出土した。特に台地上に立地する本郷邸では、このようにまとまった量の木製品が出土することは稀であり、さらに出土遺物や間層を挟み堆積した C 面焼土の存在から、掘削から埋め戻しまでが、10 年前後の短期間で行われたことが確認でき、年代を限定できる木製品一括資料として高く評価される。

ここに取り上げた以外にも傾斜地になされた厚い盛土層によって、藩邸開発の変遷や、初期開発期の遺構・遺物など多くの知見が得られた調査であった。その一方、元禄 16 年の火災以降は、盛土による造成がほぼ完了したことによる、遺構面継続期間の長期化と、現表土に近接することによって攪乱率が大きくなったことなどの影響から、大聖寺藩邸期の様相は断片的な部分が多い。今後の課題として、整理、研究を進めている第 2 中央診療棟地点の様相と、既刊の中央診療棟地点、外来診療棟地点などを合わせ、藩邸全体としての視点から遺構の立地や変遷、出土陶磁器の様相などを復元していきたい。

【引用・参考文献】

- 阿部芳郎 1988 「第5章 第3節 遺物のライフサイクルと上土棚遺跡の形成過程」『上土棚南遺跡第3次調査』綾瀬市教育委員会
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究辞典』 柏書房
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1992 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』 I 江戸陶磁器土器研究グループ
- 江戸陶磁器土器研究グループ 1996 『江戸出土陶磁器・土器の諸問題』 II 江戸陶磁器土器研究グループ
- 追川吉生 2012 「医学部附属病院ドナルド・マクドナルド・ハウス地点」『東京大学構内遺跡調査研究年報』 8 東京大学埋蔵文化財調査室
- 大成可乃 1997 「天和2年の火災で焼失した長屋に伴う炉灶遺構について－東京大学医学部附属病棟地点出土事例を中心に－」『東京考古』15 東京考古談話会
- 大成可乃 2011 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類(2)－器種(小器種)の出土状況－」『東京大学構内遺跡調査研究年報』77 東京大学埋蔵文化財調査室
- 大橋康二 1992 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小川和博 1975 「成田市における縄文時代後期の遺跡群」『奈和』第14号 奈和同人会
- 小川 望 2008 『焼塩壺と近世の考古学』 同成社
- 加賀一丁目(東京家政大学構内)遺跡調査会 1995 『加賀一丁目(東京家政大学構内)遺跡発掘調査報告書』
- 香取祐一 2000 「東京大学医学部附属病院病棟地点の土器廃棄場について」『東京考古』18 東京考古談話会
- 香取祐一 2004 「加賀藩本郷邸表長屋の変遷」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4
- 可見通宏 1971 「第三章第2節Ⅳ-3 遺跡の性格に関する若干の考察」『平尾遺跡調査報告Ⅰ』 東京都住宅供給社 南多摩群平尾遺跡調査会
- 神谷正義 1997 「岡山市二日市遺跡の発掘『近世の出土銭Ⅰ-論考篇-』永井久美男篇 兵庫埋蔵銭調査会
- 神谷正義・山路弥寿夫 1991 「寛永通宝鑄銭場の一様相(1)～(2)」『貨幣』33-1～6 日本貨幣協会
- 川根正教 1996 「寛永通宝銭の基礎的研究1(下)-形式分類と編年-」『出土銭貨』第5号 出土銭貨研究会
- 川根正教 2001 「寛永通宝銅銭の様式分類」『出土銭貨研究』 出土銭貨研究会
- 川根正教・石川功・植木真吾 2005 「寛永通宝銅銭の形態的特徴と金属成分分析」『日本考古学』第20号 日本考古学協会
- 関西近世考古学研究会 2000 『近世の実年代資料』第12回関西近世考古学研究会大会資料
- 関西陶磁史研究会 2004 『軟質施釉陶器の成立と展開』研究集会資料集』 関西陶磁史研究会
- 木下正史 1967 「湯島切通貝塚の調査」『文京区史』 東京都文京区
- 工藤裕司 1998 『新寛永通宝図会』(株)ハドソン・東洋鑄造貨幣研究所
- 小泉好延・伊藤博之・原祐一・西脇康 2001 「近世貨幣の製造技術と金銀定量法に関する研究」『産業考古学会第25回(2000年度)総会研究発表講演論文集』 産業考古学会
- 小葉一夫 1982 「No.3 遺跡Ⅳ 成果と問題点 埋没谷における中期土器の遺物出土状態」『多摩ニュータウン遺跡 昭和56年度第5分冊』 東京都埋蔵文化財センター
- 古泉 弘 1985 「B.キセル」『江戸-都立一橋高校地点発掘調査報-』
- 古泉 弘編 2013 『江戸の暮らしの考古学』 吉川弘文館
- 小林達夫 1974 「縄文世界における土器の廃棄について」『国史学』第93号 国史学会
- 惟村忠志・増尾富房 1990 「再検討を要する江戸時代銭貨の研究-御殿場市長坂出土の銭貨の分析を通じて-」『牟邪志』第5号 牟邪志同人会
- 齊藤 努 2001 「日本の銭貨の鉛同位体比分析」『国立民俗歴史博物館研究報告』第86集 国立歴史民俗博物館
- 齊藤 努・高橋照彦・西川裕一 2000 「近世銭貨に関する理化学的研究」『IMES DISCUSSION PAPER』 No.2000-J-1 日本金融研究所
- 阪口 豊 1990 「東京大学の土台-本郷キャンパスの地形と地質-」『東京大学史紀要』第8号 東京大学史料室
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1991 『柴田コレクション展(Ⅱ)』
- 佐賀県立九州陶磁文化館 2006 『將軍家への献上 鍋島-日本磁器の最高峰-』
- 重久淳一 1984 『なすな原遺跡の研究Ⅱ』 なすな原遺跡友の会
- 静岡いづみ会 1990 「穴銭入門(84)」『収集』Vo.15No.7 書信館出版(株)
- 新宿区厚生部遺跡調査会 1992 『細工町遺跡』

- 鈴木克彦 1998 「東北地方北部の縄文中期後半の土器 - 大木系土器層位的の相伴関係土器集成 -」『研究紀要』第3号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木公雄他 1988 『増上寺子院群』港区芝公園1丁目遺跡調査団
- 墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団 1996 『墨田区錦糸町駅北口遺跡』I 墨田区錦糸町駅北口遺跡調査団
- 台東区遺跡調査会 1999 『茅町遺跡』台東区文化財調査会
- 台東区文化財調査会 2005 『茅町二丁目遺跡 池之端一丁目5番地点 (本郷台遺跡群、湯島両門町遺跡湯島四丁目12番地点)』
- 高橋照彦 2001a 「日本における銭貨生産と原料調達」『国立民俗歴史博物館研究報告』第86集 国立歴史民俗博物館
- 高橋照彦 2001b 「近世銭貨の生産と品質規格」『鹿園雑集』第2・3合併号 奈良国立博物館研究紀要 第2・3合併号 奈良国立博物館研究紀要
- 東京大学医学部附属病院創立150周年記念アルバム編集委員会 2008 『医学生とその時代』中央公論新社
- 東京大学遺跡調査室 1989 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書1 東京大学本郷構内の遺跡 理学部7号館地点』東京大学遺跡調査室
- 東京大学遺跡調査室 1990a 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書2 東京大学本郷構内の遺跡 法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室
- 東京大学遺跡調査室 1990b 『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』東京大学遺跡調査室
- 東京大学文学部考古学研究室 1979 『向ヶ岡貝塚』東京大学文学部考古学研究室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1990 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書4 東京大学本郷構内の遺跡 山上会館・御殿下記念館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1996 『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2 東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1997 「東京大学構内遺跡出土陶磁器・土器の分類 (1)」『東京大学構内遺跡調査研究年報』2別冊 東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2004 「東京大学本郷構内の遺跡 山上会館龍岡門別館地点発掘調査報告」『東京大学構内遺跡調査研究年報』4 東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書5 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院外来診療棟地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2005 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書6 東京大学本郷構内の遺跡 工学部1号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2006 『東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書7 東京大学本郷構内の遺跡 工学部14号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室
- 東京大学埋蔵文化財調査室 2012 「東京大学構内遺跡出土人形・玩具の分類」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 東京大学埋蔵文化財調査室
- トスカ・ヘゼキール編著、北村智明／小関恒雄訳 1987 『明治初期御雇医師夫妻の生活』玄同社
- 都内遺跡調査会 1997 『駒込縄手 御先手組屋敷』
- 都立学校遺跡調査会 2000 『管谷遺跡』都立学校遺跡調査会
- 永井久美男 1998 「第2章 近世貨幣の分類図版 (1) 寛永通宝」『近世の出土銭Ⅱ - 分類図版篇 -』永井久美男編 兵庫埋蔵銭調査会
- 永井久美男 2001 「序章 模鑄銭の全国的様相」『中世の出土模鑄銭』東北中世考古学会編
- 長崎県波佐見町教育委員会 1998 『三股青磁窯跡』波佐見町文化財調査報告書 第10集 波佐見町教育委員会
- 中山修秀 1984 「土器捨て場考 (1) - 特に縄文時代中・後期の関東及び中部高知を中心として -」『日本考古学研究所集報Ⅳ』日本考古学研究所
- なすな原遺跡調査団 1984 『なすな原遺跡 No.1 地区調査』なすな原遺跡調査会
- 成瀬晃司 1990a 「先土器時代調査各節」『東京大学本郷構内の遺跡法学部4号館・文学部3号館建設地遺跡』東京大学埋蔵文化財調査室

- 成瀬晃司 1990b 「先土器時代の遺物」『東京大学本郷構内の遺跡医学部附属病院地点：医学部附属病院中央診療棟・設備管理棟・給水設備棟・共同溝建設地点』 東京大学埋蔵文化財調査室
- 成瀬晃司 1997 「江戸遺跡出土資料による磁器碗・皿の変遷—文様、銘款を中心に—」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 成瀬晃司 1997 「加賀藩江戸藩邸の調査—天和二（1682）年消失の長屋群—」『地方史・研究と方法の最前線』 雄山閣出版
- 成瀬晃司 2000 「加賀藩本郷邸内『黒多門邸』出土陶磁器の様相」『竹石健二先生・澤田大多郎先生還暦記念論文集』
- 成瀬晃司 2006 「加賀本郷邸東域の開発—17世紀代の大聖寺藩邸を中心に—」『江戸の大名屋敷』 江戸遺跡研究会第20回大会
- 成瀬晃司 2011 「加賀藩本郷邸東域の開発」『江戸の大名屋敷』 吉川弘文館
- 成瀬晃司・堀内秀樹 1990 「消費遺跡における陶磁器の基礎的操作と分析—東京大学構内遺跡病院地点出土資料を例に—」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書3 東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点』 東京大学遺跡調査室
- 西近畿文化財調査研究所 1998 『播州葡萄園 園舎遺跡発掘調査報告書』 西近畿文化財調査研究所
- 西脇 康 2003 「江戸期の地方金貨（1）-甲州金を中心に-」『収集』Vol.28 No.2 書信館出版（株）
- 西脇 康校訂・補編 2005 『新訂 加藩貨幣銀—金沢柿園舎森田良見著—』 書信館出版貨幣叢書13 書信館出版（株）
- 橋口定志 2003 「4節 銭の出る場所」『雑司ヶ谷I』 豊島区教育委員会
- 原山一郎（監修）赤羽根秀一（著）1976 『寛永通寶（古寛永銭）大分類の手引き』 古仙堂
- 平田博之 2009 「江戸遺跡出土のいわゆる関西系火鉢について」『江戸在地系土器の研究』Ⅶ 江戸在地系土器研究会
- 兵庫埋蔵銭調査会 1996 『日本出土銭総覧』1996年版兵庫県埋蔵銭調査会
- 文京区遺跡調査会 1991 『真砂遺跡』
- 堀内秀樹 1997 「東京大学本郷構内の遺跡における年代的考察」『東京大学構内遺跡調査研究年報』1 東京大学埋蔵文化財調査室
- 堀内秀樹 2012 「医学部附属病院看護師宿舍地点Ⅲ期」『東京大学構内遺跡調査研究年報』8 東京大学埋蔵文化財調査室
- 増尾富房篇 1976 『古寛永銭志（改訂版）』 穴銭堂
- 両角まり 2005 「コメント 江戸地域出土の『涼炉』」『江戸時代の名産品と商標』 江戸遺跡研究会第18回大会発表要旨 江戸遺跡研究会
- 大和市教育委員会社会教育課編 2003 『下鶴間の小倉家資料調査報告書』 大和市教育委員会
- 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1986 『長光廃寺跡』 横浜市埋蔵文化財調査委員会

報告書抄録

ふりがな	とうきょうだいがくほんごうこうないのいせき いがくぶふぞくびょういんにゆういんとうAちてん							
書名	東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院入院棟A地点							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書							
シリーズ番号	13							
編著者名	成瀬晃司（編）、大成可乃、原 祐一、追川吉生、小松愛子、安芸穂子、大貫浩子、香取祐一（編）、小林照子（編）、清水 香、阿部常樹、宮崎勝美、近藤 修、新美倫子、西脇 康、能城修一、鈴木伸哉、パリノ・サーヴェイ(株)							
編集機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行機関	東京大学埋蔵文化財調査室	所在地	〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1 駒場リサーチキャンパス内 03-5452-5103					
発行年月日	平成28年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
とうきょうだいがくほんごう 東京大学本郷 こうない いせき 構内の遺跡 ほんごうだいいせき (本郷台遺跡 ぐん 群) いがくぶ 医学部 ふぞくびょういん 附属病院 にゆういんとう 入院棟A ちてん 地点	とうきょうと 東京都 ぶんきょうく 文京区 ほんごう ちょうめ 本郷7丁目 ばんごう 3番1号	13105	47	35° 42' 40" ～ 41"	139° 45' 57" ～ 59"	平成6年4月 21日～11月 16日、 平成7年1月 31日～平成8 年6月28日	6,406.8㎡	医学部附属 病院入院棟 A建設に先 立つ事前調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
東京大学本郷 構内の遺跡 (本郷台遺跡 群) 医学部附属病 院入院棟A地点	包蔵地、集落、 大名屋敷、寺院	旧石器、縄 文、古墳、 中世、近代	古墳：竪穴住居 中世：道路状遺構 近世：石垣、石組溝、道 路、礎石建物、地下室、 井戸、溝、堀跡、建物 跡、採土坑、厠跡、池、 木樋、築山、植栽痕、 墓墳 近代：土坑、墓墳、基礎	旧石器：剥片、礫 縄文：土器 古墳：土器 中世：磁器、陶器、土器 近世・近代：陶器、磁 器、土器、瓦、金属製 品、石製品、ガラス製 品、木製品、銭貨、動物 製品		旧石器・縄文：遺物包含 層 古墳：集落 中世：道路状遺構 近世：加賀藩邸（黒多門 邸）、大聖寺藩邸、講安 寺の調査。大聖寺藩邸の 地境石組遺構、庭園など 諸施設、黒多門邸長屋建 物群（天和2年被災資 料）。盛土層から加賀藩 邸から運ばれた天和2年の 火災被災遺物一括廃棄資 料が出土。		

東京大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 13

東京大学本郷構内の遺跡

医学部附属病院入院棟 A 地点
報告編《第 1 分冊》

2016 年 3 月 25 日発行

編集・発行 東京大学埋蔵文化財調査室
東京都目黒区駒場 4 - 6 - 1
<http://www.aru.u-tokyo.ac.jp>

印刷 能登印刷株式会社

医学部附属病院入院棟A地点 付属DVD-ROM 収録内容

1. 本DVD-ROMには、本書電子版、写真データ、図表データが収録されている。
2. 写真データはJPEG形式、図表データはExcel 2007形式で収録されている。遺構写真データ、一部の遺物参考資料、遺物観察表などは報告編に掲載されていないものも含まれているので参考にされたい。
3. 遺構写真ファイルの名称は、「調査地点名略称_遺構種別_遺構No._種別コード（例：HW_SB_0001_kan）」とした。遺構写真の種別コードは、zenkei：全景、kan：完掘、sec：セクション、ken：検出状況、ibutu：遺物出土状況で表記している。但しそれ以外の写真については各ファイルに日本語表記を付している。
遺物写真ファイルの名称は、「調査地点名略称_遺構No._胎質コード_実測図番号（例：HW_0001_T_0001）」とした。但し包含層出土遺物は1区と2区で同じ層序名称を付しているため、2区に関して包含層名称の前に「2ku」を付した（例：HW_2kuCsou_R_0002）。遺構外出土遺物の名称もこれに準じた。遺物写真の胎質コードは、B：動物製品、BD：鹿角未製品、C：繊維製品、G：ガラス製品、K：金属製品、M：木製品、R：瓦、S：石製品、T：磁器・陶器・土器で表記している。
4. 収録されているファイルのディレクトリー構造は以下の通りである。



5. PDF版全体図（以下、全体図）と附図の対応は以下の通りである。
全体図1：附図1、全体図2：附図2、全体図3：附図3、全体図4：附図4・5、全体図5：附図9、全体図6：10・11、全体図7：12・13、全体図8：14、全体図9：附図15

- 「本書電子版」は、Adobe (R) Acrobat形式 (PDFファイル) で収録されています。PDFファイルを開くためには、Adobe ReaderなどのPDFファイル閲覧ソフトが必要です。
閲覧ソフトは本DVD-ROMには収録されていませんが、インターネット上で配布していますので、以下のアドビシステムズ社ホームページアドレスより必要に応じてダウンロードして下さい。
<http://www.adobe.co.jp/support/downloads/>
- 本書は学術資料としての観点から、電子版に掲載された図版・写真類の複写・転載に関しては、基本的に許可申請を必要としませんが、有償による販売を目的とした刊行物などで使用される場合は、当調査室までお問い合わせ下さい。
ただし、掲載された絵画資料などは出典元の著作権が発生する場合がありますので、学術研究目的においても各所蔵機関までお問い合わせ下さい。また著作及び所有権上の関係から、電子版には一部未掲載の資料があります。
- 本DVD-ROMの使用により生じたいかなる損害に対しても東京大学埋蔵文化財調査室では責任を負いかねます。あらかじめご了承下さい。
- Excel、Adobe Readerはそれぞれ、Microsoft Corporation、Adobe Systems Incorporatedの登録商標です。

